

# 合代島丘陵の古墳群

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

豊岡村-3

上神増A 古墳群（第二東名No.124地点）

上神増B 古墳群（第二東名No.125地点）

上神増E 古墳群（第二東名No.125地点）

2010

中日本高速道路株式会社東京支社  
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 合代島丘陵の古墳群

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

豊岡村 - 3

上神増A古墳群（第二東名No.124地点）

上神増B古墳群（第二東名No.125地点）

上神増E古墳群（第二東名No.125地点）

2010

中日本高速道路株式会社東京支社  
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 序

磐田原台地の北部、天竜川が浜松市天竜区二俣付近で東側に大きく方向を変える場所付近に位置する合代島丘陵は、赤石山系と南側の磐田原台地の丘陵が・雲斎川により下野部あたりで分断され、天竜川平野から太田川平野へ抜ける場所に位置しています。また、戦国時代に武田信玄が二俣城を攻めるために築城した亀井戸城や社山城などがあり、古くから交通・軍事的な要衝として重要視された地域がありました。

本書で報告する上神増A・B・E古墳群は、1930年に刊行された『静岡縣史』に『合代島の古墳・上神増の古墳』として報告された古墳群であり、古くからこの場所に多くの古墳があることが周知されていました。今回の調査では、第二東名建設事業に伴い破壊されることになった、23基の古墳と火葬墓4基をはじめ多くの遺構の調査を実施し、静岡県内で三葉環頭大刀が初めて出土したこと、これまで磐田原台地東縁や小笠山丘陵に限定されると考えられていた横穴式木室が磐田原台地以北の合代島丘陵で確認されたことなど、新しい知見を多く得ることができました。

古墳は中期中ごろ（5世紀中頃）から終末期（8世紀初頭）まで継続的に築造され、8世紀中頃～後半には火葬墓が、12～13世紀には中世墳墓が築造されるなど、この一體が古墳時代～中世まで墓域として使用されたことがわかるとともに、古墳時代にはこの地域の人々が幅広い交流関係をもっていたと想定することが可能となりました。

今後は、調査担当者が調査成果を元に分析した当古墳群の考察に対して批評を願うとともに、本資料を活用したさまざまな視点での議論が行われることを期待します。

現地調査および整理作業、本書の作成にあたり、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）、静岡県教育委員会、磐田市教育委員会、旧・豊岡村教育委員会、地元自治会をはじめとする多くの関係諸機関・各位にご援助、ご理解をいただきました。この場を借りて深くお礼申しあげます。また、現地での発掘作業、地道な整理作業に従事された方々に、厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所  
所長 天野 忍

## 例　　言

1 本書は、静岡県磐田市（旧・豊岡村）合代島・社山地内に所在する上神増A古墳群、上神増B古墳群、上神増E古墳群の発掘調査報告書である。

2 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（旧市町村）単位にて実施している。豊岡地区では本書が3冊目であるため、「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 豊岡村-3」とした。

なお、豊岡地区では最終の報告書である。

3 発掘調査は第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（平成17年度途中までは日本道路公団静岡建設局）の委託を受けて、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、豊岡村教育委員会（発掘調査当時）および磐田市教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

4 現地調査・資料整理の期間と調査担当者は下記のとおりである。

なお、本発掘調査は事務的な準備期間を含めず、実際に現地に着手した期間とする。また、資料整理のうち基礎整理作業は現地調査と並行して実施しており長期に及ぶため、ここでは本格的な資料整理を実施した期間とした。

確認調査 平成9年9月1日～11月25日 遠藤喜和・平野徹・佐藤清隆

本調査Ⅰ期 平成10年1月26日～3月19日 遠藤喜和・平野徹・佐藤清隆・長谷川睦

本調査Ⅱ期 平成10年6月9日～平成11年1月8日 篠原修二・富樫孝志・梶葉良久・大谷宏治

本調査Ⅲ期 平成12年4月17日～平成12年8月8日 田村隆太郎・児玉卓・中村正宏

資料整理 平成19年4月1日～平成20年3月31日 田村隆太郎

平成21年2月1日～平成22年3月31日 田村隆太郎（21年3月まで）

大谷宏治（21年4月から）

5 本書の執筆は、第7章第1節をパリノ・サーヴェイ株式会社、同第2・3節を株式会社加速器研究所、第8章第2節を田村隆太郎が行い、その他を大谷宏治が行った。

6 本書の挿図・挿表・図版（第7章を除く）の作成は、第4章第3～6節、第5・7章および写真図版は平成20年度までに田村隆太郎が行い、平成21年度に大谷宏治が一部追加・修正した。その他の挿図（第1～3章・8・9章）は平成21年度に大谷宏治が作成した。

7 現地の写真撮影は各担当者が、遺物の写真撮影は当研究所写真室が行った。

なお、図版96に掲載した上神増A・B古墳群の写真は、当研究所調査研究員 足立順司氏よりB1～4号墳の調査時の写真およびその時に見学・撮影した上神増A古墳群（A1号墳？）の写真の提供を受けた。

8 金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室 西尾太加二・大森信宏が実施した。

9 調査の概要については、当研究所や他の刊行になる出版物で一部公表されているが、本書と内容が異なる場合は本報告をもって訂正する。

10 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

11 発掘調査における指導・助言および協力者は第9章末に、測量等の委託先については第2章調査の経過に記載している。

12 本発掘調査にかかる記録類、出土品については静岡県教育委員会が保管・管理している。

## 凡　　例

- 1 現地測量においては、日本測地系（旧測地系）を使用した。測量図・実測図もこれに準拠する。特に記載のない場合は日本測地系による位置である。
- 一方、国土地理院ホームページにおいて世界測地系におけるおよその位置を確認し、記載している部分がある。この場合は、世界測地系であることを明記した。
- 2 土色は、小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1999『新版標準土色帖』に基づいて、分類した。
- 3 本書で使用した遺跡の表記は次のとおりである。
 

S F	土坑（陥穴・古代墳墓・中世墳墓・炭窯）	S D	溝状遺構	S X	性格不明遺構
-----	---------------------	-----	------	-----	--------
- 4 土器・陶器は、須恵器（黒ヌリ）、繩文土器・土師器（白ヌキ）、山茶壺・常滑焼（灰色）などの陶器に分けて、網みかけをしている。
- 5 古墳や埋葬施設に関しては、第4章にて部位名称とその定義を記載した。土器、鉄器などの遺物については同じく第4章にて本書で使用する名称を記載した。
- 6 参考文献については、第1・7章および第8章第2節については章・節末に記載した。それ以外（第3～5章、第8章第2節）については第8章末に一括して掲載している。
- 7 資料整理にあたり、古墳の番号および遺構番号を変更した。以下に、調査の古墳名と本書で用いる遺構名の対応表を記載した。本書をもって正式遺構名とする。

第1表 新旧遺構番号対応表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
A5号墳	5号墳	E10号墳	2号墳	SF10	SF15
B5号墳	17号墳	E11号墳	21号墳	SF11	SF17
B6号墳	19号墳	E12号墳	14号墳	SF12	SF07
B7号墳	18号墳	E13号墳	12号墳	SF13	SF18
B8号墳	20号墳	E14号墳	15号墳	SF14	SF01
B9号墳	16号墳	E15号墳	10号墳	SF15	SF02
E1号墳	23号墳	E16号墳	11号墳	SD01	SD02
E2号墳	6号墳	E17号墳	13号墳	SD02	SD27
E3号墳	24号墳	SF01	SF01	SD03	SD04
E4号墳	5号墳	SF02	SF03	SD04	SD03
E5号墳	8号墳	SF03	SF05	SD05	SD12
E6号墳	7号墳	SF04	SF21	SX01	SF23
E7号墳	1号墳	SF05	SF20	SX02	SF26
E8号墳	9号墳	SF06	SF19	SX03	SF13
E9号墳 第1埋葬施設	2号墳	SF07	SF16	SX04	SX04
E9号墳 第2埋葬施設	SF09	SF08	SF22	SX05	SX05
		SF09	SF14	SX06	SF24

## 目 次

挨拶	
目次	
挿図目次	
挿表目次	
写真目次	
図版目次	
第1章 調査に至る経緯	1
第1節 調査の方法と経過	3
第1節 調査体制	3
第2節 確認調査の方法と経過	4
第3節 本調査の方法と経過	5
第2章 地理的・歴史的環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	10
第3章 古墳調査の成果	14
第1節 合代島丘陵に築かれた古墳群の概要	14
第2節 調査区の配置	23
第3節 調査した古墳の概要	24
第4節 上神増A古墳群の調査成果	26
1. 上神増A古墳群の概要	26
2. 上神増A 5号墳	27
第5節 上神増B古墳群の調査成果	39
1. 上神増B古墳群の概要	39
2. 上神増B 5号墳	41
3. 上神増B 6号墳	44
4. 上神増B 7号墳	47
5. 上神増B 8号墳	54
6. 上神増B 9号墳	57
第6節 上神増E古墳群の調査成果	61
1. 上神増E古墳群の概要	61
2. 上神増E 1号墳	63
3. 上神増E 2号墳	67
4. 上神増E 3号墳	80
5. 上神増E 4号墳	90
6. 上神増E 5号墳	93
7. 上神増E 6号墳	95
8. 上神増E 7号墳	98
9. 上神増E 8号墳	105
10. 上神増E 9号墳	108
11. 上神増E 10号墳	114
12. 上神増E 11号墳	119
13. 上神増E 12号墳	123
14. 上神増E 13号墳	128
15. 上神増E 14号墳	130
16. 上神増E 15号墳	131
17. 上神増E 16号墳	138
18. 上神増E 17号墳	148
第5章 古墳以外の調査成果	155
第1節 縄文時代の遺構と遺物	155
第2節 古代の遺構と遺物	158
第3節 中世の遺構と遺物	162
第4節 その他の遺構と遺物	166

第6章 出土遺物観察表	170
第1節 上神増A・B・E古墳群出土遺物観察表	170
1. 上神増A・B・E古墳群出土土器・陶磁器観察表	170
2. 上神増A・B・E古墳群出土玉類観察表	172
3. 上神増A・B・E古墳群出土金属製品観察表	177
4. 上神増A・B・E古墳群出土耳環観察表	178
第7章 自然科学分析の成果	179
第1節 金属製品の材質について	179
第2節 炭窯 (SF12) 出土炭化材放射性炭素年代 (AMS 測定)	188
第3節 炭窯 (SF12) 出土炭化材の樹種同定	191
第8章 上神増A・B・E古墳群の評価	193
第1節 上神増A・B・E古墳群の築造順序と群構成	193
第2節 上神増E 3号墳の横穴式木室について	209
第3節 特異な石積み埋葬施設について	213
第4節 合代島丘陵における横穴系埋葬施設の変遷	217
第5節 上神増E 2号墳出土の三葉環頭大刀について	221
第6節 上神増B 7号墳出土の環付足金物で佩用する大刀について	225
第7節 上神増A・B・E古墳群出土の装飾付大刀以外の遺物について	229
第8節 上神増B・E古墳群出土の古代墳墓について	231
第8章註	234
参考文献 (第3～5、8章)	235
第9章 結語	238
謝辞	240
図版	1～96
抄録	
奥付	

## 挿図目次

【第1章】	
第1図 遺跡の位置	1
【第3章】	
第2図 上神増A・B・E古墳群の位置	9
第3図 遺跡周辺の地質状況図	10
第4図 届の遺跡分布図	11
【第4章第1～3節 上神増A古墳群】	
第5図 合代島丘陵の古墳群既出資料①	14
第6図 合代島丘陵の古墳分布図	15
第7図 遺跡と第二東名工事範囲の関係	16
第8図 合代島丘陵の古墳群既出資料②	17
第9図 古墳、埋葬施設の部位名称と計測位置	20
第10図 土器分類図	21
第11図 調査区周辺の地形と調査区配置図	23
【第4章第4節 上神増A古墳群】	
第12図 上神増A古墳群調査区配置図と周辺の地形	26
第13図 上神増A古墳群調査区測量図	26
第14図 上神増A 5号墳填土測量図	27
第15図 上神増A 5号墳填土土層図	29
第16図 上神増A 5号墳石室測量図	30
第17図 上神増A 5号墳第1埋葬施設実測図および遺物出土状況図	32
第18図 上神増A 5号墳第2埋葬施設実測図	33
第19図 上神増A 5号墳第2埋葬施設遺物出土状況図	34
第20図 上神増A 5号墳第1埋葬施設出土土器実測図	35
第21図 上神増A 5号墳填土・周溝および第2埋葬施設出土土器実測図	36
第22図 上神増A 5号墳第2埋葬施設出土玉類および金屬製品実測図	37
第23図 上神増A 5号墳填土表土出土遺物	38
【第4章第5節 上神増B古墳群】	
第24図 上神増B古墳群・上神増E古墳群調査区配置図と周辺の地形	39
第25図 上神増B古墳群調査区地形測量図	40
第26図 上神増B 5号墳周辺出土土器基底実測図	41
第27図 上神増B 5号墳填土測量図	41
第28図 上神増B 5号墳横穴式石室検出状況および基底石・墓壙実測図	42
第29図 上神増B 5号墳横穴式石室実測図	43
第30図 上神増B 6号墳填土測量図	44
第31図 上神増B 6号墳横穴式石室検出状況および基底石・墓壙実測図	45
第32図 上神増B 6号墳横穴式石室実測図	46
第33図 上神増B 7号墳填土測量図	47
第34図 上神増B 7号墳横穴式石室検出状況および基底石・墓壙実測図	48
第35図 上神増B 7号墳横穴式石室実測図	49
第36図 上神増B 7号墳横穴式石室遺物出土状況図	50
第37図 上神増B 7号墳出土土器実測図	50
第38図 上神増B 7号墳横穴式石室出土金屬製品実測図	51
第39図 上神増B 8号墳周溝出土土器実測図	54
第40図 上神増B 8号墳填土測量図	54
第41図 上神増B 8号墳横穴式石室および墓壙実測図	55
第42図 上神増B 9号墳周辺地形測量図	57
第43図 上神増B 9号墳横穴式石室検出状況および基底石・墓壙実測図	58
第44図 上神増B 9号墳横穴式石室実測図および遺物出土状況図	59
第45図 上神増B 9号墳横穴式石室出土土器実測図	60
第46図 上神増B 9号墳横穴式石室出土耳環実測図	60
【第4章第6節 上神増E古墳群】	
第47図 上神増E古墳群調査区（E-1区）測量図	61
第48図 上神増E古墳群調査区（E-1・2区）測量図	62
第49図 上神増E 1号墳填土周辺出土土器実測図	63
第50図 上神増E 1号墳填土測量図	63
第51図 上神増E 1号墳埋葬施設および遺物出土状況実測図	64
第52図 上神増E 1号墳埋葬施設出土玉類および刀子実測図	65
第53図 上神増E 1号墳埋葬施設出土鉄劍実測図	66
第54図 上神増E 2号墳填土測量図および墓道遺物出土状況図	68
第55図 上神増E 2号墳填土土層図	69
第56図 上神増E 2号墳第1次填土の範囲	70
第57図 上神増E 2号墳横穴式石室検出状況図	71
第58図 上神増E 2号墳横穴式石室実測図	72
第59図 上神増E 2号墳横穴式石室床面（下面）実測図および横穴式石室復原図	73
第60図 上神増E 2号墳横穴式石室基底石および墓壙実測図	74
第61図 上神増E 2号墳横穴式石室遺物出土状況図	75
第62図 上神増E 2号墳墓道出土土器実測図	76
第63図 上神増E 2号墳横穴式石室出土玉類実測図	77
第64図 上神増E 2号墳出土金屬製品実測図	78
第65図 上神増E 3号墳填土測量図	80
第66図 上神増E 3号墳横穴式木室墓壙内土層図	81
第67図 中・東遠江の横穴式木室復原模式図	82
第68図 上神増E 3号墳横穴式木室検出状況図	83
第69図 上神増E 3号墳横穴式木室実測図	84

第70図	上神増E 3号埴横穴式木室遺物出土状況図	86
第71図	上神増E 3号埴出土土器実測図	87
第72図	上神増E 3号埴横穴式木室出土玉類および 錫製品実測図	87
第73図	上神増E 3号埴出土鉄製品実測図	88
第74図	上神増E 4号埴埴丘測量図	90
第75図	上神増E 4号埴埋葬施設実測図および遺物出土 状況図	91
第76図	上神増E 4号埴埋葬施設出土土器実測図	92
第77図	上神増E 5号埴埴丘測量図	93
第78図	上神増E 5号埴埋葬施設実測図	94
第79図	上神増E 6号埴埴丘測量図	95
第80図	上神増E 6号埴埋葬施設実測図および遺物出土 状況図	96
第81図	上神増E 6号埴埋葬施設出土玉類実測図	97
第82図	上神増E 6号埴埴丘出土土器実測図	97
第83図	上神増E 7号埴埴丘測量図	98
第84図	上神増E 7号埴出土土器実測図	100
第85図	上神増E 7号埴埋葬施設実測図および遺物出土 状況図	102
第86図	上神増E 7号埴埋葬施設床面実測図および遺物 出土状況図	103
第87図	上神増E 7号埴埋葬施設出土玉類および鉄製品 実測図	104
第88図	上神増E 8号埴周辺測量図	105
第89図	上神増E 8号埴埋葬施設実測図および遺物出土 状況図	106
第90図	上神増E 8号埴出土土器実測図	106
第91図	上神増E 8号埴出土金銅製品実測図	107
第92図	上神増E 9・E10号埴埴丘測量図	108
第93図	上神増E 9号埴第1・2埋葬施設出土状況図	109
第94図	上神増E 9号埴第2埋葬施設出土状況図	110
第95図	上神増E 9・E10号埴出土土器実測図	111
第96図	上神増E 9号埴第2埋葬施設出土鉄鑑実測図	112
第97図	上神増E 9号埴第2埋葬施設出土刀劍実測図	113
第98図	上神増E 10号埴埋葬施設検出状況図	115
第99図	上神増E 10号埴埋葬施設基底石および墓域 実測図	116
第100図	上神増E 10号埴埋葬施設出土玉類実測図	118
第101図	上神増E 11号埴埴丘測量図	119
第102図	上神増E 11号埴横穴式石室実測図	120
第103図	上神増E 11号埴周溝出土土器実測図	121
第104図	上神増E 11号埴横穴式石室出土刀子実測図	122
第105図	上神増E 12号埴周辺測量図	123
第106図	上神増E 12号埴横穴式石室検出状況および墓底 石、墓域実測図	124
第107図	上神増E 12号埴横穴式石室実測図および遺物 出土状況図	126
第108図	上神増E 12号埴出土土器実測図	127
第109図	上神増E 13・E14号埴周辺測量図	128
第110図	上神増E 13号埴埋葬施設実測図	129
第111図	上神増E 14号埴周辺出土土器実測図	130
第112図	上神増E 14号埴横穴式石室実測図	130
第113図	上神増E 15号埴埴丘測量図	132
第114図	上神増E 15号埴横穴式石室実測図	133
第115図	上神増E 15号埴横穴式石室蓋石および墓域 実測図	134
第116図	上神増E 15号埴横穴式石室遺物出土状況図	135
第117図	上神増E 15号埴出土土器実測図	136
第118図	上神増E 15号埴横穴式石室出土鉄製品実測図	137
第119図	上神増E 16号埴出土土器実測図	138
第120図	上神増E 16号埴埴丘測量図	139
第121図	上神増E 16号埴横穴式石室検出状況図	140
第122図	上神増E 16号埴横穴式石室実測図	141
第123図	上神増E 16号埴横穴式石室基底石および墓域 実測図	142
第124図	上神増E 16号埴横穴式石室遺物出土状況図	143
第125図	上神増E 16号埴横穴式石室出土玉類実測図	145
第126図	上神増E 16号埴出土金属製品実測図	146
第127図	上神増E 17号埴周辺測量図	148
第128図	上神増E 17号埴横穴式石室検出状況および墓底 石、墓域実測図	149
第129図	上神増E 17号埴横穴式石室実測図	150
第130図	上神増E 17号埴横穴式石室遺物出土状況図	152
第131図	上神増E 17号埴出土土器実測図	153
第132図	上神増E 17号埴横穴式石室出土鉄製品実測図	154

## 【第5章 古墳以外の構造と遺物】

第133図	窟穴の位置	155
第134図	窟穴完結状況図①	156
第135図	窟穴完結状況図②	157
第136図	古代埴輪実測図および遺物出土状況図	159
第137図	古代埴輪出土土器実測図	160
第138図	中世墓SF01実測図	162
第139図	SF01および炭窯ほか出土遺物実測図	162
第140図	炭窯実測図①	163
第141図	炭窯実測図②	164
第142図	性格不明の遺構実測図①	166
第143図	性格不明の遺構実測図②	167
第144図	溝状遺構実測図①	168
第145図	溝状遺構実測図②	169
第146図	遺構以外の出土土器実測図	169

## 【第7章 自然科学分析】

第147図	FT-IRスペクトル	182
第148図	X線回折図	182
第149図	鉄片1の金属鉄の成分分析結果	183
第150図	鉄片2の金属鉄および非金属介在物の成分分析 結果	184
第151図	【参考】歴年較正年代グラフ	190

【第8章 上神塚A・B・E古墳群の評価】	
第152図 今回調査した古墳の築造時期と追葬時期·····	193
第153図 古墳時代中期の古墳の埋葬施設と出土遺物···	194
第154図 古墳時代後期～統一朝の古墳の埋葬施設···	195
第155図 古墳時代後期～統一朝の古墳の出土遺物···	196
第156図 今回調査した古墳の築造過程·····	199
第157図 今回調査した古墳の分類·····	203
第158図 合代島丘陵の古墳群の分類·····	204
第159図 東海の横穴式木室の分布·····	209
第160図 石積みの入口構造を伴う横穴式木室·····	210
第161図 石積みの入口構造を伴う横穴式石室·····	211
第162図 幅狭短小の入口構造を伴う横穴式石室·····	212
第163図 上神増E 7号墳と関連する聖穴系埋葬施設···	213
第164図 上神増E 7号墳と関連する横穴式石室·····	214
第165図 上神増E 10号墳と関連する埋葬施設·····	215
第166図 合代島丘陵における埋葬施設の変遷·····	219
第167図 上神増E 2号墳出土三葉環頭大刀復原図···	221
第168図 薙鉾形三葉環頭大刀の類例·····	221
第169図 日本列島および朝鮮半島の三葉環頭大刀出土 遺跡分布図·····	222
第170図 日本列島および朝鮮半島の三葉環頭大刀出土 遺跡分布図·····	223
第171図 上神増B 7号墳出土環付足金物佩用大刀の想定 復原図·····	225
第172図 地域別の環付足金物佩用大刀出土数·····	226
第173図 日本列島及び朝鮮半島の環付足金物出土遺跡 分布図·····	228
第174図 上神増E 古墳群出土の鉄鋒·····	229
第175図 古墳群から出土した古代墳墓·····	233

## 挿表目次

第1表 新田遺構番号対応表·····	ii
第2表 調査体制·····	3
第3表 合代島丘陵の古墳群一覧表·····	18
第4表 本書で使用する須恵器編年の時期対応表·····	22
第5表 調査古墳一覧表·····	24・25
第6表 上神増A 5号墳第1埋葬施設の規模·····	31
第7表 上神増A 5号墳第2埋葬施設の規模·····	31
第8表 上神増B 5号墳埋葬施設の規模·····	42
第9表 上神増B 6号墳埋葬施設の規模·····	45
第10表 上神増B 7号墳埋葬施設の規模·····	49
第11表 上神増B 7号墳出土装飾付大刀の計測値···	52
第12表 上神増B 8号墳埋葬施設の規模·····	55
第13表 上神増B 9号墳埋葬施設の規模·····	57
第14表 上神増E 1号墳埋葬施設の規模·····	65
第15表 上神増E 2号墳埋葬施設の規模·····	70
第16表 上神増E 2号墳出土三葉環頭大刀柄頭の計測値 ·····	77
第17表 上神増E 3号墳埋葬施設の規模·····	82
第18表 上神増E 4号墳埋葬施設の規模·····	92
第19表 上神増E 5号墳埋葬施設の規模·····	94
第20表 上神増E 6号墳埋葬施設の規模·····	96
第21表 上神増E 7号墳埋葬施設の規模·····	101
第22表 上神増E 8号墳埋葬施設の規模·····	106
第23表 上神増E 9号墳第1・2埋葬施設の規模·····	111
第24表 上神増E 10号墳埋葬施設の規模·····	114
第25表 上神増E 11号墳埋葬施設の規模·····	121
第26表 上神増E 12号墳埋葬施設の規模·····	125
第27表 上神増E 13号墳埋葬施設の規模·····	128
第28表 上神増E 14号墳埋葬施設の規模·····	130
第29表 上神増E 15号墳埋葬施設の規模·····	131
第30表 上神増E 16号墳埋葬施設の規模·····	144
第31表 上神増E 17号墳埋葬施設の規模·····	151
第32表 陥穴一覧表·····	155
第33表 古代埴輪一覧表·····	158
第34表 墓窓一覧表·····	163
第35表 性格不明の遺構一覧表·····	166
第36表 溝状遺構一覧表·····	169
第37表 上神増A・B・E古墳群出土土器・陶器器観察表 ·····	170
第38表 上神増A・B・E古墳群出土玉類観察表···	172
第39表 上神増A・B・E古墳群出土金属製品観察表 ·····	177
第40表 上神増A・B・E古墳群出土耳環・鍔製品観察表 ·····	178
第41表 鉄片1の付着物の成分分析結果·····	181
第42表 鉄片2の非金属介在物の組成物相分析結果···	187
第43表 金属製品(遺物番号408)の成分分析結果···	187
第44表 SF12出土炭化材の放射性炭素年代測定結果一覧表 ·····	189
第45表 SF12出土炭化材の樹種同定結果·····	191
第46表 合代島丘陵の古墳群時期別古墳数·····	198
第47表 合代島丘陵の古墳群の支派分類と各古墳の概要 ·····	206
第48表 環付足金物佩用大刀出土遺跡一覧表·····	227
第49表 遠江における古代墳墓一覧(奈良時代)···	231

## 図版目次

図版 1	遺跡の北からの遠景	2	上神増 B 6 号埴石室検出状況
図版 2	1 上神増 E 古墳群全景	1	上神増 B 6 号埴石室検出状況
	2 上神増 E 古墳群 E - 3 区全景	2	上神増 B 6 号埴石室右側壁
図版 3	1 上神増 B 古墳群 B - 1 区全景	3	上神増 B 6 号埴石室左側壁
	2 上神増 A 5 号埴全景	4	上神増 B 6 号埴石室床面
図版 4	1 上神増 E 2 号埴全景	5	上神増 B 6 号埴石室基底石
	2 上神増 E 2 号埴横穴式土断面	図版 19	1 上神増 B 7 号埴全景
	3 上神増 B 7 号埴石室内	2	上神増 B 7 号埴石室崩落状況
	4 上神増 E 12号埴横穴式石室石室内	3	上神増 B 7 号埴石室検出状況
	5 上神増 E 16号埴横穴式石室内勾玉出土状況	図版 20	1 上神増 B 7 号埴石室右側壁
図版 5	1 上神増 E 17号埴横穴式石室内土器出土状況	2	上神増 B 7 号埴石室左側壁
	2 SF13上器出土状況	3	上神増 B 7 号埴石室奥壁及び床面・遺物出土状況
	3 上神増 E 3号埴横穴式木室左袖部土層断面	図版 21	1 · 2 上神増 B 7 号埴石室基底石
	4 上神増 E 3号埴横穴式木室土層断面	図版 22	1 上神増 B 8 号埴全景
	5 上神増 E 3号埴横穴式木室	2	上神増 B 8 号埴石室検出状況
図版 6	1 上神増 E 2 号埴出土過物	図版 23	1 上神増 B 8 号埴石室床面
	2 上神増 E 3 号埴出土過物	2	上神増 B 8 号埴石室基底石
図版 7	1 上神増 E 9 · 10 号埴出土過物	図版 24	1 上神増 B 古墳群 B - 2 区全景
	2 上神増 E 12号埴出土過物	2	上神増 B 9 号埴石室崩落状況
図版 8	1 上神増 E 16号埴出土玉類	3	上神増 B 9 号埴石室検出状況
	2 上神増 B 7 号埴出土玉類付大刀	図版 25	1 上神増 B 9 号埴石室奥壁
	3 SF03 · 13 · 15出土土器	2	上神増 B 9 号埴石室左側壁
図版 9	1 上神増 A 古墳群 A - 1 区全景	3	上神増 B 9 号埴石室右側壁
	2 上神増 A 5 号埴頂部の盗掘痕跡	4	上神増 B 9 号埴石室床面
図版 10	1 上神増 A 5 号埴全景	5	上神増 B 9 号埴石室内外土器出土状況
	2 上神増 A 5 号埴盛土除去後	図版 26	1 · 2 上神増 B 9 号埴石室基底石
図版 11	1 上神増 A 5 号埴西部薛石	3	上神増 B 9 号埴墓域
	2 上神増 A 5 号埴東部薛石	図版 27	1 上神増 E 古墳群 E - 1 区全景
	3 上神増 A 5 号埴東部填埋	2	上神増 E 古墳群 E - 3 区全景
	4 上神増 A 5 号埴西部填埋	図版 28	1 上神増 E 1 号埴全景
図版 12	1 上神増 A 5 号埴石室検出状況	2	上神増 E 1 号埴埋葬施設
	2 上神増 A 5 号埴石室北西部	3	上神増 E 1 号埴埋葬施設棺床東端部
	3 上神増 A 5 号埴石室北東部	4	上神増 E 1 号埴埋葬施設内鉄針等出土状況
	4 · 5 上神増 A 5 号埴石室蓋遺	図版 29	1 · 2 上神増 E 2 号埴全景
図版 13	1 上神増 A 5 号埴石室南西部遺物出土状況	図版 30	1 · 2 上神増 E 2 号埴石室崩落状況
	2 上神増 A 5 号埴石室内理出土状況	図版 31	1 上神増 E 2 号埴石室転落石除去状況
	3 上神増 A 5 号埴石室南西部遺物出土状況	2	上神増 E 2 号埴石室右側壁崩落状況
	4 · 5 上神増 A 5 号埴石室蓋遺	3	上神増 E 2 号埴石室左側壁崩落状況
	6 · 7 上神増 A 5 号埴填土上部土器出土状況	4	4 · 5 上神増 E 2 号埴石室閉塞石
図版 14	1 · 2 上神増 A 5 号埴第 1 埋葬施設	図版 32	1 上神増 E 2 号埴石室残存部・床上面検出状況
図版 15	1 上神増 B 古墳群 B - 1 区全景	2	上神増 E 2 号埴石室北東部遺物出土状況
	2 上神増 B 5 号埴全景	3	上神増 E 2 号埴石室残存部・床上面検出状況
図版 16	1 上神増 B 5 号埴石室検出状況	4	上神増 E 2 号埴石室南西部執刀出土状況
	2 上神增 B 5 号埴石室右側壁	5	上神増 E 2 号埴石室奥壁残存状況
	3 上神增 B 5 号埴石室左側壁	6	上神增 E 2 号埴蓋道内土器出土状況
	4 上神增 B 5 号埴石室基底石	図版 33	1 上神増 E 2 号埴石室残存状況・床下面及び 盛土第一段階検出状況
図版 17	1 上神增 B 6 号埴全景		

	2	上神增E 2号填石室床下面	2	上神增E 12号填石室内	
	3	上神增E 2号填石室基底石	1	上神增E 12号填石室右侧壁	
图版34	1 · 2	上神增E 3号填石室全景	2	上神增E 12号填石室左侧壁	
图版35	1	上神增E 3号填石室黏土层·闭塞石被出状况	3	上神增E 12号填石室被出状况	
	2 · 3	上神增E 3号填石室闭塞石	4	上神增E 12号填石室内土器出土状况	
图版36	1	上神增E 3号填石室黏土层被出状况	5	上神增E 12号填石室内土器出土状况	
	2	上神增E 3号填石室底部	图版51	1	上神增E 12号填石室右侧壁
	3	上神增E 3号填石室床面·遗物出土状况	2	上神增E 12号填石室左側壁	
图版37	1	上神增E 3号填石室床面·遗物出土状况	3	上神增E 12号填石室被出状况	
	2 · 3	上神增E 3号填石室被道闭塞石除去状况	4	上神增E 12号填石室基底石	
	4	上神增E 3号填石室被道左侧壁	图版52	1 · 2	上神增E 12号填石室基底石
	5	上神增E 3号填石室被道右侧壁	3	上神增E 12号填石室墓葬	
图版38	1 · 2	上神增E 3号填石室床面·柱穴等被出状况	图版53	1	上神增E 13号填埋葬施設被出状况
	3	上神增E 3号填石室墓道基底石	2 · 3	上神增E 14号填石室全景	
	4	上神增E 3号填石室内部遗物出土状况	4	上神增E 14号填石室基底石	
	5	上神增E 3号填石室墓道	5	上神增E 15号填石室全景	
图版39	1	上神增E 4号填石室全景	图版54	1	上神增E 15号填石室被出状况
	2	上神增E 4号填埋葬施設被出状况	2	上神增E 15号填石室床面	
图版40	1	上神增E 4号填埋葬施設土层断面	3	上神增E 15号填石室東側土器出土状况	
	2	上神增E 4号填埋葬施設内	4	上神增E 15号填石室基底石	
	3	上神增E 4号填埋葬施設北部	5	上神增E 15号填石室墓葬	
	4	上神增E 4号填埋葬施設南部	图版55	1	上神增E 16号填石室全景
	5	上神增E 4号填埋葬施設北東土器出土状况	2	上神增E 16号填石室被出状况	
	6	上神增E 4号填埋葬施設墓墙	3 · 4	上神增E 16号填石室內	
图版41	1	上神增E 5 · 6号填石室全景	图版56	1	上神增E 16号填石室右侧壁
	2	上神增E 5号填埋葬施設	2	上神增E 16号填石室左侧壁	
	3	上神增E 6号填埋葬施設下段(棺床下面)断面	3	上神增E 16号填石室床面	
	4	上神增E 6号填埋葬施設上段(棺床上面)	4	上神增E 16号填石室基底石	
	5	上神增E 6号填埋葬施設下段(棺床下面)断面	5	上神增E 16号填石室內耳环等出土状况	
图版42	1 · 2	上神增E 6号填埋葬施設被出状况	6	上神增E 16号填石室內勾玉等出土状况	
	3	上神增E 6号填埋葬施設墓墙断面	7	上神增E 16号填石室土器出土状况①	
	4	上神增E 6号填埋葬施設内勾玉出土状况	8	上神增E 16号填石室土器出土状况②	
	5	上神增E 6号填埋葬施設内管玉等出土状况	图版57	1	上神增E 17号填石室崩落状况
图版43	1 · 2	上神增E 7号填石室全景	2 · 3	上神增E 17号填石室被出状况	
图版44	1 · 2	上神增E 7号填埋葬施設被出状况	图版58	1	上神增E 17号填石室右侧壁
图版45	1	上神增E 7 · 8 · 11~14号填石室全景	2	上神增E 17号填石室左侧壁	
	2	上神增E 8号填石室全景	3	上神增E 17号填石室被出状况	
	3	上神增E 8号填埋葬施設	4	上神增E 17号填石室土器出土状况	
图版46	1	上神增E 9号填石室全景	5	上神增E 17号填石室基底石	
	2	上神增E 9号填第1 · 2号埋葬施設	6	上神增E 17号填石室墓葬	
	3	上神增E 9号填第2号埋葬施設内刀劍等出土状况	图版59	陷穴(SF04~11)	
图版47	1 · 2	上神增E 10号填石室全景	图版60	填墓(SF01 · 03 · 13~15)	
图版48	1	上神增E 10号填埋葬施設被出状况	图版61	炭窑 · 土坑 · 满状道桥 · 性格不明道桥	
	2	上神增E 10号填埋葬施設基底石	图版62	上神增A 5号填出土土器 · 玉類	
	3	上神增E 11 · 12号填石室被出状况	图版63	上神增A 5号填出土玉類 · 金屬製品	
图版49	1	上神增E 11 · 12号填石室全景	图版64	1	上神增A 5号填出土物一括
	2	上神增E 11号填石室被出状况	2	上神增B 7号填出土物一括	
	3	上神增E 12号填石室崩落状况	图版65	1	上神增B 5号填出土土器
图版50	1	上神增E 12号填石室被出状况	2	上神增B 7号填出土物①	
			图版66	1	上神增B 7号填出土物②
			图版67	上神增B 9号填出土物	
			图版68	1	上神增B 9号填出土物一括

2	上神増E 1号埴出土鉄製品一括
図版69	上神増E 1号埴出土遺物
図版70	上神増E 2号埴出土遺物①
図版71	上神増E 2号埴出土遺物②
図版72	上神増E 2号埴出土遺物③
図版73	1 上神増E 2号埴出土遺物一括 2 上神増E 3号埴出土遺物一括
図版74	上神増E 3号埴出土遺物①
図版75	上神増E 3号埴出土遺物②
図版76	上神増E 3号埴出土遺物③
図版77	1 上神増E 4号埴出土遺物 2 上神増E 5号埴出土遺物 3 上神増E 7号埴出土遺物①
図版78	上神増E 7号埴出土遺物②
図版79	1 上神増E 7号埴出土遺物一括 2 上神増E 8号埴出土遺物一括
図版80	1 上神増E 8号埴出土遺物 2 上神増E 9号埴出土遺物①
図版81	1 上神増E 9号埴出土遺物② 2 上神増E 10号埴出土遺物①
図版82	1 上神増E 10号埴出土遺物② 2 上神増E 10号埴出土遺物③ 3 上神増E 11号埴出土遺物
図版83	1 上神増E 9・10号埴出土遺物一括 2 上神増E 12号埴出土遺物一括
図版84	上神増E 12号埴出土遺物①
図版85	1 上神増E 14・15号埴出土遺物 2 上神増E 15号埴出土遺物①
図版86	1 上神増E 15号埴出土遺物② 2 上神増E 16号埴出土遺物①
図版87	上神増E 16号埴出土遺物②
図版88	上神増E 16号埴出土遺物③
図版89	1 上神増E 15号埴出土遺物一括 2 上神増E 17号埴出土遺物一括
図版90	1 上神増E 16号埴出土玉類一括 2 上神増E 16号埴出土玉類一括
図版91	1 上神増E 16号埴出土遺物④ 2 上神増E 17号埴出土遺物①
図版92	1 上神増E 17号埴出土遺物② 2 SF03出土遺物
図版93	SF13～15出土遺物
図版94	1 中世の遺物 2 遺構外出土の遺物
図版95	1 SF03・13～15出土遺物一括 2 中世の遺物一括
図版96	上神増A・B古墳群の既往調査時の写真

## 写真目次

写真1	調査区の草木伐採作業状況	4
写真2	試掘溝の掘削作業状況	4
写真3	試掘溝の精査作業状況	4
写真4	試掘溝の埋め戻し作業状況	4
写真5	表土除去作業状況	5
写真6	造構検出作業状況	5
写真7	古墳埋葬施設精査作業状況1	5
写真8	古墳埋葬施設精査作業状況2	5
写真9	古墳埋葬施設精査作業状況3	6
写真10	造構実測作業状況1	6
写真11	造構実測作業状況2	6
写真12	古墳墳丘調査作業状況	6
写真13	古代墳墓精査作業状況	7
写真14	ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影 作業状況	7
写真15	接合作業状況	7
写真16	遺物実測作業状況	7
写真17	遺構図鑑集・トレース作業状況	8
写真18	遺物写真撮影作業状況	8
写真19	写真図版作業状況	8
写真20	報告書編集作業状況	8
写真21	上神増古墳群出土鉢鏡	14
写真22	上神増B古墳群横穴式石室の現況	18
写真23	装飾付大刀の柄周縁微鏡写真	52
写真24	装飾付大刀の箱口金具に付着した有機物の 顕微鏡写真	52
写真25	鉄片1の外観と断面組織	185
写真26	鉄片2の外観と断面組織	186
写真27	金属製品(遺物番号408)の外觀	187
写真28	炭窯SF12出土炭化材の組織	192

# 第1章 調査に至る経緯

東名高速道路は昭和44年の開通以来、日本の大動脈として大きな役割を果たしている。しかし、経済発展に伴って交通量が激増し混雑が激しくなり、高速性・定時性を伴う交通需要に対応することが困難になると予想されるようになった。この問題に対する抜本対策として第二東名高速道路（現・新東名高速道路、以下では契約名に基づき「第二東名高速道路」のまととする）が計画された。このうち静岡県内においては、東西に貫く形で延長約170kmの路線が策定された。

この計画に伴い、静岡県教育委員会は日本道路公団から埋蔵文化財分布調査の手続きの依頼、埋蔵文化財包蔵地の所在の有無についての照会を受けた。埋蔵文化財の所在の有無についての回答は、関係市町村教育委員会へ照会した結果を基に協議し、静岡県教育委員会が取りまとめて行った。調査対象となる地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地を中心に県内130箇所以上に及ぶこととなった。

その後、日本道路公団に第二東名建設の施行命令が出されたことに伴って、日本道路公団、静岡県土木部、静岡県教育委員会が埋蔵文化財調査の進め方等について協議した。また、発掘調査の実施については、日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、財団法人を除いて記す）へ委託することが確認された。平成8年度には埋蔵文化財調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結した。さらに、静岡県埋蔵文化財調査研究所を加えた三者は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等を定めた協定書を締結した。この年度から、静岡県における第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が始まっている。なお、平成17年度の日本道路公団の民営化に伴って、日本道路公団静岡建設局による埋蔵文化財発掘調査の委託は、中日本高速道路株式会社東京支社（掛川工事事務所）に引き継がれている。

上記したように旧豊岡村域においても調査が開始された。豊岡村域には、延長約4.2kmの路線が計画されており、旧豊岡村域では周知の埋蔵文化財包蔵地と第二東名路線の計画範囲を対比すると、<sup>豊岡</sup>上神増A古墳群（124地点）、<sup>豊岡</sup>上神増B・E古墳群（125地点）、<sup>豊岡</sup>西の谷遺跡（126-2地点）、<sup>豊岡</sup>寺山古墳群（128地点）が所在することが判明した。この4地点（5遺跡）に対し、分布調査を実施し、遺跡が良好に現存することが判明したため、本発掘調査（以下、「本調査」とする）に先立ち確認調査を実施した。調査の結果、



第1図 遺跡の位置

4地点すべてで遺構の存在が認められた。この結果にもとづいて、各遺跡の本調査を順次実施することとなった。

今回報告する合代島地区では、上神増A・B・E古墳群が所在しており、この2地点3遺跡について本調査を実施した。

確認調査と本調査（現地調査、整理作業、報告書刊行作業）は、静岡県教育委員会の指導のもと、静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。なお、上記の経緯の詳細や確認調査の内容については、既に報告している（静岡埋文研 2004）。

#### 参考文献

静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 『寺山古墳群』

## 第2章 調査の方法と経過

### 第1節 調査体制

本書で報告する上神増A・B・E古墳群の調査は、第二東名建設事業に伴う掛川工区として体制を組んで実施した。第2表はそのうち豊岡地区に係る調査体制である。

第2表 調査体制

職員名		平成20年度	平成20年度	平成21年度								
所長	高橋 勉											
副所長	油谷伸三	山下 兼										
事務担当											酒井 伸	天野 志
事務課長											酒井 伸	天野 志
(事務)次長												
管理係事務監理係長	三田村浩昭	伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	金田造幸	金田造幸	金田造幸	金田造幸	平松公介	平松公介	大庭正夫 佐野五十三 高橋義一 高橋義一 高橋義一	大庭正夫 佐野五十三 高橋義一 高橋義一 高橋義一
次長												鶴村 幸
総務課長	掛川野所	日本敏雄	太田正夫 大庭正夫	鶴村 幸								
総理部門B	福原謙平											
総務課長	鈴木誠代											
会計課長	鈴木 貴											
課長												
主事												
部長	石垣英夫	石垣英夫	石垣英夫	石垣英夫	白瀬達雄	白瀬達雄	白瀬達雄	白瀬達雄	山本洋平	山本洋平	白瀬達雄 石垣英夫 石垣英夫 石垣英夫 石垣英夫	
次長	豊野敏二	豊野敏二 豊野敏二 豊野敏二 豊野敏二 豊野敏二										
文秘心霊	豊野五十五											
担当課長	鈴木 達	鈴木 達 鈴木 達 鈴木 達 鈴木 達 鈴木 達										
会計課長												
担当課長												
工政主査	遠藤善和	平野 敏	高尾 順二	高尾 順二 高尾 順二 高尾 順二 高尾 順二 高尾 順二								
主任調査 幹事会議		高尾 順二										
調査研究室 (調査班)	佐藤信一 竹原一 高尾一 長谷川裕 西田宏馬 丸山耕一郎											
監督												
主任調査 研究員		西尾太加二										
調査研究員		青木伸										
上級助人・専 門力講師	福武調査 研究員											
担当者各 別力講師												

## 第2節 確認調査の方法と経過

### 1. 調査の方法

踏査 発掘調査前に、第二東名高速道路建設工事対象地内を踏査し、これまでの分布調査で古墳の所在が確かめられている位置や、古墳が存在する可能性が高い丘陵斜面の不自然に高くなっている場所などをを中心に、古墳の所在が想定される箇所を抽出した。

確認調査 上記で古墳の所在を想定した箇所に試掘溝を設定し、人力にて表土除去・遺構の精査を行い、古墳の埋葬施設や葺石、周溝やその他の遺構の有無を確認した。確認調査地点は簡易の平面図等を作成した後、地形図に古墳や遺構の所在を明記した。

### 2. 調査の経過

上神増A古墳群（No. 124地点）の確認調査は、平成9年9月1日より準備を開始し、9月2日に現地事務所を設置し、9月10日より試掘溝の設定、掘削を開始した。順次、試掘溝の掘削、精査を行い、実測図や写真などの記録類を作成し、9月30日に確認調査を終了した。この確認調査では、周知のA5号墳以外には遺構・遺物は出土しなかった。

上神増E古墳群、B古墳群（No. 125地点）の確認調査は、平成9年10月1日より開始した。10月1日に現場事務所の設置、発掘調査に必要な資機材の運搬を行うとともに試掘溝設定箇所の樹木の伐採、除草作業を開始した。古墳の所在が想定される場所に64箇所の試掘溝を設定し、10月2日より人力により試掘溝の掘削を開始した。確認調査は、11月25日にすべての作業を終了した。この確認調査で9基の古墳の存在が想定できた。



写真1 調査区の草木伐採作業状況



写真2 試掘溝の掘削作業状況



写真3 試掘溝の精査作業状況



写真4 試掘溝の埋め戻し作業状況

## 第3節 本調査の方法と経過

### 1. 現地調査の経過と方法

#### (1) 現地調査の方法

表土除去 古墳の表土除去は基本的に人力で行い、確認調査により古墳や遺構が存在しない調査区の斜面下部や樹木の抜根・処理については、重機を用いた。

古墳の調査 古墳は確認調査によりその存在が想定できる箇所を中心に表土除去を行った後、埋葬施設、周溝の検出を行った。古墳の存在が想定できたものについては、埴丘と想定される箇所を四分割し、まず、対角線上に掘削し土砂の堆積状況に留意しながら、盛土や葺石、埋葬施設の有無等を確認した。それらが確認できたものから順次、周溝の掘削、埋葬施設の掘削を行い、埋葬施設内部を完掘した状態で写真撮影、遺物出土状況や横穴式石室の実測を実施した。埋葬施設内の調査終了後、盛土との関係に留意しながら、埋葬施設および埴丘の解体を行い、墓域の写真撮影・実測を行った。なお、埋葬施設内の土砂については、現地にて篳にかけた。

その他の遺構の調査 古墳以外の遺構については、古墳の表土除去後に判明したものが多く、大型のものは四分割、小型のものは二分割して堆積状況や遺物等に留意しながら人力にて実施した。

遺構実測 遺構実測のうち、3・4級基準点、座標杭の設置は、委託作業として実施し、国土座標（日本測地系）に準拠して設置した。横穴式石室等の実測のための杭については、調査担当者などがトータルステーション（以下、TSとする）を用いて設置した。

地形測量は、TSを用いて調査担当者等が実施した調査区と、測量業者に委託してラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した調査区がある。遺構実測については調査担当者の指示のもと、調査補助員等が実測した。

写真撮影 遺構の写真撮影は、中型カメラ（6×7判、白黒フィルム）を主体に撮影し、補助的に小型カメラ（35mmポジフィルム、カラーネガフィルム）を用いて撮影した。また、古墳群の全景



写真5 表土除去作業状況



写真6 遺構検出作業状況



写真7 古墳埋葬施設精査作業状況1



写真8 古墳埋葬施設精査作業状況2

写真などについては大型カメラ（4×5判、ポジフィルム、白黒フィルム）を用いた。空中写真撮影については、中型カメラ（6×4.5判、ポジフィルム、白黒フィルム）を用いてラジコンヘリコプターにて実施した。

## （2）現地調査の方法

現地調査は、平成9年度（Ⅰ期）、10年度（Ⅱ期）、12年度（Ⅲ期）に実施した。

平成9年度（本調査Ⅰ期）は、上神増E・5・6号墳の調査を実施した。調査はまず平成10年1月26日から調査前地形測量を行い、2月12日から人力による表土除去を開始し、順次墳丘・埋葬施設の調査を行い、3月18日に（株）フジヤマに委託し、空中写真撮影を行い、翌19日に現地事務所及び発掘資機材の撤収を行い、本調査Ⅰ期を終了した。

平成10年度（本調査Ⅱ期）は、上神増E、B古墳群の調査を実施した。調査は、平成10年6月9日から資機材の搬入、現地詰所の設置を開始し、翌6月10日から人力による表土除去を行い、検出した遺構の精査、実測、写真撮影を順次実施し、11月16日に（株）フジヤマに委託して調査区全体の空中写真撮影を行った。遺構の調査は平成11年1月7日に終了し、翌1月8日に資機材の撤収を実施し、Ⅱ期の本発掘調査を終了した。

平成12年度（本調査Ⅲ期）は、上神増A、E古墳群の発掘調査を行った。平成12年4月17日に資機材の搬入、現地詰所の設営とともに重機による進入路の作成および表土除去を開始した。4月24日より人力による表土除去を開始し、古墳等の遺構検出を行った後、順次遺構の精査、写真撮影、実測を行った。A古墳群については、6月7日に国際航業（株）に委託し、E古墳群については7月12日に中日本航測（株）に委託して、空中写真撮影・測量を実施した。空中写真撮影後、遺構の解体を行い、8月3日に現地の調査を終了し、8月8日にプレハブの解体、資機材の撤収を行い、Ⅲ期の本発掘調査を終了した。



写真9 古墳埋葬施設精査作業状況3



写真10 遺構実測作業状況1



写真11 遺構実測作業状況2



写真12 古墳墳丘調査作業状況

## 2. 資料整理および報告書作成

### (1) 資料整理の方法

基礎整理～報告書刊行までの作業は、静岡県教育委員会通知「静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準」に基づき実施した。

**基礎整理** 土器・玉類については取上げ後、台帳を作成し、遺物を傷つけないように慎重に洗浄・注記し、整理作業に備えた。金属製品については、現地にて劣化遅延処置を実施後、取り上げを行い、台帳作成し、保存処理に備えた。

記録類は現地で実測した図面の整合性を合わせるとともに、台帳を作成した。

**整理作業・報告書刊行作業** 出土品の分類、仕分け、接合、復原を行うとともに、復原が終了した遺物から順次実測を行い、版組を行った後でトレースした。また、実測が終了したものから写真撮影を行った。金属製品は、保存処理（クリーニング）を行った後で実測、版組、トレースを行うとともに、写真撮影を実施した。

記録類は図面整理を行い、古墳・遺構ごとに版組し、トレースを行った。

これらが終了した段階で、文章の執筆、編集、構成を行い、本書を刊行した。

**保存処理** 出土した金属製品について、現地調査終了後断続的に当研究所保存処理室においてクリーニング・保存処理等を進めた。

### (2) 資料整理および報告書作成の経過

**基礎整理** 基礎整理は、記録類の図面整理、遺構写真整理、遺物（土器と玉類）の洗浄・注記、台帳作成、金属製品は、遺物の劣化遅延処置および台帳作成を当研究所森現地事務所にて平成10年度から平成12年度に断続的に実施した。

**整理作業・報告書作成** 整理作業・報告書作成は、掛川工区の基礎整理作業が終了した平成15年度から報告書刊行に向けた整理作業を開始し、平成21年度まで断続的に当研究所森現地事務所及び袋井整理事務所で実施した。本格的な整理作業は主に平成19～21年度に実施し、平成19・20年度に主に挿図・図版の作成、平成21年度に主に原稿執筆・編集作業等を行い、報告書の刊行に至った。



写真13 古代墳墓精査作業状況



写真14 ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影作業状況



写真15 接合作業状況



写真16 遺物実測作業状況

**保存処理** 保存処理は当研究所保存処理室にて実施した。処理前記録の作成後、X線写真撮影を行い、この写真を参考にしながら土砂および鉄<sup>14</sup>を除去し、脱塩処理を行った。脱塩処理後保存処理を実施し、処理後の記録を作成し、処理を終了した。

**自然科学分析** 自然科学分析は、平成19年度に上神増Ⅱ・3号墳から出土した刀装具<sup>14</sup>と想定した金属製品の漆膜らしいものおよび用途不明の金属製品408の材質分析をパリノサーヴェイ株式会社に委託して実施した。

また、平成21年度には当時の植生や炭として利用した樹種及び操業年代を確定するためSF12(炭窯)から出土した木材の樹種同定および加速器(AMS)を用いた放射性炭素 C14年代測定を(株) 加速器分析研究所に委託して実施した。

**収納** 遺物や版組が終了した記録類は永久保管のための台帳作成・収納作業を平成 21年度末に行い、報告書を刊行後、静岡県教育委員会へ移管した。



写真17 遺構図編集・トレース作業状況



写真18 遺物写真撮影作業状況



写真19 写真図版作成作業状況



写真20 報告書編集作業状況

# 第3章 地理的・歴史的環境

## 第1節 地理的環境

上神増A・B・E古墳群が所在する磐田市（旧豊岡村）は静岡県西部に位置し、古代の遠江國の中央部に当たることから、中遠地区に区分される。磐田市は北と西側が浜松市（東区・浜北区・天竜区）、東側が森町、袋井市に接しており、南側は遠州灘に面する（第2図）。

旧豊岡村域西側は諏訪湖をはじめとする天竜川によって浜松市域と隔てられ、旧村域の形成に大きく影響を受けている。旧豊岡村域北部は赤石山系の本宮山から南にむかって伸びる山地の裾にあたる丘陵地であり、南側は磐田原台地が広がり、山裾と磐田原台地に挟まれた丘陵地帯が今回報告する上神増古墳群が築かれた「合代島丘陵」にあたる。旧村域内の丘陵地は、一雲斎川、敷地川により開析され、狭小な平野部が形成される。西側は大きく天竜川により開析された天竜川平野の北東隅の平地部に当たる（第3図）。

台地が途切れる旧豊岡村域は、太田川が形成した平野部から磐田原台地を避け、天竜や浜松方面へ向かうための交通要衝であり、現在も掛川と湖西を結ぶ天竜浜名湖鉄道—旧国鉄時代は、東海道に支障が生じた場合の代幹線として想定された一や県道61号線がはしり、戦国時代には当地を押さえるために武田、徳川などが剣を交えた場所となっている。



第2図 上神増A・B・E古墳群の位置  
(国土地理院平成元年1月30日発行1:200,000地勢図「掛川」「伊良湖」に加筆)

## 第2節 歷史的環境

## 1. 旧石器・縄文時代

合代島丘陵周辺では、旧石器時代の遺跡は数箇所において確認されているが発掘調査による資料ではない。合代島丘陵南側の磐田原台地では、磐田市寺谷遺跡、匂坂中遺跡、高見丘Ⅰ～IV遺跡、袋井市山田原Ⅰ遺跡(第4図51、以下、括弧内の数字は第4図の遺跡番号)のほか豊富な資料が確認されており、遠江では最も旧石器時代遺跡の密度が濃い地域として周知されている。

縄文時代の遺跡としては、本宮山から伸びる丘陵の先端部分にある大字東地(上の段)遺跡(14)で溝状遺構が確認され、中期後半の喫煙式や北屋敷式土器、石核、剥片などが出土しており、遺跡内で石鎚などの製品が生産された可能性が高い。

合代島丘陵の北端にある新平山遺跡(B地点、21)で石畳炉<sup>1</sup>基が確認されたほか、中期前半の五領ヶ台式を中心として、曾利式、鷺島式、北屋敷式、吠煙式、勝坂式(の影響を受けた)土器や打製石歛(石斧)、石斧、石錠などが出土している。

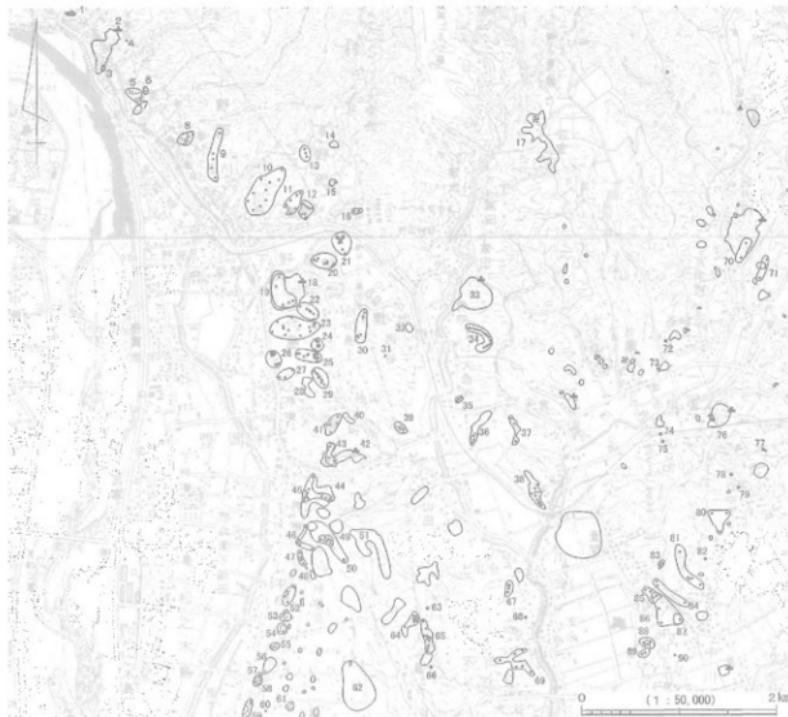
## 2. 弥生時代

合代島丘陵では、西の谷遺跡（31）で敷地川に向かって延びる尾根の北斜面で明治時代に2点、第二東名高速道路建設工事に先立つ調査で1点の合計3点の銅鐸が出土している。このうち敷地1・2号銅鐸は偶然発見されたもので、「上下2個が相重なった」状態で出土し（梅原1927）、現在1号銅鐸は東京国立博物館、2号銅鐸は辰馬考古資料館が所蔵している。また、第3号銅鐸は静岡県指定文化財となった。これらの銅鐸は三遠式銅鐸であり、完全な形の銅鐸として現存するものでは最も東側に位置しており、銅鐸文化圏を考える上で非常に重要な位置を占めている（静岡埋文研2010）。西の谷遺跡の北側に位置する慈眼平遺跡では鳥形土器などが出土し、西の谷遺跡との関係が注目される。

また、新平山遺跡（A地点、20）で弥生時代後期から古墳時代前期を主体とする集落跡（竪穴住居10軒）が確認されている。合代丘島陵上では、現在確認される唯一の集落跡であり、蔵平遺跡や西の谷遺跡との関連性などが注目される。



第3図 遺跡周辺の地質状況図



1 三郷塚古墳群	19 合代島A古墳群	36 鹿源寺上西古墳群	55 大道西D古墳群	73 同海道古墳
2 神山古墳	20 新平山A古墳群	37 鹿源寺上東古墳群	56 大道西E古墳群	74 山ノ原古墳
3 神田古墳群	・新平山道跡A地点	38 八王子神社上古墳群	57 大道西F古墳群	75 石仏山坪古墳
4 松井氏首理	21 新平山B古墳群	39 牡山C古墳群	58 大道西3古墳群	76 堀田古墳
5 萩井古墳群	・新平山道跡B地点	40 喬光平道跡	59 大道西G古墳群	77 麻瀬古墳
6 本村寺裏古墳群	22 合代島B古墳群	41 牡山A古墳群	60 狐塚西古墳	78 丸山古墳
7 稲平道跡	23 上神増A古墳群	42 牡山城	61 鶴塚古墳	79 春中二本松古墳
8 本村古墳群	24 上神増B古墳群	43 牡山B古墳群	62 大谷派道跡	80 霊宝寺古墳群
9 田川古墳群	25 上神増C古墳群	44 大手御上道跡	63 大谷派A古墳群	81 伊賀ノ谷古墳群
10 谷田ヶ谷古墳群	26 上神増D古墳群	45 大手内A古墳群	64 大谷屋B古墳群	82 富士見山古墳
11 亀井戸古墳群	27 新林石碑群	46 大手内B古墳群	65 大谷原C古墳群	83 照雲寺裏古墳群
12 大森地西古墳群	28 牡山古墳群	47 大手内C古墳群	66 大谷原D古墳群	84 天神山古墳群
13 梅園古墳群	29 上神増F古墳群	48 大道東古墳	67 川金坊主山古墳群	85 友永A古墳群
14 大森地(上の段)道跡	30 合代島C古墳群	49 山田原古墳群	68 刈分次神社上I号墳	86 北ノ原古墳群
15 大森地窓跡群	31 西の谷道跡	50 山田原1号墳	69 積露院上古墳群	87 北ノ原古墳群
・行者下道跡	32 織平道跡	51 山田原I道跡	70 宮ノ谷古墳群	88 上ノ山古墳群
16 大森地東古墳群	33 仲町古墳	52 大道西A古墳群	71 宮原古墳群	89 友永B古墳群
17 岩室庭寺	34 寺山古墳群	53 大道西B古墳群	72 高霧寺古墳	90 宮森古墳
18 亀井戸城	35 大当所古墳群	54 大道西C古墳群		

第4図 周辺の遺跡分布図

### 3. 古墳時代

旧豊岡村には古墳(群)が非常に多く、北から神田古墳群(3)、新平山A・B古墳群(20・21)、合代島A・B古墳群(19・22)、上神増A～F古墳群(23～26・29、なお、C古墳群はない)、大当所古墳群(35)、寺山古墳群(34)、大手内A～C古墳群(45～47)、血松塚古墳(47)などが形成されている。

古墳時代前期の古墳としては、磐田原台地北部には、西縁に小銚子塚古墳、寺谷銚子塚古墳、東縁に新豊院山2号墳がある。旧豊岡村域では、磐田原台地北西縁に築造された大手内A15号墳が位置づけられる可能性があるが、非常に少ない。

古墳時代中期前葉～中葉(5世紀前半～中頃)では、大手内A3号墳、五反田1号墳などがある。その後、中期後半(5世紀後半～6世紀初頭)になると古墳の造営が活発化し、磐田原台地上で当該時期では遠江で最大級の前方後円墳、血松塚古墳が築造される。また、小規模古墳の造営が増加し、寺山古墳群、大手内A・B古墳群、本書で報告する上神増A・E古墳群などで継続的に古墳が築造されるようになる。この時期の合代島丘陵周辺地域は、遠江でも非常に珍しい箱形石棺や小竪穴式石槨(室)が形成されるなど、同時期の遠江の他の古墳とはやや系譜の異なる古墳が確認でき、注目できる(大谷2004)。

古墳時代後期(6世紀前半以降)になると、古墳の築造はより活発となり、群集墳としては上神増A～F古墳群、合代島A・B古墳群、新林古墳群(27)、新平山A・B古墳群などで多数が築造され、奈良時代直前の8世紀まで古墳の築造が続けられる。これらの後期～終末期の古墳群では、合代島丘陵の古墳から鏡鏡(第4章第1節の写真21)や三葉環頭大刀(同第5図)が出土していること、新平山A2・4・6号墳で金銅装大刀や金銅装馬具が出土していること、神田1号墳で7世紀代の中国製の銅鏡が出土していることが注目できる。

一方、古墳に比べて集落遺跡は少ない。大楽地(上の段)遺跡(14)で、前期の竪穴住居7軒が切り合った関係をもって出土しており、ある程度の期間、集落として機能していた。また、同遺跡からは古墳時代後期から奈良時代に亘る遺物が出土しており、その期間の集落が存在する可能性がある。

### 4. 奈良・平安時代

奈良時代の遺物が採集される遺跡もあるが、この時期に位置づけられる遺構が確認された遺跡はない。平安時代の代表的な遺跡は、敷地川上流の東側の丘陵上に造営された岩室廃寺(17)である。岩室廃寺は密教系山岳寺院で、平安時代後期の作と想定される大日如来等が祀られる観音堂のほか、礎石建物や塔心礎が確認でき、発掘調査により基壇らしい部分2箇所が確認されている。これらの遺構周辺では平安時代の瓦や陶器が発見されており、岩室廃寺は平安時代中頃に最盛期を迎えていたと考えられる。

熊野神社の尾根斜面に当たる行者下遺跡(15)では、奈良時代前半～平安時代に亘る遺物が出土しており、行者下という地名からも岩室廃寺や修験道との関係が想定できる。また、行者下遺跡に近接する大業地窯(15)では、平安時代～中世と想定される布目瓦が採集されており、陶器も併焼されていたと考えられている。

また、遺物は確認されるものの現状ではこの時期の集落は確認されていない。上神増B・E古墳群から奈良時代後半の火葬墓と想定する古代墳墓4基が確認された。

### 5. 中世・近世

中世では、岩室廃寺の近接箇所で集石墓をはじめとする墳墓が多数確認された岩室中世墓群、本書で報告する上神増E古墳群などで中世墓が出土している。

また、敷地川の西岸の横山遺跡では、貿易陶磁器の白磁、龍泉窯青磁碗や古瀬戸製品などが出土して

いる。

城館跡としては、合代島丘陵の北西端（合代島丘陵西尾根の北端）に築かれた亀井戸城（18）や合代島丘陵の南端に位置する社山城（42）を代表として挙げることができる。

亀井戸城は合代島丘陵の北端に位置し、縄張りの遺存状況は良好である。南東から浜松市天竜区（旧天竜市）の二俣城を目指すには避けて通れないルートに位置しており、各方向への眺望も良好である。武田信玄が二俣城を攻撃する際（16世紀後半）に本陣を張った城と考えられている。

社山城は合代島丘陵の南端に位置しており、築城の時期は明確ではないが、15世紀末から16世紀にかけて、今川氏と斯波氏の新旧守護勢力の抗争の舞台となっていたことが判明しており、その後、武田氏が亀井戸城に陣を張るころには、武田氏の所領になっていた可能性が高い。

# 第4章 古墳の調査成果

## 第1節 合代島丘陵に築かれた古墳群の概要

### 1. 合代島丘陵に築造された古墳群の概要 (第3・4・6図、第3表、図版1)

今回、合代島丘陵とする丘陵地は、上述したように本宮山から伸びる山地の最南端の山麓と磐田原台地に挟まれた丘陵地である。この丘陵地は中央部が平坦地となっており、東西に最高地点、標高100m前後の丘陵地が展開する。この丘陵地をここでは「合代島丘陵」とし、中央の平坦地（谷）を挟んで東側を東尾根、西側を西尾根とする。この丘陵地の範囲は合代島丘陵全体で、東西1.5km、南北2.5km、東尾根は東西0.9km、南北2.5km、西尾根は東西0.6km、南北1.5kmの範囲である。

この丘陵地で現在周知される集落遺跡として東尾根の北端部分に新平山遺跡が所在するが、基本的に古墳、古代～中世の墳墓と山城（社山城、亀井戸城）や砦が多い。

古墳群は合代島丘陵の尾根上とその斜面に築造されており、西尾根は全体的に古墳の分布が確認でき、北から合代島A（5基）、合代島B（5基以上）、上神増A（13基以上、上神増B（西通り山、9基）・E（19基）、上神増D（鉢越、15基以上）、上神増F（社山古墳群、9基以上、3基消滅か）、新林古墳群（3基以上）が築造される。総数79基以上が現状で確認でき、未周知の古墳や既に破壊された古墳を含めれば100基以上が築造されたと想定できる。一方、東尾根には北側の先端に新平山A（11基）・B古墳群（18基）が築造されるが、それ以降は合代島C古墳群（7基）や、合代島丘陵最南端に位置する社山C古墳群（14基）が築造される程度で、古墳の分布は散在的である。



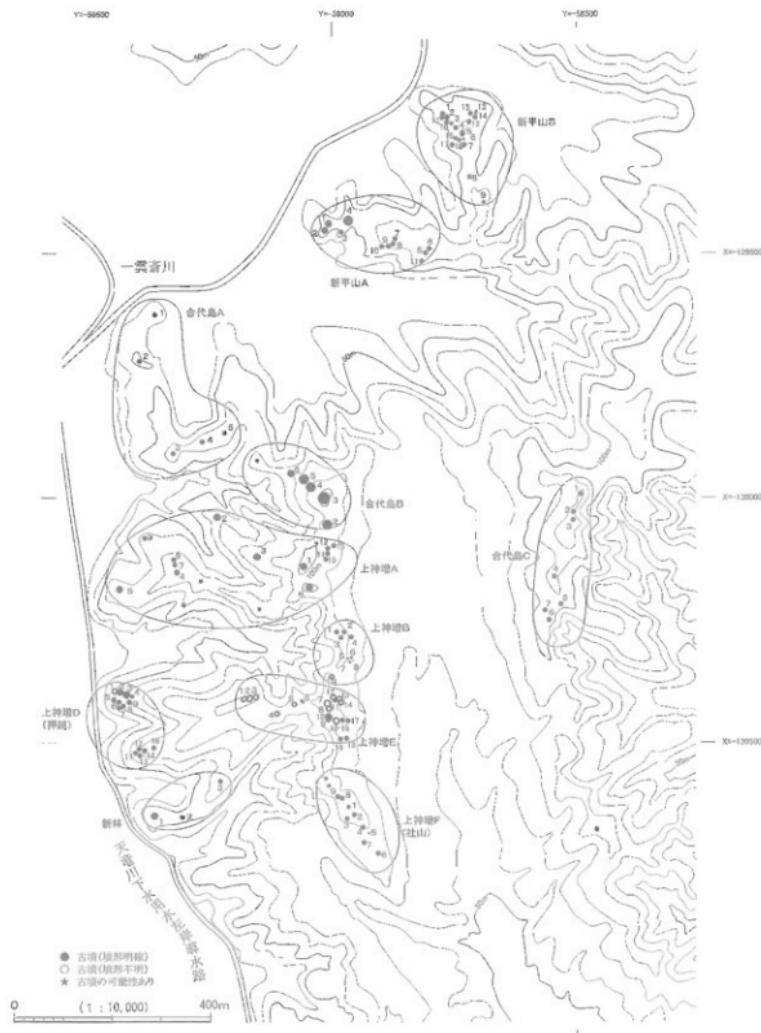
第5図 合代島丘陵の古墳群既出資料の  
① 合代島丘陵の三葉環  
古墳出土の大刀頭鏡式  
圓、静岡縣1930年  
より

### 2. 既往の調査 (第5・8図、写真21、図版96)

合代島丘陵の古墳群は、古くから知られており、「静岡縣史」(1930)時点での古墳の所在が報告され、三葉環頭大刀（第5図）や鏡（写真21）などが出土したことが記録されている。特に、丘陵上の古墳4基は明治時代に掘削され、そのうちの1号墳から金銅装大刀を含め、豊富な遺物が出土している。この1号墳の記録からすると、天井石を外して天井から入った様子が記録されていることから判断すると、現在も天井部分から石室内に進入できる上神増A1号墳である可能性が高い。同時に「静岡縣史」に掲載された1号墳は割石を用いた全長10m程の大型の横穴式石室である。

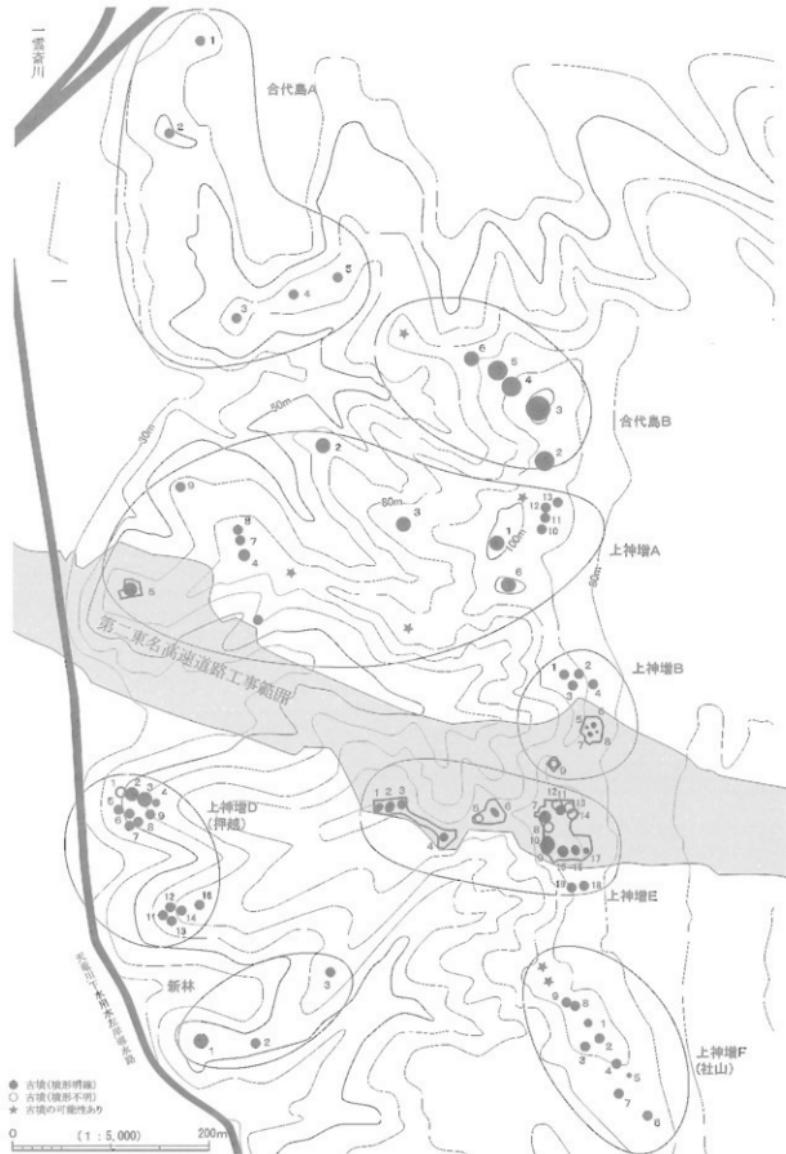


写真21 上神増古墳群出土鉢鏡（静岡縣1930年より）

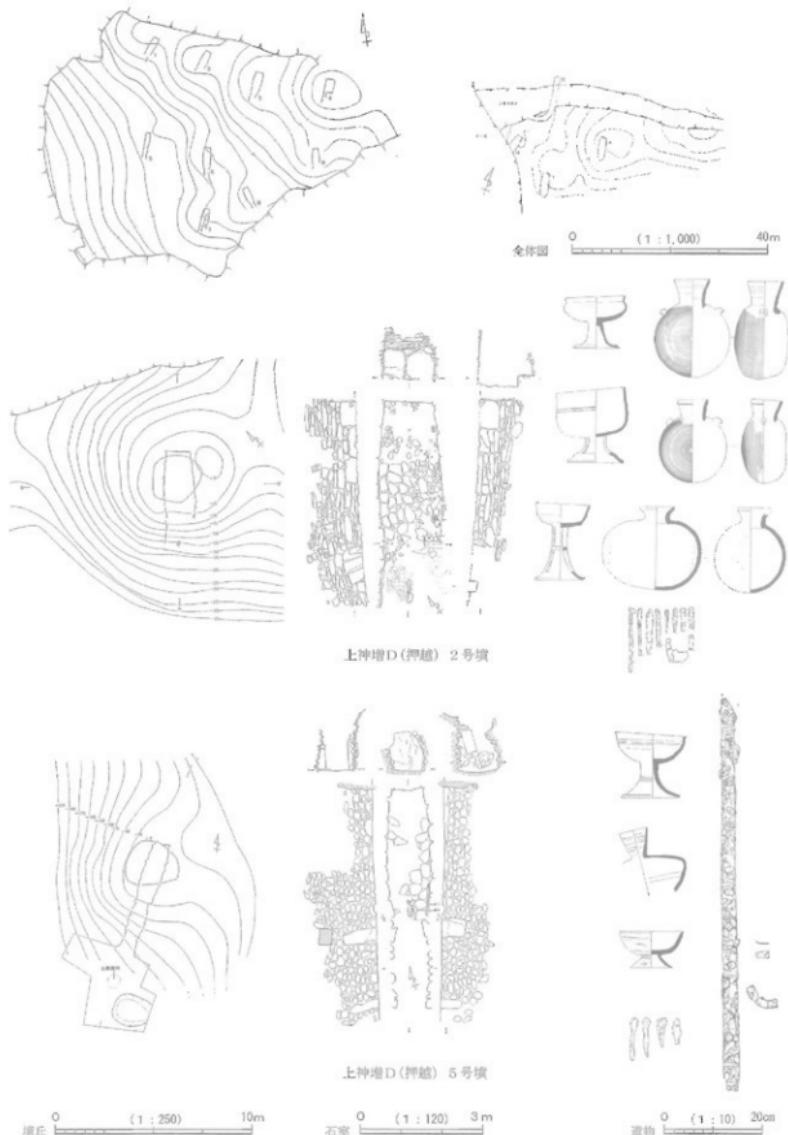


第6図 合代島丘陵の古墳分布図

第4章 古墳の調査結果



第7図 道路と第二東名工事範囲との関係



第8図 合代島丘陵の古墳群既出資料②

また、足立順司氏に提供いただいた上神増古墳群（A古墳群）の写真（図版96）は足立氏の記録によれば、当1号墳に該当する可能性が高い。

このように合代島丘陵では古くから古墳の存在が知られ、豊富な遺物が出土している。

**第1・2次調査** 本格的な発掘調査が行われたのは戦後になってからで、合代島丘陵西尾根ではこれまで大きく2回の発掘調査が実施されている。1965年に調査された上神増B

1～4号墳（西通り山古墳群）および1970年に調査された上神増D（押越）古墳群・上神増F（社山）古墳群であり、合代島丘陵の古墳群の特徴ひいては天竜川平野北東部の古墳群の様相を知る上で貴重な調査資料となっている。

上神増B古墳群（写真22、図版96）は、正式報告が刊行されていないため、概要を知ることができるのである。この時に調査された古墳のうち2基が現地に保存されており、奥壁や立柱石に板石、側壁に円礫を使用した横穴式石室が保存される。複室擬似両袖式石室で、土器や鉄製品が出土したとされ、築造時期は7世紀代とされている。

上神増D・F古墳群は、正式報告（豊岡村教委1983）が刊行されており、詳細が報告されている。上神増D古墳群は天竜川に向かって伸びる尾根斜面に築造され、調査箇所において15基の古墳調査が実施されている（第8図、全体図には20号墳が抜けている）。古墳は立地箇所から2支群に区分できる。板石を用いて構築した横穴式石室墳であり、左片袖式石室が隣接して所在するなど遠江でも特徴的な群集墳である。

なお、「押越・社山古墳群調査報告書」（豊岡村教委1983）で「社山古墳群」とされた古墳群は、現状では上述したとおり上神増F古墳群に当たる。豊岡村教育委員会が刊行した別遺跡の発掘調査報告書ではその「社山古墳群」が「社山A古墳群」として報告されるものがあり、誤解を生む可能性がある。静岡県教育委員会による分布調査の際に発掘調査された「社山古墳群」の場所は再確認され、現在静岡県教育委員会が周知する上神増F古墳群に該当していることを明記しておきたい。

**第3次調査** 今回の第二東名高速道路建設に先立つ調査は合代島丘陵西尾根で行われた上神増古墳群としては第3次調査となる。

### 第3表 合代島丘陵の古墳群一覧表

古墳群名	場所	基數	墳形	埋葬施設	時期	参考	文献
新平山A	東尾根	11	円墳	横穴式石室	後期～終末期	消滅	豊岡村教委1992
新平山B	東尾根	18	円墳	木棺直葬・横穴式石室	中期～終末期	消滅	豊岡村教委1992
合代島A	西尾根	5	円墳	横穴式石室	後期～終末期	未調査	
合代島B	西尾根	5	円墳	横穴式石室	後期～終末期	未調査	
合代島C	東尾根	7	円墳	横穴式石室	後期～終末期？	未調査	
上神増A	西尾根	13	円墳	木棺直葬・横穴式石室	中期後半～終末期	本書、未調査	本書
上神増B	西尾根	9	円墳	横穴式石室	後期～終末期	未報告 西通り山古墳群	本書
上神増D	西尾根	15	円墳	横穴式石室	後期～終末期	押越古墳群 消滅	豊岡村教委1983
上神増E	西尾根	19	円墳	木棺直葬・横穴式石室 ・横穴式石室ほか	中期後半～終末期	本書 一部未調査	本書
上神増F	西尾根	9	円墳	横穴式石室	後期～終末期	社山古墳群 大部分未調査	豊岡村教委1983
新井	西尾根	3	円墳	横穴式石室	後期	未調査	豊岡村1993
合計	11古墳群	114基以上					

※1 古墳の基數は、調査および踏査で古墳あるいは古墳の可能性が高いものの数をえた。第6・7回で古墳の可能性ありとしたものは含めていない。  
※2 上神増C古墳群は「登録地盤なし(欠番)」である。

※3 社山C古墳群は基數に含めていない。



写真22 上神増B古墳群横穴式石室の現況

### 3. 古墳部位の名称と出土遺物の名称（第9・10図）

今回報告する古墳および埋葬施設、遺物の名称を下記の通り定義する。

#### (1) 古墳

**墳形** 円墳 石室・木室などの形状に合わせ主軸側が長い楕円形墳、やや不整形な形の円墳を含む。

**墳丘** 第一次墳丘 横穴系埋葬施設において墳丘を段階的に造成する場合、埋葬施設を覆う墳丘の中核となる盛土。

**第二次墳丘** 横穴系埋葬施設において第一次墳丘を覆う盛土。これをもって墳丘は完成する。

**葺石** 墳丘の斜面部を礫で覆った施設。

**外覆列石** 墳體あるいは構築がある場合、各段の裾に積載された石列で、一段から数段積載されるもの。

**墳丘内石列** 墳丘の構築段階で積載された石列で、墳丘完成時には墳丘内に全部あるいは一部が取り込まれたもの。

**周溝** 墳丘を区画するために掘削された溝。

**削り出し** 斜面を削り出して成形することにより、古墳と周囲を区画するもの。

#### (2) 埋葬施設

**木棺直葬** 古墳の内部に構築された墓壙に木棺を直接埋葬するもの。

**襖** 古墳の内部に構築された墓壙に川原石を用いて襖を作り、内部に木棺を納めるもの。

**箱形石棺（箱形石襖）** 古墳の内部に構築された墓壙に板状の石材を用いて箱形の棺（襖）とするもの。

**横穴式石室** 古墳の内部に掘削された墓壙に、石材を用いて玄室などを構築するもの。

**横穴式木室** 古墳の内部に掘削された墓壙に、木材と粘土を用いて玄室などを構築するもの。

**横穴式土壙** 古墳の内部に掘削された墓壙をそのまま利用し、天井に木材を用いるものなど墓壙・埋葬施設を構築するために掘削された土坑。

**墓道** 埋葬施設へ至る通路部分。

**裏込め** 横穴式石室・横穴式木室を構築し、木棺を墓壙内に据える際、石材・木材と墓壙との間に充填された土砂。

**基底石** 横穴式石室を構築するにあたり最下段に据えられた石材。

**片袖式** 袖が片側のみ内側に折れ、狭道はその幅のまま、あるいはやや広がるもの。

なお、本報告では、横穴系埋葬施設の場合、奥壁側から玄門側をみて、右側を右側壁、左側を左側壁とする。

**両袖式** 袖の両側が内側に折れ、狭道はその幅のまま、あるいはやや広がるもの。

**疑似両袖式** 玄門を有するが、玄門が内側に突出するもの。

また、玄室と狭道（あるいは前庭側壁）で構成されるものを「(单室) 疑似両袖式」、玄室と狭道と前庭側壁（あるいは後室、前室、狭道）で構成されるものを「複室疑似両袖式」とする。

**堅穴系横口式石室** 横穴式石室の影響を受けて、堅穴系埋葬施設に横口が取り付けられたもの。

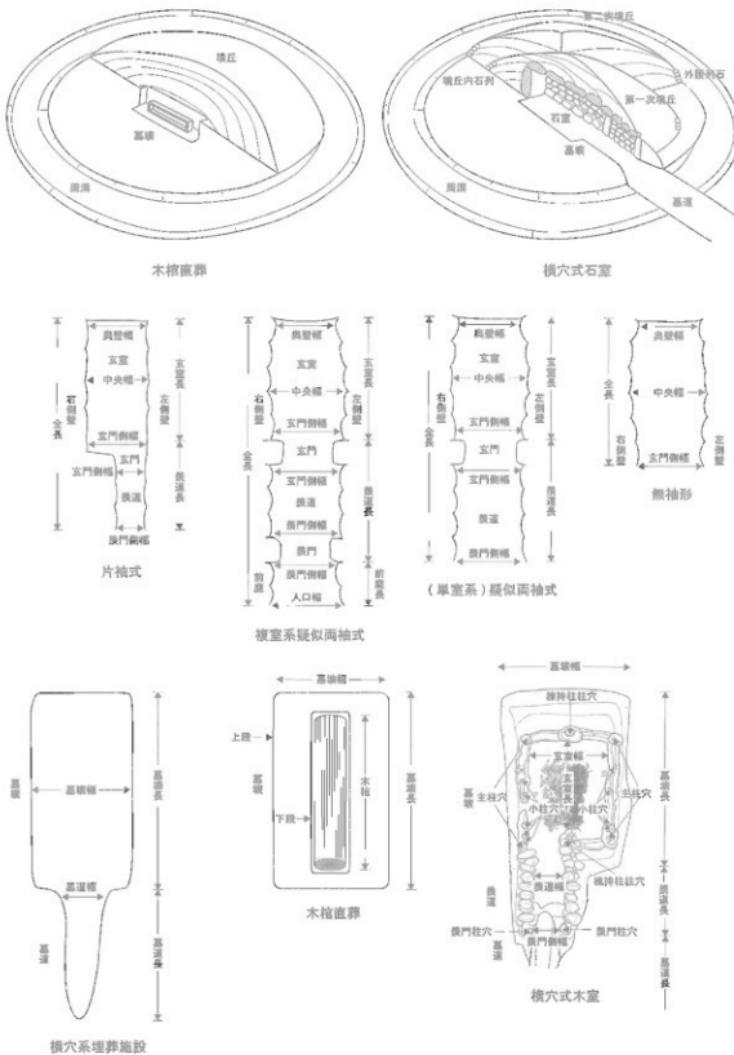
**無袖形** 袖が形成されないもの。無袖形は、系譜関係の判断が難しく、「型式」として区分できないため、袖がないものを一括して「無袖形」とする。

**玄室の平面形** 長方形 玄門側、中央部、奥壁側の幅がほぼ等しいもの。

胴張形 玄門側、奥壁側に比べて中央の幅が広く、側壁が弓なりを呈するもの。

奥窄まり形 玄門側、中央部に比べて、奥壁側のみ幅が狭いもの。

第4章 古墳の調査成果



第9図 古墳、埋葬施設の部位名称と計測位置

## (3) 遺物

遺物では、須恵器、土師器、玉類、耳環、鉄鎌、刀剣、刀子、縄文土器、山茶塊、常滑焼が出土した。主な遺物は次のように分類する。

**須恵器** 須恵器は环身・环蓋（环身・环蓋、返蓋・無台环、拙蓋・有台环に細分して表記する）、高环、（小型）広口短頸壺、長頸壺、甕、短頸壺、平瓶、提瓶、フラスコ瓶、壇、壺、甕に区分した（第10図）。

**土師器** 环身・环蓋、塊、高环、盤、脚付盤（高盤）、壺、甕に区分した（第10図）。

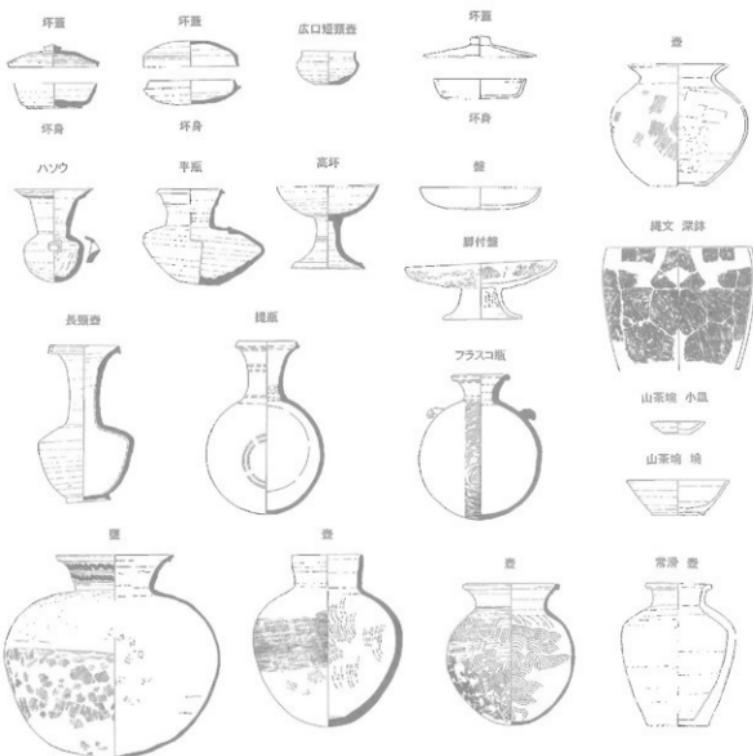
**その他** 本報告で報告する須恵器・土師器以外では、縄文土器（深鉢）、山茶塊（塊・小皿）、常滑焼（壺）に分類した。

**玉類** 勾玉、管玉、策玉、切子玉、算盤玉、丸玉、小玉に分類した。

ガラス玉は直径8mmで丸玉（8mm以上）と小玉（8mm未満）に区分した。

なお、管玉などについて自然科学的な石材鑑定は実施していない。

**鉄鎌** 頸部長が鎌身長の2倍以上のものを長頸鎌、それ未満のものを短頸鎌とする。また、鎌身幅が



第10図 土器分類図

1.5 cmを超えるものを平根式、それ以下のものを尖根式とする。関は鐵身部分を鐵身関、茎と頭部の間の関を「茎関」とする。鐵の形態分類については、「静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要」10号の分類に基づく。

#### 4. 本書で用いる時期について

本書で用いる古墳時代の時期区分は、須恵器を主体とし、鈴木敏則氏の湖西窯を中心とした遠江須恵器編年（鈴木敏 2001）を用いる。大阪府陶邑古窯群とのおおよその時期の対応を以下に示す。

第4表 本書で使用する須恵器年の時期対応表

本書 湖西編年(鈴木編年)	陶邑田辺編年	陶邑中村編年	飛鳥編年	曆年代
遠江Ⅰ期中葉	TK208	I期3段階		5世紀中頃～後半
遠江Ⅰ期後葉	TK23	I期4段階		5世紀後半
遠江Ⅰ期末葉	TK47	I期5段階		5世紀末～6世紀初頭
遠江Ⅱ期	MT15	II型式1段階		6世紀前葉
遠江Ⅲ期前葉	TK10	II型式2段階		6世紀中頃
遠江Ⅲ期中葉	TK43	II型式3・4段階		6世紀後半
遠江Ⅲ期後葉	TK209古	II型式5段階		6世紀末～7世紀初頭
遠江Ⅲ期末葉		II型式6段階	飛鳥Ⅰ	7世紀前半
遠江Ⅳ期前半	TK217	II型式6段階・III型式1段階	飛鳥Ⅱ	7世紀中頃～後半
遠江Ⅳ期後半	TK46	III型式2段階	飛鳥Ⅲ	7世紀後半
遠江Ⅳ期末葉	TK48	III型式3段階	飛鳥Ⅳ	7世紀後半～末葉
遠江Ⅴ期前半(初頭)	MT21	IV型式1段階	飛鳥Ⅴ・平城Ⅰ	7世紀末葉～8世紀第1四半期
遠江Ⅴ期前半				8世紀第2四半期頃
遠江Ⅴ期後半				8世紀第3四半期頃～

\*陶邑との編年的な対応関係および曆年代については、近づ飛鳥博物館「年代のものさし・陶邑の須恵器一」、鈴木一有氏の編年観（鈴木2008）を参考にして作成。

## 第2節 調査区の配置

第二東名高速道路建設範囲内で、上神増古墳群中の範囲は、試掘・確認調査結果に基づき、調査区はA古墳群で1箇所（A-1区）、B古墳群で2箇所（B-1区・2区）、E古墳群で3箇所（E-1～3区）設定した（第11図）。

なお、当初は上神増A・E古墳群のみと考えて調査したが、遺跡範囲図と詳細に分析した結果、当初E古墳群として調査した古墳5基はB古墳群に該当することが判明したため、本報告での調査区名と発掘調査時（当初）の調査区名とは変えていることをあらかじめ断つておく。

各調査区の緯度経度は下記のとおりである。なお、本緯度経度は世界測地系による。

A-1区は、おおよそ北緯 $34^{\circ}49'40''$ 、東経 $137^{\circ}50'50''$ に位置する。

B-1区は、おおよそ北緯 $34^{\circ}49'35''$ 、東経 $137^{\circ}51'8''$ に位置する。

B-2区は、おおよそ北緯 $34^{\circ}49'35''$ 、東経 $137^{\circ}51'7''$ に位置する。

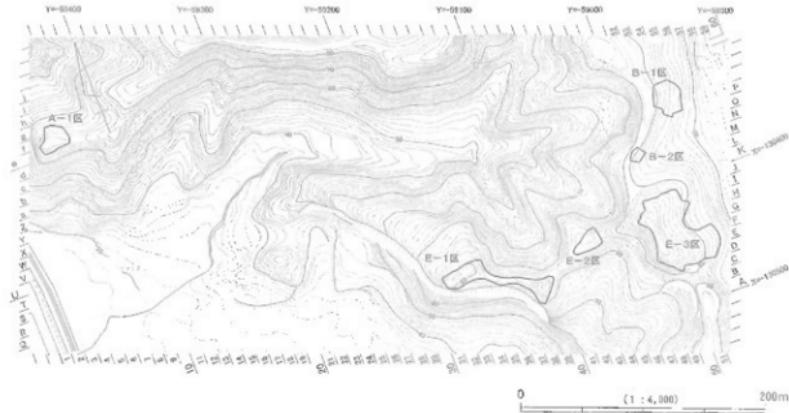
E-1区は、おおよそ北緯 $34^{\circ}49'36''$ 、東経 $137^{\circ}51'00''$ に位置する。

E-2区は、おおよそ北緯 $34^{\circ}49'35''$ 、東経 $137^{\circ}51'4''$ に位置する。

E-3区は、おおよそ北緯 $34^{\circ}49'35''$ 、東経 $137^{\circ}51'7''$ に位置する。

したがって、今回の調査範囲は、北緯 $34^{\circ}49'40''$ ～北緯 $34^{\circ}49'35''$ 、東経 $137^{\circ}50'50''$ ～ $137^{\circ}51'8''$ の範囲である。

なお、例言で記述したように、第11図以下の挿図中の緯度経度は、日本測地系であることを再度断つておきたい。



第11図 調査区周辺の地形と調査区配置図

### 第3節 調査した古墳の概要

今回の調査において、上神増A古墳群で1基、上神増B古墳群で5基、上神増E古墳群で17基の計23基の古墳とともに、縄文時代の陥穴8基、奈良時代の火葬墓4基、平安時代末～鎌倉時代初頭の中世墓1基、鎌倉時代の炭窯2基、用途不明遺構7基、溝5条の調査を行った。

第5表 調査古墳一覧表

古 墳 名	墳形	墳丘		石室 の有無	蓋頂・被墳 の有無	主軸方位	玄室 平面形	全長	残存高	墓葬施設		
		南北×東西	墳丘 高さ							玄室長 最大幅	黒帯幅	玄門幅
A5	円墳	(11.5±)×14	無石	木棺直葬 (削竹形木棺)	有	N-90°45'-E	-	6.0	0.55	2.15	0.78	-
		(再利用)	-	横穴式石室	有	N-38°15'-E	長方形	4.5±	0.8	4.5±	1.4	1.2 1.25±
B5	円墳	(4.5±)×(3.5±)	-	横穴式石室 (無袖形)	無	N-49°45'-W	長方形	2.2	0.7	2.2	0.62	0.6 0.56
B6	円墳	(6.0±)×(6.0±)	-	横穴式石室 (削竹形木棺)	有	N-44°33'-W	異形	3.6±	0.65	2.2	1.1	0.8 1.04
B7	円墳	(6.0±)×(5.0±)	-	横穴式石室 (削竹形木棺)	有	N-27°15'-W	異形	3.7±	1.0	2.4	0.9	0.4 0.8
B8	円墳	(3.2±)×(3.3±)	-	横穴式石室 (無袖形)	無	N-21°15'-W	圓形	1.4	0.65	1.4	0.68	0.54 0.4
B9	不明	-	-	横穴式石室 (削竹形木棺)	有	N-37°30'-W	異形	3.5±	1.0	1.55	0.9	0.5 0.9±
E1	円墳?	(12.2±)×(7.7±)	-	木棺直葬 (削竹形木棺)	有	N-51°45'-E	-	3.4±	0.56	3.0±	0.6	- -
E2	円墳?	(0.4±)×12.4	-	横穴式石室 (無袖形)	無?	N-33°30'-E	長方形	3.8	1.3	3.8	0.65	0.65 0.75
E3	円墳?	(6.5±)×(12.6±)	-	横穴式木室 (片袖形)	有	N-0°00'-E	方形	4.65	0.7	2.7	2.0	1.9
E4	不整形墳	(0.0±)×(0.0±)	-	横穴式木室か 横穴式土壙	有	N-46°00'-W	方形?	3.9±	0.6	3.9±	-	-
E5	不明	-	-	木棺直葬?	有	N-46°15'-E	-	2.5±	0.1	-	-	-
E6	円墳	(0.5±)×11.2	-	木棺直葬	有	N-0°00'-E	-	3.5±	0.7	2.5	0.94	-
E7	円墳?	(12.5±)×(12.0±)	-	横穴式石室(複数) 横穴式石室か 横穴式箱形石室	有	N-63°00'-E	長方形	3.5±	0.4	3.5±	0.9±	0.8±
E8	不明	-	-	木棺直葬?	有	N-78°00'-E	-	1.45±	0.8	0.5±	0.64	- -
E9	円墳	(7.9±)×(13.8±)	-	木棺直葬	無?	N-16°15'-W	-	5.0	0.55	2.9	0.5	- -
				木棺直葬	有	N-49°30'-W	-	3.1	0.45	-	1.3	- -
R10	円墳	(0.0±)×(11.0±)	-	「横口造の櫛形?」	有	N-76°15'-E	長方形?	6.8±	0.5	6.8±	1.5±	1.3± 1.3±
E11	円墳	(10.5±)×(10.0±)	-	横穴式石室 (無袖形?)	有?	N-16°15'-E	異形	2.0±	0.1	3.0±	1.0±	1.6± -
E12	不明	-	墳丘内 石室	横穴式石室 (削竹形木棺)	有?	N-29°30'-W	削開形	3.1	1.3	2.85	0.8	0.5 0.6
E13	なし?	-	-	横穴式石室?	有?	N-24°30'-W	-	2.3±	0.55	-	-	- -
E14	なし?	-	-	横穴式石室?	無	N-34°15'-W	円形	1.0±	0.2	1.0±	0.5±	0.5 0.3±
E15	円墳?	(12.0±)×(11.0±)	-	横穴式石室 (削竹形木棺)	有	N-15°45'-W	異形	5.0±	0.2	3.0±	1.2	- -
E16	円墳	(11.0±)×(8.8±)	-	横穴式石室 (削竹形木棺)	有	N-22°45'-W	削開形	6.75	0.7	4.5±	1.1±	1.0± 0.8
E17	不明 (円墳?)	(7.0±)×(6.0±)	-	横穴式石室 (削竹形木棺)	有	N-17°30'-W	長方形	4.65	1.15	4.3	1.05	0.9 0.95

※1 「+」=以上、「±」=前後、「-」=以下

※2 本棺直葬の場合、会長=墓頭長、玄底長=墓底長、奥道長=下段長、奥道幅=下段幅とする。

※3 文字としたものには横穴系埋葬施設が該当する。横穴系埋葬施設では、玄室=木棺(墓底下段)・石室の長さ、幅を示す。

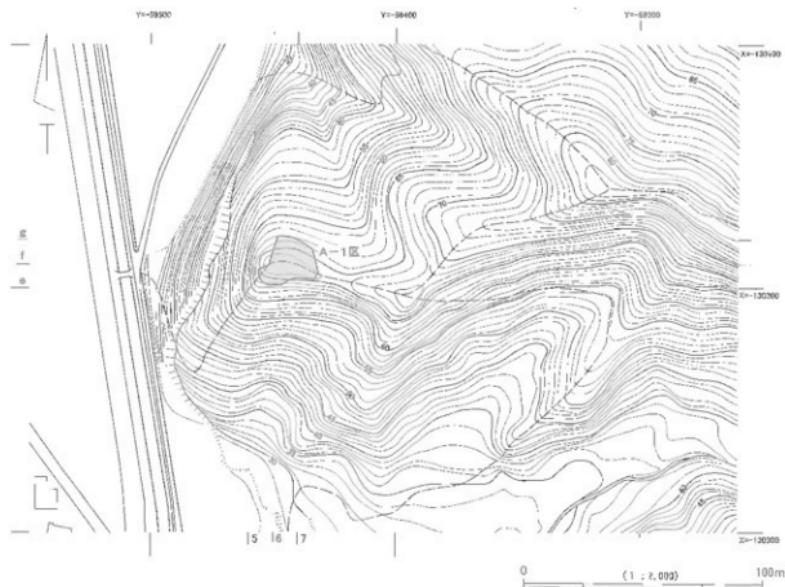
遺物は、縄文土器、古墳時代の須恵器、土師器、装飾付大刀、鉄刀、鉄劍、鉄鋸・石突、刀子、馬具、玉類、耳環、鉄釘、奈良時代の土師器、中世の常滑壺、山茶塙、銅錢、江戸時代の銅錢が出土した。

第5表に古墳の墳形、規模、埋葬施設の種類・規模、副葬品、そのおよその時期を記す。各古墳の調査所見については、第4節以降で詳述する。古墳以外の遺構については第5章以降で詳述する。

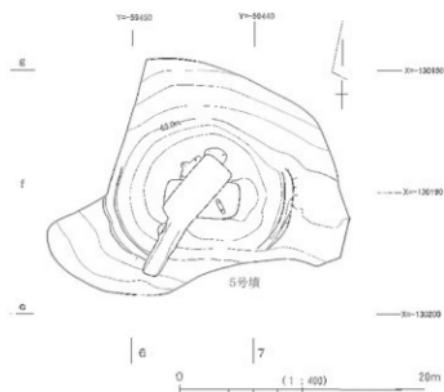
埋葬施設						副葬品等	備考	派生時期	古墳名
横道長	幅	高さ	横道	幅	高さ				
-	-	-	圓丸 長方形	6.0	3.0	(推)須恵器1	青石を伴う。	5世紀中頃～後半	A5
不明	0.9+	-	長方形 (円筒形)	6.1	2.8	玉類(勾玉1・管玉5・小玉4)・耳環1・鉄小刀1・刀子4~7・不明 金屬製品5・須恵器1:(墓道)須恵器4;(埴丘・周溝)須恵器2	破壊が著しく、石室規模 6世紀末葉～7世紀初頭		
-	-	-	圓丸 長方形	2.8	1.6	(周溝)須恵器1		7世紀後半以前	B5
1.4+	0.95	-	圓丸 長方形	4.0+	2.0	なし		7世紀後半以降	B6
1.3	0.8	-	圓丸 長方形	4.4+	1.8	鉄軒付大刀1・鉄鏡1+・鉄刀7+・須恵器1:(與壁面含む)須恵器1:(埴丘・周溝・周溝)須恵器4	7世紀中頃	B7	
-	-	-	圓丸 長方形	2.2	1.9	(周溝)須恵器1		7世紀後半～末葉	B8
2.1+	0.7+	-	圓丸 長方形	4.6+	1.9	耳環1・須恵器4・土解器2		7世紀末～8世紀初頭	B9
-	-	-	圓丸 長方形	3.4+	1.3	鉄鎧2・刀子1・玉類(小玉1)		5世紀後半～6世紀初頭	B10
-	-	-	圓丸 長方形	4.5	2.5	袋錐三重輪附大刀・鉄鏡1・刀箭具2・大刀2・鉄小刀1・刀子2・ 鉄鏡4+・玉類(勾玉11・玉茎2・切子玉2・管玉2・小玉4・小玉11)+・ (墓道)須恵器15	6世紀後半	E2	
1.95	0.8	-	左片袖形	6.6	3.3	玉類(小玉14)+・銅製品1(滑輪か)・大刀2・刀子1・鉄1・鉄鏡10+・刀箭具1・須恵器1:(埴丘・周溝無類)須恵器8	圓通は石材で構成。	10世紀後半	E3
-	-	-	圓丸 長方形	4.4	2.4	須恵器2・土解器1		6世紀末～7世紀前半?	E4
-	-	-	圓丸 長方形	2.5+	1.15	なし	埋葬施設ではない可能性がある。	不明(6世紀後半～7世紀初頭?)	E5
-	-	-	圓丸 長方形	3.3+	2.3	玉類(勾玉1・管玉1・丸玉1・小玉4)		5世紀後半～6世紀初頭?	E6
-	-	-	圓丸 長方形	3.5+	1.3	玉類(管玉1・丸玉12・小玉2)・鉄鏡1・刀子1・須恵器2:(埴丘) 須恵器9	SX09に破壊される。 石室の場合は須穴式・鏡口式石室・片鏡式無袖形 の可能性あり。	5世紀後半～中頃 8世紀後半	E7
-	-	-	圓丸 長方形	14.5+	1.85	馬具(総)・大刀1・須恵器2:(埴丘)須恵器1	埋葬施設ではない可能性がある。	6世紀中頃	E8
-	-	-	圓丸 長方形	5.0	1.15	なし		5世紀後半～6世紀初頭	E9
-	-	-	楕円形	3.1	1.3+	鉄劍1・大刀1・鉄鎧5・土解器1			
-	-	-	圓丸 長方形	7.3	3.0	玉類(管玉1)・須恵器2:(墓道)須恵器5:(埴丘)須恵器5	9号埴丘を利用	6世紀中頃～後半	E10
-	-	-	圓丸 長方形	6.0+	1.05	刀子1:(周溝)須恵器2		6世紀末～7世紀初頭?	E11
0.25	0.5	-	圓丸 長方形	4.0+	1.7	須恵器1:(墓道)須恵器7:(埴丘・石室内・墓道)須恵器2	埴丘出土の須恵器は11 号埴の周溝の笠置から 出土。	7世紀末葉～8世紀初頭	E12
-	-	-	圓丸 長方形	2.1	0.8	なし		7世紀末葉以降?	E13
-	-	-	圓丸 長方形	12+	1.1	なし		7世紀末葉以降?	E14
2.0+	-	-	圓丸 長方形	5.5+	2.5	大刀1・刀子2・鉄鏡2・須恵器1・須恵器1:(墓道)須恵器8・土 解器1:(埴丘・周溝)須恵器2	7世紀後半以降	E15	
2.25	0.75	-	圓丸 長方形	7.0+	2.3	玉類(勾玉10・切子玉2・丸玉3・小玉10)・耳環4・刀子2・ 大刀2+・鉄鎧2+・鉄鏡2+・鉄1・須恵器7:(墓道)須恵器7:(埴丘・周溝) 須恵器3	6世紀後半～7世紀初頭	E16	
0.25	1.0+	-	圓丸 長方形	5.5	2.3	鉄鍔1・石突1・須恵器10:(石室周辺)須恵器1		7世紀前半	E17

単位(m)

## 第4節 上神増A古墳群の調査成果



第12図 上神増A古墳群調査区配置図と周辺の地形



第13図 上神増A古墳群調査区測量図

### 1. 上神増A古墳群の概要

上神増A古墳群は、合代島丘陵の西尾根の、天竜川に向かって張り出した小尾根の頂部に築造される古墳と、東側斜面に築造される古墳がある（第6図）。A古墳群では東側斜面では古墳が密集する可能性があるが、尾根頂上に築造された古墳はやや大型（15～20m）で、群集することはなく、単独で位置する古墳が多い。

A 5号墳は、合代島丘陵の西に向かって熊手状に張り出した尾根先端に単独で位置する。上神増A古墳群では最も西側に築造された古墳である。

## 2. 上神増A 5号墳

### (1) 古墳の現況（第12図、図版9）

A 5号墳は、周囲よりも高く盛り上がっており、調査前から古墳であることが想定できた。この他に古墳と想定できる高まりは周囲ではなく、単独で築造されたと考えられる。墳丘頂部は標高約66.6mで、平地部との比高差は現状で約37mである。古墳が築造された場所からは天竜川平野が一望でき、非常に立地条件がよい場所に築造されている。

### (2) 墳丘の構造（第13～16・21図、第5・37表、図版3・9～11・62・64）

墳丘 後述するように、A 5号墳は時期の異なる埋葬施設2基が確認でき、時期の新しい横穴式石室構築時の墳丘は、古い時期の墳丘を再利用したものである。古い時期の墳丘を活かして、横穴式石室を



第14図 上神増A 5号墳墳丘測量図

構築し、古い時期の埴丘盛土の上に新しい盛土（第一次埴丘）が積み上げられた状況を確認できる。

**周溝** 周溝は、古墳が立地する尾根が東西に伸びることから、尾根筋に直交するように東側と西側を掘削し、北側と南側は自然地形を活かしたかあるいは削りだして周溝に代えていた可能性が高い。

埴丘には段築は確認できず、截頭円錐形の円墳であった可能性が高い。

**葺石** 蓐石は埴丘東側および西側で確認した。南東～南西にかけては丘陵自体が崩落しており、また横穴式石室を築造した際の墓道の掘削等で破壊された可能性が高い。したがって、葺石は少なくとも埴丘東側から南側を経て西側まで葺かれていた可能性が高い。埴丘北側は崩落した状況であるが、北の平地から仰ぎ見た場合、丘陵に遮られて直接見えない場所にあたることから、もともと葺く予定ではなかったのかもしれない。古墳が築造された場所は最も南西からの見晴らしがよいことから、明らかに南西から見ることを意識して築造された可能性が高いといえるであろう。このため築造当初から北側は葺石が行われなかつた可能性も否定できない。

葺石の設置は、周溝底面立ち上がり箇所に 20～30cm の川原石を基底石として据えた後、埴丘の中心から見た場合、放射状になるように区画石を約 1.0～1.2m の間隔で一直線に積み上げ、その間を 10～15cm の川原石で充填している。残存する葺石の傾斜角度は、埴丘西側（第 16 図の C-C' 断面部分）で約 25 度、埴丘東側（H-H' 断面）で約 25 度であり、東西でほぼ同じ角度で設置している。

周溝と葺石の関係から、埴丘規模は東西 14m、南北 11.5m 以上であることが判明する。

**埴丘及び周溝出土遺物（第 21・23 図、第 37・39 表、図版 62～64）** A 5 号墳の埴丘表土から須恵器壺瓶類底部 1 点（7）、周溝からは須恵器壺身 1 点（2）が出土した。

壺身（2）は内傾しながら立ち上がる立ち上がりで、口縁端部は丸く收められる。口径は 11.3cm に復原できる。壺瓶類底部片は、平底で、胴部下端にはヘラ削りを行う。

この他、直接古墳に伴わない遺物として、埴丘表土から銅錢「寛永通寶」（古寛永、初鑄 1636 年）1 点（32）、銅錢「元豈通寶」（北宋錢、初鑄 1078 年）1 点（33）の銅錢 2 点が出土した。遺構は確認できなかつたが、中世墓・近世墓が存在した可能性がある。

### （3）埴丘盛土の構築過程（第 14・15 図、図版 10）

埴丘の構造については、調査所見から復原する盛土工程を記載する。なお、下記のとおり、第 1 埋葬施設に伴う盛土と第 2 埋葬施設に伴う盛土が確認できるため、ここでは、古墳築造当初の盛土（ア）と第 2 埋葬施設の盛土（イ）に分けて記載する。

#### ア 古墳築造当初の盛土

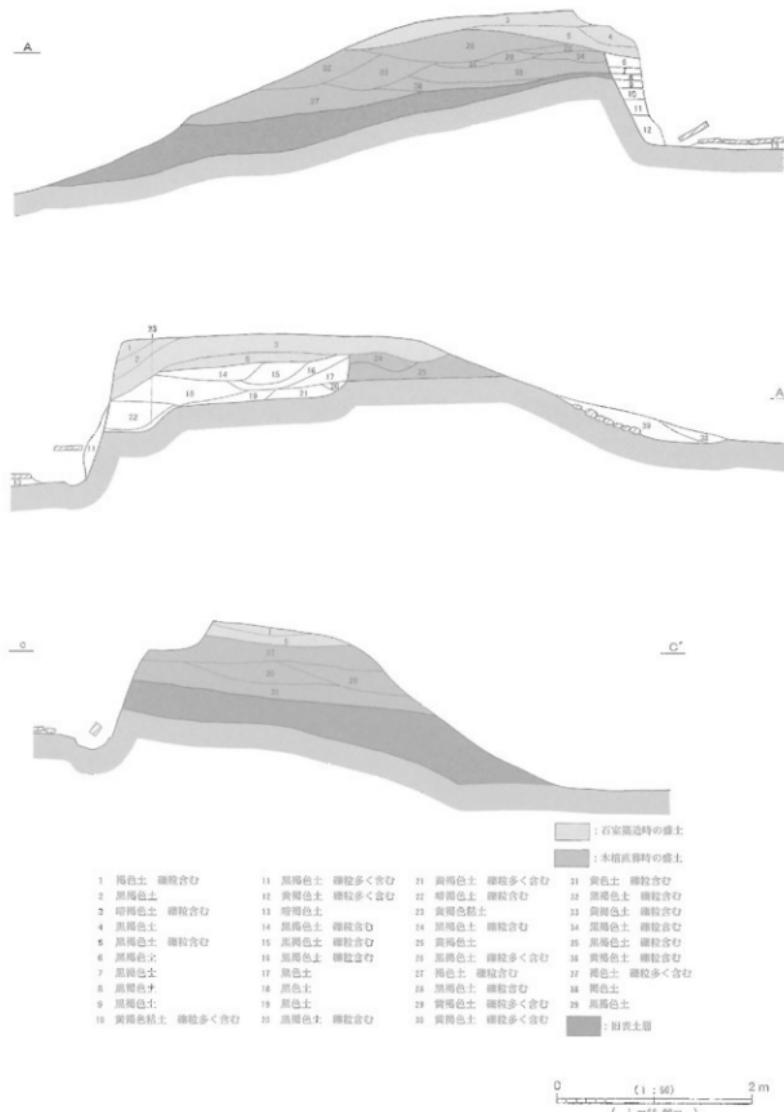
古墳築造は 3 工程に分けて把握できる。

**第 1 工程** 旧表土の様子をみると、水平ではないがやや傾斜する平坦面が確認できることから、盛土前に樹木等の除去を行うとともに平坦面を意識して古墳築造予定箇所を造成する。

**第 2 工程第 1 段階** 土層断面の確認により、埋葬施設を構築するために 24・25、26～37 層を整地（旧地表）面上に盛土する工程で、黒色土と黄褐色土を交互に積み上げている。

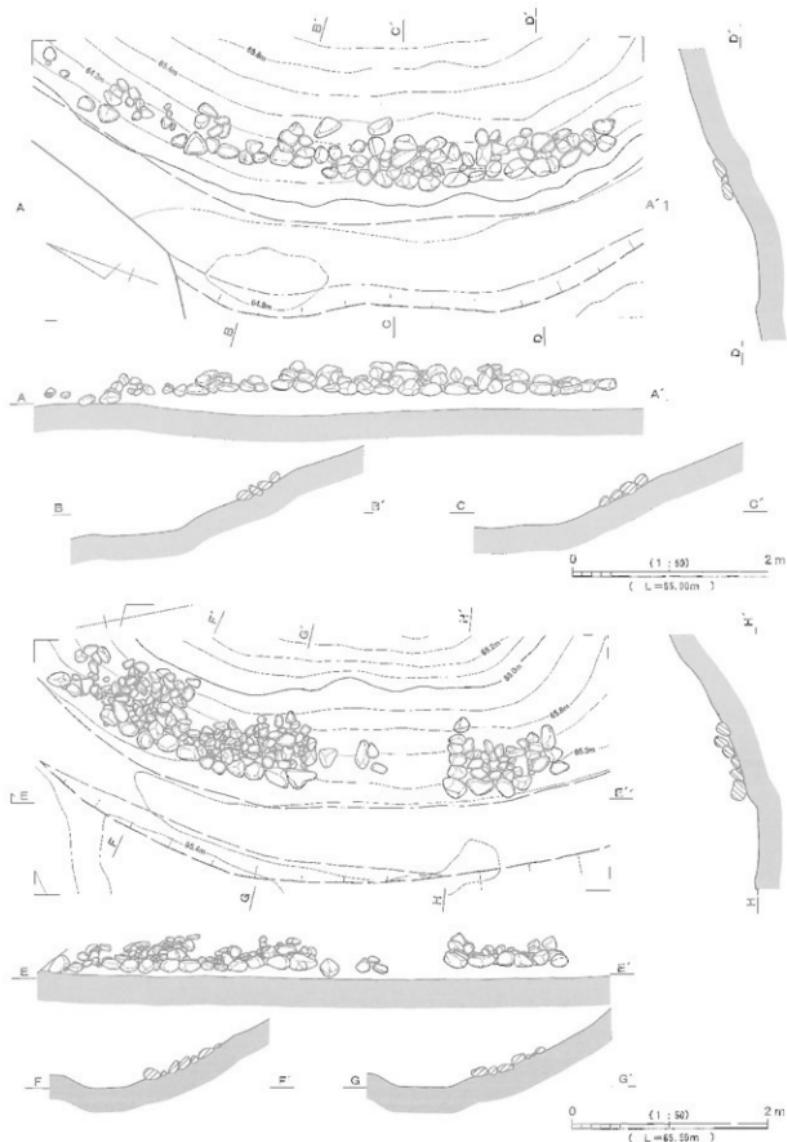
残存する部分の土層の観察からは、外側に堤状の土山を築いたその内側を埋めていくような様相は確認できず、35・36 層と 33 層の関係や 30・31 層と 29 層の関係から中心から外側に向かって盛土を行つた可能性が高い。

**第 2 工程第 2 段階** 標高 65m 付近で、c-C' 断面 30・29 層、A-A' 断面 25 層下面、31・32・33・35 層上面の高さが揃えられており、第 2 工程第 1 段階がこの高さまであった可能性が高い。したがって、この高さで一旦水平にした後でこの上に盛土（A-A' 断面 34・29・28・26 層、25・24 層、c-C' 断面 27 層）を行う工程が本工程である。



第15図 上神増A 5号墳墳丘土層図

図4 取扱い第1回 上神増古墳群の調査成果



第16図 上神増A 5号墳古窓石実測図

**第3工程** 第2工程まで積み上げた盛土を掘り込んで、墓壙（上段）を掘削し、墓壙の中央部を木棺の形状に合わせて一段深く掘削する（下段）。棺床に粘土を設置した後で木棺の左右に粘土を入れて固定させながら木棺を設置し、埋め戻す工程で、木棺設置する段階である。

#### イ 横穴式石室構築時の盛土

古墳築造当初の盛土の上に横穴式石室築造時の土層が確認できる。1～12層である。6～12層は墓壙と石室との裏込めであり、墓壙は34層、18・22層などを掘り込んでいることが確認できる。1～5層は横穴式石室築造時の裏込めを兼ねた第一次埴丘である。

裏込めおよび盛土は、黒褐色土を主体とし、その間に黄褐色土を挟む形で盛る。

#### （4）埋葬施設の構造と遺物出土状況

A 5号墳では埴丘中央部で木棺直葬（第1埋葬施設）および横穴式石室（第2埋葬施設）を確認した。第2埋葬施設が第1埋葬施設を破壊して構築されている。

##### ア 第1埋葬施設（第17図、第6表、図版13・14）

埋葬施設 墓丘中央部に掘削された墓壙内をさらに第6表 上神塚A 5号墳第1埋葬施設の規模  
主軸方位 N-90°45'·E  
一段掘り下げて、棺底に粘土〔第17図青灰色粘土（底 墓壙上段長 6.0m 墓壙上段幅 3.0m  
部）〕を設置し、その上に木棺を設置した木棺直葬で 墓壙下段長 2.15m以上 墓壙下段幅 0.78m  
ある。木棺は残存していないが、底面の粘土の断面形状を確認すると底面は水平ではなく、U字形であることから削竹形木棺を安置したものであることがわかる。なお、木棺の左右および小口上部にも粘土が確認できることから木棺を設置後、安定させるため粘土を活用していたことがわかる。想定木棺長は5.3 m前後である。

遺物出土状況 埋葬施設の半分が第2埋葬施設により破壊されているため、この部分に遺物が副葬されていた可能性が高いが、残存する東側棺内外では遺物は全く出土していない。また、朱なども確認できない。磐田原台地北西端に位置する大手内A 6号墳第1埋葬施設（豊岡村教委2000）でも、8 mの墓壙内に埋葬された棺（5世紀前半と報告される）には玉類が副葬されただけで遺物量が少ない古墳があること、第2埋葬施設の埋土や、埴丘からも第1埋葬施設に伴う可能性が高い遺物が出土していないことから、埋葬当初から副葬品が少なかった可能性も十分考慮する必要がある。

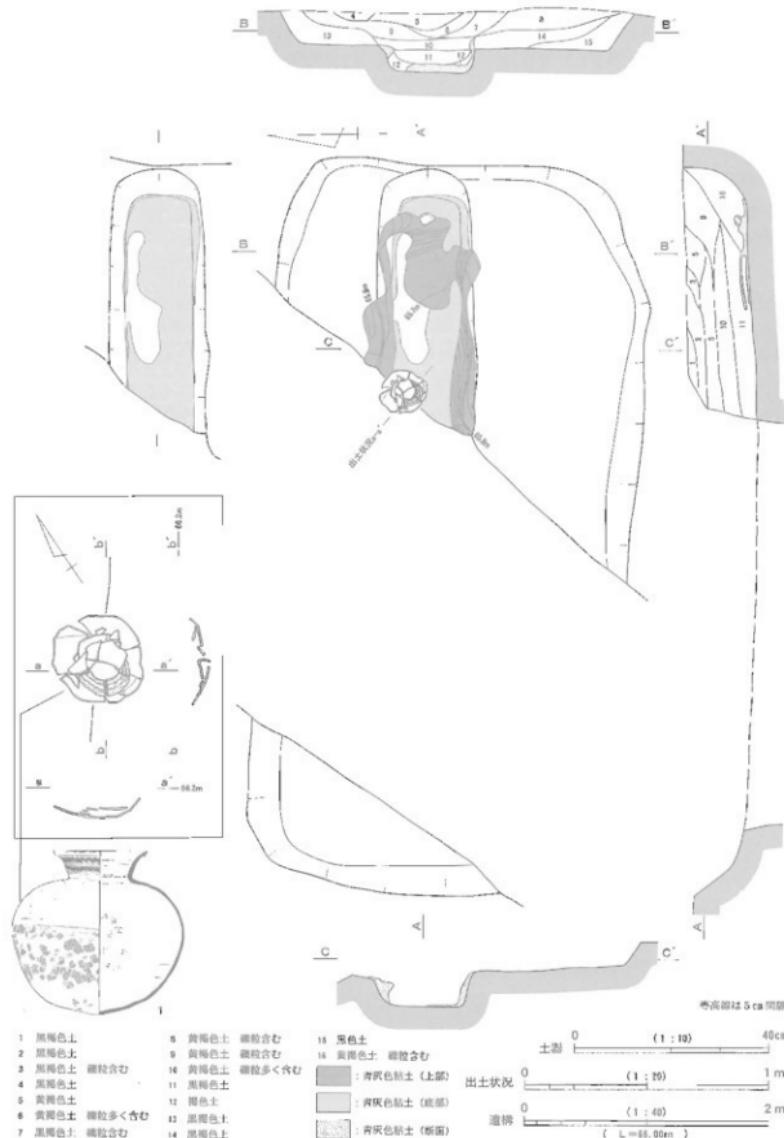
なお、第1埋葬施設の棺上から、須恵器窯（1）が1点は胴下部と胴上部へ口縁部が打ち欠かれ、胴下部は正位の状態で据えられているが、胴上部以上は口縁部を下に向け、胴下部の中に入れられた状態で出土した。儀礼をおこなった後で、破碎された可能性が高い。

#### イ 第2埋葬施設（第18・19図、第7表、図版12～14）

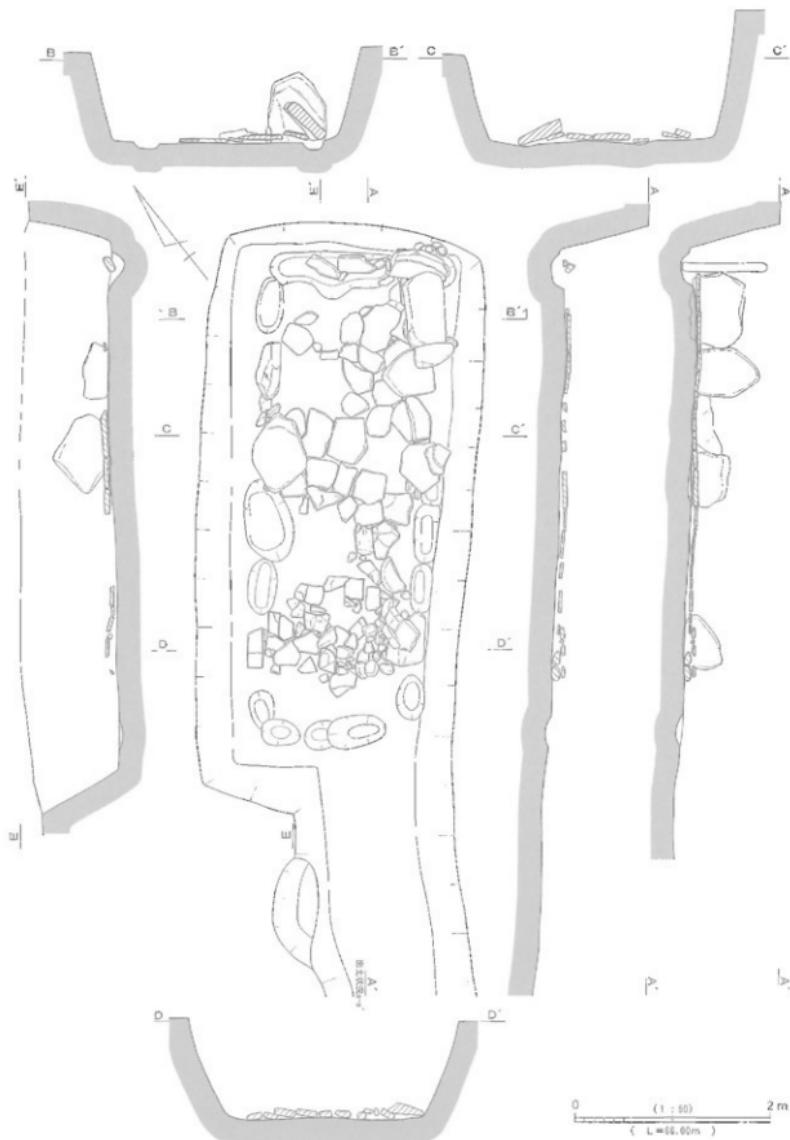
第1埋葬施設を破壊して構築された、主軸を北東に第7表 上神塚A 5号墳第2埋葬施設の規模  
取り、南西に開口する無袖形あるいは右片袖形の横穴 主軸方位 N-38°15'·E  
式石室である可能性がある。第8章第2節で論じるように、無袖形石室に狭道の要素を付加した片袖式と無 石室全長 4.5m前後  
袖式の折衷的な石室である可能性もある。 玄室長 4.5m前後 玄室幅 1.4m  
玄室奥壁幅 1.2m 玄室玄門側幅 1.25m前後  
狭道長 不明 狹道幅 0.9m以下  
墓壙長 6.1m 墓壙幅 2.8m

**墓壙・墓道** 墓壙は第1埋葬施設設置時の埴丘および埋葬施設、そしてその下の地山を掘り込んで構築した長方形である。墓壙の南側に沿って墓道が接続するため、平面形は右片袖形である。石室との関係は石室の石材を据えた小土坑の痕跡からは玄門部分にも小土坑が確認でき、玄門にも石材を設置しきみ石としていた可能性がある。また、墓道の墓壙の接続部には大手内A 6号墳（豊岡村教委2000）

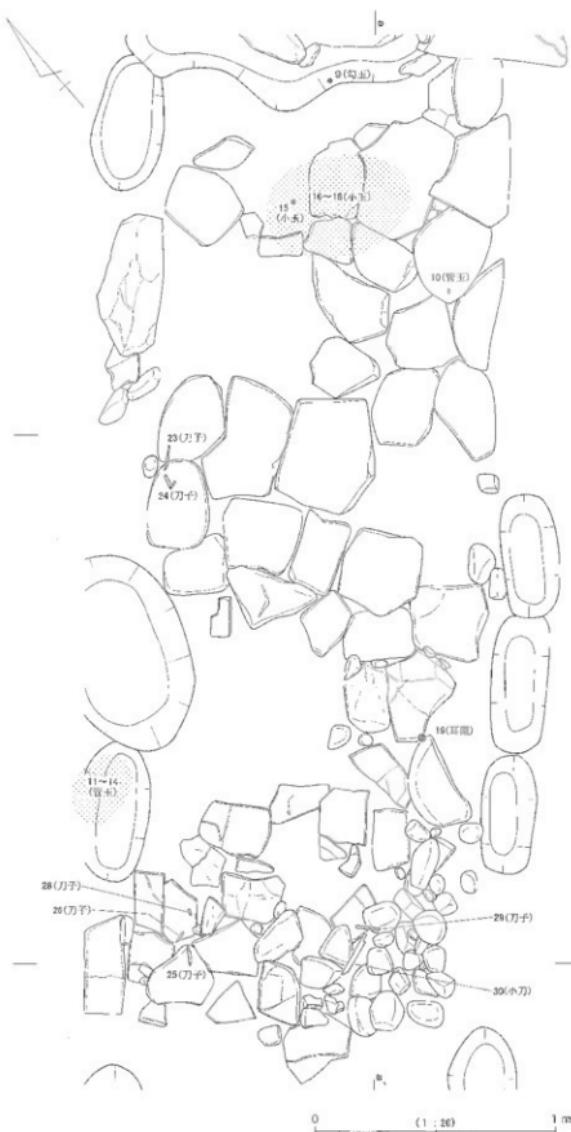
第4章第4節 上神塚古墳群の調査概要



第17図 上神塚A 5号墳第1埋葬施設実測図および遺物出土状況図



第18図 上神増A 5号墳第2埋葬施設実測図



第19図 上神塚A 5号墳第2埋葬施設出土状況図

の事例を参照すると石積みの短い狭道が構築されていた可能性が高い。

墓道は、石室の主軸からやや東側にずれた谷方向に伸びており、南東の谷部を意識した配置である。つまり、墓道への通路はこの方向にあった可能性がある。

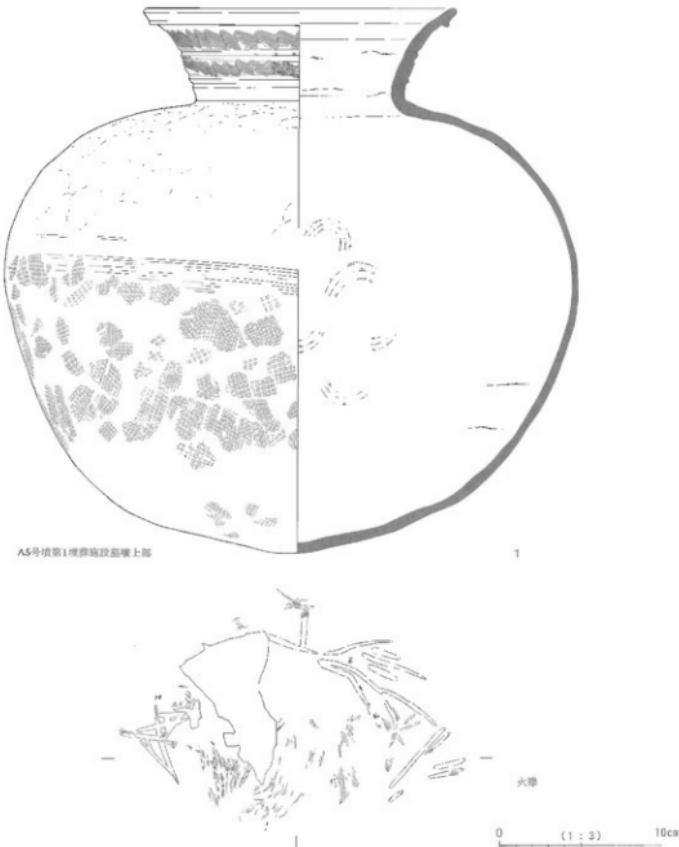
**横穴式石室 玄室平面形は、やや中央部が膨れる長方形である。**

**奥壁・側壁** 奥壁には板石を立て奥壁の基底石としている。本来は2枚の板石で奥壁基底石を構成していた可能性が高い。

側壁は奥壁と同じく板石を立てて基底石(腰石)としている。

残念ながら2段目以上は崩落しており、積載状況は不明であるが、石室内の覆土中には川原石が多く含まれていたこと、南に位置する大手内A 6号墳(豊岡村教委2000)片袖式石室の状況から川原石を小口積みしていた可能性が高い(ただし、川原石は、閉塞石や狭道側壁などのみに用いられた可能性もある)。

なお、図上で墓壇に近い墓道の接続箇所付近で本来狭道が構築さ



第20図 上神塚A 5号墳第1埋葬施設出土土器実測図

れる箇所には石材が確認できないが、石室形状が類似する大手内A 6号墳第2埋葬施設（豊岡村教委2000）を参考にすると、墓道には玄室のように石材を据えるための小土坑を確認できないため板石を立てたのではなく、川原石を小口積みしていたか、板石を平積みしていた可能性が高い。また、羨道は2～3石分のみ設置され、かなり短かった可能性が高い。また、石積みがあった場合でも天井石は架構されなかった可能性が高く、前庭側壁とすべきであろう。

**床面** 板石を床面に敷いている。玄室中央から奥側がやや大きめの石材を用いており、中央より玄門側に小型の石材を用いている。なお、攪乱が著しく判然としないが玄室中央やや南側には下部に板石、上部に川原石が確認できることから、床面は板石敷面（下面）と川原石敷面（上面）の2面であった可能性がある。

**遺物出土状況** 第2埋葬施設からは、残存した床石上から遺物が出土した。玄門付近では散乱した状

態で刀子4点(25・26・28・29)、小刀1点(30)が出土した。その北側約0.8mで耳環1点(19)が出土し、石室中央右側壁側で刀子2点(23・24)が、奥壁側からはガラス玉4点(15~18)が、その左側壁よりから管玉1点(10)が出土している。勾玉1点(9)、管玉4点(11~14)は奥壁・側壁が抜かれた痕跡から出土しており、原位置を保持していない。このうち刀子1点(29)と小刀1点(30)は川原石上であるため、床面が2面だとすれば、上面(追葬時)の遺物となる。

この他、墓道の覆土中から須恵器5点(3~6・8)が、石室内の攪乱土から刀子1点(27)、用途不明金属製品3点(20~22)が出土した。

### (5) 出土遺物

#### ア 第1埋葬施設(木棺直葬、第20図、第37表、図版62)

土器 須恵器壺1点(1)が出土した。口縁部直下に突帯を作り出し、頸部には波状文を2条施す。胴部下半には格子タタキを施し、胴部中央はその格子目をカキメにより消している。

この格子タタキと口縁部の特徴から、陶邑田辺編年TK208型式併行期(以下、型式併行期は「型式期」とする)に位置づけられる可能性が高い。

#### イ 第2埋葬施設(横穴式石室、第21・22図、第37~40表、図版62~64)

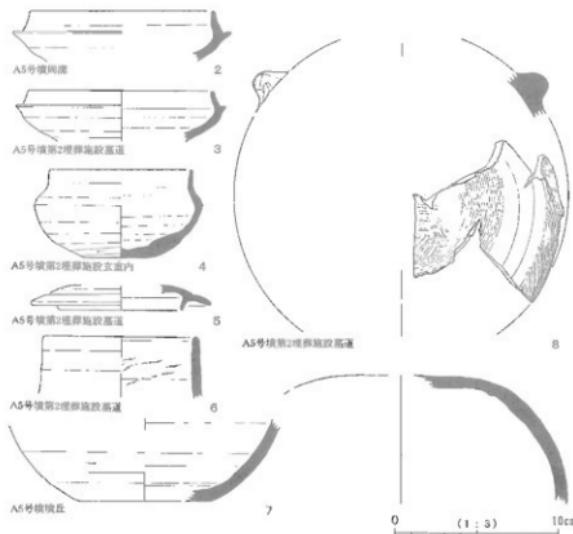
大きく攪乱された埋葬施設内からは、玉類10点、耳環1点、刀子6点以上が出土した。

墓道の覆土からは須恵器(3~6・8)の5点が出土した。

土器 須恵器(3)は壊身であり、立ち上がりは高い。口径11.3cmである。4は短頭壺で、5は長頭壺の可能性が高い。天井と口縁の境に凹線があり、全体的にシャープに仕上げられている。6はいわゆるワイングラス形高壺か盤の口縁部の可能性が高い。8は提瓶で、耳は環状になっていないが、突起ではなく、C字形に曲げられ貼り付けられている。

これらの須恵器の中で、5は非常に薄く、シャープに仕上げられ、硬質に焼き上げられており、丁寧なつくりが特徴である。今回調査した古墳から出土した須恵器の中でもみると異質な感じを受ける。

玉類 9は瑪瑙製勾玉である。穿孔は図左側から右側に向かって穿孔している片面穿孔



第21図 上神塚A 5号墳墳丘・周溝および第2埋葬施設出土土器実測図

孔である。10～14は緑色石材を利用した管玉（いわゆる碧玉製）で、全長1.8～2.7cm、直徑約7～9mmである。穿孔は図上部から下に向かって穿孔する片面穿孔である。15～18はガラス製小玉である。15・17・18が濃緑色、16が紺色を呈する。直徑約4～7mm、高さ約3～4mmである。

耳環 銅地銀張、中実である。C字に開いた部分の小口面の観察を行うと、箔を折り曲げた痕跡（皺）が確認できることから銅地に薄い銀箔を貼り付けたものであることが判明する。断面は円形で、耳環幅3.4cmである。

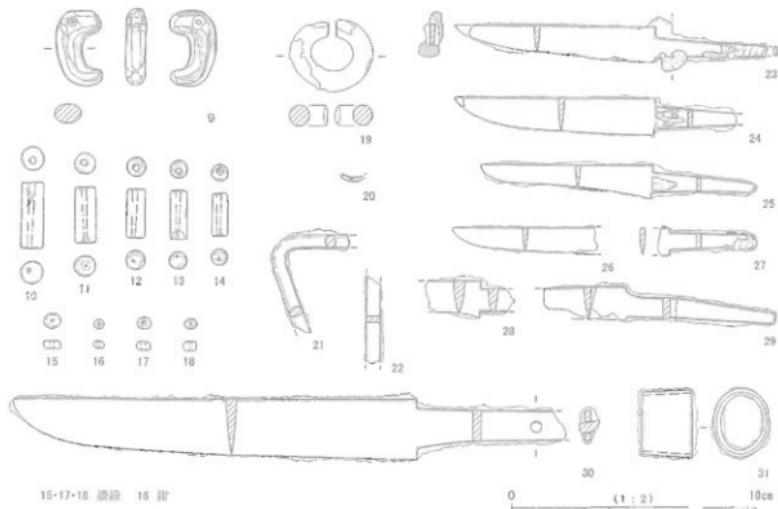
鉄製品 30は鉄製小刀（短刀）である。刃部に反りはなく、鎌は確認できない。関は直角均等両関で、茎は茎尻が欠損しているが、関と残存部端までほぼ幅は同じであることから直線的に伸びる形状であった可能性が高い。関から約5cmの所に目釘孔が穿たれ、鉄製目釘が残存している。残存長22.5cm、刃部長16.5cm、刃部幅2.4cmである。

31は鉄製組（柄縁装具）である。その大きさを考慮すると、小刀（30）の組の可能性が高い。断面形状は楕円形であるが、図下部がやや尖っており、刃側である可能性が高い。全長2cm、幅2.7cmである。

23～29は鉄製刀子である。関が6点確認できることから少なくとも6点が副葬されていたことになる。このうち23・27は鹿角柄刀子、24・25は木柄刀子である。28・29は茎にその痕跡が遺存しないため柄の材質は不明である。25が完形である以外は刃部あるいは茎の一部が欠損している。関は23～25・27・28は直角均等両関、29は刃部側が直角、棟側が撫角の両関である。

21・22は用途不明鉄製品である。21は断面が楕円形であることから、馬具の轡の引手や銜、鎧吊金具の兵庫鎖の可能性がある。22は断面が薄い長方形であることを考慮すると、鐵鎧の頸部の可能性が高い。

金銅製品 20は金銅製品である。小片のため用途不明であるが、弧状を描く製品であることから、大刀などの刀装具（責金具）の可能性がある。



第22図 上神増A 5号墳第2埋葬施設出土玉類および金属製品実測図

## (6) 小結

墳丘高の復原 棺上から出土した須恵器甕が墳頂部祭祀に伴うものと仮定し、木棺の沈下の深度（約0.6～0.8mと想定）を考慮した場合、須恵器の本来の位置は甕底部が標高66.7～66.9m付近となり、墳丘の高さは1.5～1.7mで、葺石の傾斜角度との相関関係から墳頂部の平坦面の直径は約7.5m前後であったと想定できる。石室を構築した際、もともとあった墳丘を掘削した土砂を石室天井石上に載せた場合もそれほど高くはならず、標高67.5m付近までであった可能性が高い。

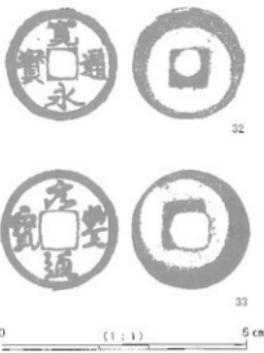
古墳の築造時期について 第1埋葬施設は、棺上から出土した須恵器甕から、古墳時代中期後半（遠江Ⅰ期中葉～後期陶邑編年TK208型式期～TK23型式期）に位置づけることができ、その時期に築造された可能性が高い。

第23図 上神塙A5号墳墳丘表土出土遺物  
径が約11cmであり、遠江Ⅲ期後葉（TK209型式期）、6世紀末～7世紀初頭に位置づけられる。同じく周溝から出土した須恵器も同じ時期に位置づけられることから、A5号墳第2埋葬施設は遠江Ⅲ期後葉、6世紀末～7世紀前半に築造された可能性が高い。

ただし、提瓶（8）は把手が鉤状ではなく、環状にはなっていないものの先端が胴部に接着されており、この要素を最大限評価すれば、遠江Ⅲ期中葉（TK43型式期）まで遡る可能性があるが、この1点のみで時期を遡らせるには根拠が薄い。この点を注意するに留めたい。

追葬について 第1埋葬施設については木棺直葬のため、追葬は行われていない。

第2埋葬施設については、床面が2面の可能性があるが出土遺物に明確な時期差が認められないため、判然としない。



## 第5節 上神増B古墳群の調査成果

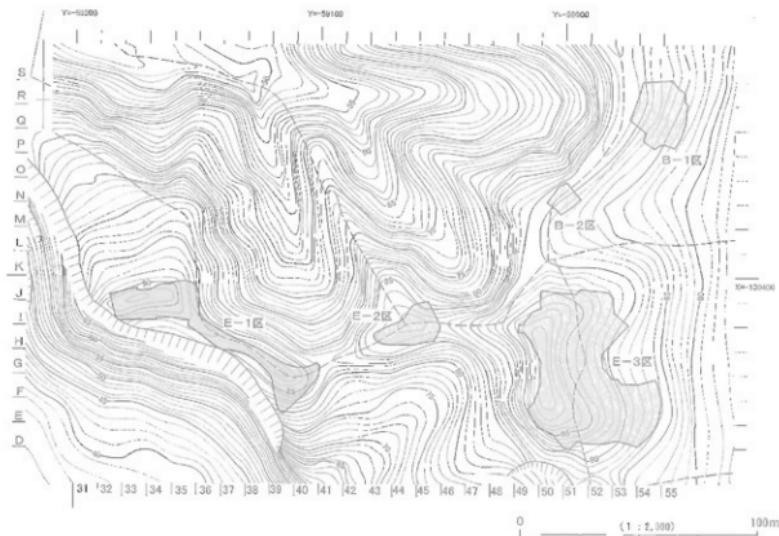
### 1. 上神増B古墳群の概要

上神増B古墳群は、A古墳群の南、E古墳群の北側に位置しており、周知されている古墳はすべて合代島丘陵西尾根の東側緩斜面地に位置している。今回の確認調査で新たに5基(B5～B9)が確認され、これまでに調査された古墳4基を含め9基が確認されている。今回の調査により上神増B古墳群すべてが調査されたことになる(B1～B4号墳は未報告)。

今回調査したのはB古墳群中の5～9号墳で、B5～8号墳は西側に向かって張り出した尾根斜面(B-1区)に、B9号墳はその谷の奥部分(B-2区)に立地している(第24・25図、図版15)。それぞれの古墳からの見晴らせる範囲は狭く、天竜川平野は一切確認できないうえ、合代島丘陵の東西尾根の谷口(平坦地)も見渡すことは難しく、立地条件としてはよいとはいえない。

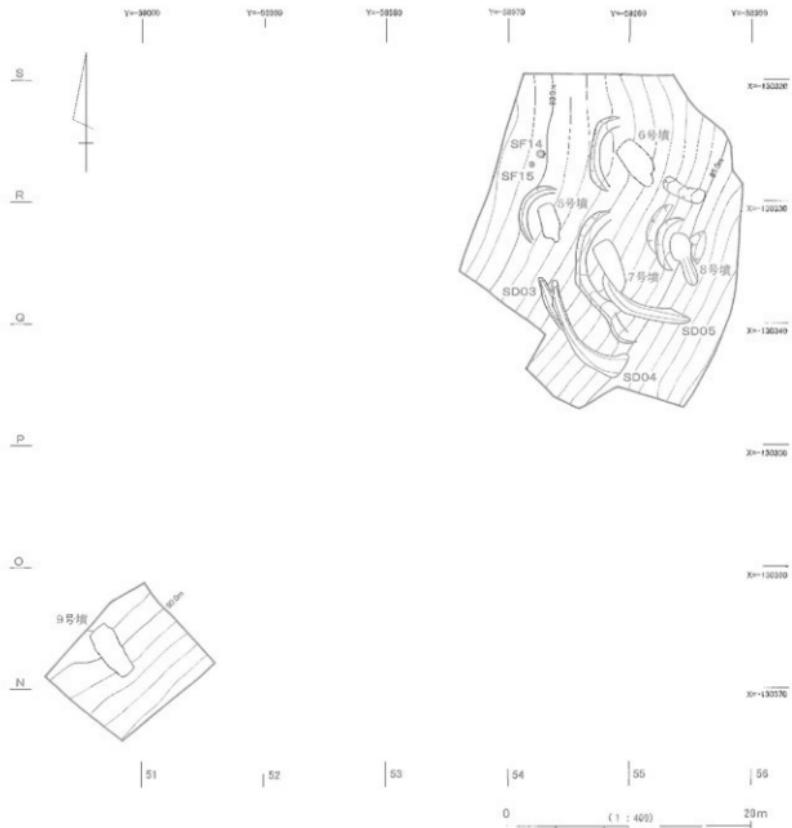
なお、B-1・2区西側の尾根は、昭和49年7月7日の、いわゆる「七夕豪雨」の際に大きく崩落したといわれている。B-1区ではB5～8号墳の築造時期とは異なる可能性が高い須恵器坏身が出土していることも考慮すると、この崩落したといわれている尾根上に古墳が存在した可能性を排除できない。

B-1・2区とともに第25図の示したように等高線はほぼ等間隔であり、傾斜の緩い斜面を利用して古墳を築造したことが明らかである。



第24図 上神増B古墳群・上神増E古墳群調査区配置図と周辺の地形

第4章第5節 上神増B古墳群の調査成果



第25図 上神増B古墳群調査区地形測量図

## 2. 上神増B5号墳

### (1) 古墳の現況

古墳は、緩斜面に位置しており、調査前は若干の高まりが確認でき、古墳の可能性があり、確認調査により確定された古墳である。古墳は標高89m付近に築造されている。周囲には第5章で後述する古代墳墓2基や、B6～8号墳が位置し、この群の中では最高所に築かれた古墳である。

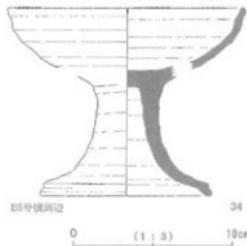
### (2) 墓丘の構造（第26・27図、第5・37表、図版15）

墳丘・盛土　墳丘盛土は一切確認できない。

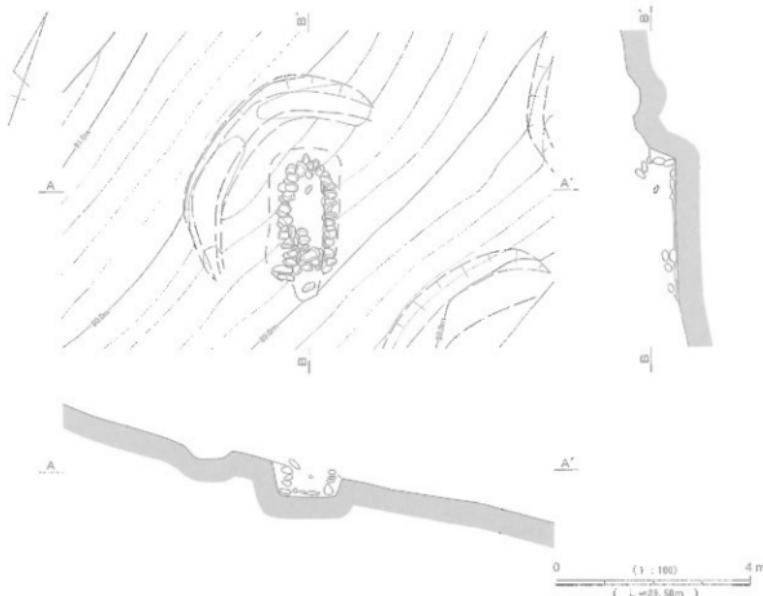
周溝　周溝は斜面上部のみ確認でき、当初からこの部分のみ掘削された可能性が高く、東側や南側は周溝ではなく削り出しなどで周囲と区画していた可能性が高い。残存する周溝と石室の位置関係からすると、東西3.6m、南北4.0m程度の不整形な凹墳と想定できる。

古墳周辺の出土遺物（第26図、図版65）　B5号墳の周辺から須恵器高坏（34）が出土している。B5号墳はB-1区の中では最も高い位置に築造されている古墳であり、当古墳に伴うものである可能性があるが断定はできない。

須恵器高坏（34）は塊形の坏部の短脚無蓋高坏で口縁部は外反した後丸く仕上げられる。脚部はラッパ状に垂下した後、脚端部に段を設けるものである。このような



第26図 上神増B5号墳周辺出土土器実測図



第27図 上神増B5号墳墳丘測量図

特徴の高壙は遠江IV期前半～V期まで確認される形状であり、7世紀前半以降の遺物である。

### (3) 墓葬施設の構造 (第28・29図, 第8表, 図版16)

埋葬施設は墳丘のほぼ中心に位置し、半地下式に構築された無袖形横穴式石室である。ほぼ南に向かって開口する。

**墓壙・墓道** 墓壙の平面形態は長方形であり、南側に墓道が接続する。横穴式石室より一回り大きく、石室はこの墓壙内に設置されている。

なお、墓道は石室南東側に一部確認できるが、斜面下位にあるSD04がB5号墳の墓道の可能性がある。  
**横穴式石室** 玄室平面は長方形で、玄門と奥壁側の幅はほぼ同一である。

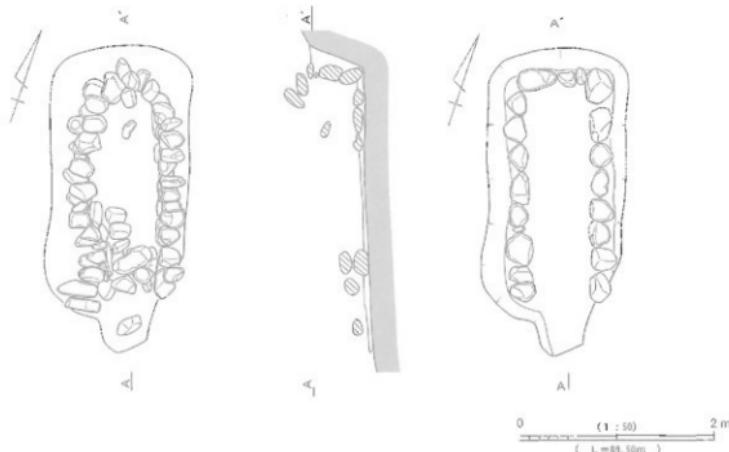
**側壁・奥壁** 奥壁はやや大型の川原石を用いており、基底石3石、2段目1石で、3段目以上は側壁から続く、円錐で構成され、奥壁と側壁の区分は困難である。側壁は人頭大の川原石を用いて構築されており、残存範囲で5段、約0.65m残存している。側壁の持ち送りは著しく、特に奥壁側は隅角が明瞭ではなく、ドーム状に丸みをもって仕上げられていた可能性が高い。側壁の基底石は2段目以上と同大の石材を用いているが、長手面を内側に向けて設置されたものが多い。2段目以上は小口積みを基本としている。

**床面** 奥壁から0.7mの範囲まで人頭大の円錐が敷設され、その南側は地山を床面としている。この敷石の範囲が埋葬に伴うと想定できるが、0.7mの範囲に大人を伸展葬で埋葬するのは不可能である。したがって、B5号墳は伸展葬ではなく、改葬骨を納めた可能性が高い。

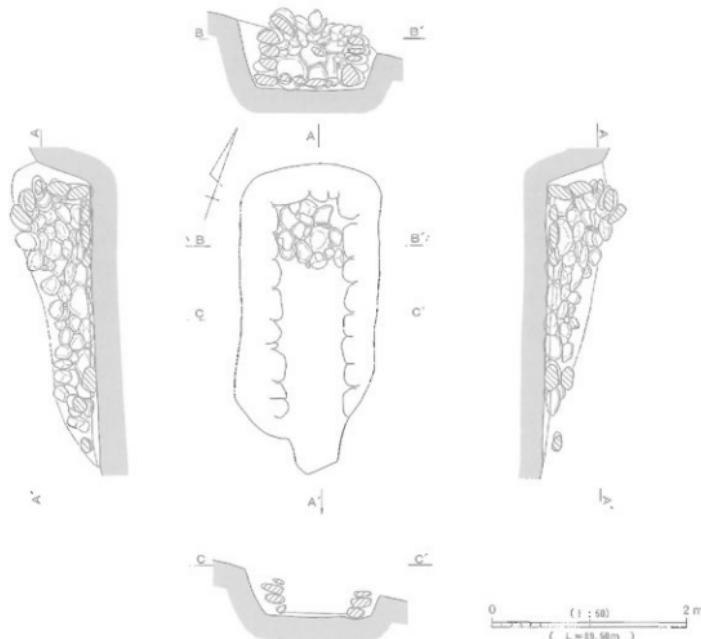
**閉塞石** 閉塞石は玄門部分で確認でき、側壁と同大の川原石を用いている。

第8表 上神増B5号墳埋葬施設の規模

主軸方位	N-19°45'W
石室全長	2.2m
玄室長	2.2m
玄室奥壁幅	0.6m
墓壙長	2.8m
玄室幅	0.62m
玄室玄門側幅	0.56m
墓壙幅	1.4m



第28図 上神増B5号墳横穴式石室検出状況および基底石、墓壙実測図



第29図 上神増B 5号墳横穴式石室実測図

## (4) 出土遺物

横穴式石室内から遺物は全く出土していない。

## (5) 小結

築造時期について 石室内から出土遺物がないことから時期は特定できないが、横穴式石室が約2.2mと小型であること、改葬骨を納めた古墳である可能性が高いことから、7世紀前葉以降に築造された可能性が高く、後述するB 7号墳との関係から7世紀後半以降である蓋然性が高い。

追葬について 出土遺物がないため、追葬についても不明である。

### 3. 上神増B 6号墳

#### (1) 古墳の現況

調査前はなだらかな斜面であり、隆起等は確認できず、確認調査により発見された古墳の一つである。地形的には斜面が東側に向かって、やや張り出した位置を利用している。古墳は標高約87.5m付近に築造されている。

#### (2) 墓丘の構造（第30図、第5表、図版17）

墳丘盛土 墳丘盛土は一切残存していない。

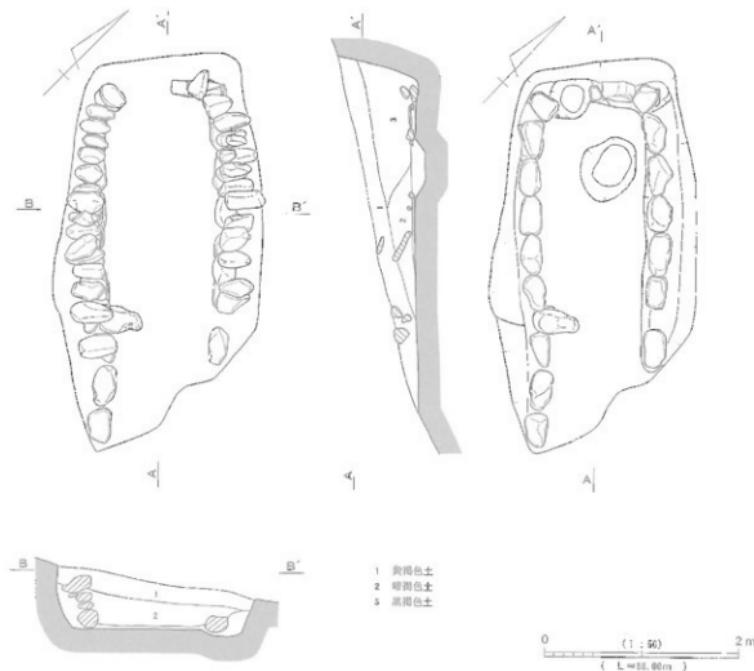
周溝 周溝は斜面上部のみ確認されており、B 5号墳同様、斜面上部のみ掘削された可能性が高く、南側、東側は削り出しにより周囲と区画していたと想定できる。横穴式石室が古墳の中央に構築されたとすれば、東西約6.0m、南北約6.0m程度の不整形な円墳に復原することができる。古墳の見かけ上の高さは、玄室入口部分基準として周溝までの高さとした場合、1.4mである。

#### (3) 埋葬施設の構造（第31・32図、第9表、図版17・18）

埋葬施設は南東に向かって開口する半地下式に構築された擬似両袖式横穴式石室である。



第30図 上神増B 6号墳墳丘測量図



第31図 上神増B 6号墳横穴式石室検出状況および基底石、墓壙実測図

**横穴式石室** 玄室平面形はやや胴の張る奥率まり形で、羨道は八字形に開いており、羨道ではなく天井が架構されない前庭である可能性が高い。

**奥壁** 奥壁は既に取り除かれており残存していないが、それを据えるための掘方から板状の石材を用いた可能性が高い。

**側壁** 側壁は川原石を用いており、基底石は40cm大の川原石の長手積み、2段目以上は人頭大の川原石を小口積みしている。立柱石は細長い川原石を縦位に設置している。

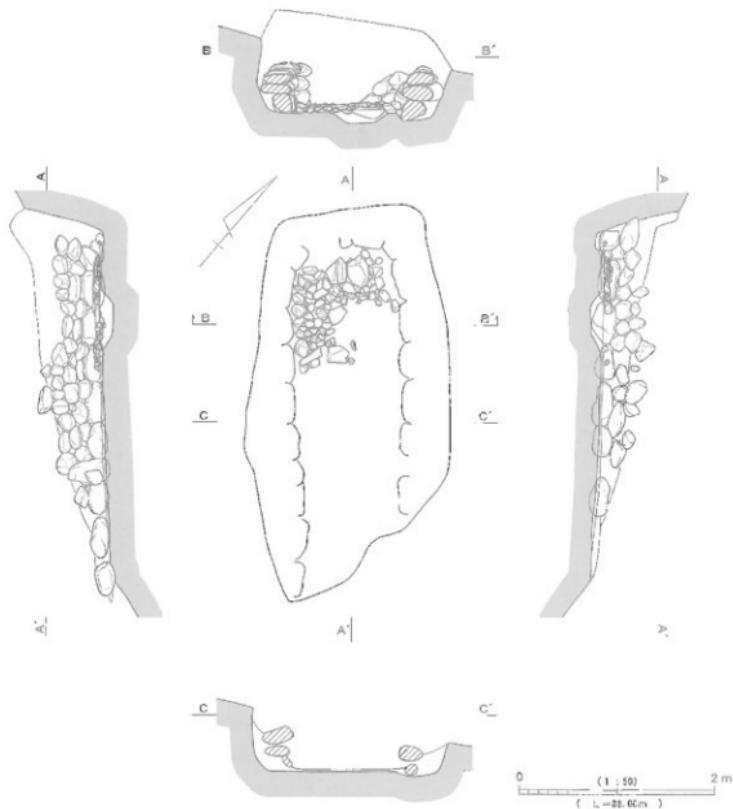
**床面** 床面は一部破壊されているが、奥壁から1.2mまで敷石が設置されている。この敷石には板石と拳大の円砾を用いている。敷石が設置されない箇所については、本来敷石が敷設されなかったのか、盗掘等により持ち出されたのか明確ではない。

#### (4) 出土遺物

B 6号墳からは一切遺物は出土していない。

第9表 上神増B 6号墳埋葬施設の規模

主軸方位	N-44°30'W
石室全長	3.6m前後
玄室長	2.2m
玄室奥壁幅	0.8m
羨道長	1.4m前後
墓壙長	4.0m以上
玄室幅	1.1m
玄室玄門側幅	1.04m
羨道幅	0.95m
墓壙幅	2.0m



第32図 上神増B 6号墳横穴式石室実測図

### (5) 小結

築造時期 出土遺物がないため時期を特定することはできない。古墳の位置や横穴式石室の形状等から想定すると、B 7号墳より新しく、B 8号墳よりは古い可能性が高い。したがって、遠江IV期後半以降V期前半以前に築造された可能性が高い。

追葬の有無 出土遺物がなく、追葬の有無は不明である。

#### 4. 上神増B 7号墳

##### (1) 古墳の現況

緩斜面に位置しており、当初は古墳の存在は想定できず、確認調査で初めて確認された古墳の一つである。北側にB 5・B 6号墳、東側にB 8号墳が所在する。古墳は標高87.5m付近に築造されている。

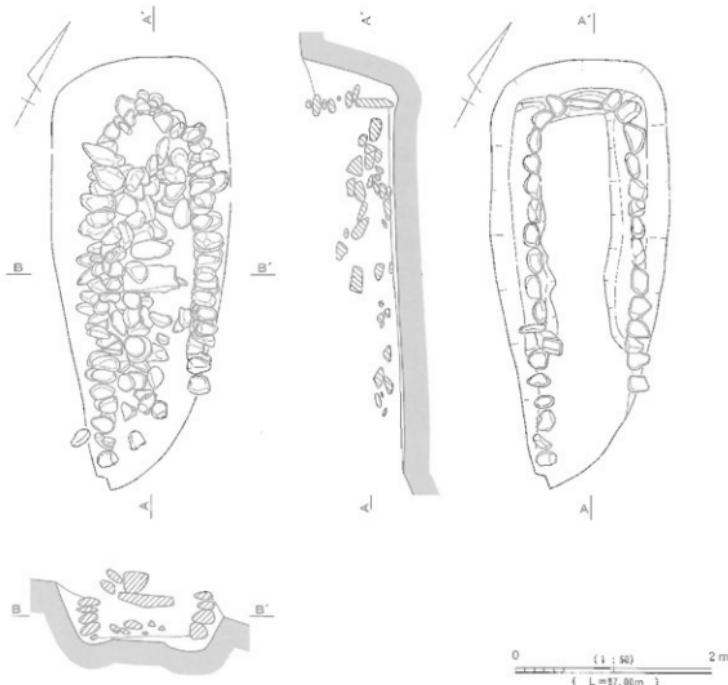
##### (2) 墳丘の構造（第33～37図、第5・37表、図版19～21・65）

**墳丘盛土** 墳丘盛土は一切確認できず、既に流出した可能性が高い。

**周溝** 周溝は、斜面上部の地山を掘削して形成しており、斜面下位の東側には周溝は確認できず、B 5・6号墳に想定したように削り出しを行い、周溝に代えていた可能性が高い。西側周溝と石室の関係から見ると、石室が古墳の中央に設置されたとすれば、東西5.0m前後、南北6.0m前後の楕円形に近い円墳に復原できる。



第33図 上神増B 7号墳墳丘測量図



第34図 上神塚B 7号墳横穴式石室検出状況および基底石、墓壇実測図

墳丘および周溝出土遺物（第37図、第37表、図版65） 墳丘からは須恵器環身1点(38)、周溝から須恵器高环1点(40)、古墳周辺から須恵器環蓋1点(36)、環身2点(37・39)、環身（高环の可能性も残る）1点(42)が出土した。B-7号墳周辺から出土した遺物は当古墳に伴わない可能性がある。

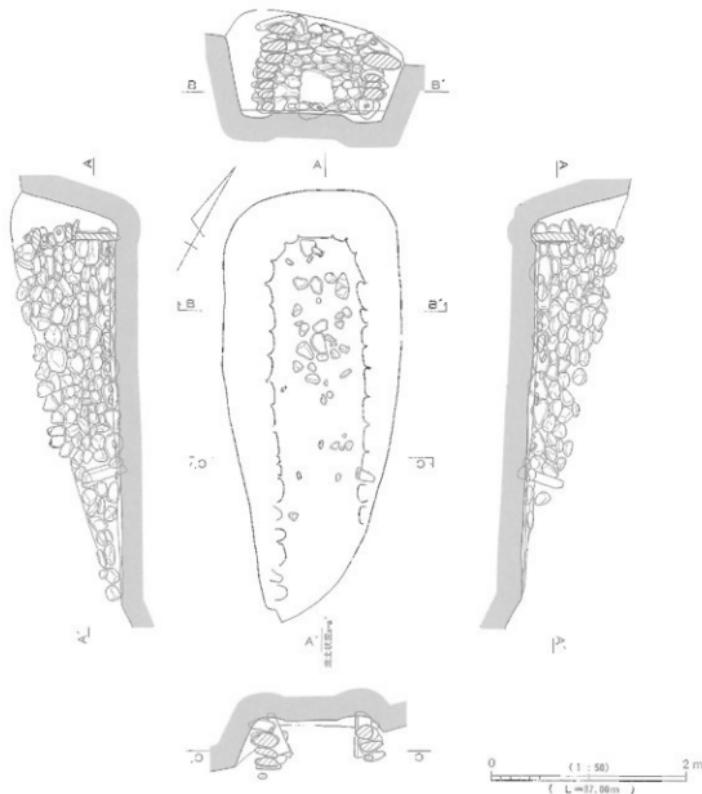
墳丘から出土した環身(38)は、短いが受け部より高い立ち上がりであり、口径8cmである。古墳周辺出土の環身(37・39)も同様の特徴で、口径7~8cmである。環蓋(36)は半球形で、口縁と天井の境界に稜や凹線はない。口径9.8cmである。高环(40)は塊形の環部であり、口縁部は外反する。環身(42)は外側に向かって伸びる環部で、口縁部は外反せず、丸く收められる。有台环あるいは平底の環身（無台环）の可能性が高い。

これらの須恵器は、42を除いて、遠江IV期前半に位置づけられる可能性が高い。42は、環身だとすれば、遠江IV期後半に位置づけられる可能性が高い。

### (3) 埋葬施設の構造（第34・35図、第10表、図版19~21）

横穴式石室 南南東に向けて開口する半地下式に構築された擬似両袖式横穴式石室である。

墓壇 墓壇は南側が狭い台形で、立柱石の部分から急激に幅を狭める。残存する墓壇の状況では墓道とは境がなく連続する可能性が高い。



第35図 上神増B 7号墳横穴式石室実測図

**平面形** 玄室平面形は、奥壁に向かって急激に幅を狭める奥窄まり形である。羨道平面形は2石目までは主軸に平行し、3石目以降はハ字形に開いているため2石目までが羨道、3石目以降は前庭側壁であった可能性が高い。羨道および前庭側壁は立柱石から1.3mまで残存する。

**天井石** 石室内には天井石が落下しており、B-B'断面部分まで確認できる。したがって、玄門までは確実に天井石が架けられていたことが判明する。

**奥壁・側壁** 奥壁は板石を立て、その上に円礫を5段以上積載する。円礫部分の持ち送りは著しく、ドーム状に円く形作られていた可能性が高い。側壁は円礫を用いて多段積みして形成されており、最大で7段残存している。基底石は長手積、2段目以上は小口

第10表 上神増B 7号墳葬器施設の規模			
主軸方位	N-27°15'-W		
石室全長	3.7m以上		
玄室長	2.4m	玄室幅	0.9m
玄室奥壁幅	0.4m	玄室玄門側幅	0.8m
羨道長	1.3m	羨道幅	0.8m
基底長	4.4m以上	墓壙幅	1.8m

袖（玄門）は板状の角礫を縦位に用い立柱石としており、側壁に組み込まれているが、10cm程度石室内に向けて

突出する。

**床面・棺台** 石室内には全面的に敷石は確認できない。原位置を保つ大刀（59）を考慮すると当初から敷石は行われておらず、人頭大の石材を棺台として設置していた可能性が高い。棺台と想定する石材の範囲は長さ1m、幅0.6mであり、木棺を設置するためにはやや狭い。しかし、奥壁の部分と、石室中央の鉄釘（49）の出土位置までが木棺の範囲とすれば木棺は長さ2m弱になり、伸展葬が可能である。

埋葬に当たっては釘が出土していることから木棺が採用されたことは明らかである。



第36図 上神塔B7号墳横穴式石室遺物出土状況図

#### (4) 遺物の出土状況（第36図、図版20）

棺台と想定する石材の南側で石室の主軸に平行し、柄を奥壁側に、佩裏を上に向けて副葬された装飾付大刀（59）が、奥壁側から鉄釘・鉄鎌・鉄刀切先付近から鉄釘（43）、石室中央から鉄釘・鉄鎌・石室玄門付近で須恵器杯蓋（35）が出土した。

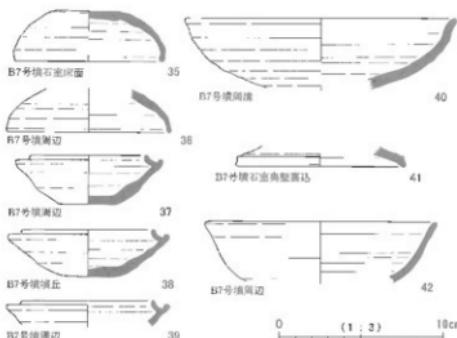
#### (5) 出土遺物（第37・38図、第11・37・39表、図版8・64～66、写真23・24）

石室内からは、須恵器1点、装飾付大刀1点、鉄鎌1点以上、鉄釘7点以上が出土した。

土器35は須恵器杯蓋である。口径は9.0cm、器高3.1cmである。天井と口縁部の境には稜や凹線はない。天井はヘラケズリを施す。

##### 装飾付大刀

概要 装飾付大刀（59）は柄頭が失われているため、その形式は不明である。拵えは柄頭を除いて良好に残存しているため、柄頭は有機質であったものが腐食して消滅した可能性が高い。拵えは、鞘口金具、鍔・鎚が金属製で、それ以外は有機質の素材を用いる素鞘（瀧瀬



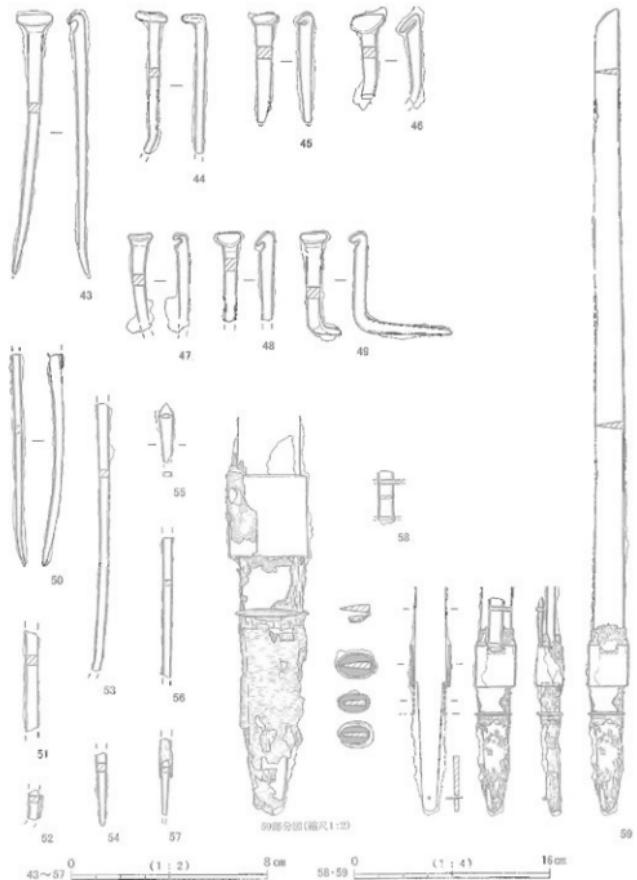
第37図 上神塔B7号墳出土土器実測図

1984)である。佩用方法は環付足金物を用いた一足佩用、綻佩である。鉄刀の全長65.4cmである。

捺え 柄間は糸巻きで、鍔は噴出鍔、刀側には繩が、柄側には貴金属具が装着される。鞘について鞘尻金具は確認できず、鞘口金具と佩用のための鉄製金具とそれを鞘に固定するための貴金属具が2点確認されている。以下、残存する柄間から順に特徴について記述する。

なお、各部位の数値については第11表に記載する。

また、材質について、鞘尻金具は鉄製塗、足金物の貴金属



第38図 上神増B7号墳横穴式石室出土金属製品実測図

具、繩、鍔、柄の貴金属具は腐食が著しく断定できないが、残存状況が不良であることから金銅装ではなく銅製である可能性が高い。

柄間 柄間は、木製柄を装着した後、1.5~2mm間隔で糸巻きを施す(写真23、図版66の中段)。糸巻き後に漆塗りを施した可能性があるが、断定はできない。目釘孔は茎尻から1cmのところに打たれている。柄を固定するための目釘には銅(あるいは金銅)製のものが使用されている。

鍔 鍔は噴出鍔で、腐食のため欠損しており、本来はもう少し大きかった可能性が高い。

鍔の柄側には、銅製(あるいは金銅装)の貴金属具が装着される。

繩 繩は残存状況が不良で、佩裏側のみ残存する。横断面倒卵形であった可能性が高い。

第11表 上神代B 7号墳出土装飾付大刀の計測値

部位	材質	長さ	横断面			板厚	備考		
			表面形	長軸	短軸				
柄頭 柄頭金具	銅・鉄製	65.4	—	—	—	—	金剛頭の可能性あり		
	有機質?	—	—	—	—	—	欠損		
	柄頭金具 柄頭金具	—	—	—	—	—	1.5~2 mm間隔で角巻きを行う		
	銅製	0.2	倒卵形?	(1.2)	—	0.1	—		
刃 鞘	銅製	0.3	倒卵形?	(3.0)	2	0.3	金剛頭の可能性あり		
	銅製	2.4	稍円形?	(2.1)	1.4	0.1	—		
	鞘口金具 鉄製漆塗?	3.2	倒卵形	3.2	2.2	0.1	黒色→赤色の漆を塗る?付着		
	環付足金物 鉄製	(4.4)	側丸長方形	1.2	0.2	—	—		
環付足金物資金具 環付足金物資金具	銅製	0.3	瘤状に突起する倒卵形	(1.8)	—	0.1	金剛頭の可能性あり		
	銅製	—	—	—	—	—	銀製のみ。金剛頭の可能性あり		
	有機質?	—	—	—	—	—	欠損		
	木柄 木柄	(11.0)	倒卵形	(2.6)	(1.6)	—	—		
刀 刀身	木製	—	倒卵形	(2.8)	(1.0)	—	—		
	全長	65.4	—	—	—	—	—		
	万年	54.8	二等辺三角形	2.4	0.7	—	ふくら切先		
	茎	10.6	筒形	2.0	0.4	—	—		
	目貫	(1.4)	方形	0.1	0.1	—	—		

※1 単位はcm。括弧内は残存している部分の長さ。

※2 長さは、各部位の極に併行する方内の長さ。横断面は極に直交する方向の形態と法観

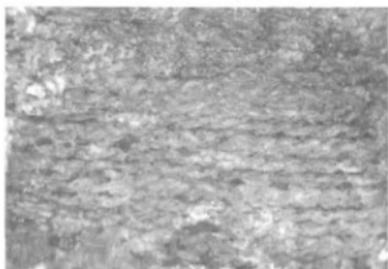


写真23 装飾付大刀の柄頭横断面写真

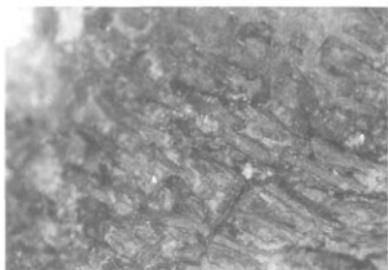


写真24 装飾付大刀の鞘口金具に付着した有機物の顕微鏡写真

写真24 装飾付大刀の鞘口金具に付着した有機物の顕微鏡写真  
さ約5 mmである。釘頭の整形は、まず方形の鉄棒を叩き延ばした後でL字形に折り曲げ、平面的にはT字形になるように鍛造されたもので、東海地方で出土する一般的な鉄釘の形状（A類）である（大谷2004）。この他、鉄釘の可能性があるものとして断面が方形で厚さ約5 mmの5点（50~54）がある。

**鞘口金具** 鞘口金具は、佩表側の一部（切先側）を凹形に抉り、佩用のための金具を配置したものである。この部分には佩用金具である環付足金物が装着された可能性が極めて高い。表面には漆が塗布され、表面は赤色（黒色→赤色の2層）であった可能性がある。

なお、鞘口金具には写真24に示したように網代状に編まれた有機材が付着している。これは、鞘内に納められた時に縫等が木棺内に敷かれていたことを示すであろうか。

環付足金物は、環が既に腐食して存在していないが、環は

銅製であった可能性が高い。足金物は鉄製で、平面形態は長方形である。残存長で4.4 cm、幅1.2 cm、厚さ2 mmである。内面に布などの痕跡は確認できない。

環付足金物はいずれないように足金物が装着する部分が瘤状に膨らむ凸状貴金属具で2箇所固定されている。貴金属具は、銅製の可能性が高い。

**刀** 刀はふくらの張る切先で、鍔は確認できない。刀身長54.8 cm、幅2.4 cm、極厚さ7 mmである。鍔は直角均等両開である。茎は茎尻に向かって幅を狭めるもので、茎尻は丸尻である。茎には上述したように銅製目釘が打たれる。通常鉄製目釘が用いられる中、銅製目釘が用いられたことは注目できる。

**鉄器** 鉄鎌（55）は尖根壁筋式鉄鎌である。鎌身側はなく、鎌身と頭部の境界は不明瞭で、鎌身は両丸造である。この他、56が鉄鎌の頭部、57が鉄鎌の茎の可能性がある。

鉄釘のうち釘頭が残存する7点（43~49）は、残存状況が良好なもので、全長約8~11 cm、厚さ約5 mmである。釘頭の整形は、まず方形の鉄棒を叩き延ばした後でL字形に折り曲げ、平面的にはT字形になるように鍛造されたもので、東海地方で出土する一般的な鉄釘の形状（A類）である（大谷2004）。この他、鉄釘の可能性があるものとして断面が方形で厚さ約5 mmの5点（50~54）がある。

## (6) 小結

築造時期について 石室内出土須恵器は、壺蓋が口径約9cmであり、遠江IV期前半、7世紀中頃に位置づけられる可能性が高い。装飾付大刀は、環付足金物を伴うものが7世紀以降増加すること（下大迫2003）、柄えが銅装であること、鑿筒式鉄鋸は7世紀以降多いことを考慮する（大谷2003）と、須恵器の時期である遠江IV期前半、7世紀中頃に築造された可能性が高い。

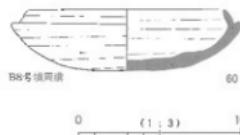
追葬について 出土遺物に時期差がなく、追葬の有無については不明である。

## 5. 上神増B 8号墳

### (1) 古墳の現況

古墳は緩斜面に位置する。調査前には斜面の盛り上がりなどは確認できなかったことから、古墳の存在は想定できず、確認調査で新たに確認された古墳の一つである。標高85.0m付近に築造される。斜面上部にB 7号墳、北側にB 5・B 6号墳が位置する。

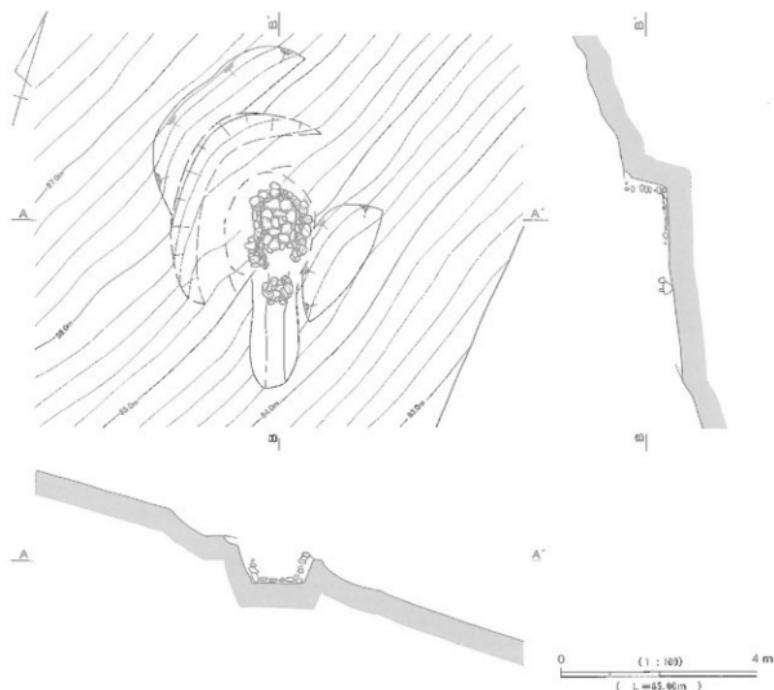
### (2) 墓丘の構造（第39・40図、第5・37表、図版22・23・66）



墳丘盛土 B 7号墳に隣接して造営されており、築造当初は、B 7号墳の墳丘・周溝の一部を破壊して構築したか、その墳丘に貼りつけるように構築された可能性が高い。墳丘盛土は一切確認できない。

周溝 周溝は斜面上部のみ残存しており、周溝と石室の高さから考えると、斜面上部を削り出して平坦に成形した後、石室の墓壙を掘削し、それに盛土したと考えられる。したがって、本来斜面上部のみしか成形されていなかったことも考慮する必要がある。

第39図 上神増B 8号墳周溝出土土器実測図



第40図 上神増B 8号墳墳丘測量図

周溝出土遺物（第39図、第37表、図版66）B8号墳周溝から、須恵器壺身1点（60）が出土したが、後述するように想定されるB8号墳の築造時期と須恵器の時期が不一致であることから、この遺物はB8号墳に伴わず、斜面上位から流れ込んだ遺物である可能性が高い。

壺身は立ち上がりが斜め上方に立ち上がるもので、口径12.0cm、器高3.7cmである。この特徴から遠江國後葉に位置づけられる可能性が高い。

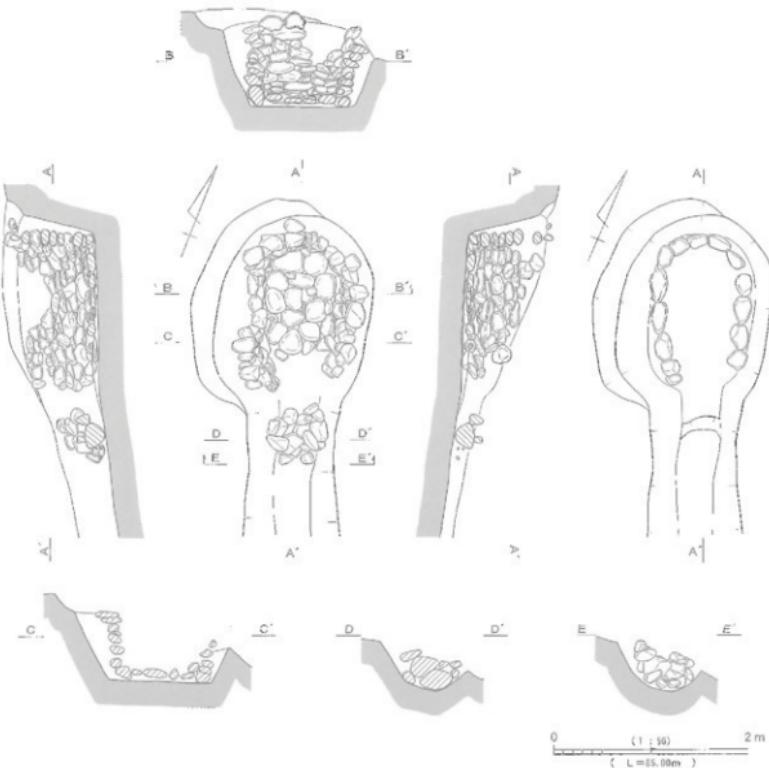
### （3）埋葬施設の構造（第41図、第12表、図版22・23）

横穴式石室 地下式に構築された、南南東に向かって開口する無袖形石室である。石室は奥壁と側壁の明瞭な区分が確認できず、石室平面形は楕円形である。

石室規模から大人の伸展葬は不可能であり、改葬骨を納めた可能性が高い。

第12表 上神増B8号墳埋葬施設の規模

主軸方位	N-21°15'W
石室全長	1.4m
玄室奥壁幅	0.54m
玄室玄門側幅	0.4m
墓域長	2.2m
墓域幅	1.9m



第41図 上神増B8号墳横穴式石室および墓域実測図

**奥壁・側壁** 上述したように奥壁と側壁の境界は明瞭ではなく、当初から奥壁と側壁を一体として構築した可能性が高い。基底石は川原石の長手面を内側に向け、2段目以上は川原石の小口積みを基本としている。現状で8段、0.7m残存している。天井石らしい石材は確認できず、8段目以上が急激にもち送られ、幅の狭い天井石が利用されたか、あるいは木板などが使用された可能性もある。

**閉塞** 閉塞は石室前面の墓道部分で行っている。側壁と同じく人頭大の川原石を山形に積み上げた様子が確認できる。

**床面** 石室内には玄門付近を除いて全面に人頭大の石材が敷設されている。敷設範囲は、長さ1m、幅0.8mであり、上述したように成人を伸展葬するには不可能である。

#### (4) 出土遺物

石室内からの出土遺物はない。

#### (5) 小結

築造時期について B 8号墳周辺から須恵器が1点出土しているが、遠江で調査された同様の特徴を有する横穴式石室をもつ古墳の事例一浜松市大屋敷C 52号墳などは遠江IV期末葉～V期前半、7世紀末葉～8世紀前半に位置づけられており、B 8号墳も7世紀末葉～8世紀前半に位置づけられる可能性が高い。

したがって、B 8号墳に近在する古墳は、遠江IV期前半にB 7号墳が築造された後、IV期後半以降V期前半までに、B 5・B 6・B 8号墳が築造された可能性が高い。

追葬について 遺物が出土していないことから、追葬の有無については明確ではないが、石室規模は伸展葬が不可能なほど小さいこと、築造が想定される7世紀後半以降は追葬を行わず単葬になっている時期であり、追葬は行われなかったと考えたい。

## 6. 上神増B 9号墳

### (1) 古墳の現況

古墳は、丘陵谷部分の最も奥まった箇所に築造されており、当初全くその存在は想定しておらず、確認調査により確認した古墳の一つである。古墳は、標高 90 m付近に築造される。

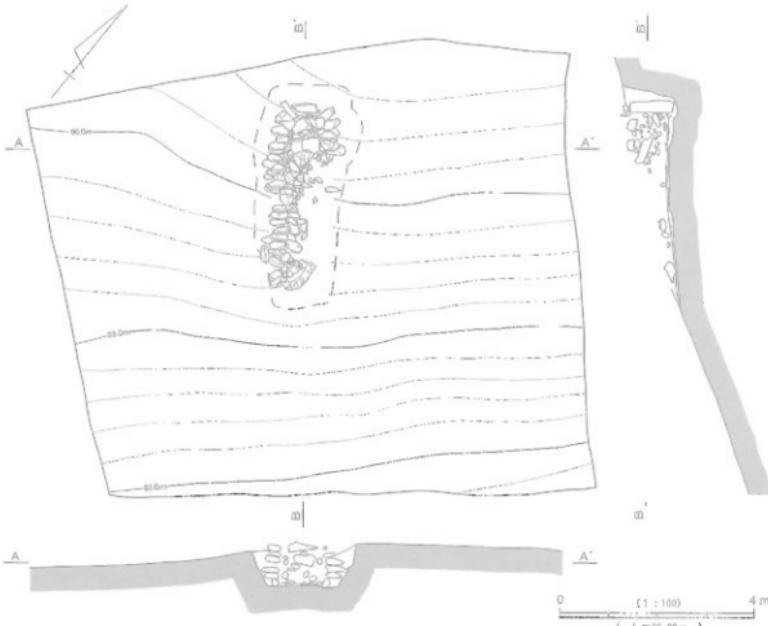
### (2) 墓丘の構造（第 42 図、第 5 表、図版 24）

古墳の盛土および周溝は確認できず、墳形・規模は不明である。古墳の周辺の周溝が掘削されてもよい場所に周溝は確認できないことから、非常に浅く掘削されたものか、あるいは当初から周溝をもたない古墳であった可能性もある。

### (3) 埋葬施設の構造（第 43・44 図、第 13 表、図版 24～26）

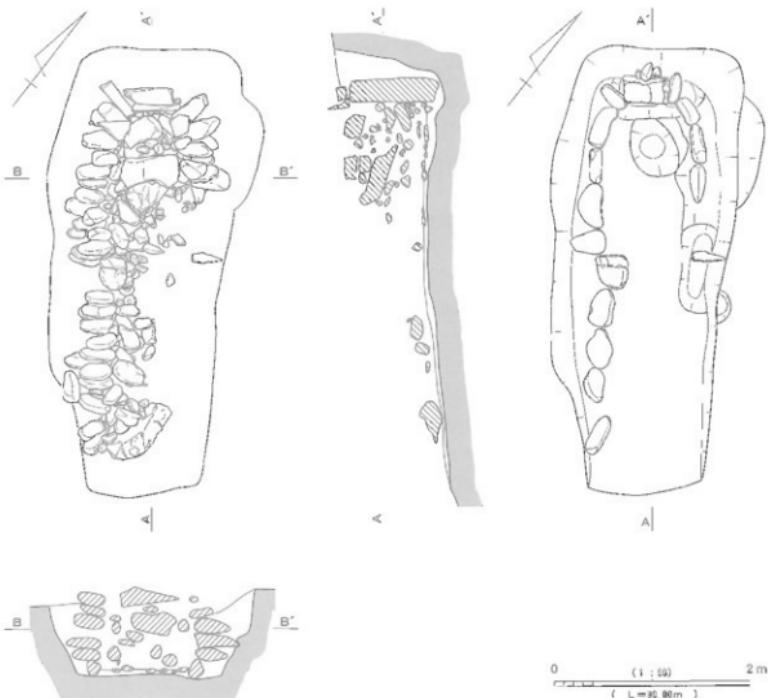
埋葬施設は、半地下式に構築された擬似両袖式横穴式石室であり、南東に向かって開口する。  
墓壙 墓壙は丘陵斜面を掘り込んだ、隅角が丸みをもつ羽子板形であり、奥壁部分で 1.1 m 掘り込んでいる。墓壙長 4.6m 以上  
右側壁先端の石材は移動している可能性が高く、本来は長方形の墓壙内に石室が納まっていた可能性が高い。

第13表 上神増B 9号墳埋葬施設の規模		
主軸方位	N-37°30'W	
石室全長	3.5m 以上	玄室幅 0.9m
玄室奥深幅	1.55m	玄室玄門側幅 0.9m 前後
側道長	0.5m	側道幅 0.7m 以上
墓壙長	2.1m 以上	墓壙幅 1.9m



第42図 上神増B 9号墳周辺地形測量図

第4章第5節 上神増古墳群の調査成果



第43図 上神増B9号墳横穴式石室検出状況および基底石、基壇実測図

#### 横穴式石室

**平面形** 玄室は中央部がややふくらみ、奥壁に向かって窄まる形状である。羨道は玄門からハ字形に開いている。C-C'断面を確認すると、この部分の側壁は内傾するように石材が持ち送られていることから、玄門から2石目までは天井が架構されていた可能性がある。

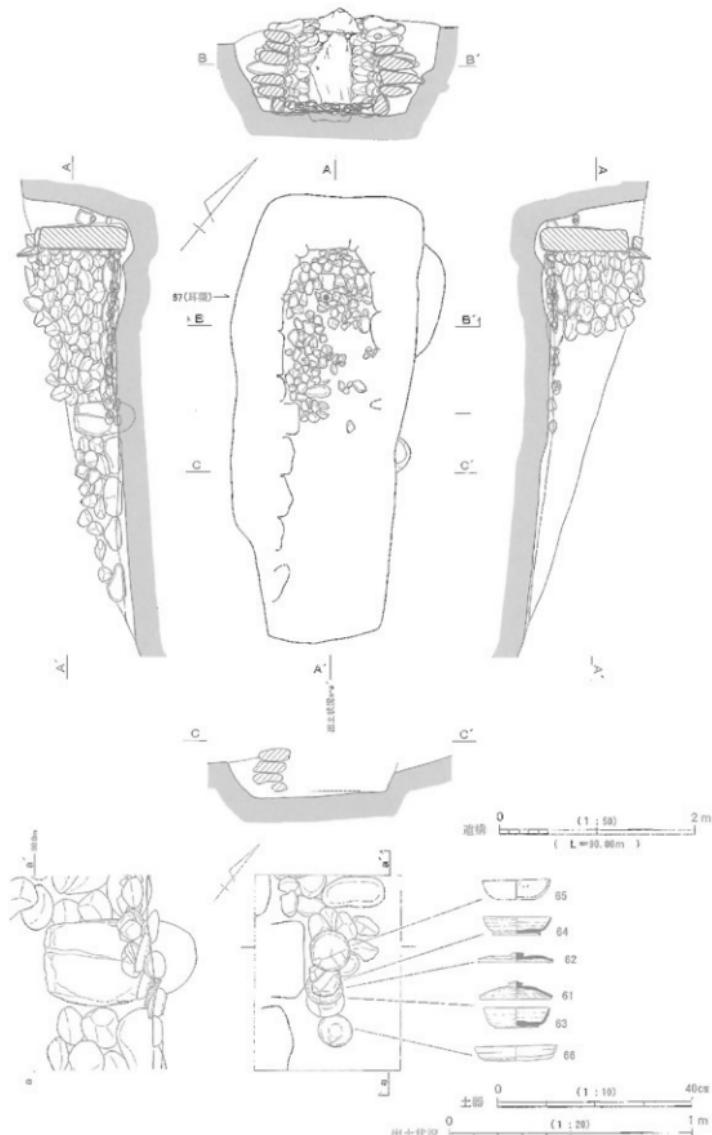
**奥壁・側壁** 奥壁は大型の板状石材を立てて使用し、2段目も板状の石材の平手面を内側に向けて積んでいる。側壁の基底石は川原石の長手面を内側に向けて設置し、2段目以上は小口積みを基本として積み上げている。玄門（袖）は右側壁側しか残存していないが、板状の石材ではなく、大型の川原石を用いて立柱石としている。側壁は7~8段残存している。

**天井石** 天井石は石室内に落ち込んでおり、板状の石材が玄室中央から奥壁側に3石、南側に1石の都合4石が確認できる。これらの長さは1.1m前後しかないが、石室を破壊した際に持ち出されたとすれば、玄室部分は天井石で覆われていた可能性が高い。

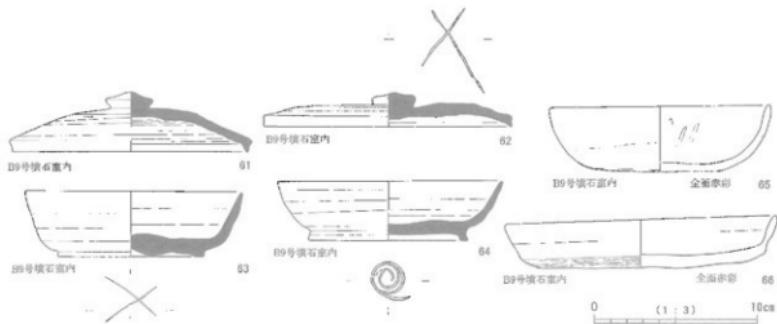
**床面** 玄室床面には全面的に拳大の川原石を用いて敷石が設置されている。

#### (4) 遺物の出土状況 (第44図、図版25)

遺物は玄室敷石直上で中央からやや奥壁側で耳環1点(67)が、左側玄門部分に須恵器壙蓋2点(61・



第44図 上神増B9号墳横穴式石室実測図および遺物出土状況図



第45図 上神増B9号横穴式石室出土土器実測図

62)、环身2点(63・64)、土師器壺1点(65)、盤1点(66)がまとめられた状態で出土した。一番南側に土師器盤(66)、その横に蓋付环身(61・63)、この蓋の上に环蓋(62)、その上に环身(64)、さらにその上に土師器壺(65)が出土しており、蓋付环身の上に62・64・65が載せられていて、それが倒れたような状態を示している。

##### (5) 出土遺物 (第45・46図、第37・40表、図版67・68)

出土遺物には、耳環1点、須恵器环身2点、环蓋2点、土師器壺1点、盤1点がある。

**土器** 須恵器环蓋(61)は大型の擬宝珠形の摘をもつ摘蓋で、口縁部は垂直に垂下させ三角形に仕上げる。口径14.5cm、器高3.7cmである。环蓋(62)は扁平な大型の擬宝珠形の摘みをもつ摘蓋で、61と異なり、天井からほぼ水平に伸びた後、口縁端部を緩やかに垂下させるもので、器高が低い。口径15.2cm、器高2.1cmである。天井外面には「×」字形のヘラ記号が刻まれている。环身(63)は环蓋(61)が重ねられていたが、ヘラ記号からみると、組み合わせ関係にあったのではなく、この位置に置かれる際に重ねられただけの可能性もある。63は台を持つ有台环で、底部は台よりも高い位置にある。环部はやや外側に向かって立ち上がり、口縁部はやや細く丸められている。口径13.3cm、器高4.1cmである。底面には「×」字形のヘラ記号が刻まれている。このヘラ記号から考えると、本来は62と組み合わせ関係にあった可能性が高い。环身(64)は有台环で底部は台よりも高い位置にある。口径13.8cm、器高3.7cmをはかる。62と63が組合関係であるとすれば、61と64が組合関係にある可能性が高い。

土師器壺(65)は内外面全体に赤彩が施されている。底面はほぼ平坦で、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は丸く仕上げられている。盤(66)も全面赤彩されている。底面はやや外側が高く、体部は底部から外側に向かって立ち上がり、体部下半は強く撫でられる。

**耳環** 耳環(67)は銅地銀張である。開口部の小口面を観察すると、箔を折り曲げた痕跡(皺)が確認できることから、銅地に薄い銀箔(板)を貼り付けたものであることがわかる。



(6) 小結

築造時期について 築造時期は出土した土器から遠江V期前半(7世紀末葉~8世紀前半)に位置づけることができる

追葬について 出土した遺物は同時期であり、追葬の有無については不明である。

0 (1:2) 4cm

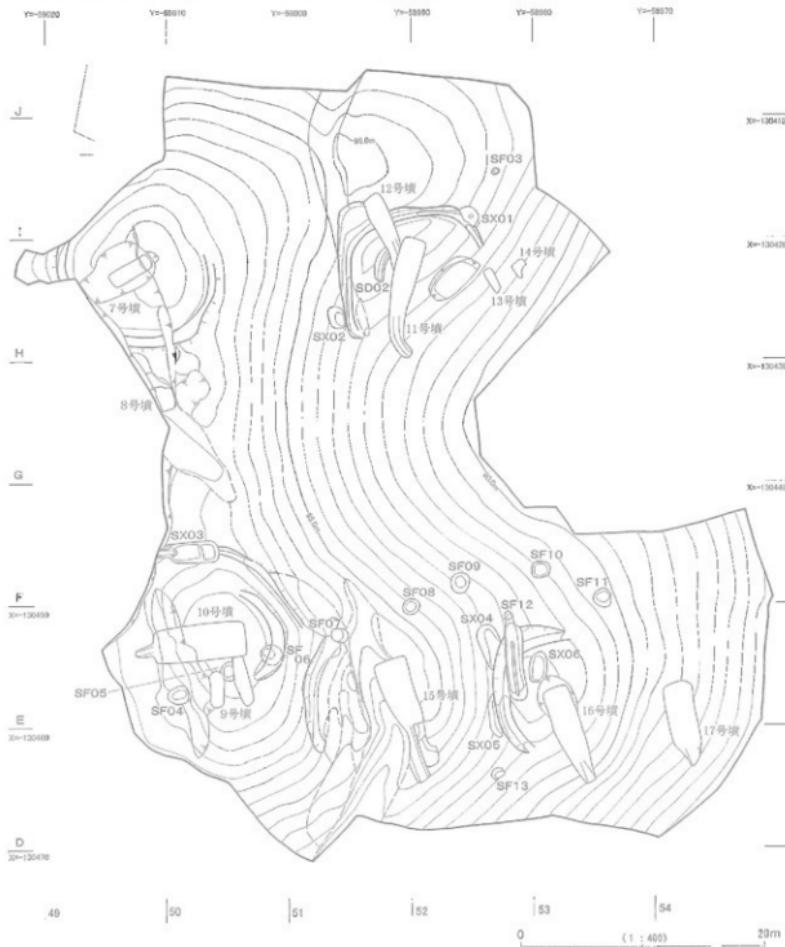
第46図 上神増B9号横穴式石室出土耳環実測図

## 第6節 上神増E古墳群の調査成果

### 1. 上神増E古墳群の概要

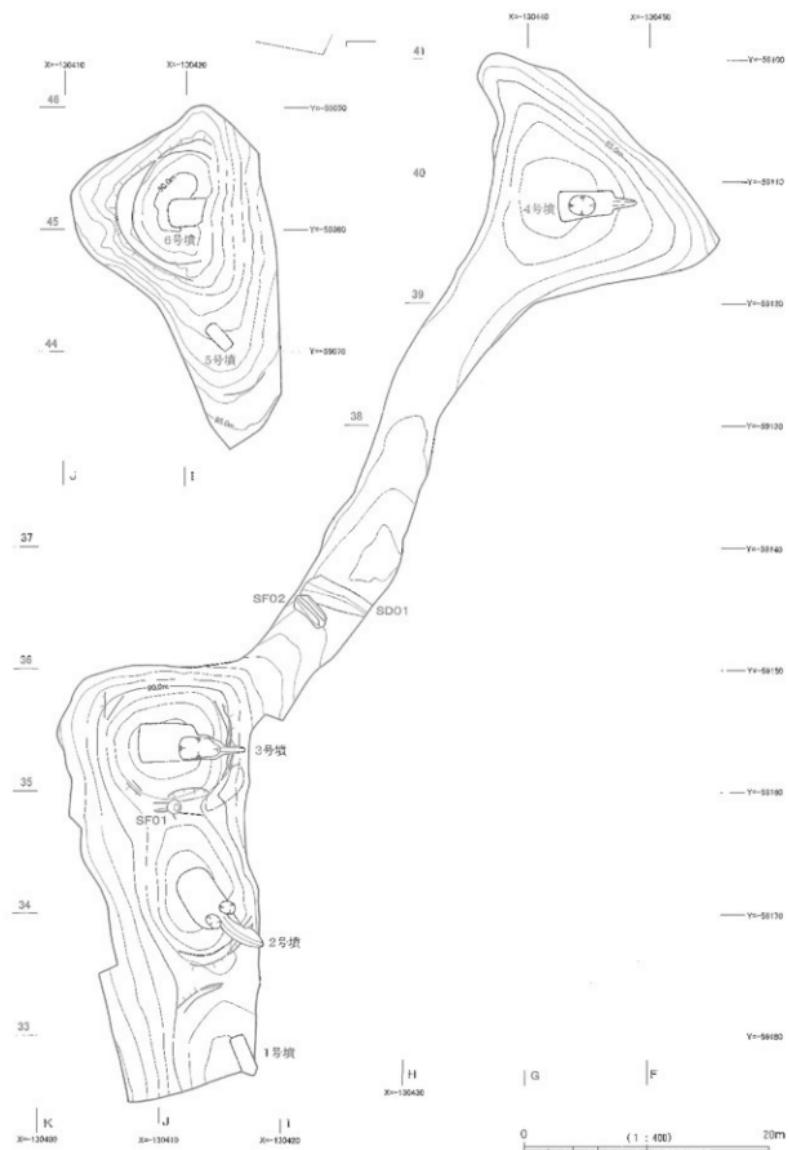
上神増E古墳群は、A・B古墳群の南側、D古墳群の東側に位置する。E古墳群は尾根上とその斜面に位置するが、尾根が痩せて古墳が築造されていない部分があることから、4支群程度に細分できる。

E-1区では西側のE 1～E 3号墳と東側のE 4、E-2区でE 5・E 6号墳、E-3区でE 7～E 17号墳が築造されている（第6・7・24・47・48図、図版2・27）。



第47図 上神増E古墳群調査区（E-3区）測量図

第48図 上神増E古墳群調査区(E-1・2区)測量図



第48図 上神増E古墳群調査区(E-1・2区)測量図

## 2. 上神増E 1号墳

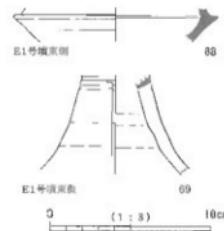
### (1) 古墳の現況

古墳は天竜川に向かって伸びる尾根上に位置しており、天竜川平野を一望することができる。この尾根の先端に上神増D古墳群が分布する。D古墳群からは直線距離200m、標高差約30mである。E 1号墳には近接してE 2・E 3号墳が所在するが、E 1号墳は尾根の先端で、最も立地状況が良好な場所に築造している。

### (2) 墓丘の構造（第49・50図、第5・37表、図版28・69）

E 1号墳周辺は土取りにより大きく削平されており、その際の掘削あるいはその後の斜面の崩落によりE 1号墳の一部（西側から南側）の墳丘が崩落している。

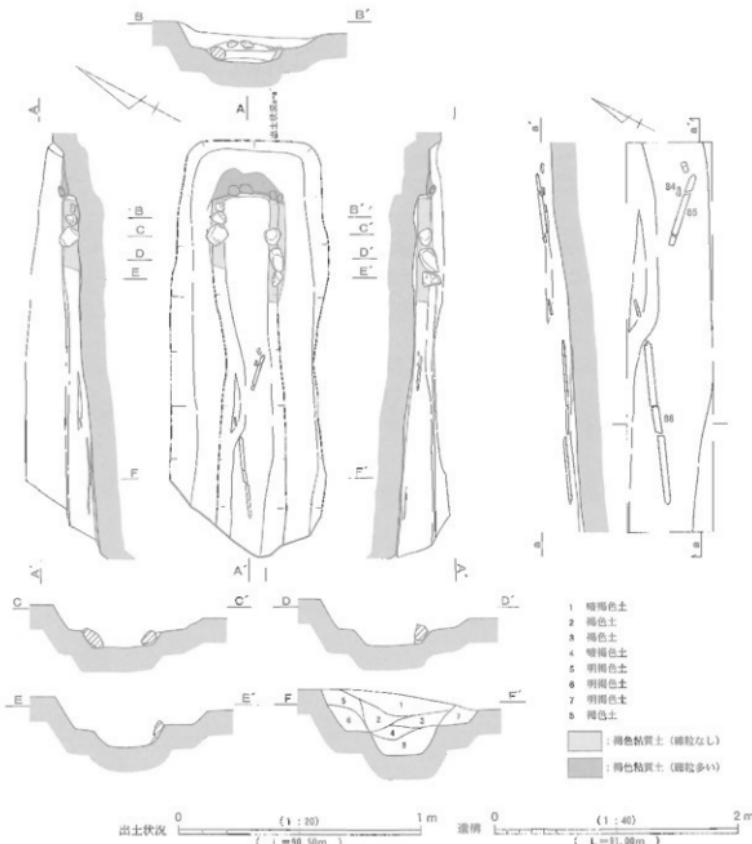
**墳丘** 墓丘は北側部分に盛土が残存している。埋葬施設より標高が低い位置から盛土が始められており、墳裾から徐々に赤褐色土、褐色土、黒褐色土を互層にしながら盛り上げたことがわかる。



第49図 上神増E 1号墳  
墳丘周辺出土土器実測図



第50図 上神増E 1号墳墳丘測量図



第51図 上神塚E 1号墳埋葬施設および遺物出土状況実測図

**周溝** 周溝は墳丘東側から北側部分で確認でき、丘陵を掘削し、隣接するE 2号墳がある場所と区画している。周溝は残存部位で幅約0.8 mである。

古墳は墳丘が崩落していることから確定的ではないが、円墳の可能性が高い。現状では12 m前後の円墳であった可能性が高い。

**墳丘出土遺物** (第49図、第37表、図版69) E 1号墳の東側から須恵器坏身1点(68)、高环1点(69)が出土しているが、両者が接合し、有蓋高环である可能性もある。坏身(68)は受部の破片で、受部径12.6cm前後に復原できることから、口径はおよそ11~12cmと推測できる。高环脚部片(69)は破片上部に凹線が2条確認できることから、長脚二段透かし高环である。脚部はハ字形に広がる形態を示す。透かしは二方向透かしである可能性が高い。

したがって、これらの特徴から両者は遠江國後葉に位置づけられる可能性が高く、隣接する2号墳

に伴う遺物である蓋然性が高い。

### (3) 埋葬施設の構造 (第51図、第14表、図版28)

埋葬施設は、主軸を東西側に向け、地山を掘り込んだ木棺直葬である。

墓壙 墓壙は二段墓壙で、一旦長方形に掘削した後、木

**木棺** 下段の墓壙は東側に棺を安定させるための拳大の川原石が隅に設置されていること、粘土は墓壙の棺底面中央には配置されず、棺の南北部分（棺側）にのみ確認できることの2点を考慮すると、平板な板を組み合わせた組合式箱形木棺とするよりも、棺底がU字形の割竹形木棺で、それを安定させるために棺側壁近くの下部に川原石と粘土を設置し、木棺の安定を図った可能性が高い。また、東側の粘土は棺小口跡を埋めるために設置されたものである可能性が高い。

**頭位** 棺は棺床が東側から西側に向かって傾斜していることから、棺床が高い東側に頭を置く、東頭位であった可能性が高い。

(4) 遺物の出土状況 (第 51 図、図版 28)

遺物は残存する棺の南側から出土したが、当初は棺の中央であった可能性が高い。遺物は棺底よりもやや高い位置から出土している。現存する棺南側から切先を西側に向けた状態で鉄劍（85）が、その間付近から刀子（84）が同じく切先を西に向かって出土した。85 の 0.4 m 西側から棺床直上で切先を西側に向けた状態で鉄劍（86）が出土した。この他、棺内の土砂の洗浄中にガラス小玉 14 点が出土した。

なお、鉄剣（86）は茎と剣身が分断して10cmほど離れて出土しているが、この高低差は5cmほどあり、後述する上神増E7号墳や、磐田市（旧豊岡村）寺山14号墳第1・2主体部（静岡理文研2004）のように地震などによる地滑りの影響を受けている可能性がある。

(5) 出土遺物 (第 52・53 図、第 38・39 表、図版 68・69)

出土遺物は、玉類14点、鉄剣2点、刀子1点である。

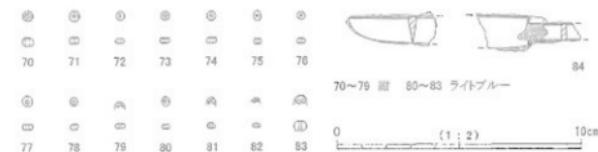
玉類　すべてガラス小玉で、70～79が緋色、80～83がライトブルーである。大きさは直径3.0～4.5mm、全長（高さ）1.5～3.8mm、重量0.01～0.13gである。

鉄器 刀子(84)は刀部と茎尻が欠損している。残存長7.6cmである。刀部は鏃のない平造りで、関は直角均等両面關で、茎は關から茎尻までほぼ同じ幅である。關部分には柄縫装具が残存している。

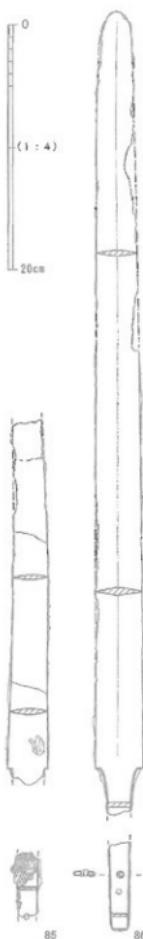
鉄剣(85)は、切先、茎が欠損しており、全長は不明である。剣身は鎌がなく、断面杏仁形(レンズ状)である。闇は直角両闇で、抉り込みは浅い。茎は茎尻に向かい幅を狭めるものであり、破断部に目釘孔(円孔)が確認できる。茎には、布が付着しており、柄・鞘装着状態で布に巻かれていたか、被葬者の衣服の一部が付着したものと想定できる。剣残存長35.0cm、剣身残存長28.4cm、幅3.3cmである。

鉄剣 (86) は、剣身・

茎の一部が欠損しており、全長は不明である。剣身は両面に鎧があり、断面は幅広の菱形（鎧造）である。剣残存長 73.0cm、剣身長



第52図 上神増E 1号墳埋葬施設出土玉類および刀子実測図



61.8cm、幅4.0cm、厚さ0.8cmである。関は直角均等兩闊で、茎は茎尻に向かい幅を狭める。茎尻は一文字尻である。茎には目釘孔が2孔穿たれており、一孔には鉄製目釘が残存する。茎残存長11.2cm、幅2.8cm、厚さ0.4cmである。

#### (6) 小結

築造時期について 墳丘周辺から出土した須恵器は壺身の法量が受部で12cm前後であり、口径が11cm前後と想定できること、長脚高壺の透かしが2方向透かしであることなどの特徴から遠江Ⅲ期後葉、6世紀末～7世紀初頭に位置づけることができる。E1号墳は木棺直葬である点や後述する埋葬施設から出土した鉄剣の分析により、この遺物は隣接するE2号墳に伴うものである可能性が高い。

埋葬施設内から出土した副葬遺物からは詳細な時期は特定できないが、刀剣類（2点）は鉄剣のみであることが注目できる。遠江では古墳時代後期になると鉄剣の副葬が減少することを考慮すると（大谷2004）、鉄剣の副葬が盛んな古墳時代中期後葉～末葉（5世紀後半～6世紀初頭）に位置づけられる可能性が高く、遅くとも鉄剣の副葬が行われる古墳時代後期前半（遠江Ⅲ期前葉、6世紀中頃）までに築造された可能性が高い。

第53図 上神塚E1号墳  
埋葬施設出土鉄剣実測図

### 3. 上神増E 2号墳

#### (1) 古墳の現況

調査前の踏査段階で、高まりが確認できたため、古墳であることは明瞭であった。

E 2号墳は、尾根の先端に築造されているが、東側にE 3号墳、西側にE 1号墳が所在している。古墳は標高約92mを墳頂としているが、平野からの見え方については、尾根の先端に築造されたE 1号墳の墳丘に遮られて、ほとんど見えず、南側の谷に入らないと見えない状況であった可能性が高い。

#### (2) 墳丘の構造（第54～56図、第5表、図版4・29）

**周溝** 周溝は墳丘北東側の尾根上を切断する形で掘削されており、周囲と分断している。墳丘南西側は削り出しを行い周囲と区画している。

なお、周溝が掘削された北東側は周囲の地形をみると、現在はこの周溝部分で尾根幅が狭まっている。E 3号墳築造箇所との関係を考慮すると、E 2・E 3号墳が所在する尾根は一つの丘で、その中間部分に周溝を掘削することで墳丘に盛る盛土を確保した可能性を想定すべきかもしれない。この周溝掘削の結果、周溝がE 3号墳と分断する機能も果たしていたと想定する。

また、E 3号墳と周溝の切り合い関係が確認できるが、後述する中世墓（SF01）の影響により前後関係は明らかにすることはできなかった。

**墳丘** 墳丘は丘陵尾根を利用し、その尾根上に盛土が行われている。現状ではやや東西に長い楕円形を呈している。東西12.4m、南北9.4m以上であり、南西からの見掛け上の高さは、約1.4mである。

**墳丘盛土** 古墳は尾根の中心に墓壙を掘削し横穴式石室を構築するには平坦面が足りなかったようで、墓壙は最高所からやや南側に掘削され、第56図に示したようにその北西側（以下、北側とする）を中心に盛土が行われている。墳丘構築前の標高は、A-a断面で墓壙南側が約91.5m、北側が91.1mであり、0.4mほど北側が低い。北側の盛土は横穴式石室の裏込めから続く第一次墳丘で、その上位に横穴式石室を覆う第二次墳丘が確認できる。

旧表土の取り扱いは、南側墳丘上には盛土が直接地山の上に盛り上げられており、表土を除去した後で盛土が行われたことがわかる。北側では旧表土が確認できるため、旧表土を残したまま盛り上げられているが、B-b断面をみると、61と60層の間の土砂は盛り上がっており、ある程度は表土を整形した上で盛土を行った可能性が高い。

#### 墳丘構築過程の復原（第54・55図）

以下には、土層の観察結果をもとに、墳丘の構築過程を5工程に復原して記述する。

**第1工程** 旧表土を整形する。

**第2工程** 横穴式石室を構築する墓壙を掘削する。

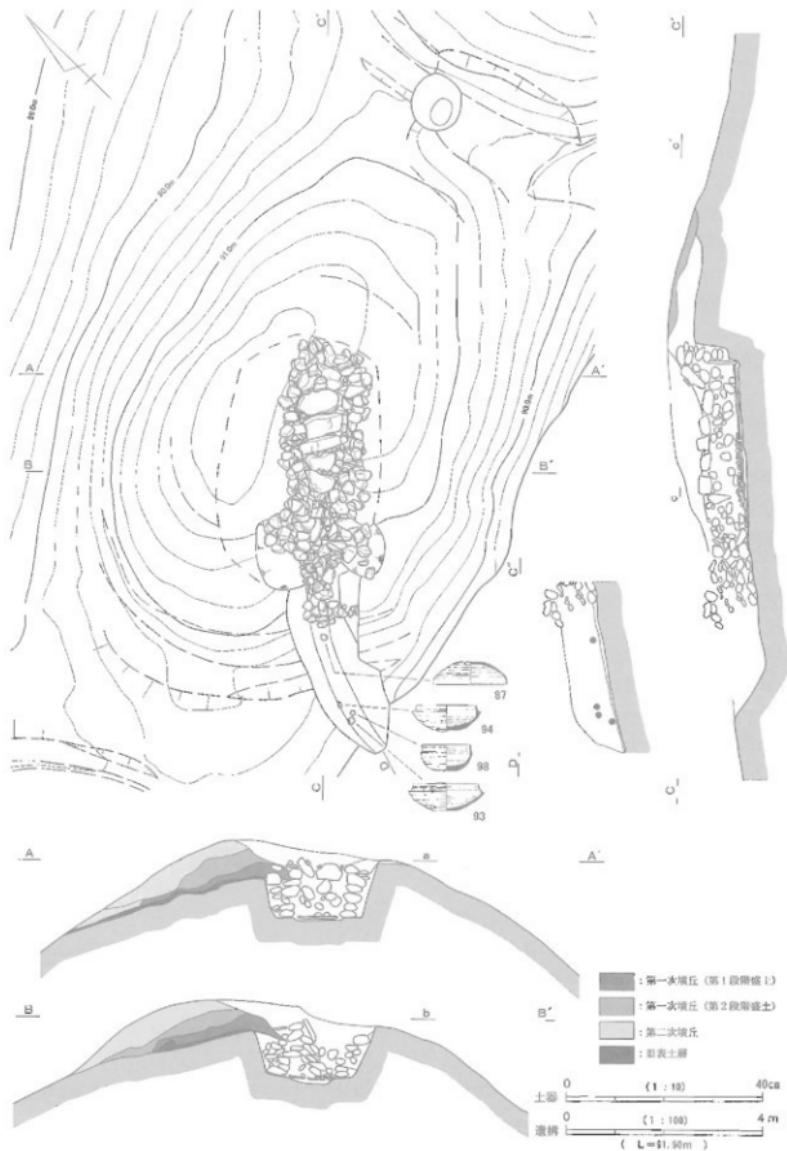
**第3工程** 横穴式石室の壁面の構築とともに、第一次墳丘（A-a断面の44～38層、B-b断面の61～52層、c-c'断面の75～62層）の盛土を行い、南東側の地表面の高さと揃える。横穴式石室の裏込めに合わせて第一次墳丘（第1段階盛土）を盛り上げる段階である。

**第4工程** 第1段階盛土上にさらに石室裏込めを兼ねた第一次墳丘（第2段階盛土、A-a断面の37～29層、B-b断面の51～45層、c-c'断面の28～27層）を盛り上げる。

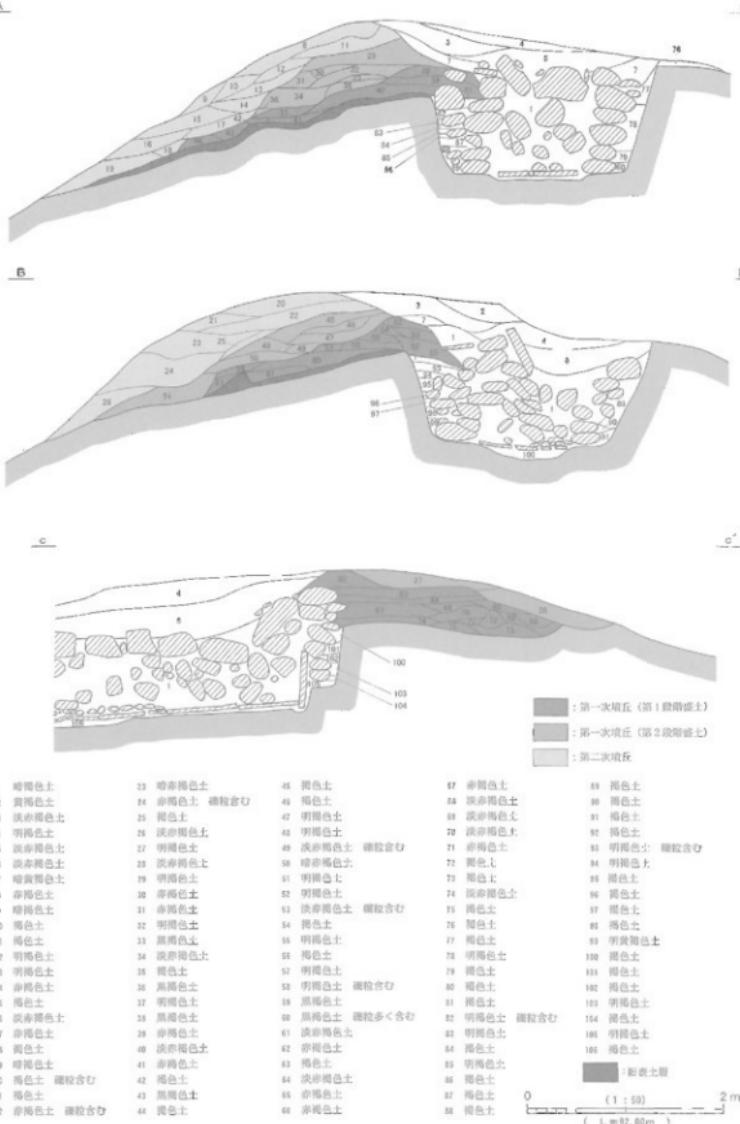
**第5工程** 第4工程で積み上げた第一次墳丘を覆うように、さらに第二次墳丘（第3段階盛土、A-a断面では19～8層、B-b断面の26～20層）を行い、古墳を完成させる。

なお、墳丘北東側の周溝および南西の削り出しについては、どの工程に伴うものか明確な根拠がないため復原工程からは除いている。第1～3工程の中で行われた可能性が高いと考えている。

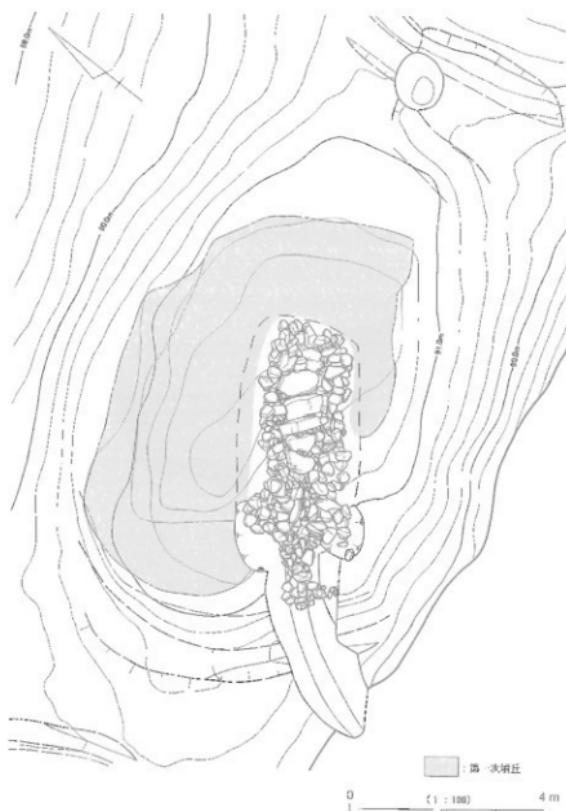
第4章第6節 上神増古墳群の調査成果



第54図 上神増E 2号墳塙丘測量図および墓道遺物出土状況図



第55图 上海堆E 2号坡堆丘土层图



第56図 上神増E 2号墳第一次墳丘の範囲

図A-A' 断面の7石とD-D' 断面の板状石材1石の8石であると想定でき、玄門部分まで確認できることから、天井石は石室を完全に覆っていた可能性が高い。天井石の大きさは石室主軸方向の断面で40~60cmである。

なお、第59図に天井石を架構した状態を復原した。一部崩落などにより側壁の構造が不明確な部分があるが、およそそのような状況で構築されていたと想定する。

**奥壁** 奥壁は1段目に2枚の板石を樹立し、2段目以降は川原石を小口積みしている。奥壁の裏込めは川原石を用いて充填しており、板石が奥に向かって倒れこむのを防ぐ目的があった可能性がある。

### (3) 埋葬施設の構造（第56~60図、第15表、図版30~33）

埋葬施設は、地下式に近い半地下式の墓壙内に築造された、南西に向かって開口する無袖形横穴式石室である。

**墓壙・墓道** 墓壙は長方形であり、南西側に墓道が接続する。墓壙内に横穴式石室が築造される。横穴式石室との間の裏込めには拳大から人頭大の川原石がやや多く充填されており、人為的に疊が混入された可能性が高い。

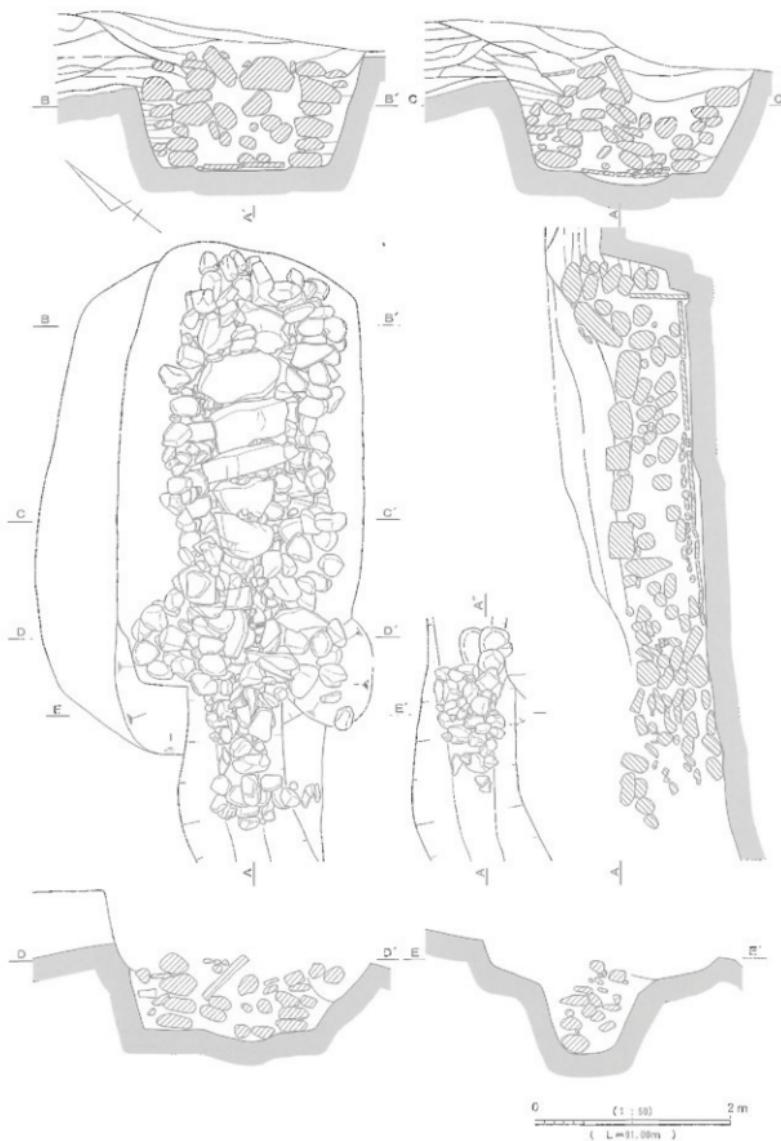
墓道は地山を約1m掘り込んでおり、石室から南に向かって緩やかに弧を描き、斜面下部方向へ向いている。古墳南側の谷筋を意識した配置と考えられる。

#### 横穴式石室

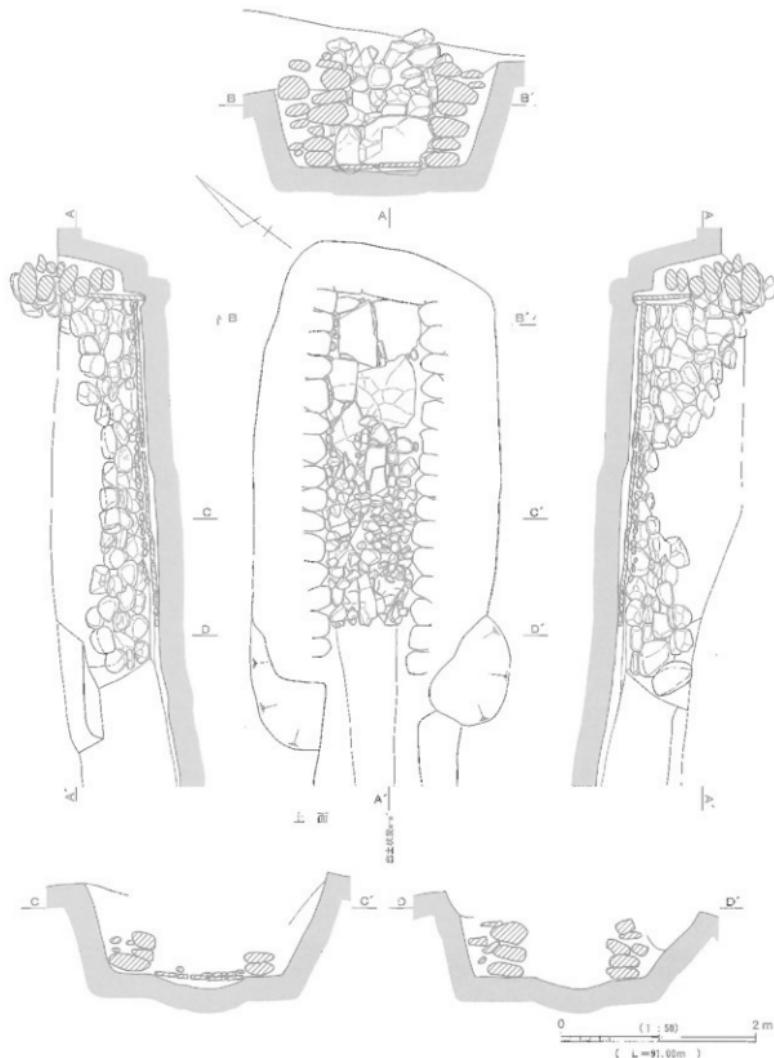
**天井石** 天井石は崩落していたが、幸運なことに石室内部に落ち込んだだけではほぼ架構位置を特定できる。天井石は第57

#### 第15表 上神増E 2号墳埋葬施設の規模

主軸方位	N-53°30'-E
石室全長	3.8m
玄室長	3.8m
玄室奥壁幅	0.95m
玄室玄門側幅	0.75m
墓壙幅	2.5m
墓壙長	4.5m

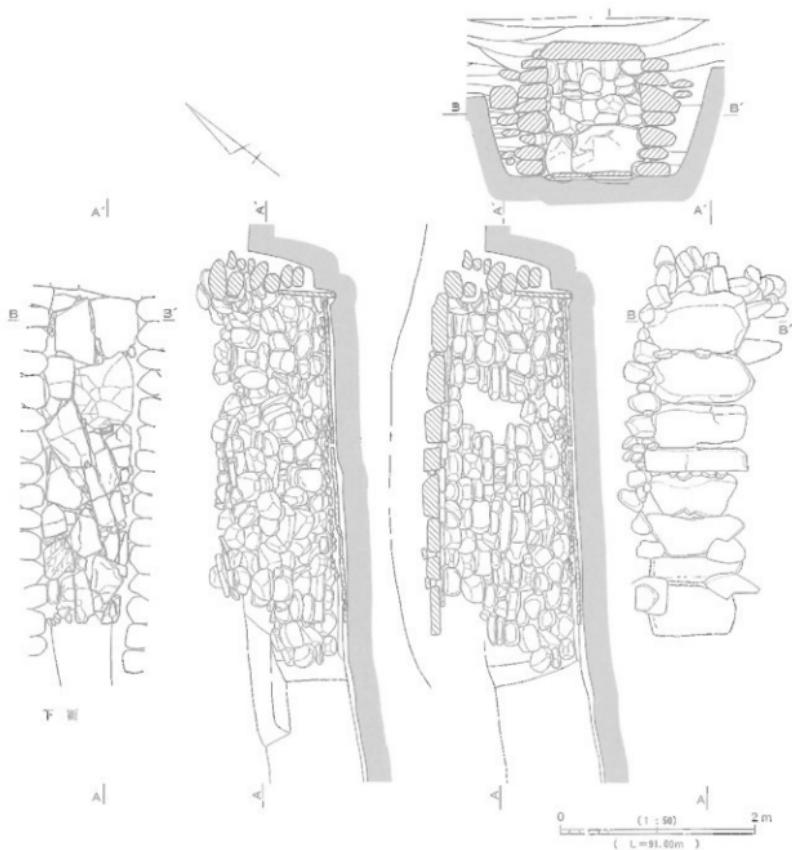


第57図 上神増E 2号墳横穴式石室検出状況図



第50図 上神堀E-2号墳横穴式石室実測図

**側壁** 側壁は基底石を含めてすべて小口積みしており、残存状況が良好な奥壁の状況から側壁の高さは奥壁部分で約1.2m前後であった可能性が高く、その場合には7段であった可能性が高い。

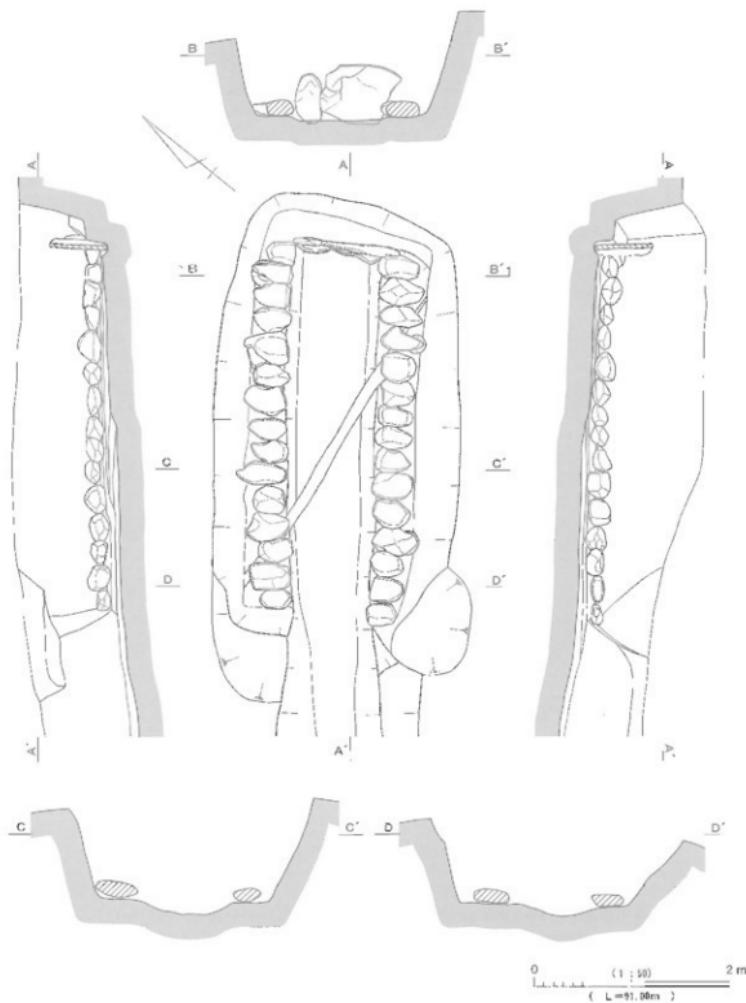


第59図 上神増E 2号横穴式石室床面（下面）実測図および横穴式石室復原図

基底石は上述のとおり、小口を内側に向けて設置しているが、左右で長さが異なり、左側壁側がやや長い。つまり、まず奥壁と玄門の石を先に置き、長さを揃えたわけではなく、奥壁側から玄門に向かって設置していく可能性が高いと考える。

敷石 敷石は2面確認できる。下面是板石を隙間のないよう玄門付近まで敷き詰めている。一方、上面は下面上に拳大から人頭大の川原石を設置しているが、玄室中央部から南側のみである。上面と下面の間には埋物がないため、両面が埋葬面として機能した（下面が初葬時、上面が追葬時）か、1面の埋葬面としてのみ機能したか明確ではない。以下、両面が埋葬面であった可能性を考慮して記述する。

閉塞 横穴式石室の閉塞は、川原石を用いて玄門部分で行っている。用いられた石材の大きさは20～40cmである。このうち玄門に近い位置の石材が30～40cmの大型の川原石を行い、その上に20cm前後の川原石が積載されていることから、大型の川原石と小型の川原石で行った閉塞には時期差があり、前



第60図 上神塚E-2号横穴式石室基底石および墓痕実測図

者が初葬時、後者が追葬の際の石材である可能性が高い。

#### (4) 遺物の出土状況 (第61図、図版32)

横穴式石室内からは玉類、刀子、小刀（短刀）、鐵鎌、三葉環頭大刀柄頭、鐵刀、刀装具が出土した。

三葉環頭大刀柄頭（246）は奥壁付近から単独で出土しており、柄頭が刀身から取り外された状態で副葬されたか、追葬のかたづけに伴い破壊されたか明確ではない。その西北でこの柄頭に伴う柄装具の可能性が高い鉄製刀装具（247）が出土し、この周囲からは鉄鎌や刀装具が出土した。これらの刀装具が散在して出土した南側から小刀（233）が切先を奥壁側に向かって出土した。さらに、玄室中央よりやや北側で、側壁に切先を下にして立てかけられた状態で鉄刀1点（249）が出土した。もう1点の鉄刀（250）は上面の敷石上から切先を奥壁側に向かって出土した。

玉類は、右側壁側奥壁から0.5～1mの範囲で出土している。

墓道からは須恵器が出土した。墓道底面にほぼ接した状態で須恵器环蓋（87）と須恵器环身（93）が出土し、須恵器広口短頸壺（錠、98）と須恵器环身（94）が床面より0.3m浮いた状態で出土した。原位置を保つ87・93と94の関係からみると、後述するように1型式の時期差があることから、追葬が行われたことが明らかである。

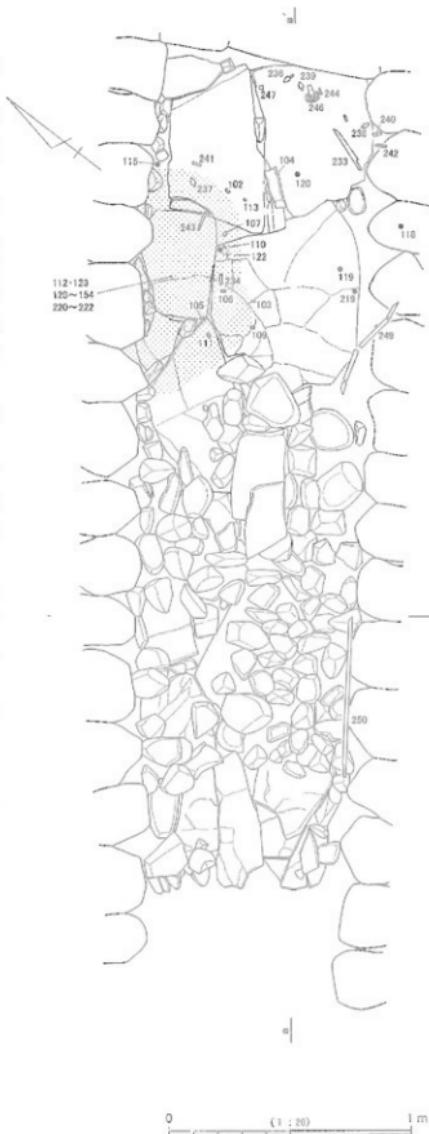
また、この他墓道の覆土から、須恵器环蓋6点、环身3点、平瓶1点、長頸壺か鍾1点、埴？1点が出土した。

なお、土器は石室内から出土せず、墓道のみで出土した点は注目すべき特徴である。

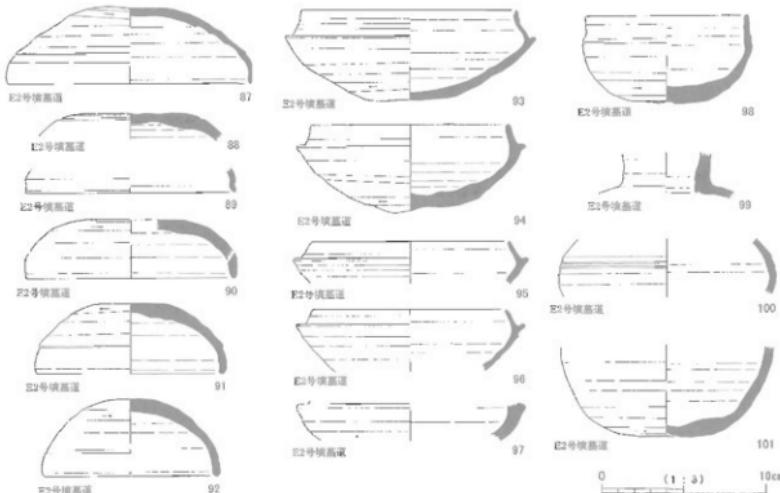
#### （5）出土遺物（第62～64図、第16・37～39表、図版6・70～73）

横穴式石室内から、玉類131点、三葉環頭大刀柄頭1点、大刀2点、刀装具2点、小刀（短刀）1点、鉄鎌5点以上、墓道から須恵器15点が出土した。

**土器** 石室内からの出土ではなく、すべて墓道からの出土で、須恵器のみが出土した。环蓋6点、环身5点、広口短頸壺（錠）1点、平瓶1点、長頸壺？胴部片1点、埴？底部片1点の15点である。



第61図 上神増E 2号墳横穴式石室遺物出土状況図



第62図 上神塚E2号墳出土土器実測図

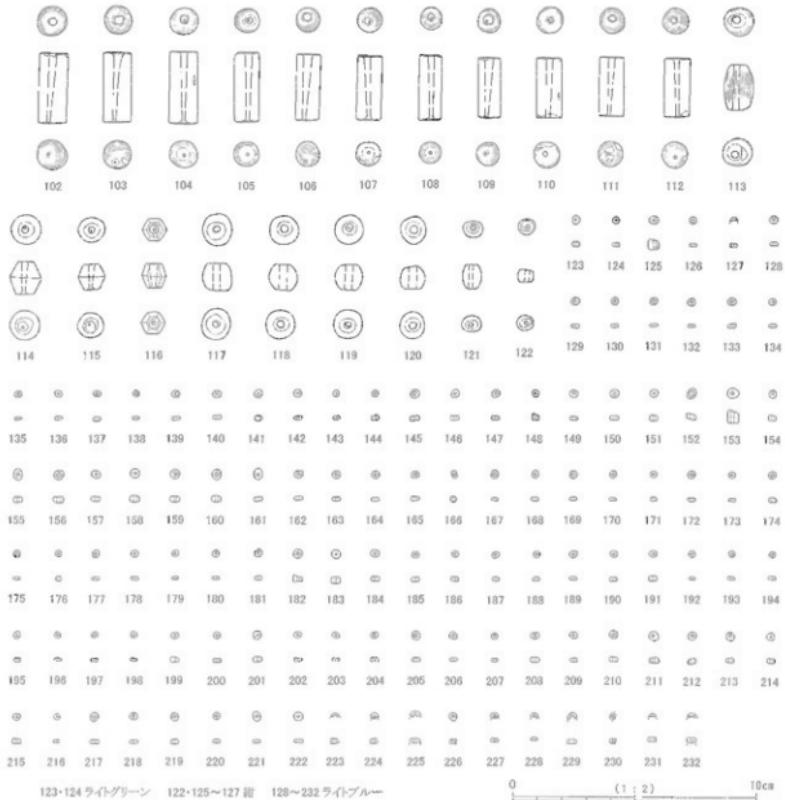
環蓋は、口径により3種類がある。87は最も大型で、天井と口縁の境には稜があり、口縁部は内湾し、口縁端部は丸く収められる。口径は14.8cm、高さ4.7cmである。89・90は口径13cm前後で、天井と口縁部の境界には稜や凹線は確認できず、屈曲により境界を表現する。3つめは、91・92で口径10~11cmであり、91は明瞭な稜線が確認でき、92は凹線がみられるのみである。91と92の特徴からは時期差として考えることもできる。

壺身は、口径により2種類がある。出土状態から前者が古く(初葬時)、後者が新しいこと(追葬時)が判明する。93は立ち上がりが高いもので、口径13.1cmである。2つめは94~96で、口径12cm前後で、立ち上がりは93に比べるとやや低いが、高いものである。

平瓶(99)は頸部片であり、頸部は5.2cmとやや太い。胴部片(100)は長頸壺か壺の体部と想定する。最大径よりやや上位に二条の凹線が施される。底部片(101)は壺と想定する。底部は平底であるが、中央がやや上げ底になるものであり、胴部は丸みをもって立ち上がる。俵形瓶などの胴部の可能性も完全には排除できない。

玉類 玉類は管玉11点、棗玉2点、算盤玉2点、切子玉1点、丸玉4点、小玉111点が出土した。

管玉11点(102~112)はすべて濃緑色を呈するもので、いわゆる碧玉製(蛇紋岩、緑色凝灰岩かグリーンタフ製のいずれかである可能性が高い)である。すべて片面穿孔である。直径約1.0~1.2cm、全長2.4~3.0cm、重量4.3~7.9gである。棗玉1点(113)は琥珀製で透明な明褐色を呈する。樽形で両面穿孔の可能性が高い。直径約1.2cm、全長1.9cm、重量2.7gである。棗玉1点(121)は濃緑色を呈する。いわゆる碧玉製(蛇紋岩、緑色凝灰岩かグリーンタフ製のいずれかである可能性が高い)である。樽形で直径0.8cm、全長1.0cmである。算盤玉2点(114・115)は水晶製で、片面穿孔である。大小があり、最大径1.3と1.2cm、全長1.4と1.0cmである。切子玉1点(116)は水晶製で、片面穿孔である。直径1.0cm、全長1.0cm、重量1.1gである。丸玉4点(117~120)は、ガラス製の可能性が高いもの2点(117・118)、石製2点(119・120)であり、直径1.0~1.2cmである。



第63図 上神増E 2号墳横穴式石室出土玉類実測図

小玉 111 点はすべてガラス製である。大部分の 105 点 (128 ~ 232) がライトブルー、2 点 (123・124) がライトグリーン、4 点 (122, 125 ~ 127) が緑色である。大部分が藍色系統であるが、2 点の緑色が組み合わされているところに注目できる。ガラス小玉の直径は 2.5 ~ 7.0mm、高さは 1.1 ~ 5.4mm である。

装飾付大刀 三葉環頭大刀柄頭 1 点が出土した。三葉環頭大刀柄頭 (246) は、鉄製であり、X 線写真撮影の結果、象嵌は施されていないことが判明した。柄頭は環と三葉文の一體造りである。柄頭の形態は平面蒲鉾形の環内に上向きに三葉文を造り出す。三葉文の中央の葉は環とは接着していない。茎は長く、茎尻付近に 2 孔の目釘孔が穿たれている。茎先は破断している可能性が高く、もう少し長い可能性がある。

三葉環頭大刀の類例 (穴沢・馬目 1989) 調査を参考にすると、三葉環頭大刀は環頭が刀身と一体造られるものと、別々に製作されるものがあるため特定

第16表 上神増E 2号墳出土三葉環頭大刀柄頭の計測値

部位	材質	横断面	高さ	幅	厚さ	備考
環頭	鉄製	一	(12.6)	—	—	象嵌なし
三葉文		隅丸方形	4.0	5.8	0.6	鈎鉄形平盤
圓丸方形		1.6	2.2	0.6		
長台形		(8.6)	1.4	0.5		

単位(cm)



第64図 上神墳E 2号墳出土金属製品実測図

なお、刀装具の鉄片の表面の分析をしたが、漆塗の痕跡は確認できなかった（第7章第1節参照）。

鉄刀（250）は切先と茎尻が欠損している。刀身に鍔はない平造りで、関は刃側が直角、棟（背）側が撫閥あるいは斜角であり、刃側の抉り込みが深い不均等両関である。茎は茎尻に向かってやや幅を狭める形状である。茎には関から2.5cmの位置に目釘孔が穿たれる。残存長65.0cm、刀身残存長56.6cm、幅2.8cm、茎残存長8.4cm、最大幅2.0cm、厚さ6mmである。

鉄刀（249）は、茎尻、刀身を欠損する。柄縁装具（鍔）を有する大刀であるが、鍔は確認できない。刀身には鍔は確認できない。関は装具に隠れて明確ではないが、直角均等両関である可能性が高い。茎

できないが、茎は長いものの環頭と刀身は一体造ではなく別々に製造された可能性が高いと考えている。根拠としては、E 2号墳から出土した大刀2点はいずれも破断部分の茎幅が1.5cm前後であり、当該三葉環頭の茎先端部分の幅と同様であるが、このどちらかと一体造されたとした場合、柄間部分が非常に長くなることから、どちらの大刀に伴うにせよ柄頭と刀身は別々に製造され、目釘で刀身茎・柄と装着された可能性が高い。

**鉄器** 刀装具2点、鉄刀2点、鉄小刀1点、刀子2点、鉄鎌5点が出土した。

刀装具（247）は中央に鉄製目釘が残存している。鍔である場合はこの部分に目釘は必要ないため、柄あるいは鞘尻金具の可能性があるが、鞘尻金具のように、鞘の端部（小口）を覆う金具は確認できることから、柄を飾る刀装具である可能性が高い。この場合、246に伴う可能性が高く、茎尻の目釘孔とこの金具の目釘孔が一致するのであろうか。これが正しいとすれば、柄間金具になる。

刀装具（248）はやや幅広の金具であり、切羽の可能性が高い。これも246に伴う刀装具であろう。

は茎尻に向かい幅を狭める形状で、関から4.0cmの位置に目釘孔が1孔穿たれている。金属製の目釘は遺存していないため有機質の目釘であった可能性が高い。残存長39.6cm、刀身長33.2cm、幅2.2cm、茎残存長6.4cm、幅2.0cm、厚さ4mmである。なお、三葉環頭大刀柄頭に伴う鉄刀は出土位置からすると、249の可能性が高い。

小刀（短刀、233）は、完形である。刀身は鎬のない平造りで、関は直角均等両関である。茎は茎尻に向かって幅を狭めるもので、茎尻は一文字尻である。茎には木質が残存しており、柄が装着された状態で副葬されている。全長20.0cm、刀身長14.9cm、幅2.0cm、厚さ3mm、茎長5.1cm、茎最大幅1.0cm、厚さ3mmである。

刀子は2点（234・235）出土しているが、ともに刃部片である。両者ともに刀身がやや内側に弧を描いており、研ぎ減りの可能性が高い。

鉄鎌は鎌身5点（236～240）、関5点（236・240～243）が確認できることから5点であった可能性が高い。すべて平根長三角形鎌である。大きさと関の形状から3種に細分できる。この分類は出土位置からみると、それが近い位置から出土していることから、236・239はセットで、238・240もセットで副葬された可能性が高い。236・239は鎌身幅が3cm前後で、関がやや鋭角である。237は幅が2.6cmとやや狭く、台形関である。238・240は237と同形態であるが、鎌身幅が3cmである。関の形状については、台形関と棘関の2者が確認できるが、出土位置からみると、243は237に、242は238に、のこる241は239に伴う可能性が高い。なお、244・245はこれらの鉄鎌の茎片である可能性が高い。

#### （6）小結

築造時期と追葬時期について 墓道の須恵器の出土状況と須恵器の特徴から追葬が行われたことが明らかであり、墓道から出土した須恵器からみるとさらにもう1回追葬が行われた可能性がある。

築造時期は87・93から遠江Ⅲ期中葉（6世紀後半）、追葬1回目は94などから遠江Ⅲ期後葉（6世紀末～7世紀初頭）、追葬2回目は須恵器（91・92）の法量や形態的な特徴から遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半（7世紀前半～中頃）に行われた可能性がある。

各時期の副葬品について 上述したように少なくとも追葬が2回行われた可能性が高いため、各時期の副葬品について考えておきたい。

鉄製品については、平根式鉄鎌には時期差が確認できないが、遠江で長三角形式鉄鎌は遠江Ⅲ期中葉に多いことから、初葬時であった可能性が高い。一方、鉄刀（250）は第2面上に副葬されており、追葬時の遺物である可能性が高い。これ以外の石室内出土遺物については、副葬時期を区分することは困難であるが、初葬者に伴う遺物である可能性が高いと考えている。須恵器は墓道の最下層である底面直上から壺身（93）が出土し、壺身（94）・広口短頭壺（98）はそれよりも上位で出土しており、93は初葬時、94・98は追葬時の遺物である。

したがって、以下に各埋葬時の副葬遺物をまとめて記載する。

初葬時 三葉環頭大刀柄頭1点（246）、鉄刀1点（249）、鉄鎌5点（236～240）、刀子3点（233～235）、玉類全部、須恵器壺蓋1点（87）、壺身1点（93）

追葬1回目 鉄刀1点（250）、須恵器壺蓋3点（88～90）、壺身3点（94～96）、広口短頭壺1点（98）  
追葬2回目 須恵器壺蓋2点（91・92）

（このほか、追葬時の遺物として須恵器平瓶1点（99）、壺瓶類2点（100・101）が該当する可能性が高い。）

#### 4. 上神増E 3号墳

##### (1) 古墳の現況

E 3号墳は踏査時から盛り上がりを確認できたため、古墳であることは想定できた。古墳はE 2号墳のすぐ東側に位置しており、E 2号墳とは周溝により隔てられている。古墳は墳頂で標高 91.8 m であるが、平野からの見晴らしは、尾根の先端に位置するE 1号墳の墳丘に遮られ、南西側から見ない限り、E 2号墳同様ほとんど見えなかつた可能性が高い。

なお、墳丘のほぼ南側に大きな盗掘坑が掘削されていた（第74図、図版34）。



第65図 上神増E 3号墳墳丘測量図

## (2) 墳丘の構造

(第65・66・71図、第5・37表、図版5・34)

**墳丘** 墳丘は、尾根を最大限利用して築造されている。

墓壇内部に落ち込んだ第66図a-a'断面の75~66層、c-c'断面の65~39層が木室の天井と墓壇の間に充填された裏込めで、その上のa-a'・c-c'断面38~20層が木室上に盛り上げられた第一次墳丘で、さらにその上にa-a'断面16~10層、c-c'断面19~10層を盛り上げて、第一次墳丘の構築を終了している。

そして、最終的に第二次墳丘(a-a'断面、c-c'断面とともに1~9層を構築し、墳丘を完成させている。

これらの盛土をみると赤褐色土と褐色土をある程度互層になるように積載していた可能性が高い。

**周溝** 周溝はE 2号墳との境界部分にのみ

尾根を切断する形で掘削されており、この部分のみ確認できることから周溝ではなく区画溝に近い。墳丘の北側と南側は削り出しで周囲と区画している。

周溝を削り出しから判断して、E 3号墳は円墳で、南北10.5m、東西約10.0m前後と想定でき、南側からの見かけ上の高さは1.4m前後である。

**墳丘出土遺物** (第71図、第37表、図版5・34) 墳丘西側と西側周溝から須恵器壺蓋4点、壺身4点が出土した。原位置を保持した状態ではなく、破片で出土した。

壺蓋は天井と口縁部の境に稜線があるもの(253)とやや浅い凹線が施されるもの(251・252・254)がある。この2者は口縁部の作り方に差異があり、前者は口縁と天井の間に稜線を巡らせ、口縁部は



第66図 上神増E 3号墳横穴式木室墓内土層図

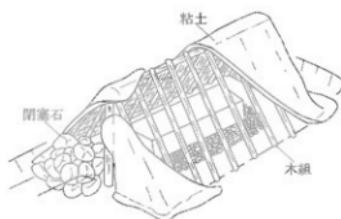
丸く収めるのに対し、後者は口縁部をS字状に外反させる。前者は口径15.0cm、器高4.2cmである。後者は口径13.4～14.9cm、器高3.9cmである。なお、後者の251・252には天井に「X」のヘラ記号が描かれている。

环身3点(255・256・258)は立ち上がりが内傾して、高く立ち上がるものである。口径11.1～12.0cm、器高4.2～4.5cmである。255～257には环蓋251・252と同じく「X」のヘラ記号が確認できる。

### (3) 埋葬施設の構造(第68・69図、第17表、図版5・35～38)

第17表 上神増E3号墳埋葬施設の規模

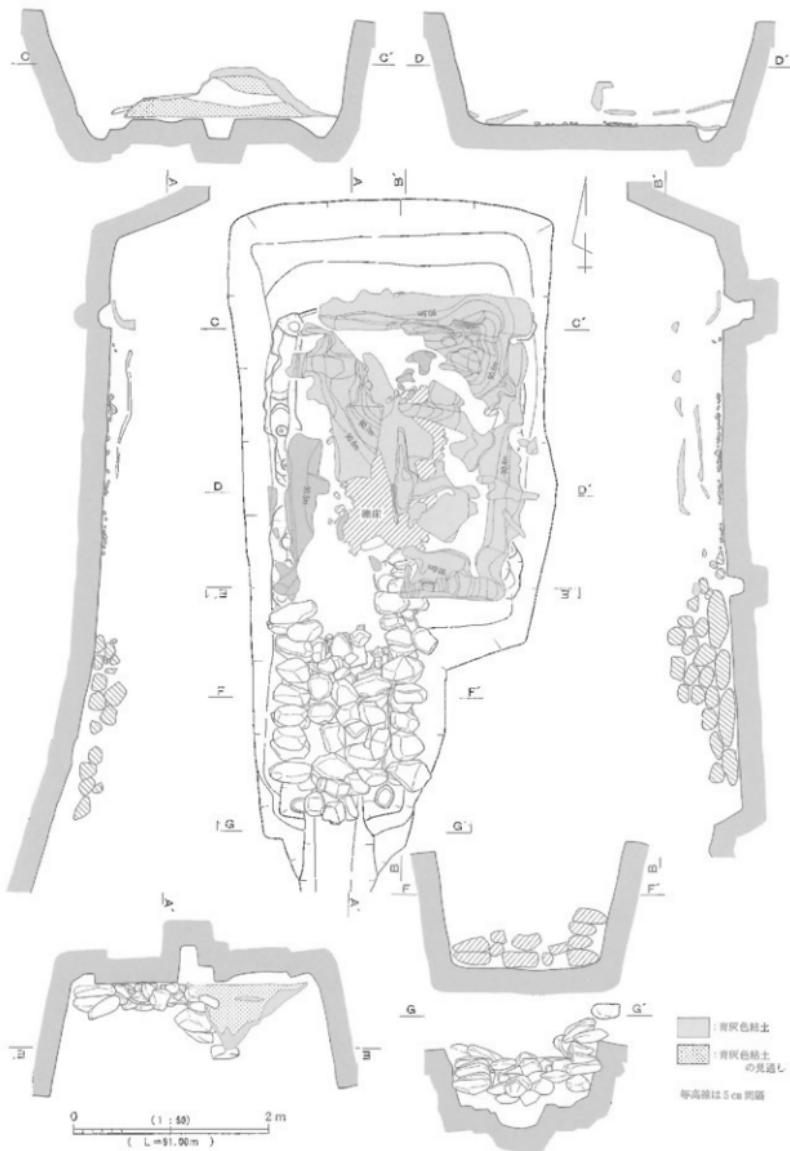
主軸方位	N°0' E
木室全長	4.65m
玄室長	2.7m
玄室奥壁幅	2.0m
狭道長	1.95m
墓壙長	6.6m
玄室幅	2.0m
玄室玄門側幅	1.9m
狭道幅	0.8m
墓壙幅	3.3m

第67図 中・東進江の横穴式木室復原模式図  
(田村2008より引用)

横穴式木室の構造 玄室は左片袖形(口形)に溝を掘り、その溝内に側壁、奥壁の中心構成材となる柱を設置するための主柱穴を掘削する。奥壁側・玄門側の中央に棟持柱の柱穴を設けるための主柱穴は奥壁側中央と左玄門部に、左片袖形(口形)に掘削された溝の各隅4箇所に設置され、棟を支える支柱を据えていた可能性が高い。主柱穴の間には木室の壁を構成する柱を挿入するための小柱穴が確認できる。木室はこれらの柱穴に柱を設置して構築し、それを粘土で覆っている。なお、左袖部分に設置された棟持柱と、玄門右側壁側に設置された主柱は後述する石材で構築された狭道側壁が崩落しないように抑える機能も持っていた可能性が高い。

墓壙内に残存する粘土の形状を確認すると木室主軸に直交する横断面では三角形、主軸(縦断面)では玄門側は直立、奥壁側は倒れかかってはいるもの直立していたような状態を示している。この粘土の状況から木室の形状が横断面三角形(合掌形)であることが判明する。また、粘土は第68図に示したように、一部確認できない部分もあるが、左片袖形に掘削された溝を覆い隠すように出土していることから、木室はほぼこの掘削された溝と同じ大きさであった可能性が高い。

狭道は石材を積み上げて構築しているが、天井石は確認できない。この部分に盗掘が及んでおり、その時に石材が抜き取られたか、築造当初より伴わなかったか、木室であることから木材を利用していたか明確ではない。狭道の側壁は、基底石の左側壁側は長手を内側に、右側壁側は小口を内側に向けるものが多い。2段目以上は基本的に小口積みしている。隣接するE2号墳の基底石の設置方法は小口を内側に向けており、E3号墳の左側壁側が長手を中心に向ける点で若干異なっている。木室でありながら石材を利用した側壁を構築している点は横穴式石室建築者集団が関与している可能性が高く、その点が興味深い。



第68図 上神増E 3号墳横穴式木室検出状況図



第69図 上神増E 3号墳横穴式木室実測図

また、羨門南側に柱穴が2箇所確認でき、羨門には木柱が立てられていた可能性が高い。この羨門に木柱が建てられた可能性からも談道の天井は木材が架構されていた可能性が高い。

**木室の構造方法の復原** 奥壁中央と左袖部分の柱穴に棟持柱を立て、それに棟木を載せる。棟持柱が倒れないように各隅から支えるための柱を差し込み、奥壁、玄門の三角形を形成する。各柱の間にはそれより細い木材を差し込むと同時に青色粘土を貼り付け各壁を構築したと考えることができる。この玄室の構造は、鈴木敏則氏の分類による遠江I型（鈴木敏 1991）であり、中遠江に一般的な形態であることが判明する。

談道は羨門部分に木柱を立て、その柱と玄室の間に川原石を積み上げ側壁を構築し、天井には木板を架けていた可能性が高い。

玄室構築後には墓壙内を埋め戻し、そのうち埴丘を盛土した可能性が高い。

**閉塞** 閉塞は川原石を用いて、狭道部分で行われている。一番下に長さ30~60cmのやや大型の石材を設置し、その上に20cm前後の小型の石材を積み上げている。石材の大きさの違いを考慮すると、一番下の大型石材と2段目以上は時期が異なり、小型の石材を用いた上部の閉塞は追葬に伴うものと考えられる。閉塞石の範囲は木室の主軸方向で約1.9m、高さ0.6mである。

**床面** 床面には敷石が墓床面直上に直接設置される。敷石は玄室内全体に設置されるわけではなく、玄室中央部のみに敷設しているが、その範囲でも東西で敷石の敷設方法が異なっている。東側は、10cm以上の石材も部分的に確認できるが、大部分が10cm以下の小砾を密に敷設している。西側は東側とは逆に10cm以上の石材をやや空間をあけて設置している。東側の砾床の範囲は南北1.6m、東西0.4~0.5mで、西側の砾床の範囲は南北1.6m、東西0.6~0.65mである。敷石全体では平面は逆台形で、北側東西1.25m、南側東西1.0m、南北1.6mである。

両砾床とも北側が広く、南側が狭いことから、北側に頭を、南側に足を置いた北頭位であったと想定できる。

横穴式木室が火化されたような状況は一切確認できない。

なお、後述するが砾床上から出土した遺物が非常に少ない点が注目できる。

#### (4) 遺物の出土状況（第70図、図版36~38）

遺物は玄室の左袖部分に須恵器壺が、奥壁に併行するように鉄刀が切先を西側に向けて、その鉄刀の茎に重なるように刀子（409）が切先と同じく西側に向けて置かれている。敷石の北西に鉄鎌などが散乱した状態で出土した。ただし、鉄鎌のうち410と412、413と415は重なった状態で出土していることから、有意な関係にある可能性が高い。また、鉄鎌は鎌身数と茎関数は10点と同じ数量であるが、417~423は完形ではない上、420は鉄鎌が主に副葬された箇所から1m以上はなれた位置から出土しており、副葬に当たって鉄鎌の破碎行為が行われた可能性がある。

なお、大刀や鉄鎌などの刃物は遺体が埋葬された敷石を取り囲むように置かれており、さらに左側壁側に沿って納置された鉄鎌（414~416）、奥壁に沿って置かれた刀子（409）と大刀（427）、右側壁に沿って置かれた鉢（424）の切先は、反時計回りになるように配置され、これに意味があるとすれば辟邪の意味が込められたのであろうか。

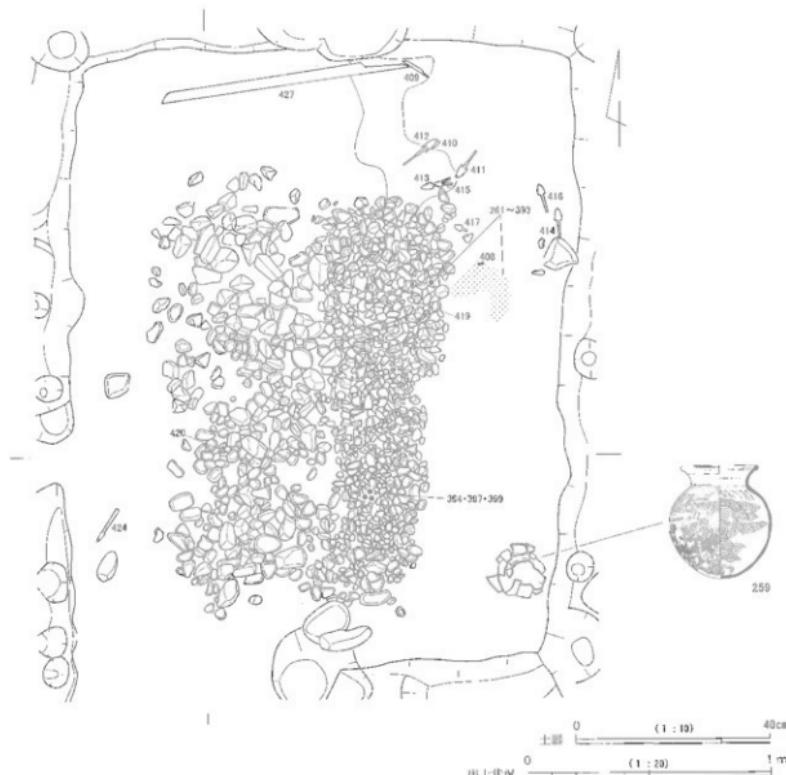
鉄鎌の南側敷石と側壁の間で玉類（261~393）と錫製品（408）が出土した。出土位置からみると錫製品は耳環の可能性が高い。

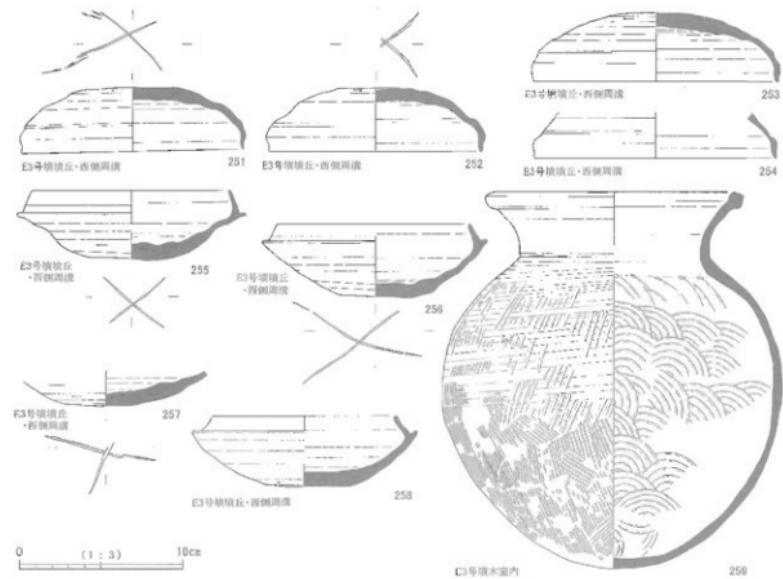
敷石上からは東側（左側壁側）の密に敷石が敷設された部分の中央やや南側からガラス玉3点（394・397・399）が、北側で鉄鎌（419）とガラス玉1点（261）が出土した。一方、西側では中央やや南側に鉄鎌（420）が出土した。鉢（424）は、右側壁側玄室中央よりやや南側で切先を南側に向かた状態で出土した。

#### (5) 出土遺物（第71~73図、第37~40表、図版6・73~76）

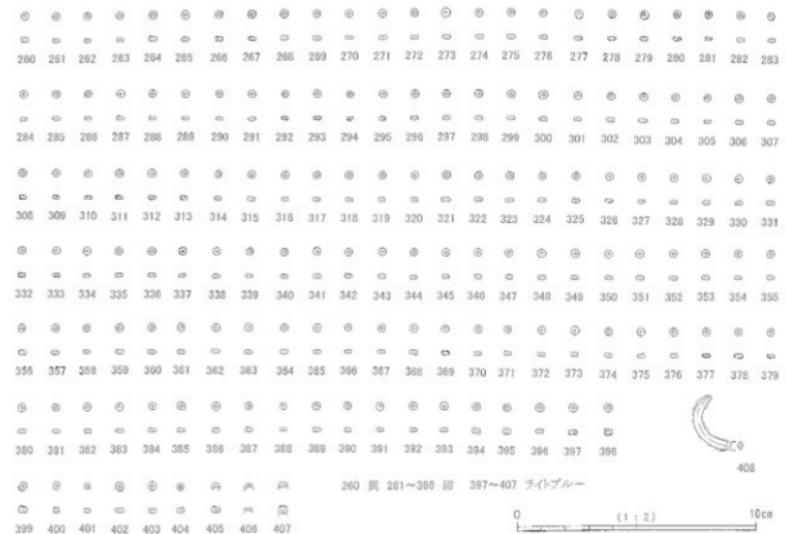
玄室内から出土した遺物には須恵器壺1点（259）、ガラス小玉148点（260~407）、錫製品1点（408、耳環あるいは指輪か）、刀子1点（409）、鉄鎌最低10点（鎌身、茎関で数えて、410~423）、鉄鉢1点（424）、鉄刀1点（427）と大刀の可能性があるもの1点（425）、刀装具1点（426）である。

**土器** 須恵器壺（259）が左袖部から破片となって出土した。本来は口縁を上に向けて正置の状態で副葬されていた可能性が高い。口縁部は厚手に仕上げられ、頸部はく字形、体部は球形で、体部下半には格子タタキ、上半には平行タタキが行われた後カキメ調整が施されている。内面には同心円の当て具痕が残る。口径14.6cm、胴部径20.9cm、器高22.9cmである。



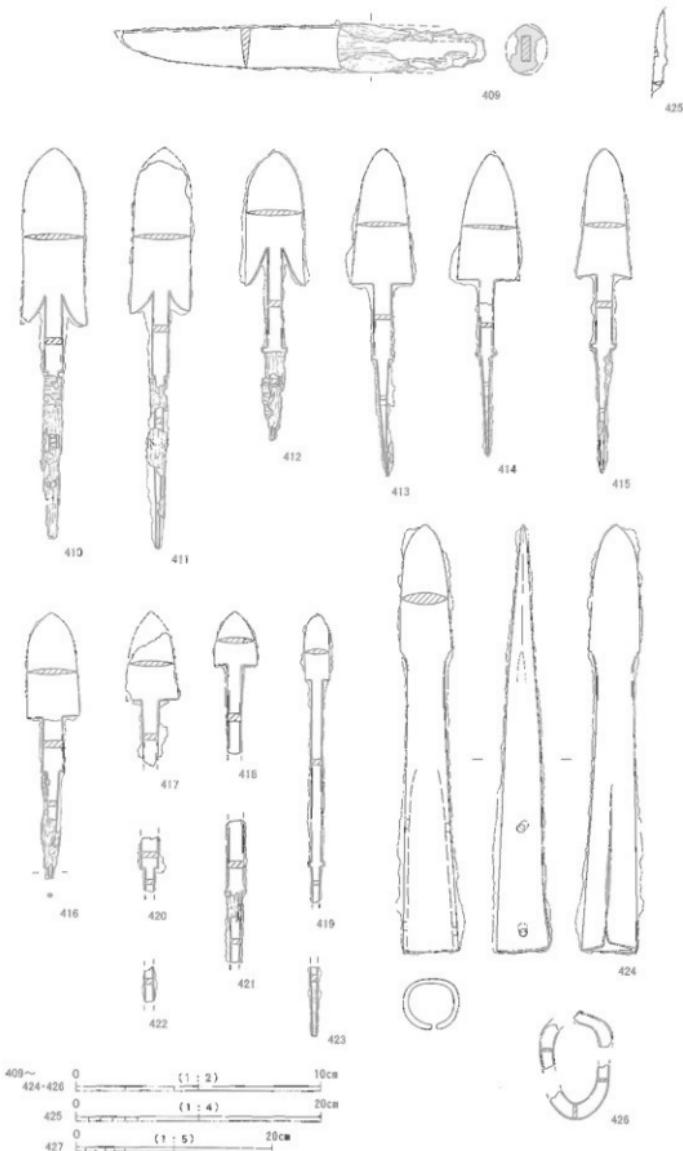


第71図 上神増E 3号墳出土土器実測図



第72図 上神増E 3号墳横穴式木室出土玉類および銅製品実測図

第4章第6節 上神増E古墳群の調査成果



第73図 上神増E 3号墳出土鉄製品実測図

413と414は平面形態が類似するものの、平根長三角形式5点は全体的に形態差がある。平根と尖根の中間形態である三角形式鉄鎌418は長頸鎌である可能性が高く、長頸尖根三角形式鉄鎌である可能性が高い。上記の9点の鎌身はすべて平造である。

長頸尖根柳葉式(419)は、鎌身が平造で、鎌身闊は直角、茎闊は紡闊である。残存長11.7cm、鎌身長約2.6cm、鎌身幅1.0cm、頸部長7.6cmである。

この他、直角茎闊、台形茎闊が各1点、茎破片2点が出土している。

なお、重なった状態で出土した410と412、413と415は前者が腸抉柳葉式、後者が長三角形式であり、同じものを2点纏めて副葬している。

これらの鉄鎌の時期は法量や茎闊の形態から若干の時期差が存在する可能性があるが、まとめて副葬された410・412は大きさ、茎闊が異なるものが重ねられており、それぞれが同時期に副葬されたものである可能性が高い。

鉄刀(427)は、ふくらの張る鉄刀で、撫闊の片闊で、茎は茎尻にむかって細くなる形状を呈し、茎尻は隅抉尻である。茎には2箇所目釘孔が空たれているが、目釘は残存していないため、木製の目釘であった可能性が高い。刀身、茎には木質が残存しており、剥き身ではなく鞘・柄に収められた状態で副葬されている。

刀子(409)は鹿角柄刀子である。直角両闊で、茎は茎尻に向かって細くなり、茎尻は一字文字尻である。目釘孔はない。

426は大刀の刀装具で、切羽あるいは貴金属の可能性が高い。平面形は外形、内形ともに倒卵形で、断面は薄い板状である。

425は鉄刀の可能性が高い刃部片である。切先に近い破片で、ふくらの張る切先であった可能性が高い。

鉄鉸 鉄鉸(424)は鉢身が短小な形態である。使用途中で折れて研ぎなおした可能性もある。

鉢身は杏仁(レンズ)形で、鏽は確認できない。闊は撫闊で、中実の円形部分があり袋部へと続く。袋部には木柄に固定するための目釘孔が2箇所で確認できる。袋部は円形で、袋端部は直裁である。全長17.5cm、鉢身長5.1cm、幅2.1cm、袋部長10.4cm、袋短部直径2.3cmである。

## (6) 小結

築造時期と追葬について 築造時期は、墳丘から出土した須恵器壺身・壺蓋は遼江Ⅲ期中葉に位置づけることができる。鉄鎌は腸抉柳葉式、長三角形式、柳葉式の組み合わせ関係からみると、遼江Ⅲ期中葉～後葉に位置づけることができる。敷石の敷き分けからみると2人が埋葬された可能性が高い。

各時期の副葬遺物について 囲塞石の状況と敷石の敷き分け状況から、追葬が行われたことはほぼ確実である。鉄鎌には形態差が確認できることから時期差ととらえることも可能であるが、上述したように形態が異なり別々に出土すれば時期差と考えるようなものが、重ねられた状態で出土していることから時期を特定することは困難である。残念ながら副葬品を時期ごとに区分するのは難しい。

ただし、出土遺物に時期差がほとんどないこと、木室構造であることから、それほど時期を隔てず埋葬された可能性を想定しておきたい。

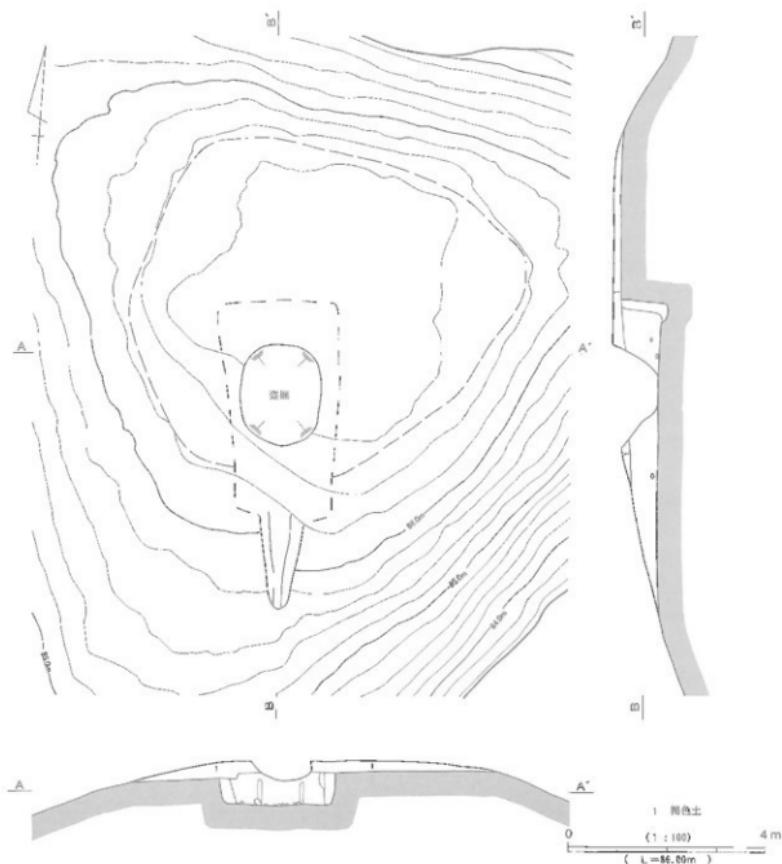
## 5. 上神増E 4号墳

### (1) 古墳の現況

古墳はE 3号墳の所在する尾根から東側に50 m、E 3号墳の所在する尾根より5 mほど標高の低い尾根上に位置する。現状ではE 4号墳の周囲には古墳を築造できるほどの空間はなく、単独で立地する可能性が高い。

古墳が築造された箇所は細尾根が広がる部分であり、高まりが確認できたことから古墳であることは明瞭であった。古墳は標高86～87 m付近に築造されている。

なお、墳丘中央部に盗掘坑が掘削されていた。



第74図 上神増E 4号墳墳丘測量図

(2) 墳丘の構造（第74図、第5表、図版39）

古墳は、尾根を最大限利用して構築されているが、盛土は確認できない。また、周溝や削り出しあれども確認できることから、墳丘の形状は明確ではない。

尾根の形状および墓道の標高から推測すると、古墳は東西に長い不整形な円墳で東西9m前後、南北9m前後であった可能性が高い。

(3) 埋葬施設の構造（第75図、第18表、図版39・40）

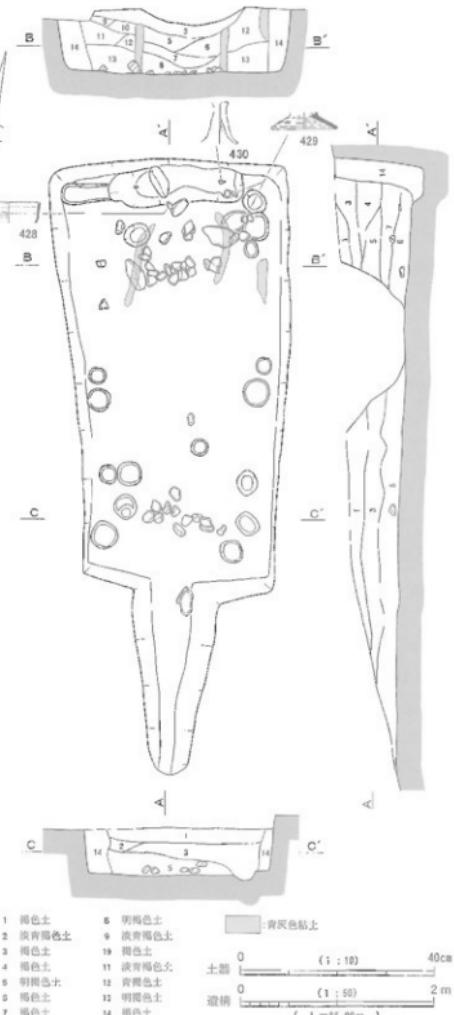
埋葬施設は石積を用いない構造である。調査段階ではE3号墳に隣接することから横穴式木室の可能性を考慮して調査したが、E3号墳のように横穴式木室を構成する粘土や柱穴は確認できず、E3号墳の横穴式木室の構造とは異なることが判明した。さらに、一部床面に対して垂直に粘土が確認できることから、E3号墳とは異なる木室形式か、あるいは横穴式土壙などの可能性が想定できる。

埋葬施設はほぼ南に向かって開口しており、この点では横穴式木室であるE3号墳と同じく真南を意識して築造されたことは明らかである。

**墓壙・墓道** 墓壙は地山を掘り込んでいる。奥壁側がやや幅の広い長台形で、南側に墓道が接続する。墓道と墓壙には段差は確認できず、ほぼ水平である。

**埋葬施設** 奥壁側では埋葬施設の主軸に並行して左右で青灰色粘土が直立した状態で確認した。この青灰色粘土の範囲は敷石と想定できる石敷き部分よりも一回り大きいことから、木棺を固定するための粘土である可能性が高い。

墓壙の両側壁側に沿って柱穴と考えられる小穴が確認できるため、木室である可能性がある。しかし、E3号墳は墓壙に沿って溝状に掘り込んで、その中に柱穴を掘削するものであるのに対し、E4号墳は



第75図 上神塚E4号墳埋葬施設実測図および遺物出土状況図

## 第18表 上神増E4号墳埋葬施設の規模

主軸方位	N.6°00'W
玄室長	3.9m前後
墓壇長	4.4m

木棺？幅  
0.8m以上  
墓壇幅  
2.4m以下

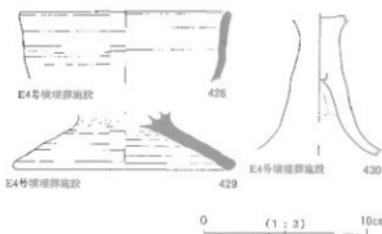
縦に細長い層位（第75図の14層）が確認でき、これは柱穴と思われる小穴の外側に形成されているものであることから、木室の裏込めである可能性もある。この点から木室が造られた場合にも横断面は△角形（合掌形）ではなく、方形（箱形）であった可能性が高い。

E4号墳は横穴式木室で、その内側に棺を入れ、その両側を粘土で固定したものであろうか。

## (4) 遺物の出土状況（第75図、図版40）

奥壁付近から、須恵器2点（428・429）、土師器1点（430）が出土した。いずれも小片で、原位置を保持していないため、埋葬施設は一部攪乱されている可能性がある。

## (5) 出土遺物（第76図、第37表、図版77）



第76図 上神増E4号墳埋葬施設出土土器実測図

## (6) 小結

築造時期と追葬について 出土した遺物は小片であり、器形も不明であることから時期を特定することは難しい。また、時期差を見出すことも困難であり、追葬の有無についても不明である。

埋葬施設について E4号墳については横穴式土壙の可能性も排除できないが、石積を伴わない横穴式木室の可能性が高い。横穴式木室である場合にも、遠江で通常確認される横穴式木室の特徴とは隔たりがあり、長い箱形の木室に木棺を納めてそれを粘土で押さえた可能性が高い。この木棺構造で墓壇際に木材を使用しない構造であれば、天井に木板を用いた横穴式土壙の可能性が高い。

このように墓壇内に石室を築かず木棺を納めたものに、袋井市山田原古墳群中の8号墳がある。この8号墳は横穴式埋葬施設（墓壇）に木棺を据え、羨道を施す横穴式土壙であるとされている（袋井市教育委1994）。

このような形態あるとすれば、遠江で横穴式土壙が多くみられるのは7世紀前半以降であるが、E4号墳で出土した土師器は古墳時代後期末～終末期前半の遺物である可能性があり、須恵器も7世紀前半までに収まる可能性が高い。横穴式木室とすれば、通常の形態とは異なるため最終段階と考えれば遠江Ⅲ期後葉以降Ⅳ期前半に収まる可能性が高い。

非常に浅い小穴だけの形態であることから、木室であった場合にもその構造は異なっていた可能性が高い。また、墓壇壁に沿って、奥壁側、左右両側壁側とともに、

縦に細長い層位（第75図の14層）が確認でき、これは柱穴と思われる小穴の外側に形成されているものであることから、木室の裏込めである可能性もある。この点から木室が造られた場合にも横断面は△角形（合掌形）ではなく、方形（箱形）であった可能性が高い。

土器 須恵器高坏？1点（428）は蓋のない形態で、脚部1点（429）は、壺類（長頸壺？）の脚部である可能性が高い。ハ字形に直線的に開く形態で、端部は丸く收められる。

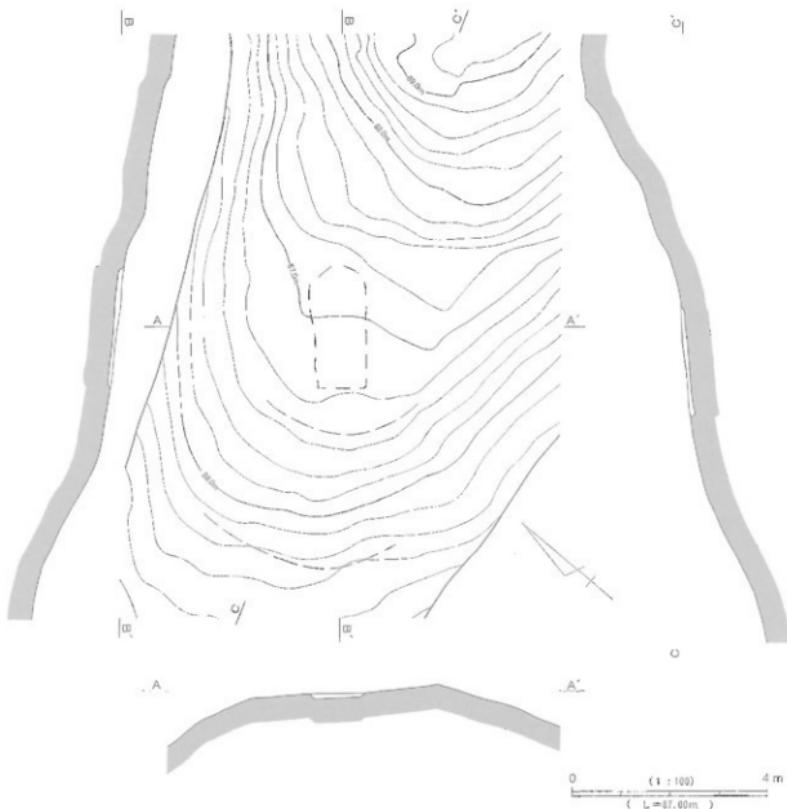
土師器高坏（430）は脚部片であり、接合部は中実で、脚中央部以下はハ字形に広がる。接合方法は坏に中実の粘土をまず接合し、それにさらにハ字形に開く脚部を接合している。

## 6. 上神増E 5号墳

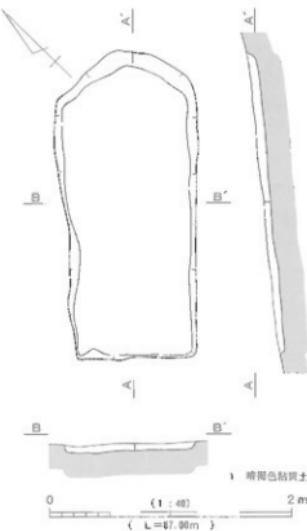
### (1) 古墳の現況

古墳は、E 1～E 3号墳、E 4号墳が所在する尾根から谷を挟んだ北の尾根の緩斜面に位置しており、尾根上にはE 6号墳が所在する。E 5号墳は墳丘の盛り上がりは全く確認できず、E 6号墳の表土除去の段階で確認したものである。

E 5号墳については埋葬施設と想定する土壙の形状が長方形であること、底面が平坦であること、丘陵斜面に位置していることなどから、古墳の埋葬施設と想定したものであり、ここでは古墳の埋葬施設として報告するが、後述するように出土遺物が一切なく、古墳の埋葬施設である確率は100%ではないことをあらかじめ断っておきたい。



第77図 上神増E 5号墳墳丘測量図



第78図 上神増E 5号墳埋葬施設実測図

第19表 上神増E 5号墳埋葬施設の規模			
主軸方位	N-46°15' E		
墓壇長	2.5m以上	墓壇幅	1.15m

期の墓や、古墳ではない別の遺構の可能性も排除できない。

築造時期について 古墳の埋葬施設であるとすれば、E 6号墳と大きく時期差は考え難いことから、遠江Ⅰ期後半～Ⅰ期末葉（5世紀後半～6世紀初頭）である可能性が高い。

#### (2) 墳丘の構造（第77図、第5表、図版41）

墳丘盛土や周溝は全く確認することができず、埋葬施設上部の丘陵部にも周溝は確認できない。

#### (3) 埋葬施設の構造（第78図、第19表、図版41）

主軸を北東方向にとる、木棺直葬である可能性がある。  
墓壇 斜面の中腹に掘削された、やや不整形な長方形であり、底面は斜面下位が低く、斜面上位から下位に向かって緩やかに傾斜している。

墓壇底面には木棺を設置するための土坑や棺台などの石材は一切確認できない。

墓壇の形状からみると、木棺は削竹形木棺ではなく、組合式箱形木棺である可能性があるが、断定はできない。

#### (4) 出土遺物

出土遺物は埋葬施設内、あるいは近辺からも一切出土していない。

#### (5) 小結

E 5号墳はE 6号墳に近接しており、古墳の埋葬施設の可能性があるが、墳丘盛土や周溝が確認できないだけでなく、遺物も一切出土しておらず、その他の時期の墓や、古墳ではない別の遺構の可能性も排除できない。

## 7. 上神増E 6号墳

### (1) 調査前の状況

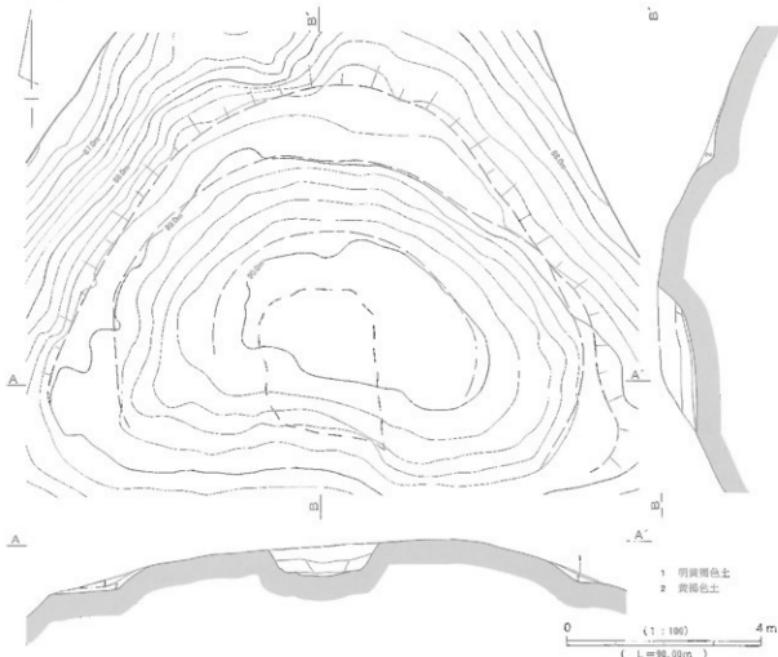
丘陵のやや高まった地点に位置しており、古墳の存在を想定することが可能であった。古墳は現状で標高 90 m 付近を墳頂としている。古墳の存在する場所は谷奥の丘陵上にあるため、平地からの見晴らしはあまり良好とはいえない。

### (2) 墳丘の構造 (第 79 図, 第 5・37 表, 図版 41)

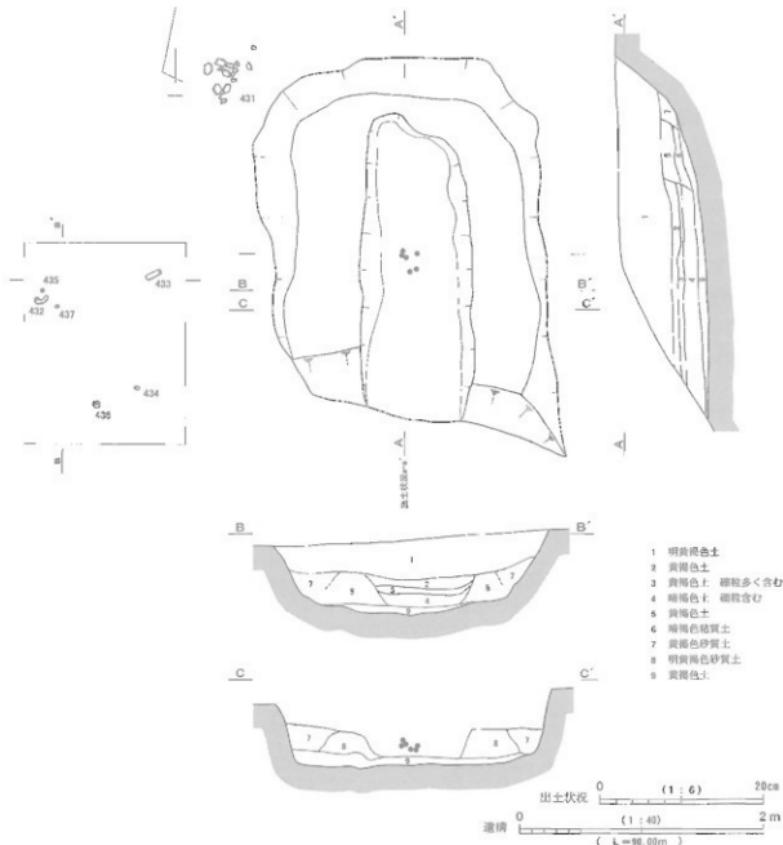
墳丘・周溝 墳丘盛土は確認できない。周溝は確認できず、地山を削り出して周囲と区画する。したがって、墳形は尾根を利用することからその形状に左右され、完全な円形とはならず、隅丸三角形あるいは椭円形に近い不整形な円墳である。墳丘規模は、東西約 11.2 m、南北 8.5 m 以上であり、見かけ上の高さは現状で 0.9 m である。

墳丘出土遺物 (第 80・82 図, 第 37 表, 図版 77) 墳丘上から縄文土器深鉢 1 点 (431) が破片となって出土した。完全には復原できないことから、古墳構築の際に破壊された可能性が高い。

431 は、条痕紋系の深鉢である。底部は欠損しており、その形状は不明である。胴部は砲弾形に近い形状で、底部から内湾しながら立ち上がり、口唇部は内傾する面をもつ。外面の調整は、風化のため確認できないが、内面には条痕が残る。口径はおおよそ 25cm に復原できる。これらの特徴から縄文時代早期に位置づけられる可能性が高い。



第79図 上神増E 6号墳墳丘測量図



第80図 上神増E 6号墳埋葬施設実測図および遺物出土状況図

## (3) 埋葬施設の構造（第80図、第20表、図版41・42）

墳丘の中央に地山を掘削して地下式に構築された木棺直葬である。主軸をほぼ真北に取っており、北を意識した埋葬であった可能性が高い。

**墓壙** 墓壙は隅丸長方形に掘削した後、床面を埋め戻し、木棺を設置した後で墓壙と木棺の間に裏込めする構造で、上神増A 5号墳第1埋葬施設やE 1号墳のような二段墓壙ではない。

**木棺** 木棺部分の土層図から判断すると、B-B'断面ではU字形に埋まっている状況が確認できるため、木棺の形状は割竹形木棺であった可能性が高い。

## (4) 遺物の出土状況と頭位（第80図、図版42）

遺物は木棺内の床面からやや浮いた状態で、勾玉1点、

## 第20表 上神増E 6号墳埋葬施設の規模

主軸方位	N°0'0"E
墓壙上段長	3.3m以上
墓壙下段長	2.5m
墓壙上段幅	2.3m
墓壙下段幅	0.94m

管玉1点、丸玉・小玉5点(432～437)が出土した。この位置が頭部周辺であった可能性が高く、また棺床はやや南側に向かって傾斜していることを考慮すると、北頭位であった可能性が高い。

#### (5) 出土遺物(第81図、第38表、図版77)

埋葬施設の木棺内に該当する箇所で、勾玉1点、管玉1点、丸玉・小玉5点が出土した。

**玉類** 勾玉(432)は、滑石製の薄い小型の勾玉であり、灰白色を呈する。全長約1.7cm、幅0.9cmである。穿孔は片面穿孔である。

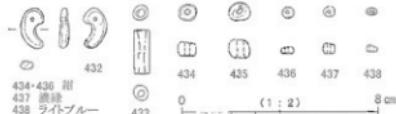
管玉(433)はいわゆる碧玉製(蛇紋岩あるいはグリーンタフ製、緑色片岩)で、緑灰色を呈する。穿孔は両面穿孔である。全長約1.9cm、直径0.7cmである。

丸玉1点(435)はガラス製で、紺色を呈する。直径8.6mm、全長7.3mmである。

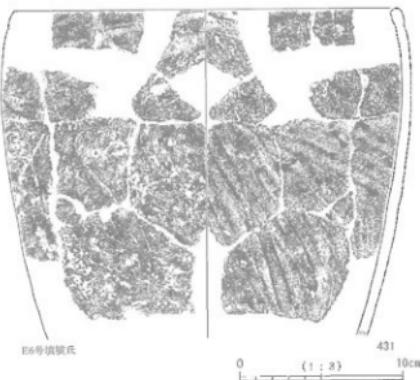
小玉4点(434・436～438)はガラス製で、434・436は紺色、437は濃緑色、438はライトブルーである。直径4.4～7.4mm、高さ3.0～5.8mmである。

#### (6) 小結

築造時期について E 6号墳からは帰属時期を特定できる遺物が出土していないため、築造時期を想定することは難しいが、滑石製の勾玉が出土していることを考慮すれば古墳時代中期に築造された可能性が高く、周囲に築造された中期古墳の様相からは中期後半以降の築造である可能性が高い。おおよそ遠江I期後半～末葉(5世紀後半～6世紀初頭)に位置づけられよう。



第81図 上神増E 6号墳埋葬施設出土玉類実測図

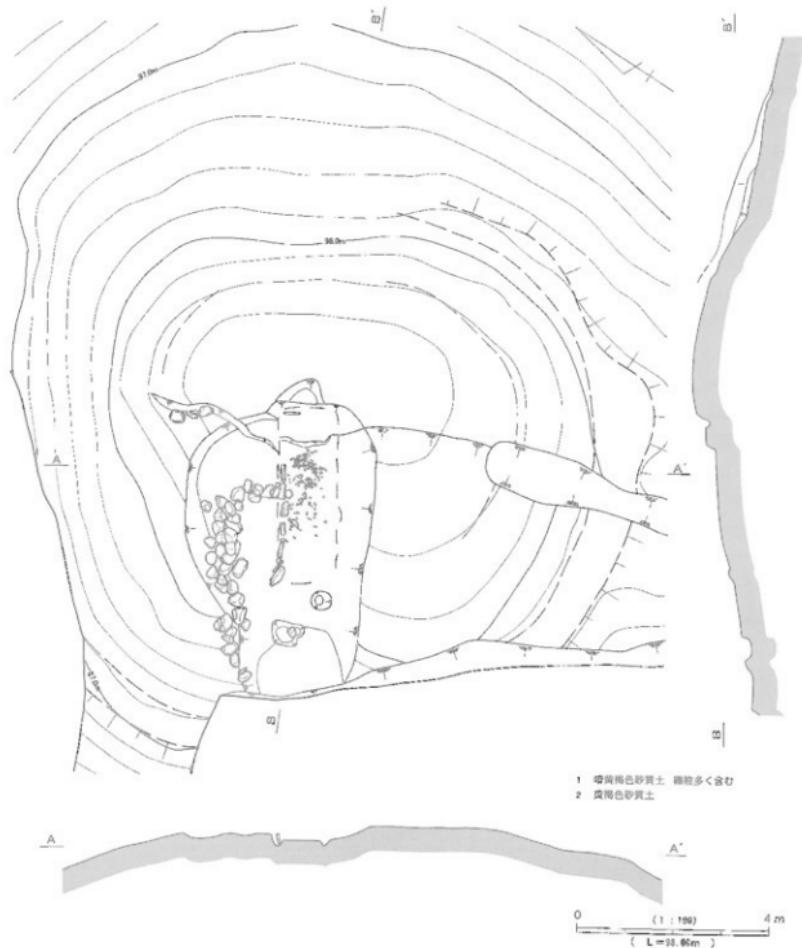


第82図 上神増E 6号墳出土土器実測図

## 8. 上神増E 7号墳

## (1) 古墳の現況

古墳は丘陵尾根上に位置しており、古墳の存在は想定できた。当初は、E 9・E 10号墳が築造された尾根を含めて前方後円墳の可能性を考慮して調査を行ったが、調査の結果、E 9・E 10号墳とは別に築造された古墳であることが判明した。



第83図 上神増E 7号墳墳丘測量図

古墳は、今回調査した古墳の中で最も高い位置に築造された古墳の一つであり、標高 98.6 m付近を墳頂とする。

## (2) 墳丘の構造（第 83・84 図、第 5・37 表、図版 43・45・77～79）

当初は、後述する E 9・10 号墳を含めた前方後円墳の可能性を想定して調査に当たったが、前方後円墳と積極的に評価するような状況ではなかった。南側斜面にも削り出しが行われており、E 10 号墳とは異なる古墳である可能性が高い。

**墳丘** 墳丘盛土は確認できない。古墳の西側斜面は地滑りにより大きく崩落している。

**周溝** 周溝は U 字形に掘削しておらず、周囲との区画は地山を削り出すのみである。この削り出しあは現状で南側、西側にのみ確認でき、北～東側にかけては確認できない。

削り出しの範囲から想定される古墳の形状は円墳で、墳丘規模は東西約 12.0 m、南北約 12.5 m程度と想定できる。

**墳丘出土遺物(第 84 図、第 37 表、図版 77～79)** 墳丘から、須恵器坏蓋 3 点(441～443)、坏身 3 点(444～446)、短頸壺 1 点(449)、提瓶 2 点(450・451)、E 8 号墳との間で須恵器坏蓋 2 点(439・440)が出土した。墳丘から出土した須恵器は、出土した地点が丘陵の最高所であることから、別地点からの流れ込みや持ち込みは考え難いことから、当古墳に伴うものである蓋然性が高い。

墳丘上から出土した坏蓋 2 点(441・442)は、低平な天井で、口縁部との境には明瞭な稜線が巡らされる。口縁端部は内傾する段を有する。口径 13.4 ～ 14.1 cm 前後、器高 4.4 cm である。443 は、低平な天井部であったと想定できるが、441・442 と比較すると、稜線が明瞭ではない。口縁端部は内傾する面をもつ。口径 13.0 cm である。坏身(444・445)は低平な底部で、口縁部は内傾して高く立ち上がり、口縁端部には内傾する段を有する。口径 13.2 cm、器高 5.0 ～ 5.1 cm である。口縁端部の形状から、441 と 444 が組合関係にある可能性が高く、442 と 445 は坏蓋の口径が小さいことから組合関係にはないが同一生産地で生産された可能性が高い。坏身(446)は内傾して高く立ち上がる口縁部で、口縁端部は丸く仕上げられる。口径 12.7 cm、器高 4.3 cm である。

短頸壺(449)はやや大型のもので、口縁部はやや内傾して立ち上がり、肩が張る形状を呈する。口径 10.2 cm、肩部径 16.2 cm である。

提瓶(450)は、木筒形の提瓶で把手はない。胴部には回転カキメ調整が行われ、頸部との接合箇所にも回転カキメ調整が行われている。製作方法は、鉄鉢形に造った後、その口縁部に蓋を付け、一旦饅頭形の胴部を作った後、頸部接合箇所に円孔をあけて頸部を接合するものである。把手は確認できないが欠損している胴部半分に取り付けられていた可能性がある。提瓶(451)は大型の提瓶で、扁平な球胴を呈する。肩には鉤状の把手が接合されている。

E 8 号墳との間で出土した坏蓋(439・440)は、低平な天井で、口縁部との境界に明瞭な稜線を巡らせるものであり、441 と特徴が類似することから、E 7 号墳に伴うものである可能性が高い。

これらの須恵器のうち墳丘から出土した坏身、坏蓋はおおよそ遠江Ⅲ期前葉に位置づけることができ、後述する埋葬施設内から出土した須恵器壺の時期と齟齬がない。短頸壺・提瓶については、時期を特定することは難しいが、遠江Ⅲ期前葉～Ⅲ期後葉の時期に収まる可能性が高い。

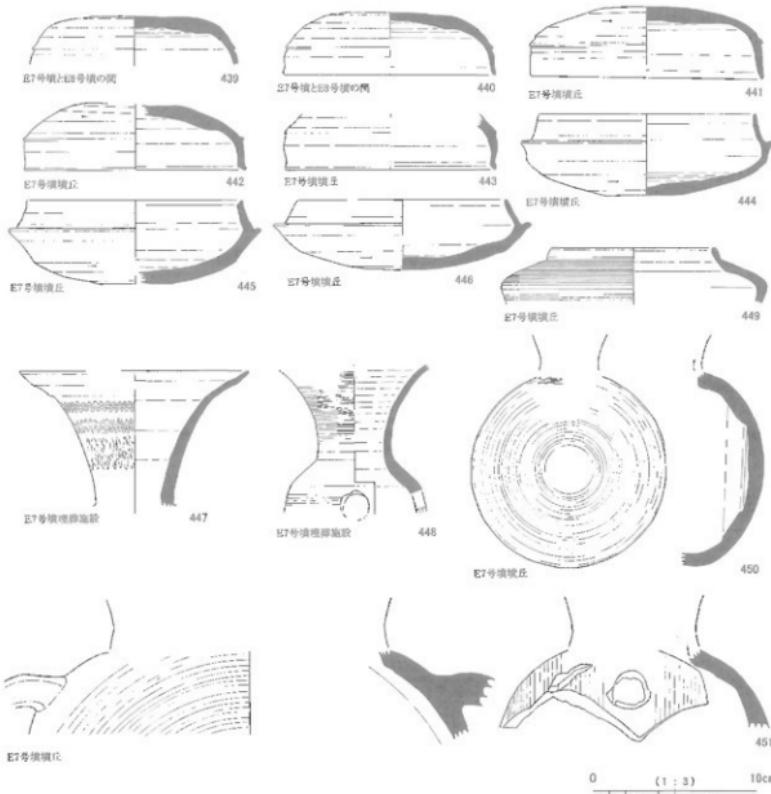
E 8 号墳との間で出土した須恵器坏蓋(440)は口縁端部に内傾する段が見られないことから、墳丘から出土したものよりは若干時期が下る可能性があるが、墳丘出土の須恵器坏身・坏蓋とはほぼ同時期と判断してよいだろう。

## (3) 埋葬施設の構造(第85・86図、第21表、図版44)

埋葬施設は尾根の最高所に位置する。地山を掘削して墓壇を築き、板状の石材を樹立して築いたものである。主軸は東西に向いている。

調査時には既に土砂崩落のため西側小口部分が破壊され、本来小口として存在したのか、特別な施設がなく開放であったか判断できなかった。

このため、周辺の古墳の状況をみると、磐田市(旧豊岡村)五反田1号墳(豊岡村教委2000)や寺山14号墳第1主体部(静岡埋文研2004)のように箱形石棺あるいはいわゆる「小竪穴式石室」である可能性と、ここで報告した上神増A5号墳や隣接する新林1号墳(豊岡村1993)のように基底石に板状の石材を樹立する横穴式石室の可能性が想定できる。ただし、横穴式石室である場合には、埋葬施設の内幅が0.8m前後と狭小であり、有袖形横穴式石室を想定することは困難である。つまり、小口が存在する場合は箱形石棺あるいは小竪穴式石室、箱形石櫛、小口がなく開放されている場合は箱形石棺・櫛に



第84図 上神増E7号墳出土土器実測図

横口が付加された埋葬施設（以下、「横口構造の石槨」と仮称する）である可能性が高い。

なお、地震などによる崩落の亀裂（地滑りの痕跡）が埋葬施設内に確認でき、15cm程度西側が崩落している。

また、埋葬施設北側に鉤形に設置された川原石組の遺構（SX07）は、埋葬施設の石材が内側にやや傾いた後で載せられていることから、古墳築造当初の遺構ではないことは明らかである。この遺構については本項（7）および第5章第3節にて詳述する。

#### 埋葬施設

**墓壙** 上述したように地滑りによる崩落のため西側小口の構造が不明であるが、箱形あるいはコ字形に掘削された隅丸長方形の墓壙で、墓壙の側壁部分には、埋葬施設の石材を設置するために溝状の掘り込みと、側壁・小口の石材の根入れに合わせた掘り込みが確認できる。

**側壁・小口壁** 上述したとおり、西側小口壁の存在の有無は確認できない。小口がある場合には箱形石棺（石槨）、ない場合には横穴式石室（無袖形横穴式石室、あるいは片袖式石室）あるいは箱形石棺・槨に横口が付加された埋葬施設（「横口構造の石槨」）である。

側壁および小口壁は全長（長手）40～50cm、幅（小口）20～30cm、厚さ10cmの板状石材を縦位に用いて構築する。側壁の板状石材相互は重ね合されることなく、両隣の石材と長手部分が合されている。側壁は残存する石材と根入れのための小土坑により北側壁が10石以上、南側が8石以上で構成されていた可能性が高い。また、東側小口壁の基底石は3枚であった可能性が高い。

なお、埋葬施設はSX07により破壊されているが、SX07が周囲にあった石材を利用して築造したとすれば、埋葬施設に利用された石材と判断でき、残存する板石上に川原石が積載されていた可能性が想定できる。このように考えれば、E7号墳の埋葬施設は大手内A6号墳（豊岡村教委2000）のような基底石に板石を縦位に用い、その上に川原石を小口積するような片袖式石室の可能性を考慮しておく必要がある（なお、E7号墳の想定される埋葬施設の形状については第8章第3節で検討する）。

**敷石** 敷石は主に2～5cm程度の小円礫を部分的に敷設しているが、東側小口部分と、西側には全く確認できない。埋葬施設内部の攪乱が著しいことから、当初からこの部分に敷設されなかつた可能性と本来は全体に敷設されていた可能性が想定できる。

現状で敷石が確認できる範囲は、東側小口から1～3mまでの2mである。このうち密に敷設された部分は、東側小口から1～1.5mの範囲であり、それより西側は敷設されていない部分が多い。

敷石面（床面）は地面の崩落による一部段差があるが、東西方向の床面は東側が高く、西側に向かって緩やかに傾斜している。したがって、堅穴系埋葬施設であるとすれば東頭位である可能性が高い。また、敷石面の南北断面は水平であることから、木棺が使用されたとすれば、割竹形木棺ではなく、箱形木棺であった可能性が高い。

#### （4）遺物出土状況（第86図）

東側小口から約0.8～1.0m西の敷石上から丸玉・小玉5点（466・455・462・464・465）が散在して出土し、その西約1.8m、埋葬施設のほぼ中央で鉄鎌1点（467）が出土した。また、玉類が出土した地点に近い、側壁が抜き取られた箇所で玉類1点（453）が出土した。須恵器壺2点（447・448）は埋葬施設の覆土内で確認した。

これ以外の管玉1点（452）、丸玉8点（454、456～461、463）、刀子1点（468）は埋葬施設土砂を

第21表 上神塙E7号墳埋葬施設の規模

主軸方位	N-63°00' E
埋葬施設全長	3.5m以上
埋葬施設長	3.5m以上
埋葬施設小口幅	0.9m前後
墓壙長	3.5m以上
埋葬施設最大幅	0.9m前後
埋葬施設小口幅	0.8m前後
墓壙幅	1.3m



第85図 上神増E 7号墳埋葬施設実測図

箇掛けして確認した。

(5) 出土遺物 (第84・87図、第37~39表、図版78~79)

土器 2点、玉類、鉄器が出土した。

土器 埋葬施設の覆土中から出土した。須恵器甕 2点である。447はラッパ状に開いた後、口縁部がさらに外反するが、頸部と口縁部の境の稜は明瞭ではない。頸部には3条の波状文が施されている。448はラッパ状に開く頸部~胴部の破片で、頸部にはカキメが施される。胴部には円孔1孔が穿たれている。胴部には特に文様ではなく、穿孔部分にカキメが施されている。447は口径 14.0cm、448は頸部径 4.5cmである。

玉類 管玉 1点、丸玉・小玉 14点が出土した。すべてガラス製である。

管玉 (452) は、紺色である。直径 7mm、高さ 12mm である。後述する丸玉と色調、直径が同一であることを考慮すると、452は引き延ばし技法で製作されたガラス棒から丸玉を切り出した後の最後の塊（ガラス生地の残りの塊）である可能性もあり、本来はガラス丸玉を生産する目的であったものが、最終的に必要量が満たされたため丸玉にされず、小型の管玉として意味が与えられた可能性がある。

ガラス丸玉 12点 (453~464) は紺色である。直径 8~9mm、全長（高さ）5.2~7.8mm、である。

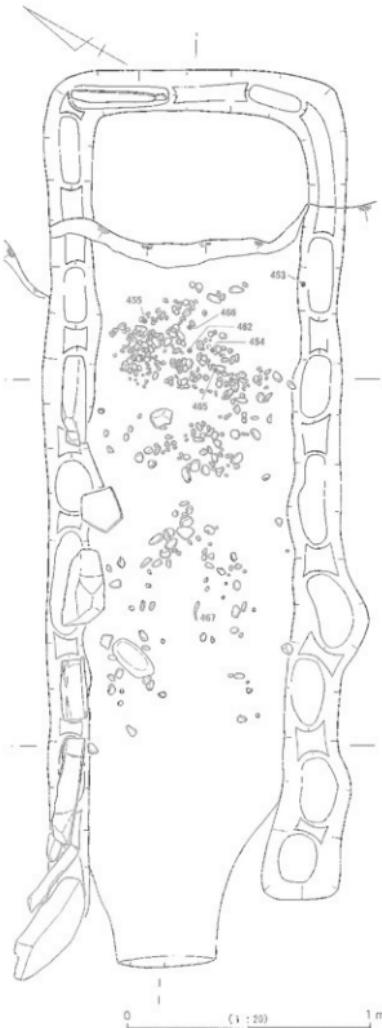
ガラス小玉 2点 (465・466) は風化が進んでおり、本来の色調は不明である。466がやや大きく直径 6.7mm、全長（高さ）5mm、465は直径 5.8mm、全長（高さ）3mm である。

鉄器 鉄鎌 1点、刀子 1点が出土した。

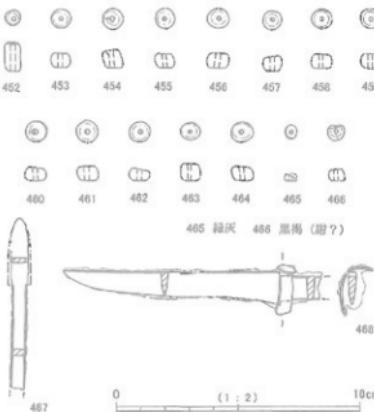
鉄鎌 (467) は鎌身の側面が欠損しているが、長頭尖根柳葉式である可能性が高い。鎌身は両丸造で、鎌身闊は直角闊である可能性が高い。

刀子は鉄製柄縁装具を装着する木柄刀子である。刃部は内湾していることから研ぎ減りの可能性がある。圓は直角両闊で茎は茎尻に向かい直線的に延びる。

柄縁金具は闊部分に嵌められており、木柄は闊で止まっていた可能性が高い。柄縁金具の断面は倒卵形であったと想定できる。



第86図 上神増E 7号墳埋葬施設床面実測図  
および遺物出土状況図

第87図 上神塚E7号墳埋葬施設出土玉類  
および鉄製品実測図

区7号墳出土例（遠江Ⅲ期前葉）と類似する。この例よりは若干胴が膨らむ傾向にあることから新しい要素が確認できるが、築造時の土器と大きく時期差は確認できず、須恵器は一括性の高い遺物とすることで、横穴系埋葬施設であった場合にも追葬はなかった可能性が高い。

#### (7) その他の遺構（第85図）

なお、埋葬施設北側の川原石による遺構（SX07）は、この覆土から山茶塙（第5章第3節、第139図）が出土しており、中世に構築された石積遺構である可能性が高い。石材がL字形に残存することから方形の石積遺構である可能性が高いが、この想定が正しければ中世の集石墓の可能性がある（詳細については、第5章第3節参照）。

#### (6) 小結

築造時期について 墳丘から出土した須恵器  
环蓋・环身は、口縁部に内傾する段をもつこと、  
天井と口縁部を分かつ稜線が明瞭で突出度が  
高いことから、遠江Ⅱ期～Ⅲ期前葉に位置づけ  
られる。これは埋葬施設から出土した甌（448）  
についても同時期に位置づけられる。甌（447）  
については、形態的に後出的な要素を有する  
が、448と同時期と考えている。

したがって、E7号墳の築造時期は遠江Ⅱ期  
～Ⅲ期前葉、6世紀前半～中頃と考えたい。

追葬について 提瓶（450・451）は口縁部や  
胴部片であり全体的な形状が明確ではないこ  
とから確定的ではないが、（450・451）ともに  
扁平な球胴であり、鈴木敏則氏の遠江編年案  
(鈴木敏 2001) を参考にすると、浜松市下淹3

## 9. 上神増E 8号墳

### (1) 古墳の現況

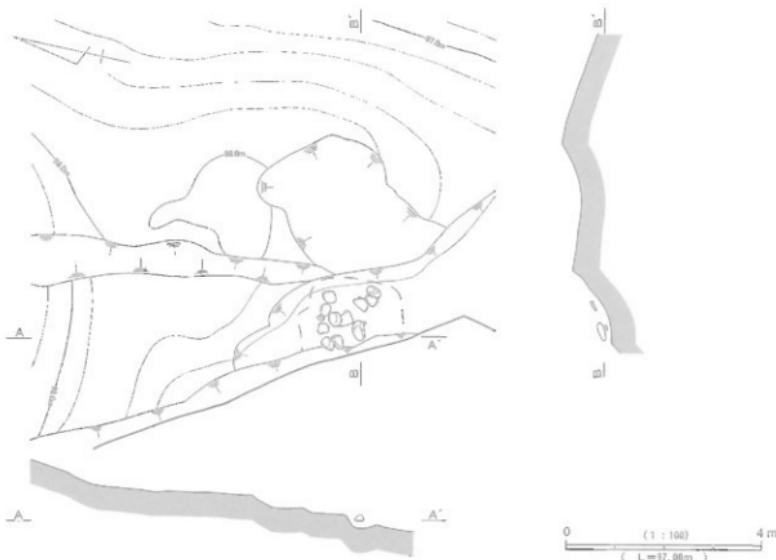
上述したように当初はE 7・E 9号墳が所在する場所は、前方後円墳である可能性を考慮して調査したため、E 8号墳の位置は前方部と後円部の取り付き部分に当たると考えていたが、尾根上にはE 7号墳と、E 9・10号墳がそれぞれ別々に造られたことが判明したことから、その中間地点に当たるこの部分を周溝として調査した。調査を進めると、この両者の間に新たに遺物が出土する箇所が確認できたため、精査を行ったところ古墳の埋葬施設である可能性がでたことで新たに確認した古墳である。

なお、ここではE 8号墳として記述するが、ここで報告する遺構は破壊が著しく、埋葬施設内覆土とその上部から出土した須恵器片が接合したことで埋葬施設ではなく、E 7号墳やE 10号墳の埋葬施設を破壊した際の埋葬施設内にあった土砂をこの部分に埋めたと想定すべきかもしれない。その理由としては、出土した須恵器の時期がE 7・E 10号墳と同時期であること、埋葬施設と想定される箇所から出土した遺物が破片や部品の一部であることからである。ただし、この破壊は近年のものではなく、中世墓（12～13世紀頃）や炭窯などが築造された時期と考える。

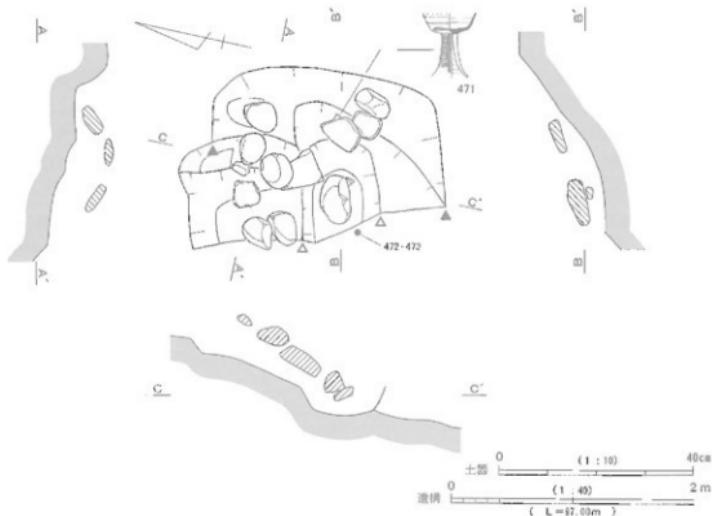
また、遺構が古墳の埋葬施設とした場合には、周溝を伴うような古墳ではなく、埋葬施設を覆う程度の墳丘であった可能性が高い。

### (2) 墳丘の構造（第88・90図、第5・37表、図版45・79・80）

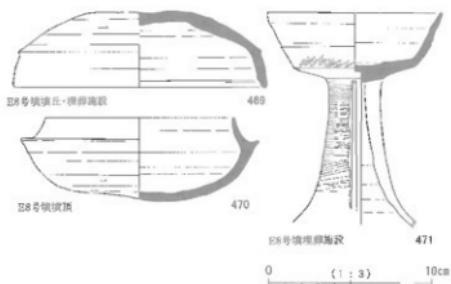
埋葬施設の周囲にはまったく周溝などが確認できないため、墳丘の有無は確認できない。E 8号墳は尾根をE 7号墳とE 9・10号墳とに区画するために掘削された鞍部にあたり、もともと周囲よりも低く、



第88図 上神増E 8号墳周辺測量図



第89図 上神塚E 8号墳埋葬施設実測図および遺物出土状況図



第90図 上神塚E 8号墳出土土器実測図

## 第22表 上神塚E 8号墳埋葬施設の規模

墓壙下段長	N-78°00'E		
墓壙上段長	1.45m以上	墓壙上段幅	1.85m
墓壙下段長	0.9m以上	墓壙下段幅	0.64m

(3) 埋葬施設の構造(第89図、第22表、図版45)

木の根の搅乱などが多く、埋葬施設は旧状を逸している。川原石が伴うことから一部に礫を使用した木棺直葬である可能性が高い。

第22図中▲部分が当初の墓壙掘り込みである可能性があり、この場合は、E 1号墳と同様、二段墓壙で、図中△部分に木棺が納められた可能性が高い。

この想定が正しければ、E 8号墳は削竹形木棺を用いた木棺直葬である可能性が高い。

周溝や切り出しを行うことは困難であるため、当初からそれらを伴わず、埋葬施設を覆う程度の墳丘であった可能性が高い。

墳丘出土遺物(第90図、第37表、図版79・80) E 8号墳の埋葬施設周辺(第90図では墳頂と表記)では、須恵器壺身1点(470)が出土した。

壺身(470)は内傾して高く立ち上がる口縁部で、口縁端部は丸く仕上げられる。口径11.5cm、器高5.0cmである。

埋葬施設は地山を掘削したものであるが、地すべりや

木の根の搅乱などが多く、埋葬施設は旧状を逸している。川原石が伴うことから一部に礫を使用した木棺直葬である可能性が高い。

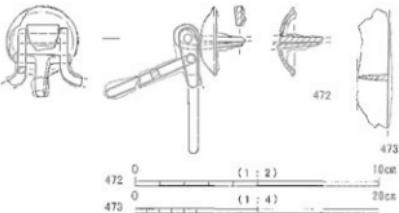
第22図中▲部分が当初の墓壙掘り込みである可能性があり、この場合は、E 1号墳と同様、二段墓壙で、

図中△部分に木棺が納められた可能性が高い。

この想定が正しければ、E 8号墳は削竹形木棺を用いた木棺直葬である可能性が高い。

## (4) 遺物の出土状況（第89図）

埋葬施設の覆土中と埋葬施設周辺から須恵器环身（470）、坏蓋（469）、高坏（471）が、西側の斜面から馬具（鞍金具、472）と鉄刀片（473）が出土した。いずれも原位置を保持するものではない。



## (5) 出土遺物（第90・91図、第37・39表、図版79・80）

第91図 上神増E 8号墳出土金属製品実測図

E 8号墳からは馬具（鞍金具）1点、鉄刀片1点、須恵器高坏1点、坏蓋1点が出土した。

土器 坏蓋1点（469）は低平な天井で、口縁部との境に明瞭な稜線を巡らせ、口縁端部は内傾する段をもつ。口径 15.6cm、器高 4.7cm である。高坏（471）は無蓋短脚高坏であるが、脚部は長い。脚部は垂直に近く垂下後、急激に外反するので、全体にカキメ調整が施される。脚部には二方向に長方形透かしがある。坏部は低平な底部から外上方に向かい直線的に伸びるので口縁端部は丸く仕上げられる。口縁部中央に凹線が一条巡らされる。この凹線の下に波状文が巡らされる。

馬具 鞍金具（472）は、金銅装座金具と鉄製鉗具、鉄製脚金具で構成される。鉗具の平面形状はきのこ形で、T字形の刺金を有する。T字形刺金は、鉗具（外枠）に円孔を穿ち、そこに嵌め込んだもので、外枠外側で叩いて止めている。

座金具は低平な半球形で、鉄地金銅装で、鉄製の地金を薄い金銅板で覆うものである。脚は鉗具の軸棒を巻いて二条にて木製鞍に取り付ける。

鉄器 鉄刀は、刀身片で、刀身の幅は 2.6cm である。刀身に鏽はない。

## (6) 小結

築造時期について 埋葬施設及びその周辺から出土した須恵器の特徴から遠江Ⅲ期前葉に位置づけられる可能性が高い。同じく半球形の座金具をもつ鉗具はTK10型式以降に確認できるものであり、E 8号墳は遠江Ⅲ期前葉（6世紀中頃）に築造された可能性が高い。

ただし、上述したように埋葬施設と想定される箇所の擾乱が著しいことなどから、埋葬施設ではない可能性もあり、取扱いに注意が必要であることを断っておきたい。

## 10. 上神増E 9号墳

### (1) 古墳の現況

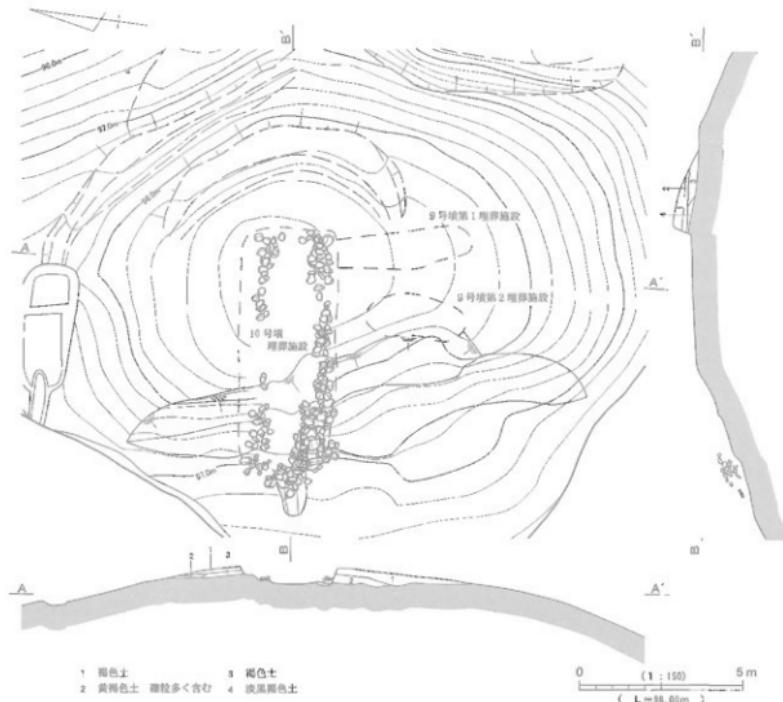
古墳は、丘陵頂部に位置しており、今回調査した古墳の中で最も高い位置に築造された古墳で、最も見晴らしが良い場所であるため踏査段階で古墳と認定されていた。

調査当初は上述したようにE 7号墳が築造された尾根を含めた前方後円墳の可能性を考慮して調査したが、調査が進むにつれて、円墳であることが明らかとなった。

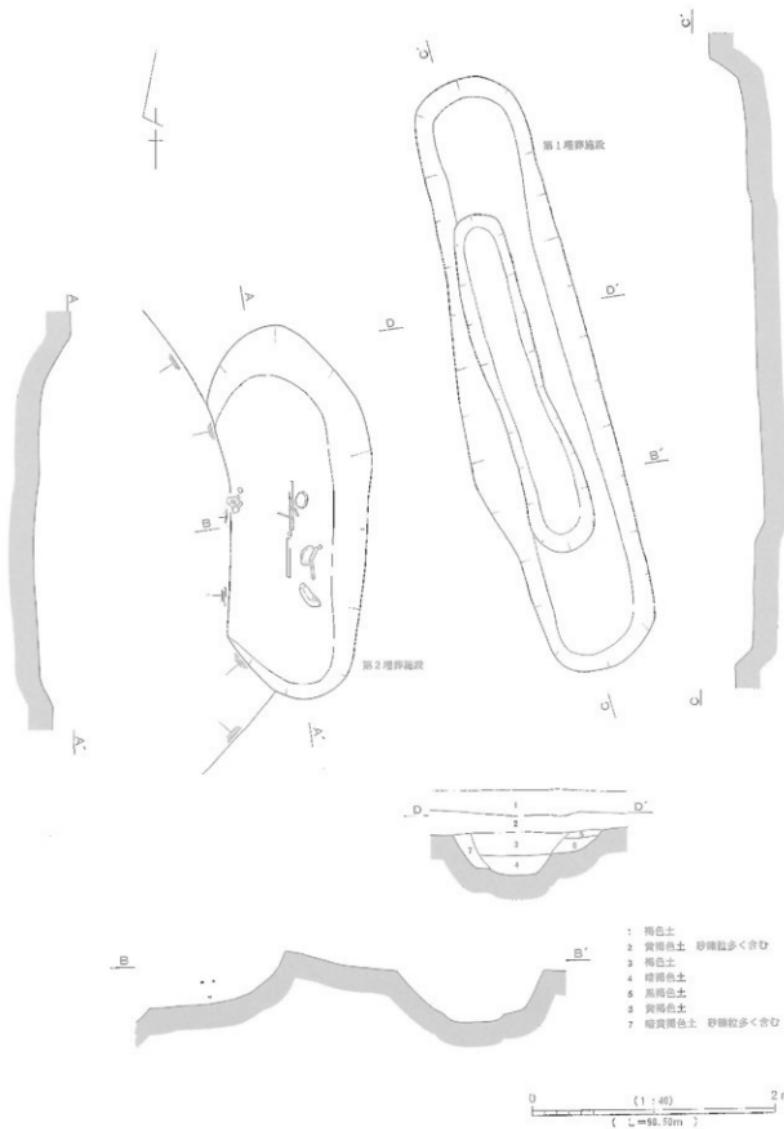
### (2) 墳丘の構造（第92図、第5表、図版46）

**墳丘** 墳丘盛土は確認できるが、E 9号墳の埋葬施設の上部は水平にされ、盛土が埋葬施設を覆うような状況であることから、E 10号墳を築造する際にE 9号墳の墳丘の一部を削平して、丘陵頂部を平坦にならし盛土を行ったものである可能性が高い。

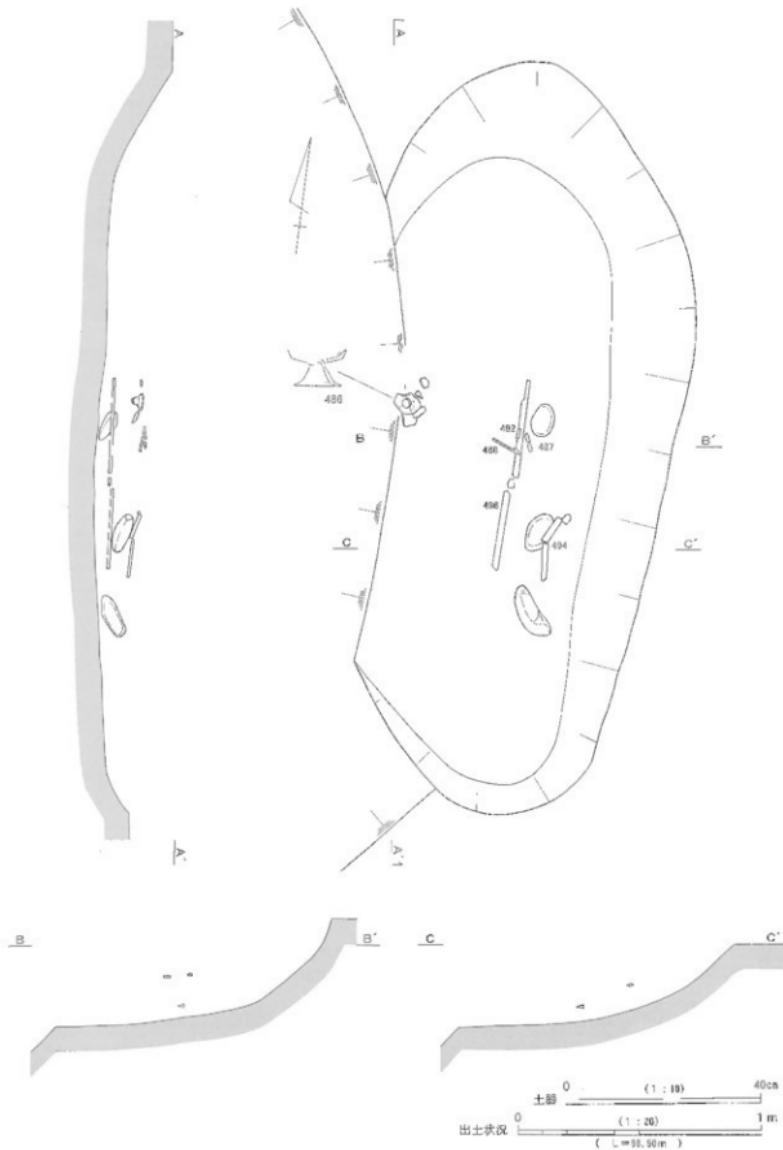
**周溝** 周溝は墳丘の北側へ北東側のみ確認でき、丘陵をU字形に掘削して周溝とし、北東側は途中から斜面の切り出しにより周溝に代えている。東側から南東側はE 15号墳の周溝造成時に破壊された可能性が高い。また、南側には周溝は確認できない。



第92図 上神増E 9・E 10号墳墳丘測量図



第93図 上神増E 9号墳第1・2埋葬施設実測図



第94図 上神塚E 9号墳第2埋葬施設遺物出土状況図

この周溝の形状からE 9号墳は南北に長い楕円形墳で、墳丘規模は南北17.0m、東西13.5m前後に復原できる。西側からの見掛け上の高さは、0.8m程度である。

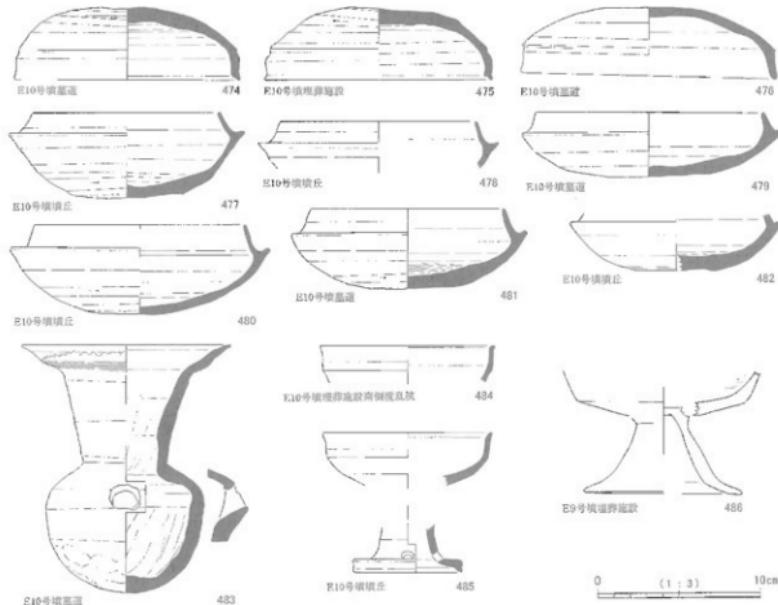
### (3) 埋葬施設の構造(第93図、第23表、図版46)

埋葬施設は主軸を南北に向ける木棺直葬が2基確認された。東側を第1埋葬施設、西側を第2埋葬施設とする。

**第1埋葬施設** 第1埋葬施設は主軸を真北からやや西側に向けた木棺直葬で、細長い隅丸長方形の墓壙(上段)の中央や西側に木棺を設置するための隅丸長方形の土壌(下段)が掘り込まれる二段墓壙である。D-D'部分の土層の様子を確認すると、棺底はU字形であることから割竹形木棺である可能性が高い。

なお、第1埋葬施設の埋没状況は上部を水平に削平された状態であり、木棺が腐朽して陥没したような上層は確認できないことから、埋葬後木棺がある程度形状を保持していた段階でE 10号墳の築造が開始され、その際棺内を埋め戻した可能性が高い。したがって、E 9号墳の築造から、それほど時期を隔てずE 10号墳が築造された可能性が高いことが判明する。

**第2埋葬施設** 第2埋葬施設は地山を掘り込んだもので、主軸をほぼ南北にむけた木棺直葬である。墓壙の平面形状は楕円形に近く、長さ3.1m、最大幅1.3m以上である。やや離れているが棺底には10~20cmの川原石3点が一直線に並んだ状態で残されており、棺底裏込め石材であった可能性が高い。この石材が裏込めである可能性が高いこと、墓壙の横断面形(東西断面)がU字形であることから、使用



第95図 上神増E 9・E 10号墳出土土器実測図

された木棺は割竹形木棺であった可能性が高い。

なお、E 10号墳の築造の際、E 9号墳の墳頂部を削平し、埋葬施設の上部を破壊している可能性が高く、両埋葬施設の掘り込み位置が不明確であること、また両埋葬施設に重複関係がないことから第1埋葬施設と第2埋葬施設の前後関係は不明である。

#### (4) 遺物出土状況（第 93・94 図、図版 46）

第1埋葬施設の出土遺物はない。

第2埋葬施設の墓壙中央部で鉄刀 1点（496）が切先を南に向けた状態で出土した。その南側、床面より 10cmほど高い位置から鉄剣 1点（494）が切先を南側に向けた状態で、また鉄鎌（487・488・492）が墓壙中央の床面から 10cm以上高い位置で出土した。鉄刀（496）の 0.2 m 西側で土師器高環 1点（486）がやや浮いた状態で出土した。このほか鉄刀片 1点（495）、鉄鎌（489～491・493）は埋葬施設の土砂を篠掛け中に発見したものである。したがって、上記の出土状況から鉄刀が棺内遺物、鉄鎌・鉄剣・土師器は棺上遺物である蓋然性が高い。

#### (5) 出土遺物（第 95～97 図、第 37・39 表、図版 7・80・81・83）

遺物は、第2埋葬施設から棺内中央部で鉄刀 1点、棺上で鉄剣 1点、鉄鎌 5点、土師器 1点が出土した。

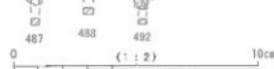
土器 土師器高環（486）はハ字形に開く脚部であり、脚部は脚端部よりやや上位でさらに外反し、その脚内部には明瞭な稜線が確認できる。环部は环底部と口縁部の境に明瞭な稜をもつ有稜高环である。脚端部径 9.7cm である。

鉄器 鉄鎌は長頸尖根片刀箭式で、逆刺が長く明瞭である。残存状況が良好な 487・488 は頸部～鎌身長 10.5～11.0cm、頸部長 8.5～9.0cm で、鎌身は 5 点ともにほぼ同寸法であり、鎌身長 3.0cm 前後、幅 0.7～0.8cm、脇抜の長さ 7～10mm である。

鉄剣（494）は、直角均等両闘で、剣身には鎬ではなく両丸造である。剣身には木質が残存していることから、木鞘に納められた状態で副葬されたことが判明する。残存長 32.8cm、剣身長 32.0cm、幅 2.6cm である。

鉄刀片 1点（495）は刀身の破片であり、鎬は確認できない。出土位置が明確ではないため確定ではないが、大刀が 496 のみであることから、496 の切先に近い部分の破片の可能性が高い。

鉄刀 1点（496）は、刃部側の片撫闘であり、茎は茎尻に向かい直線的に延びる。茎には木柄の一部と糸巻きが残存している。刀身には鎬は確認できないが、木質が刀身に残存しており、木鞘に納められた状態で副葬されたことが判明する。闘部分には有機質の柄縁装具の痕跡が確認できる。残存長 76.2cm である。



第96図 上神垣 E 9号墳第2埋葬施設出土鐵鎌実測図

#### (6) 小結

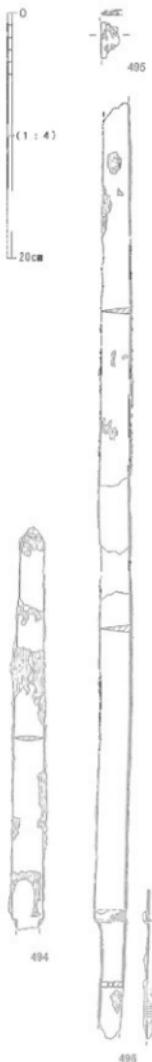
築造時期について E 9号墳では時期の帰属が判明する遺物として鉄鎌と土師器高環がある。出土した鉄鎌は長頸鎌であり、形式は脇抜の長い片刀箭式である。このような特徴を有する鉄鎌が出土した古墳をみると、磐田市寺山 14号墳や明ヶ島 5号墳、袋井市石ノ形古墳などがあり、おおよそ TK23 型式期

～TK47型式期に位置づけることができる。これらの古墳から出土した片刃箭式と法量がほぼ同じであること、遠江のこれ以前の古墳から出土した片刃箭式は、鐵身が長く、頸部が短いこと、この次段階(MT15型式併行期)以降では脇挾が非常に短くなる(大谷2004)ことから、E9号墳の鐵鎌は中期後半、遠江I期後半～末葉(TK23～TK47型式期)に位置づけられる可能性が高い。

土師器高坏は、坏部は屈曲し、明瞭な稜線を有するもので、脚部にはハ字形に開く脚部で、脚端部近くでさらに外側に屈折する脚高坏であり、脚部内面にも稜線が確認できる。この特徴から、中期後半～中期末葉に位置づけることができる。

したがって、時期が判明する鉄鎌、土師器とともに中期後半～末葉の時期を示しており、E9号墳第2埋葬施設の埋葬時期は中期後葉～末葉(遠江I期後半～末葉、TK23～TK47)、5世紀後半から6世紀初頭に築造された可能性が高い。

第1埋葬施設は一切出土遺物がないため、時期は特定できない。上述したように第2埋葬施設との重複関係もなく、第2埋葬施設との時期差が明瞭ではないことから時期を想定することも難しい。主軸をほぼ同一方向にとり、それぞれが埋葬施設を破壊していないことから、ほぼ同時期に埋葬された可能性が高い。



第97図 上神増E9号墳  
第2埋葬施設出土  
刀劍莢測定図

## 11. 上神増E 10号墳

### (1) 古墳の現況

古墳は丘陵の最も高い位置にあることから古墳の可能性が想定できた箇所である。E 7号墳の報告でも記載したように、当初は前方後円墳の可能性を考え調査を進めたが、尾根の鞍部に周溝や削り出しが確認できたため、尾根上には別々にE 7号墳と、E 9・10号墳が築造されていることが判明した。

古墳の調査を進めるに従い、E 10号墳が築造される以前に存在したE 9号墳の墳丘を一部再利用していることが判明したが、E 10号墳東側に掘削された周溝や削り出しから、この範囲がE 10号墳の範囲とすればE 9号墳よりは墳丘規模を縮小していることになり、この周溝や削りだしを段築ととらえればE 9号墳の墳丘を完全に再利用していることになる。

### (2) 墳丘の構造（第92・95図、第5・37表、図版46・47）

**墳丘** 墳丘はE 9号墳を利用しているが、E 9号墳の削り出しおよび内側に墳丘盛土が確認できる。埋葬施設を取り囲むように墳丘東側の盛土を調整し、削り出したような状況にした可能性が高い。この埋葬施設を取り囲む範囲を墳丘とすれば、南北約10.0m、東西約11.0mの円墳とすることができる。一方、E 9号墳の築造の際の周溝や削り出しの部分までを墳丘として利用したとすれば、あたかも2段築成の円墳のような状況を呈し、南北約17m、東西約13.5m以上のやや南北に長い円墳とすることができる。

**墳丘の構造** 盛土は埋葬施設を構築する際の裏込めから続く、第一次墳丘である。この墳丘が構築される面はほぼ平坦であること、上述したようにE 9号墳の埋葬施設の上部を削平していることから、E 10号墳築造の際に、E 9号墳の墳丘を削平して平坦にした後、墓壙を掘削し、埋葬施設の構築とともに第一次墳丘を盛土したことが判明する。

**墳丘出土遺物（第95図、第37表、図版7・81～83）** 墳丘からは須恵器环身4点（477・478・480・482）、高环1点（485）が出土している。

須恵器环身4点は内傾しながら高く立ち上がるもので、口縁端部は丸く仕上げられる。口径の大きさから2種類存在し、口径が12.2～12.8cmの大きいもの2点（478・480）、11.5cmの小さいもの1点（477）がある。

高环（485）の脚部は直線的に垂下した後、脚下部で急激に外反し、端部は引き出している。脚の低位置に円孔が二孔穿たれている。环部は塊形で低平な底部から直立に近く立ち上がり、口縁端部は外反し、内傾する面をもつ。

これらの环身は、遠江Ⅲ期前葉（TK10～MT85型式期）に位置づけることができる。一方、高环の帰属時期を決定するのは難しいが、同じくⅢ期前葉（TK10～MT85型式期）であろうか。

### (3) 埋葬施設の構造（第98・99図、第24表、図版47・48）

埋葬施設は川原石を用いたものであり、現状ではそれぞれの石材が規則的に積み上げられたような状況は確認できず、定型的な横穴式石室ではないことは明らかである。一方、埋葬施設西側には、礫構には確認できない墓道状に床面が掘削され、側壁から連続する石組は確認できること、さらに墓道状の部分からまとまった状態で須恵器が出土していることから、西側には当初から石積みは存在せず、開放されていた可能性が高い。また、遠江で確認される掛川市五塚山古墳などの礫構では底面にも石材が確認

#### 第24表 上神増E10号墳第1・2埋葬施設の規模

主軸方位	N-76°15' - E
石室全長	6.8m前後
玄室長	6.8m以下
玄室奥壁幅	1.3m前後
墓構長	7.3m
玄室幅	1.5m前後
玄室玄門側幅	1.3m前後
墓構幅	3.0m

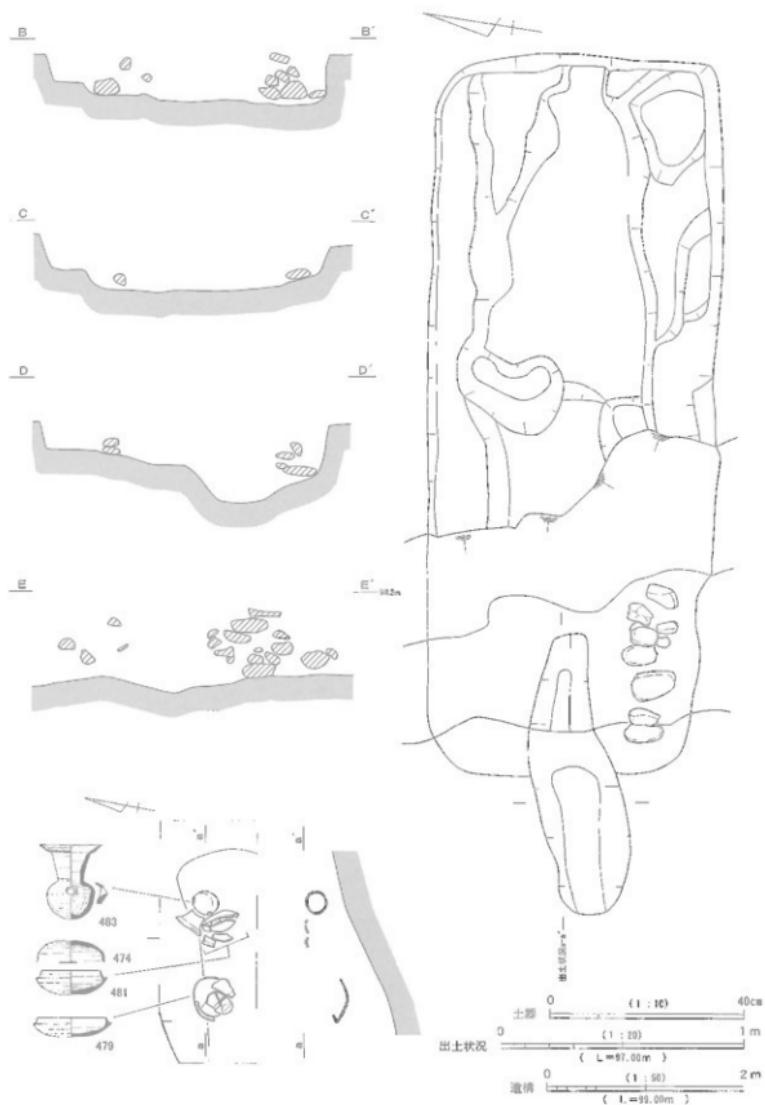
されることが多いが、E 10号墳の埋葬施設にはそれが設置されていない可能性が高い。したがって、当埋葬施設は竪穴系の礫構に横穴式石室の影響があった横口構造の特異な礫構（以下、「横口構造の礫構」と仮称する）



1 線筒色土

0 (1 : 50)  
(L = 59.00m) 2 m

第98図 上神増E10号墳埋葬施設検出状況図



第99図 上神増E10号墳埋葬施設基底石および墓塚実測図

の可能性が高い。

**墓壇** 墓壇は長方形で、西側に墓道が接続する。墓壇の底面は石材が確認された部分よりも中央が一段低く掘り下げられている。この部分に敷石が敷設されていたかどうか不明であるため、当初から一段掘り下げられていたのか、のちの攪乱により一段掘り下げられたのか調査段階では明らかにすることができなかった。

**埋葬施設** 人頭大の礫を南北の側壁に沿って礫詰めをしており、意図的に積み上げたような状態ではなく、礫構のように築造されている。西側部分には墓道状の掘り込みが確認できることから、上述したように横穴式石室の影響を受けて、西側小口を設けず開放し、横口（玄門）とした礫構（室）（「横口構造の礫構」）の可能性が高い。

奥壁はすでに存在していないか、奥壁が設置されたと考えられる東壁部分の床面には石材を設置するための小土坑は確認できないことから、板状石材を用いず、側壁のように川原石を積み上げた可能性が高い。

側壁は北壁（右側壁）側の残存状況が良好ではないが、南壁（左側壁）の玄門部分付近の残存状況が比較的良好で、一部板状角礫も利用され、基本的に20～30cmの川原石を用いて積み上げるが、規則的に組み合わせながら積み上げたような状態ではない。また、墓壇と側壁の裏込めにも20cm前後の川原石を充填している。

また、横口の閉塞には20～30cmの川原石を用いている。この閉塞石は墓道の堆積土上に載っているため、確認した閉塞石は追葬時のものである可能性がある。

#### （4）遺物の出土状況（第99図、図版48）

墓道の北側から須恵器腹1点（483）、环身2点（481・479）、环蓋1点（474）が底面からは5～15cm浮いた状態で出土した。腹が一番東側に口縁部を北西に向かう状態で横置きされ、それに接するように須恵器环身・环蓋が出土した。須恵器环身（479）はそれから20cmほど西側部分から口縁部を上にした状態で出土した。この4点の須恵器は、この上に閉塞石が載っていることから、この閉塞石を設置する前に置かれた可能性が高い。閉塞石と墓道底面の間には土砂が確認できることから追葬時の閉塞石の可能性が高いため、その下にある須恵器は初葬時の閉塞祭祀にかかる遺物である可能性が高く、閉塞石の外側で行った祭祀の痕跡である可能性が高い。

出土位置からみると、环身（474）と环蓋（481）はセット関係で副葬された可能性が高い。

この他、埋葬施設内の攪乱・流入土からは环蓋1点（475）、玉類（管玉）1点（497）、埋葬施設の攪乱坑から無蓋高环1点（484）が出土した。また、墓道覆土から环蓋1点（476）が出土した。

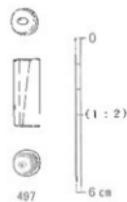
#### （5）出土遺物（第95・100、第37・39表、図版7・81～83）

埋葬施設の攪乱土中から玉類1点、須恵器2点、墓道から須恵器5点が出土した。

**土器** 474～476は須恵器环蓋である。474・475は口縁部に段を有し、口縁部と天井部の境に凹線を施しており、鈍い稜が確認できる。口径13.7～14.0cm、器高4.4cmである。476は天井部と口縁部の境界には鋭利な突出による稜が確認でき、口縁部はハ字形に開きながら垂下し、口縁端部は丸く仕上げられる。口径15.5cm、器高4.2cmである。

481は須恵器环身である。内傾しながら高く立ち上がるたちあがりである。内面底部にはタタキの痕跡が残る。口径11.7cm、器高4.9cmである。

484は無蓋高环の口縁部で、埴丘から出土した無蓋高环（485）に類似する。この仮定が正しければ、485のように円孔透かしを有する脚部であった可能性が高い。484の环部は楕形で低平な底部から直立



第100図 上神増E10  
古墳埋葬  
施設出土  
玉類実測図

497 玉類 管玉（497）は深緑色で、いわゆる碧玉製（蛇紋岩、緑色凝灰岩かグリーンタフ製である可能性が高い）である。片面穿孔で、全長約2.7cm、直径1.0cmである。

#### （6）小結

築造時期について 築造時期は、墓道や埋葬施設から出土した須恵器壙蓋は474・475のように口縁端部に内傾する段を有することや、476のように口縁部と天井の境界に明瞭な稜線を有するなどの特徴から、遠江Ⅲ期前葉（TK10型式期～MT85型式期）に位置づけることができる。

したがって、E 10号墳の築造時期は遠江Ⅲ期前葉（TK10型式期～MT85型式期、6世紀中頃）に築造された可能性が高い。

追葬について 墓道から原位置を保持して出土した須恵器と比較して、墳丘から出土した477は口径がやや小さいこと、閉塞石が須恵器の上に載っていることから、追葬があった可能性が高い。

土器の副葬について E 10号墳では埋葬施設内で原位置を保持して出土した土器はなく、墓道で行われた祭祀に須恵器が使用されている。石室内部が大きく攪乱されていること、墳丘上や石室内流入土中からも遺物が出土していることから、埋葬施設内に土器が副葬されなかつたと早計には判断できないが、遠江で埋葬施設内に土器が副葬されるようになるのは一般的には遠江Ⅲ期中葉以降と考えられるため、横穴式石室の影響を受けながらも、埋葬施設内には土器を副葬しなかつた可能性を十分考慮する必要がある。

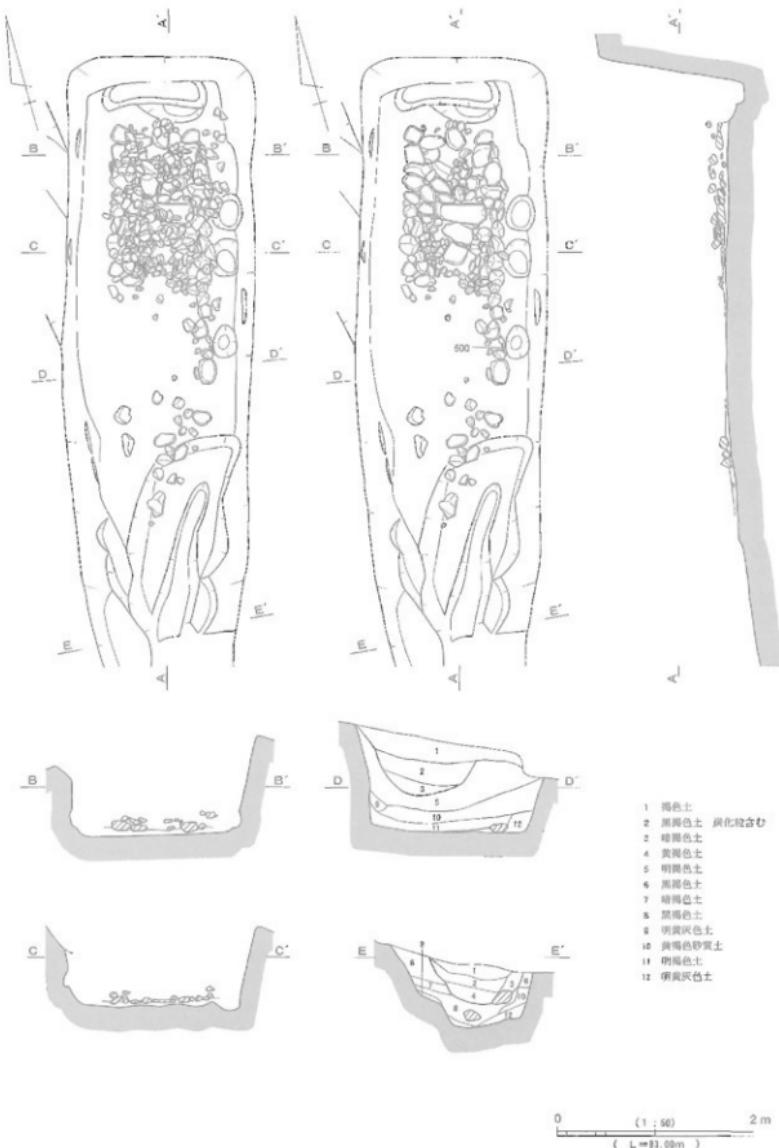
## 12. 上神増E 11号墳

## (1) 古墳の現況

E 11号墳はE 7号墳からが所在する尾根が東に向かって張り出す平坦地に近い緩い斜面に位置する。確認調査前からこの部分に平坦面が確認でき、尾根斜面が張り出していたことから古墳の存在は想定で



第101図 上神増E 11号墳墳丘測量図



第102図 上神塚E11号墳横穴式石室実測図

きた。調査を始めるとまずE 12号墳が確認されたため、緩い平坦面の奥の方へ築造した古墳があるとの見解を持っていた。このためE 11号墳に関しては全くその存在は確認できなかった。

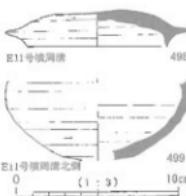
しかし、調査を進めると、E 12号墳の調査中、本来地山であるべき墓道の壁面や底面が地山ではないことが判明し、人為的な掘削の痕跡である可能性がでたため、さらに掘り進めたところ横穴式石室であることが判明し、後述するE 12号墳がE 11号墳を破壊して築造されたことが判明した。

調査の結果、古墳はE 7号墳から一段下がった尾根の張り出し部分の先端に築造される古墳で、標高92～94m付近に築造されたことが判明した。

### (2) 墳丘の構造（第101・103図、第5・37表、図版48・49）

**墳丘** 盛土は残存しておらず確認することはできない。E 12号墳の築造の際に破壊された可能性が高い。

**周溝** 周溝は、丘陵の高い部分のみを掘削し、石室よりも斜面下位の部分は手をつけていないか、地山を削り出して周溝に代えていた可能性が高い。周溝は北側で、幅1.5m、深さ0.7m程度、南東側で幅1m弱、深さ0.2m程度掘削されている。石室西側の斜面上位に当たる部分の周溝の幅が広いが、斜面上位に当たることから古墳築造後、雨水の流路となり削られた可能性が高く、当初は1.0～1.5m程度の幅であった可能性が高い。



第103図 上神増E11号墳周溝出土土器実測図

残存する部分の周溝から判断すると、墳丘形態は不整形な円墳である。周溝と埋葬施設の関係から、墳丘規模は南北約10.5m、東西約10m程度であったと想定できる。

**周溝出土遺物**（第103図、第37表、図版82） 周溝の北側部分の覆土内からは須恵器2点（498・499）が出土している。498は摘みのない蓋で、返りを有する。坏蓋ではなく、長頸壺の蓋の可能性が高い。口径8.6cm、器高2.2cmと低平である。499は壺あるいは瓶類の底部で、胴部下半にはヘラ削りが施されている。

498は破片であることから時期を特定することは困難である。498は返りのある蓋であり、遠江国期後葉以降の時期である可能性が高いが、時期を特定することは難しい。

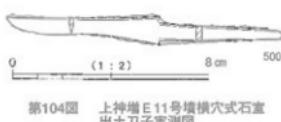
### (3) 埋葬施設の構造（第102図、第25表、図版49）

**埋葬施設**は半地下式に構築された南に向かって開口する横穴式石室である。

**墓壙** 墓壙はやや南側が窄まるものの、ほぼ長方形で、幅を狭めながら墓道へと続き、墓道は周溝を取り付くと想定される箇所付近で急激に東に向けて曲がる。

**横穴式石室** 奥壁・側壁とともに抜き取られており、その構造は明確ではないが、奥壁部分には細長い土坑が確認できることから他の横穴式石室同様板状の石材を立てて奥壁としていた可能性が高い。一方、玄門の立柱石を立てる部分にみられる土坑は現状では確認できないことから、立柱を伴わない川原石を積み上げる袖の構造であったか、無袖形石室であった可能性が高い。

**敷石** 敷石は2面確認できる。上面は拳大的川原石を敷設しており、下面はそれよりも大型の20～30cmの川原石を使用し、中には50cmを超える板石も使用している。両面ともに遺物が出土しておらず、上面のみを埋葬面としたか、上下両面ともに埋葬面であったかは確認できない。



第104図 上神増E 11号横穴式石室  
出土刀子実測図

#### (4) 遺物の出土状況（第102図）

本来敷石が敷設されていた可能性が高い箇所、石室ほぼ中央左側壁部分で刀子1点（500）が出土した。これは原位置を保持しない可能性が高い。

#### (5) 出土遺物（第104図、第39表、図版82）

鉄器 500は鉄製刀子である。関は直角両関で、刃部は使い込まれていたのか、刃が内湾している。茎は茎尻に向かって徐々に幅を狭めるので、茎尻は丸尻である。茎には木質、鹿角ともに残存していない。全長11.2cmである。

#### (6) 小結

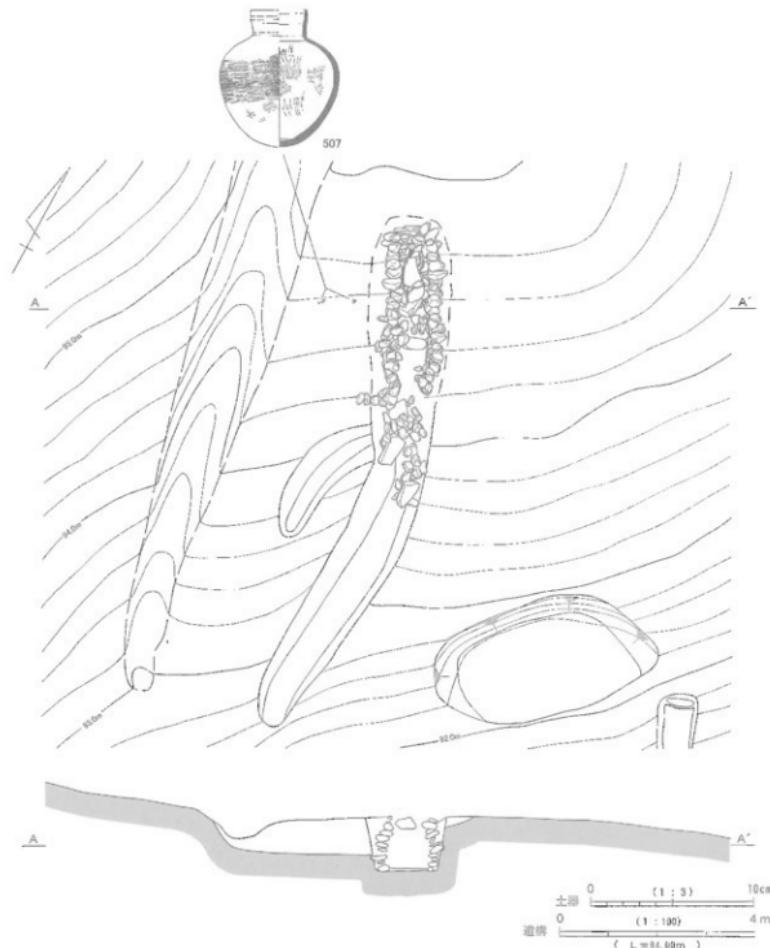
築造時期について 時期を特定できる遺物が出土していないため不明である。後述するE 12号墳に破壊されていることから、その築造時期（遠江V期前半、飛鳥V段階、平城I段階、8世紀前半）より以前であることは間違いない。E 12号墳墓道南側覆土内から出土した須恵器坏身（第108図501）が出土した地点はE 11号墳の埋葬施設内にあたることから、破壊した際にE 11号墳の遺物が紛れ込んだと仮定すれば、この須恵器の特徴から遠江III期後葉に位置づけることができることから、6世紀末～7世紀初頭頃の築造であった可能性がある。

追葬について 時期を特定できる遺物がなく、また閉塞石も残存していないことから、追葬の有無は特定できない。

## 13. 上神増E 12号墳

## (1) 古墳の現況

E 7号墳が所在する丘陵が東に向かって張り出し、平坦面に近い緩やかな斜面地が確認できたことから、当初からこの位置に古墳があることが想定できた。調査を実施すると、尾根が張り出した部分の奥まった位置に築造されているとの印象があった。この印象は、調査が進むにつれ、解決した。尾根の張り出しに築造されていたE 11号墳を破壊して、さらに奥に横穴式石室を構築したことが判明したため、



第105図 上神増E 12号墳周辺測量図

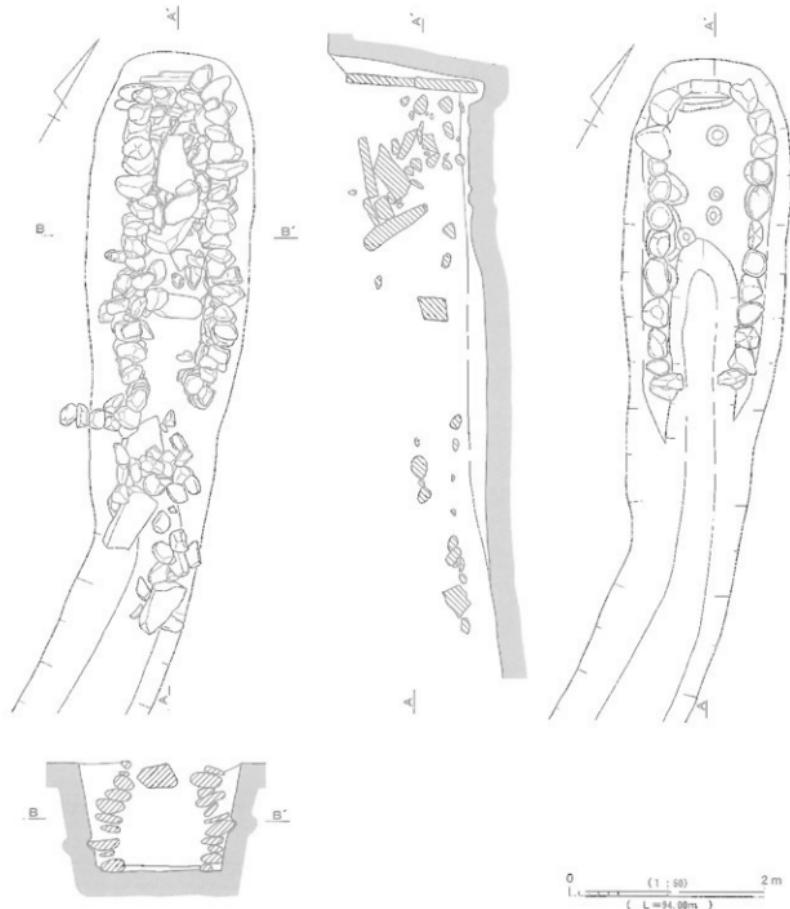
この奥まった位置に横穴式石室が築造されたことについて理解することができた。

古墳は標高 94 ~ 95 m付近に築造される。

(2) 墓丘の構造(第105図、第5表、図版48・49)

横穴式石室に平行するように溝が走っているが、E 12号墳とは特に関係ない可能性が高く、また墳丘盛土も確認できず、削り出し等も確認できないことから、墳形・規模は不明である。

なお、第105図のA-A'断面の石室左側の掘り込みの堆積土は、E 11号墳の南東側の周溝部分の土



第106図 上神塚E 12号墳横穴式石室検出状況および基底石、基壙実測図

砂である。このE 11号墳の周溝の堆積土をE 12号墳の墓壙が掘り込んでいることからE 11号墳を破壊してE 12号墳が築造されたことが判明した。

### (3) 埋葬施設の構造（第106・107図、第26表、図版7・50～52）

第26表 上神塚E12号墳埋葬施設の規模	
主軸方位	N-29°30'W
石室全長	3.1m
玄室長	2.85m
玄室奥壁幅	0.5m
奥壁2石分が墓壙内に收まる。天井石を除けば石室はほぼ	奥壁幅
墓壙	0.25m
墓壙長	4.0m前後
	墓壙幅
	0.5m
	1.7m

墓壙は奥壁側が急激に窄まる。

また、墓道側がやや狭くなる胴張り形の長方形である。墓道との境は明瞭ではない。

墓道は石室羨門から1.5m付近まで石室主軸と同一方向へ伸びた後、そこから急激に南に向かい逆く字形に曲がる。これはE 12号墳が破壊したE 11号墳の墓壙に当たったためで、E 11号墳の横穴式石室の開口方向へ曲げたと想定できる。

横穴式石室 石室平面形については、玄室は奥壁に向かって急激に窄まる奥窄まり形である。

奥壁 奥壁に板状石材を2段積んで奥壁としている。立柱石も板状の石材を立てており、その高さはほぼ奥壁1段目の高さと同様である。

側壁 側壁は基本的に川原石を用いて構築されている。現状で9段、1.3m残存している。崩落している天井石と川原石からはもう1～2段程度高かった可能性が高く、石室の内法高1.5m程度であった可能性が高い。側壁の積載方法については、基底石は長手面を内側に向けて据え、2段目以上は小口積みを基本としている。玄門は立柱石を設置した後、その上に川原石を積み重ねているため不安定で、特に右側は崩落寸前であった。立柱石の南側の羨道とする部分は1列しかなく、羨道として機能したかどうかは検討の余地があり、前庭側壁である可能性が高い。

天井石 天井石には奥壁と同じような板状の石材を用いており、墓道まで崩落して移動した大型の角礫を数えれば、天井石は7石架構されていた可能性が高い。現状でその大きさを足していくとほぼ3.0m程度となり、石室全長が3.1m、玄室の規模が2.85mであることから、少なくとも玄室は全体が天井石に覆われていた可能性が高い。

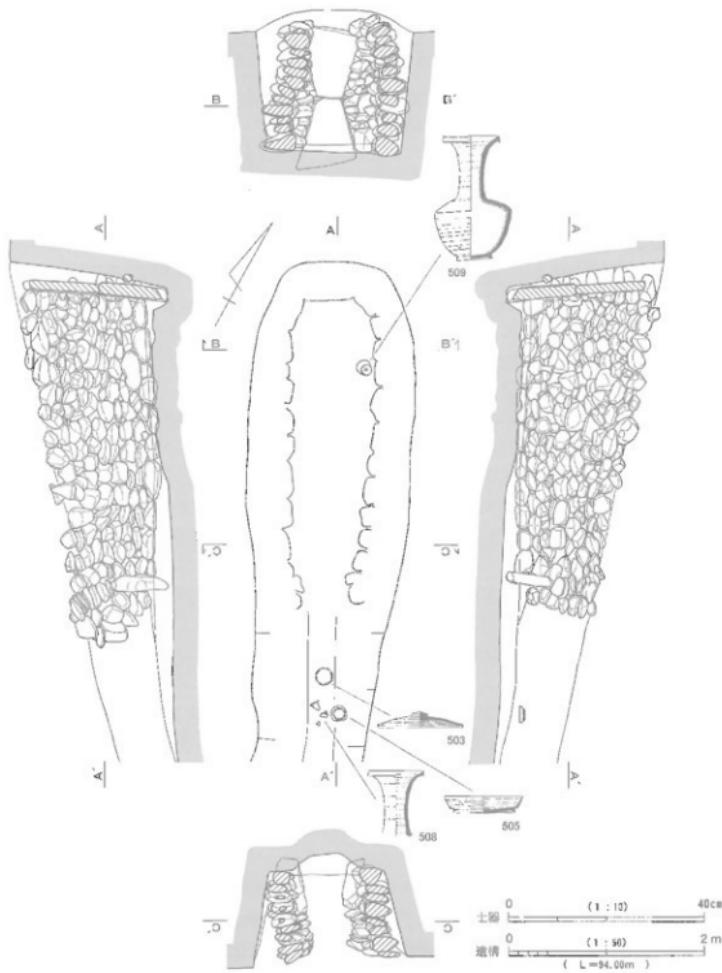
なお、羨門部分から西側に向かって川原石が4石裏込め土および墓壙肩部分に据置かれている。これは、意図的に設置されたもので、埴丘内石列あるいは外護列石の可能性が高い。

閉塞 羨道には閉塞は確認できず、墓道内に天井石の崩落とともに川原石が出土したことから、そのうちの一部が閉塞石であった可能性も排除できないが、すでに失われた可能性が高い。

敷石 敷石は確認できず、原位置を保持して出土した須恵器長頸壺は地山に直接置かれていたことから、石室構築当初から設置されなかった可能性が高い。

### (4) 遺物の出土状況（第107図、図版51）

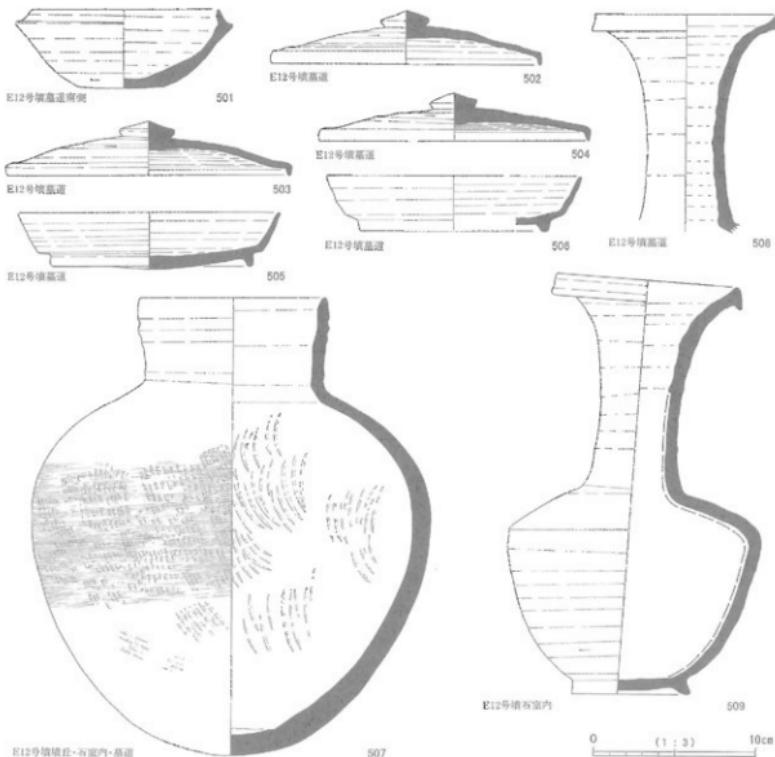
横穴式石室内では玄室中央やや北側の左側壁部分から須恵器長頸壺（509）が床面直上に正位の状態で副葬されていた。また、墓道床面から20cm程度上で环蓋（503）、环身（505）、長頸壺（508）が出土し、その覆土中から环身1点（506）、环蓋2点（502・504）が出土した。さらに、石室西側では、石室内、墓道から出土した破片と接合する壺1点（507）が出土した。また、これらとは離れて、墓道の南側から須恵器环身1点（501）が出土した。この部分はE 11号墳の墓壙内にあたるため、E 11号墳に伴う遺物である可能性が高い。



第107図 上神丸丘E12号墳横穴式石室実測図および遺物出土状況図

## (5) 出土遺物（第108図、第37表、図版83・84）

須恵器 501は須恵器壺身である。内傾して短く立ち上がるもので、口径11.2cm、器高4.9cmである。502～504は摘付の壺蓋（摘蓋）である。大型の擬宝珠形の摘みで、天井は低く、口縁部で垂直に垂下する。口径16.6～17.2cm、器高2.9～3.3cmである。505・506は高台付の壺身（有台壺）である。505は台部よりも底がはらむものである。口縁部は底部から箱形に立ち上がる。口径15.8cm、器高3.4cmである。506は底部が台よりも高い位置にあるもので、壺部の形態は505と同様である。507は直口壺で



第108図 上神増E12号墳出土土器実測図

ある。胴部は無花果形で、平行タタキを施した後、カキメでタタキを一部消している。口縁部は直立する。口径 11.7cm、器高 27.9cm である。長頸壺（509）は台付長頸壺で、肩の張る胴部で、口縁部はラッパ状に開き、口縁部を外側下位に向かって垂下させる形態である。口径 11.2cm、器高約 25.8cm である。

#### (6) 小結

築造時期について 石室内に副葬された長頸壺は台付壺であり、口縁部を外側下にむかって垂下させることなどの特徴から遠江V期前半以降に位置づけることができる。また、墓道から出土した503・505・508も同様の時期であり、E12号墳の築造時期は8世紀前半であった可能性が高い。

一方、石室周辺および石室内、墓道で出土した坏身501は口径11.2cmと遠江III期末葉に位置づけられる可能性が高い。墓道部分はE11号墳を破壊していることを考慮すると、これらはE11号墳に伴う遺物である可能性が高い。

したがって、E11号墳は遠江III期末葉の築造、E12号墳は遠江V期前半（初頭）の築造である蓋然性が高い。

追葬について 追葬については、時期差のある遺物が出土していないことから不明である。

#### 14. 上神增E 13号墳

### (1) 古墳の現況

E11号墳の下位の斜面に築造されており、斜面の盛り上がりも一切確認できず、古墳が存在することは全く想定していなかった。E11・12号墳調査中に新たに発見した古墳である。

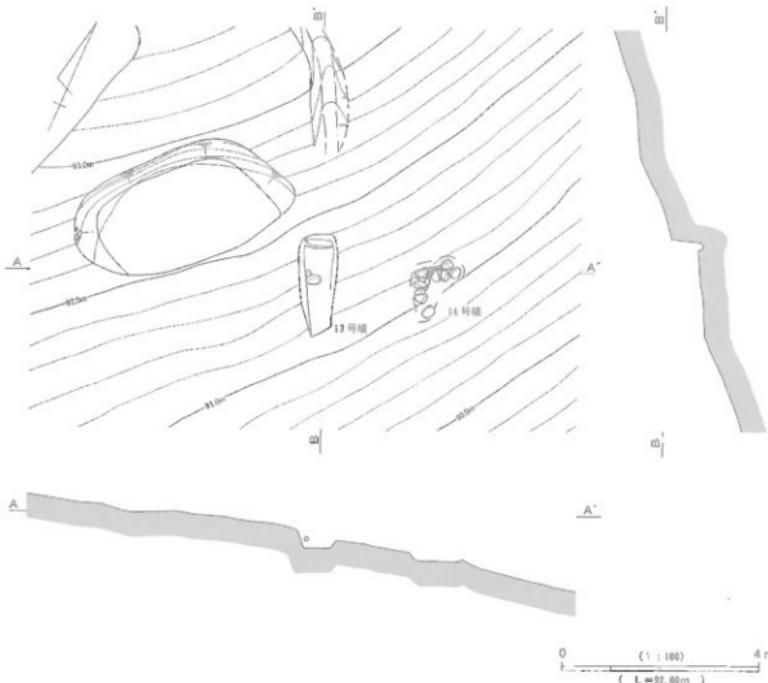
(2) 墳丘の構造(第109図、第5表、図版53)

周溝、盛土ともに確認できない。小型の埋葬施設であるため周溝は掘削されなかった可能性が高い。したがって、埋葬施設を覆う程度の埴込みであった可能性が高い。

(3) 埋葬施設の構造(第110図、第27表、図版53)

埋葬施設は墓壇内から石材2点が、床面よりやや浮いた状態で出土しているが、石室とするには内法が狭すぎるため崩落した土砂に含まれた石材の可能性を想定したい。したがって、床石を敷設しない横穴式土壙である可能性が高い。

**墓壙** 墓壙は地山を掘り込んで築造しており、南側がやや狭くなる台形で、奥壁側は奥壁を据えるた

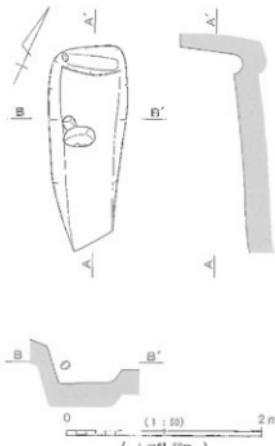


第109図 上神増E13・14号墳周辺測量図

めに一段深く掘り込まれている。床面はほぼ水平に調整されている。

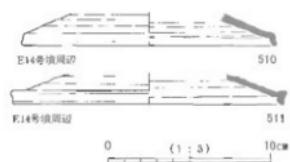
#### (4) 小結

出土遺物がなく、時期を特定することができないが、古墳の埋葬施設としては非常に小型であることから遠江V期前半（7世紀末葉～8世紀初頭）以降に築造された可能性が高い。



第110図 上神増E13号墳埋葬施設実測図

## 15. 上神増E 14号墳



第111図 上神増E 14号墳周辺出土土器実測図

須恵器壙蓋2点(510・511)が出土している。壙蓋は摘付の壙蓋で、天井から大きく開いた後、口縁部を垂下させるものである。口径は15.6・16.6cmに復原できる。これらの特徴から遠江V期前半(飛鳥V段階)、8世紀前半に位置づけることができる。

## (3) 埋葬施設の構造(第112図、第28表、図版53)

第28表 上神増E 14号墳埋葬施設の規模

主軸方位	N-34°15'W
石室全長	1.0m以上
玄室長	1.0m以上
玄室奥壁幅	0.5m前後
墓壙長	1.2m以上
墓壙幅	0.3m
墓壙側幅	0.3m前後
墓壙横幅	1.1m

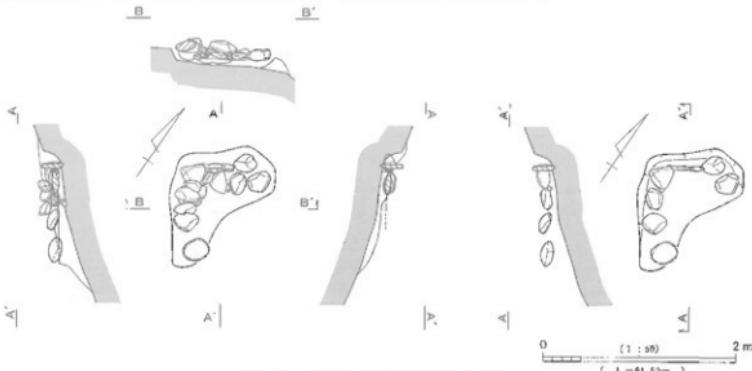
半地下式に氣遣された横穴式石室であり、南東に向かって開口する。

墓壙 墓壙は地山を掘り込んでおり、平面形は不整形な長方形である。

横穴式石室 横穴式石室は小型の無袖形石室で、平面形は樽形(胴張形)である。奥壁には板状の石材を立て、側壁には川原石を置いている。2段目は小口積みしており、小型であるが横穴式石室の造り方を踏襲している。ただし、南東部分が流出しており、南側部分に小口壁がある可能性も排除できないが、側壁の積み方、奥壁に使用した石材からみると、横穴式石室である。

## (4) 小結

築造時期と追葬について 埋葬施設内から出土した遺物はなく、時期は特定できない。B 8号墳よりも小型化していることから、やはり7世紀末葉以降に位置づけられる可能性が極めて高い。また、小型の石室であることから当初から追葬を行わない構造であった可能性が高い。



第112図 上神増E 14号墳横穴式石室実測図

## 16. 上神増E 15号墳

### (1) 古墳の現況

古墳はE 9号墳が立地する尾根が南東に向かって張り出す斜面の平坦地に築造されている。当初からこの位置が高まっており、古墳の存在は想定できた。

### (2) 墳丘の構造（第113・117図、第5・37表、図版53・54）

**墳丘** 墳丘は埋葬施設付近が後世の溝により大きく掘削・破壊されていたが、周溝および墳丘盛土も一部残存していた。墳丘盛土は斜面下位にのみ残存しており（第113図3・4層）、また横穴式石室構築の際に盛土を掘り込んでいることから、一旦斜面上部と高さをそろえ平坦面を造成した後で、埋葬施設の墓壙を掘り込んだ可能性が高い。

**周溝** 周溝は当初から丘陵上部のみ掘削されたもので斜面下部は削り出しか、それも行われなかつた可能性もある。周溝と埋葬施設の位置関係から、墳形は南北に長い楕円形に近い円墳であったと想定でき、およよその規模は、東西11m、南北12m程度であったと推測する。

**墳丘・周溝出土遺物（第117図、第37表、図版85・89）** 周溝西側で須恵器壺蓋1点（512）、墳丘上から須恵器フ拉斯コ瓶片1点（516）が出土した。

須恵器壺蓋（512）は天井部のみの破片であり、特徴は明確ではないが、回転ヘラ削り調整を3回転行っている。出土位置を考慮すると丘陵上にあるE 10号墳に伴う遺物である可能性が高い。須恵器片（516）はいわゆる「風船技法」を用いていることから、瓶類の破片である可能性が高い。図では提瓶のような状態で図示しているが、図右側が上になる場合も想定できる。

### (3) 埋葬施設の構造（第114・115図、第29表、図版54）

埋葬施設は南側に向かって開口する横穴式石室である。  
**墓壙・墓道** 墓壙は盛土および地山を掘り込んだ半地下式であり、奥壁側が広い逆台形で、南側に墓道が接続する。墓道は南側に向かって伸びる。

第29表 上神増E15号墳埋葬施設の規模			
主軸方位	N-15°45'-W		
石室全長	5.0m以上		
玄室長	3.0m前後	玄室幅	1.2m
玄室奥壁幅	不明	玄室玄門側幅	不明
墓道長	2.0m以上	墓道幅	不明
墓壙長	5.5m前後	墓壙幅	2.5m

**横穴式石室** 横穴式石室は大きく破壊を受けているため、残存状況は良好ではないが、残存部位によりおよよその形状は把握できる。

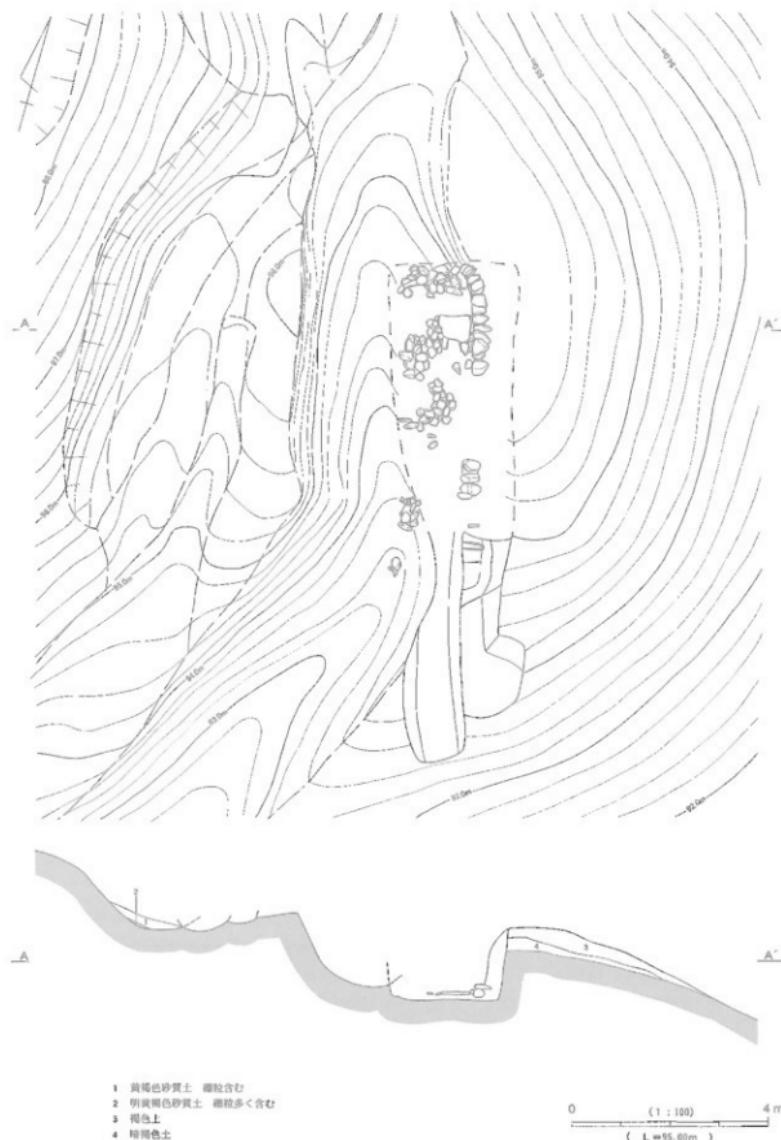
墓壙底面をみると墓壙北壁から約3.5mの位置に左右に掘り込みが確認でき、側壁の彎曲する形状からもこの位置に立柱石が据えられていた可能性が高いことから、擬似両袖式石室であった可能性が高い。さらに、墓壙南側に板状の石材が据えられており、この石材が原位置を保持しているとすれば、この位置にも立柱石が設置された複室系の疑似両袖式石室である可能性が高い。

玄室平面形は奥壁側が窄まる奥窄まり形で、側壁の基底石は平手を内側に向けて設置され、2段目以上は小口積みを基本としている。羨道部分の平面形態は不明であるが、玄室の形状から同じく側壁の張る構形に近い形状であり、側壁は玄室と同じく基底石を平手積み、2段目を小口積みしている。

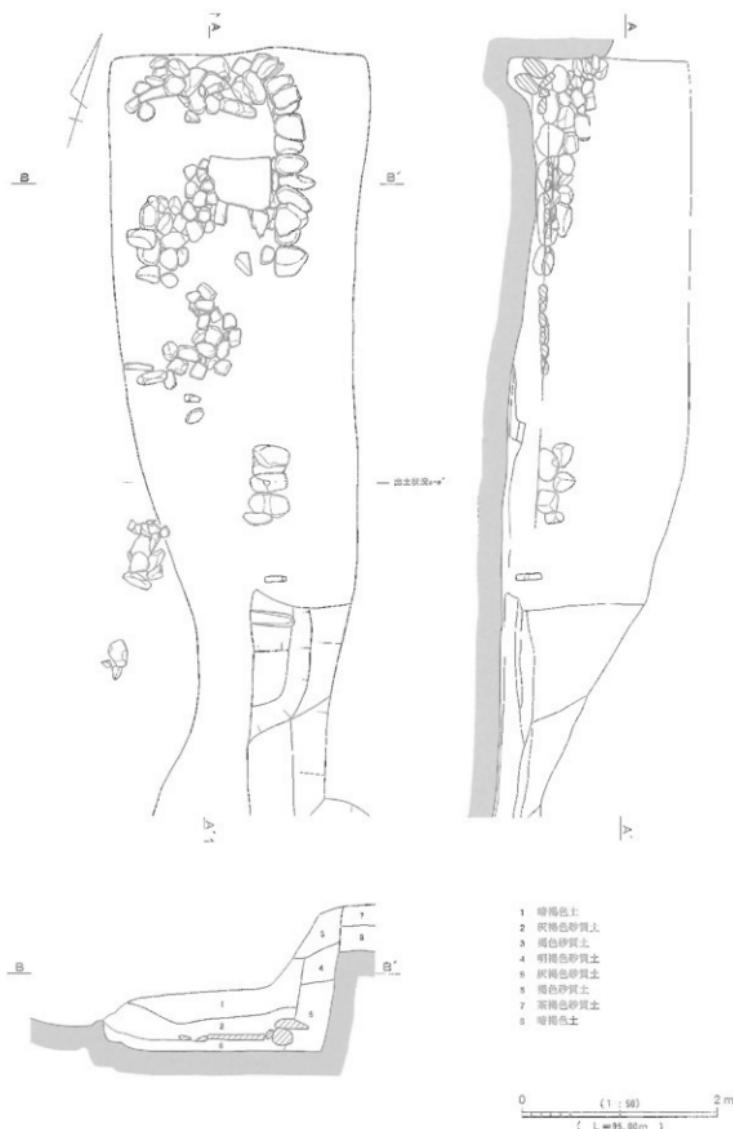
**敷石** 敷石は現状で玄室部分のみ確認できる。一部板状の石材を設置しているが、基本的に10~20cmの川原石を1面敷設している。

### (4) 遺物の出土状況（第116図、図版54）

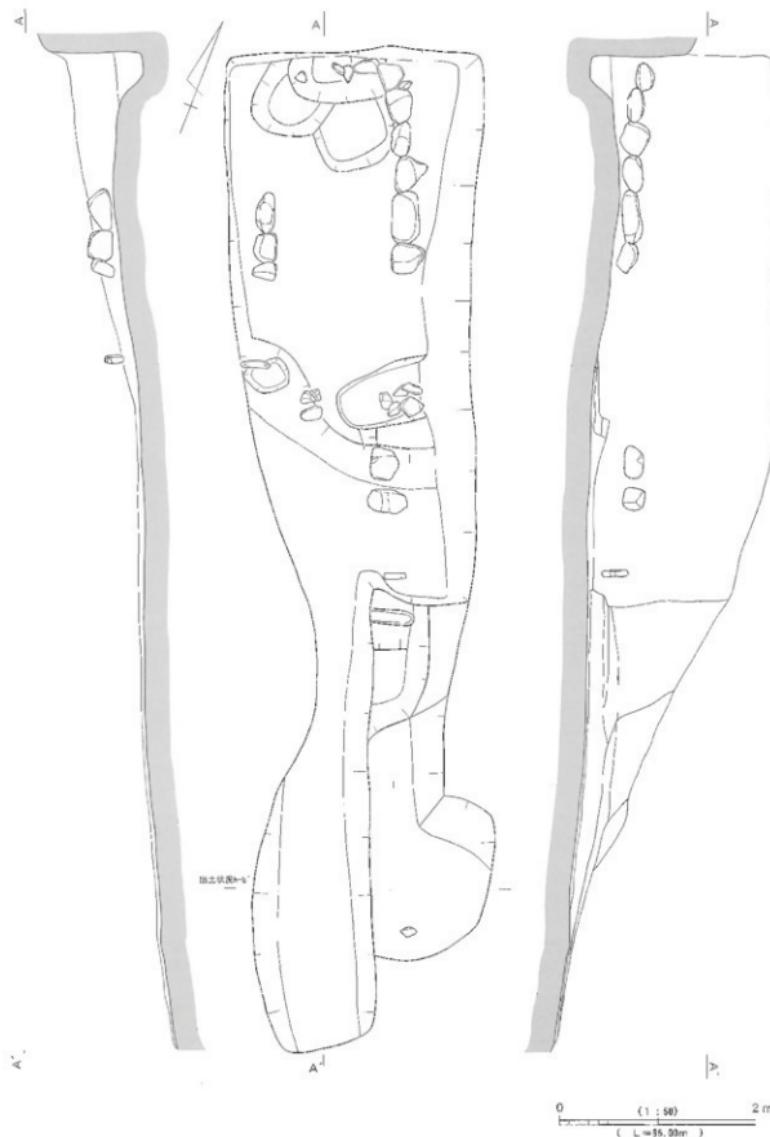
遺物は石室内の攪乱土中から鉄製品（刀子2点、鐵鏃1点、大刀茎1点）が、羨道の残存する側壁のところで土師器盤（524）がその北西側で平瓶（520）が出土した。また、墓道で底面から須恵器平瓶（519・518）、坪身（513）、壺瓶類口縁部片（521）、土師器脚付盤（523）が出土し、墓道の覆土中から須恵器



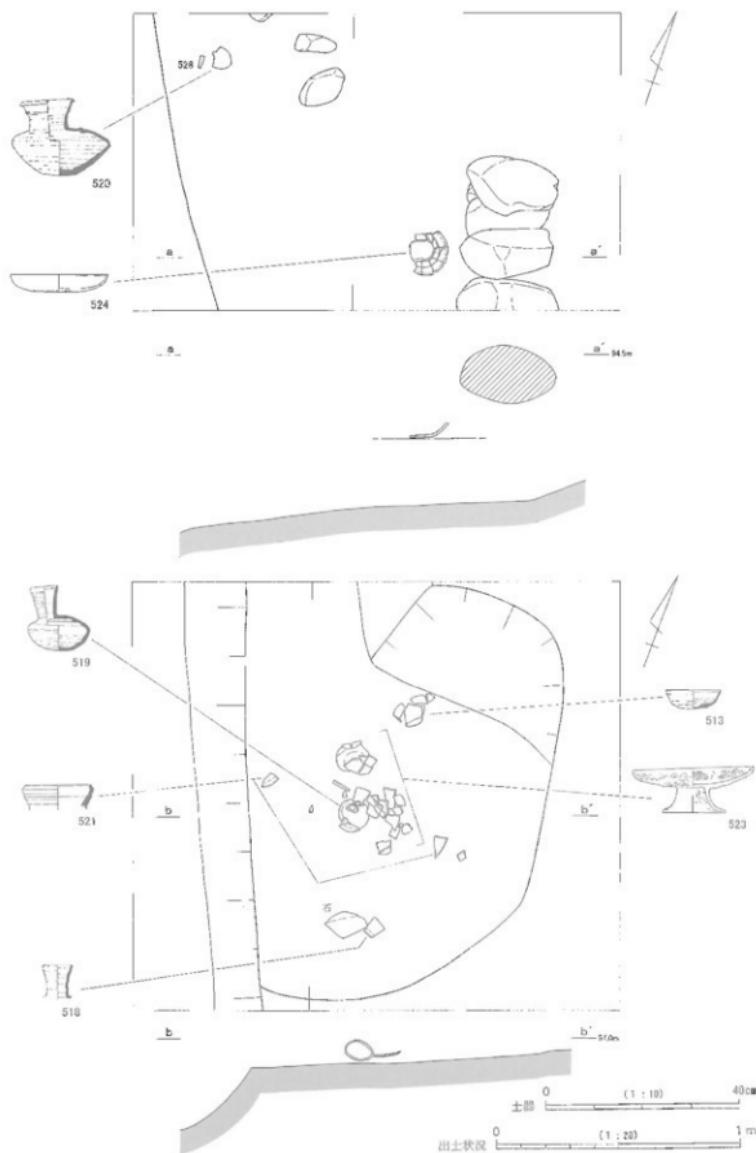
第113図 上神増E15号墳墳丘測量図



第114図 上神増E15号墳横穴式石室実測図

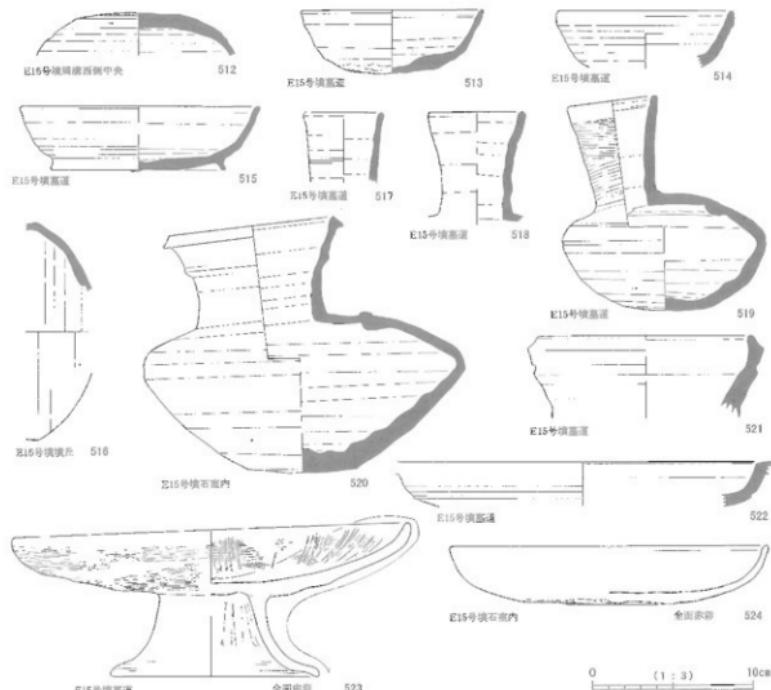


第115図 上神増E15号横穴式石室基底石および墓痕実測図



第116図 上神増E15号墳横穴式石室遺物出土状況図

第4章第6節 上神塚古墳群の調査成果



第117図 上神塚E15号壙出土土器実測図

环身（有台坏、515）、平瓶（517）、环身（514）、盤？（522）が出土した。

##### (5) 出土遺物 (第117・118図、第37・39表、図版85・86・89)

E15号壙石室内から須恵器平瓶1点（520）、土師器盤1点（524）、大刀片1点、鐵鎌1点、刀子2点が出土した。また、墓道から須恵器环身3点（513～515）、平瓶3点（517～519）、瓶頸口縁部片1点（521）、盤？1点（522）、土師器脚付盤1点（523）が出土した。

**土器** 环身（513）は、环蓋の可能性も排除できないが、無台环である可能性が高い。低平な底から外上方に向かって立ち上がり、口縁端部内面には凹線が確認できる。口径11.0cm、器高3.9cmである。环身の可能性が高い514は底部から外上方に向かい立ち上がり、口縁端部は丸く收められる。513と比較すると器壁が厚手であり、环ではなく短頸壺の蓋などの可能性も残る。口径10.1cmである。环身（515）は有台坏で、底部は台と同じ高さまで垂下する。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや外反し、丸く收められる。口径14.5cm、器高4.1cmである。

須恵器平瓶（519）は低平な胴部で、頸部は細く、直立に近く立ち上がり、口縁端部内面には凹線が確認できる。頸部にはカキメ調整が施されている。平瓶（517・518）はほぼ直立する頸部で、口縁端部は丸く收められる。517は頸部中央に沈線が巡らされ、518の頸部は直立した後口縁部は内湾する。平

瓶(520)は肩の張る扁平な胴部で、胴部は肩から急激に窄まり、ほぼ水平な底部に至る。肩にはボタン状粘土が貼り付けられている。頸部は太く、直立した後段を設けてそこから緩やかに外反し、口縁端部は外側に向かって引き出され、外傾する面をもつ。口径 10.1cm、器高 15.8cm である。

521 は大型横瓶あるいは大型平瓶の口縁部の可能性が高い。頸部はハ字形に開いた後、口縁部は内湾するもので、口縁端部は外傾する面をもつ。口径 13.2cm に復原できる。522 は盤あるいは脚付盤(高盤)の可能性が高い。底部はほぼ水平で、口縁部は外上方に向かって立ち上がり、口縁端部を外側に引き出すもので、口縁端部上面は水平の面を持つ。同じような特徴を持つ土器の類例としては浜松市半田山 D 3 号墳出土の脚付盤があげられる。

土師器脚付盤(高盤、523)は、脚基部は太く、ラッパ状に開いた後、端部を丸く收める。盤部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く收められる。外面はミガキ調整、

内面は放射状のミガキ調整が行われている。口径 24.3cm、高さ 9.1cm である。盤内外面および脚部外面に赤塗が施されている。盤(524)は全面赤彩が確認できる。口縁端部はやや肥厚し、丸く收められる。内面には調整の痕跡が残らない。口径 19.5cm、高さ 3.6cm である。

鉄器 大刀片 1 点、鉄鎌 1 点、刀子 2 点が出土した。

刀子(525)は、木柄刀子である。内湾する刃部であり、使用による研ぎ減りの可能性がある。関は直角均等兩闇で、茎は茎尻に向かい徐々に細くなる。茎には木質が残り、まず樹皮巻を行い、その上に木柄を装着していることが判明する。なお、茎には木質が確認できるが、刃部にはその痕跡がないため、抜き身の状態で副葬された可能性がある。

刀子(526)は刃部と茎の破片であり、茎は茎尻に向かい先細る形状で、断面逆長台形である。

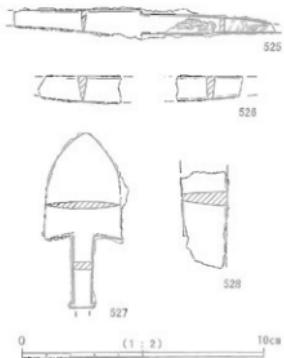
鉄鎌(527)は平根(腸抉)三角形式で、鎌身はふくらがあり、平造である。頸部は短く、茎闇は棘闇である。

528 は断面逆台形であること、幅 2 cm 前後であることから、鉄刀の茎の可能性が高い。茎尻に向かい先細る形状を呈する。

#### (6) 小結

築造時期について 石室や墓道から出土した土器(513)が無台坏であれば、遠江IV期後半には築造された可能性が高い。一方、坏蓋とする場合には遠江IV期前半まで築造時期が遡る可能性があり、これは鉄鎌(527)がその時期に位置づけられる可能性があることからも、その時期に築造された可能性も排除できない。したがって、E 15 号墳は遠江IV期前半までさかのぼる可能性があり、少なくとも遠江IV期後半には築造されていたことは明らかである。

追葬について 土師器脚付盤(523)、盤(524)、須恵器盤(522)は遠江IV期末葉、515・520 は遠江V期前半に位置づけることができることから、8世紀前半まで少なくとも1回追葬が行われた可能性がある。



第118図 上神塚E15号墳横穴式石室出土  
鉄製品実測図

## 17. 上神増E 16号墳

## (1) 古墳の現況

E 15号墳が築造された尾根の緩斜面に位置している。尾根がやや張り出した位置に造営されており、古墳が存在することは想定できる立地であった。確認調査により新たに確認された古墳である。古墳はE 15号墳の東側、E 17号墳の西側に築造されている。

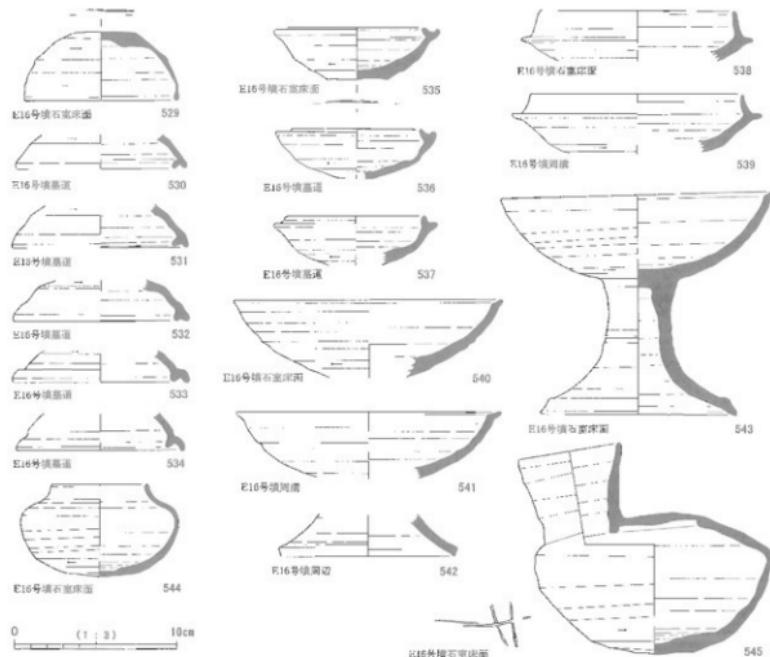
## (2) 墳丘の構造(第119・120図、第5表、図版55・87・90)

**墳丘** 墳丘盛土は一切確認できない。

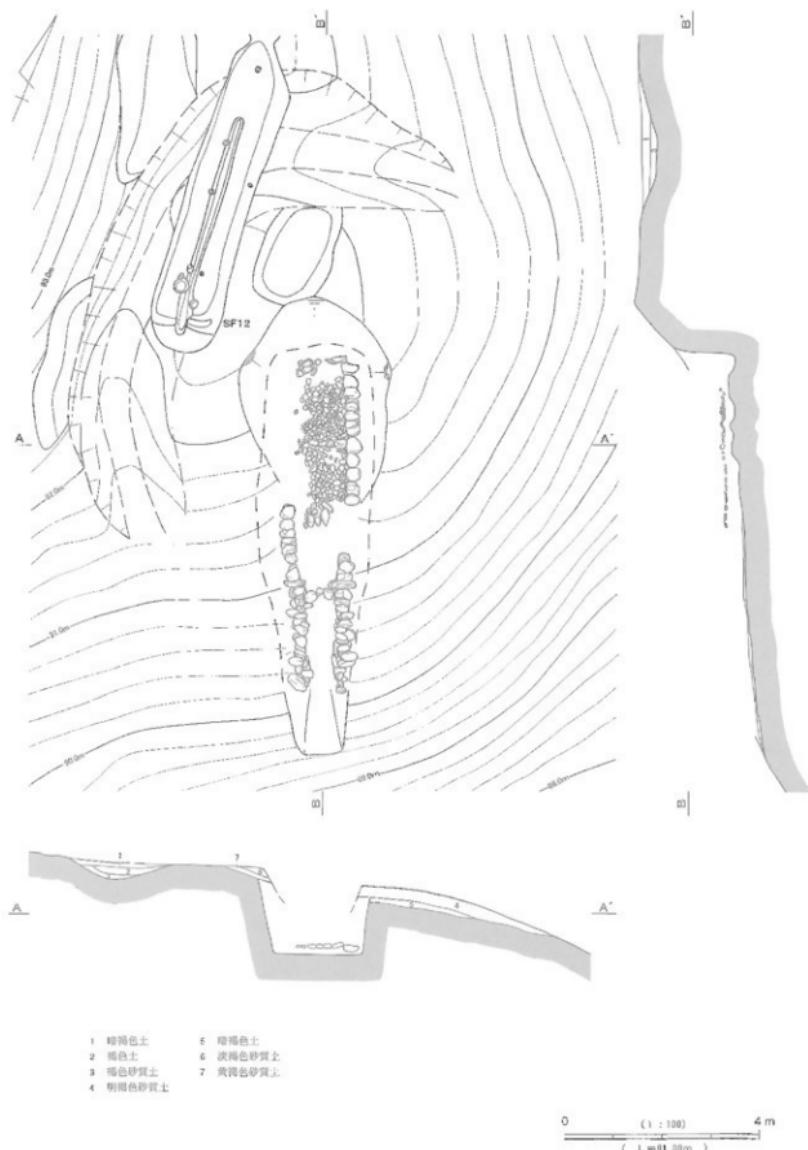
**周溝** 周溝は斜面上部のみ確認されており、本来この位置しか掘削されなかった可能性が高い。周溝と石室の関係から考えると、南北約11.0m、東西約8.8m以上の墳丘に復原でき、墳形は不整形な円墳であったと想定する。

周溝は最大幅2.8m、深さ0.3mである。

**周溝出土遺物(第119図、第37表、図版87・90)** 周溝から須恵器坏身1点(539)、無蓋高坏1点(541)、古墳の周辺から須恵器の脚部(高坏か)1点(542)が出土した。坏身(539)は垂直に高く立ち上がるるもので、口径13.0cmである。無蓋高坏(541)は坏部が楕円形のもので、口縁部は強く外反し、平坦面が作られる。脚部(542)はハ字形に開くものである。



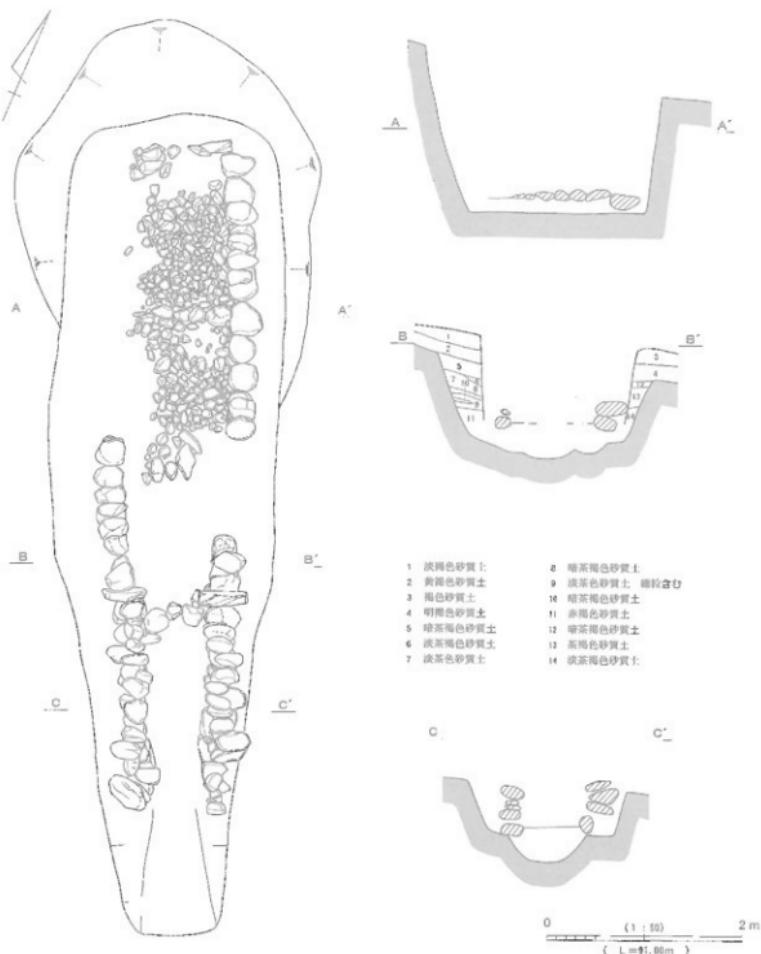
第119図 上神増E 16号墳出土土器実測図



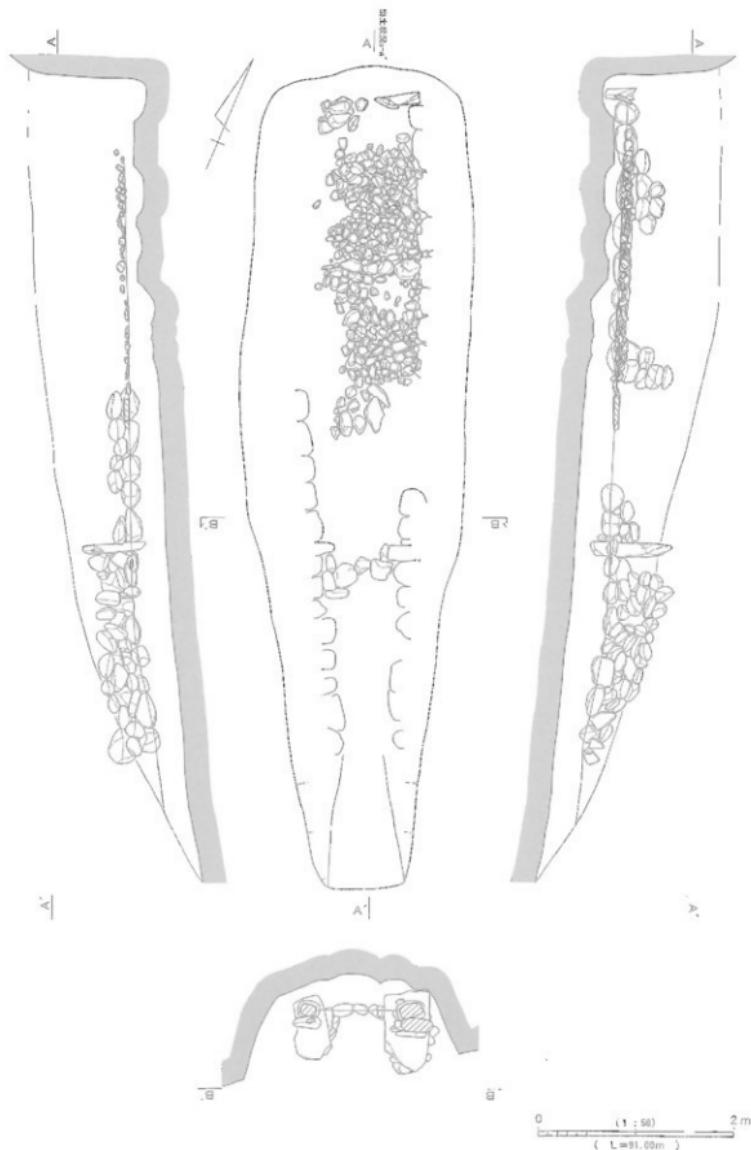
須恵器壺身は口径が大きく、立ちあがりも高いことから、遠江Ⅲ期中葉に位置づけることができる。一方、高环は楕円形の環部であることから、少なくとも遠江Ⅲ期末葉以降に位置づけられる。

### (3) 埋葬施設の構造(第121～123図、第30表、図版55・56)

埋葬施設は、地山を掘削し、半地下式に構築された、ほぼ南に向かって開口する擬似両袖式横穴式石室である。



第121図 上神増E16号横穴式石室検出状況図

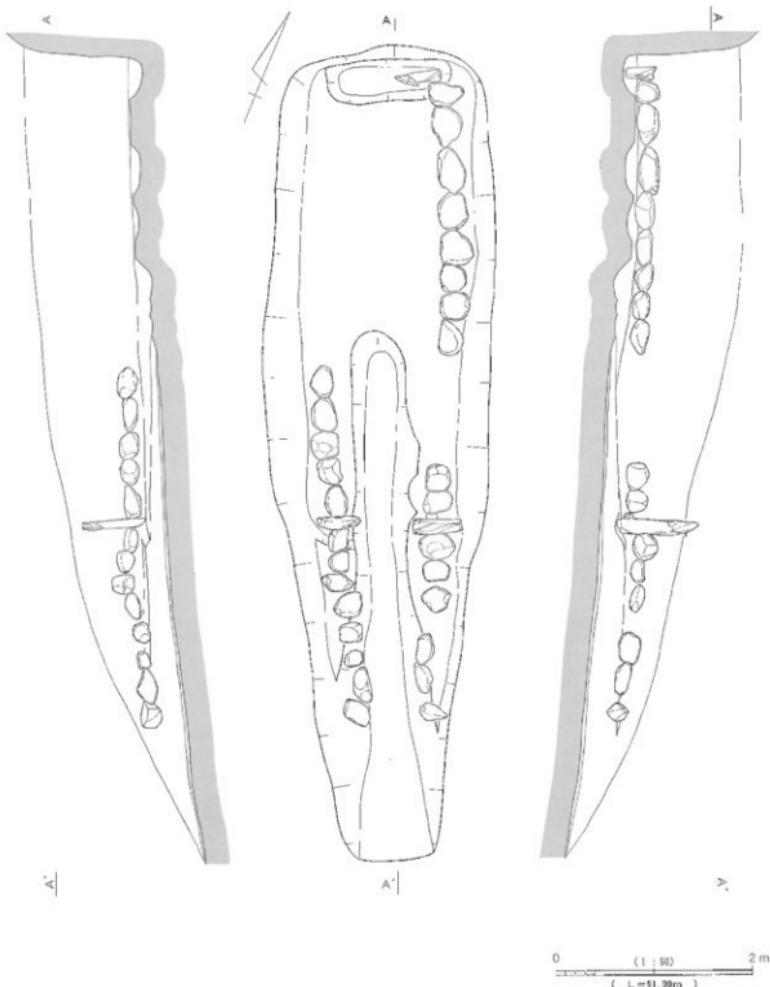


第122図 上神増E16号墳横穴式石室実測図

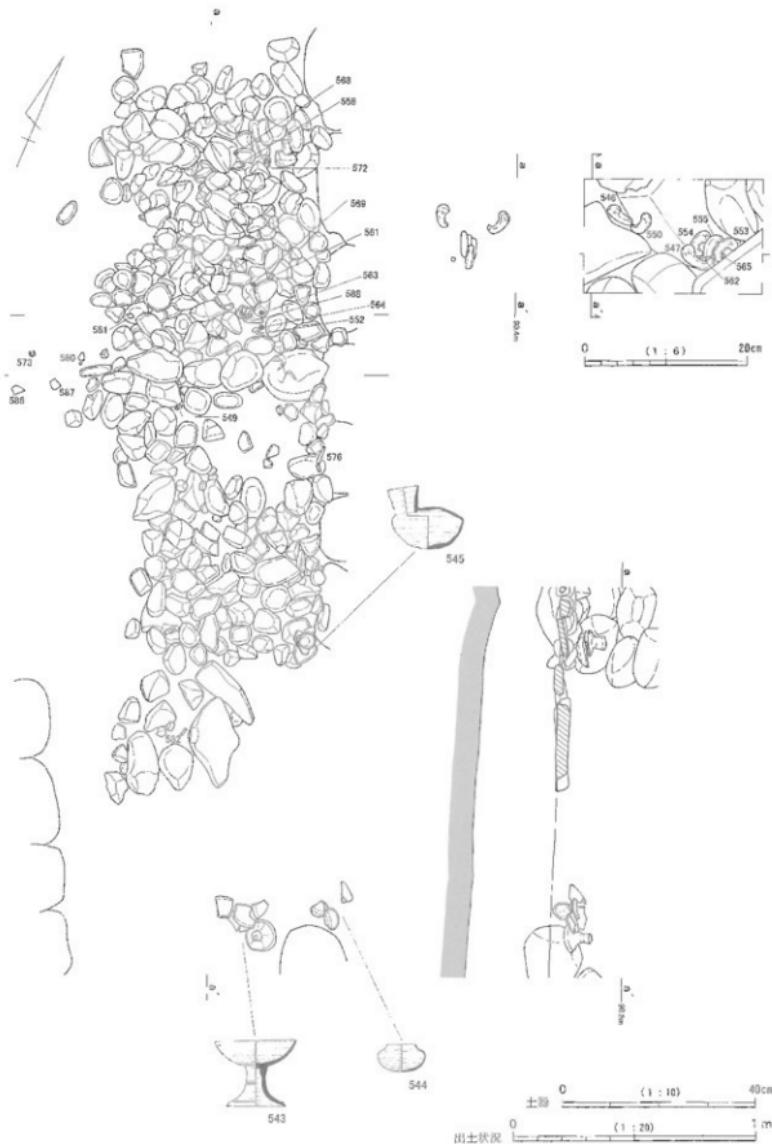
第4章第6節 上神塚三古墳群の調査成績

**墓壙・墓道** 墓壙は地山を掘り込む。平面形は逆徳利形で、この徳利形に幅を狭める部分は石室の玄門部が当たり、石室を意識して、それに合わせて墓壙を掘削したことは明らかである。墓道は玄室中央部付近まで伸び、玄室内は埋め戻された可能性が高い。現状で石室の主軸と同じ方向へ伸び、石室入口から約1.4m残る。

**横穴式石室** 玄室は中央が膨らむ胴張形である。羨道は石室外側に向かって逆ハ字形に窄まった後、



第123図 上神塚E16号墳横穴式石室基底石および墓壙実測図



第124図 上神増E16号墳横穴式石室遺物出土状況図

南側の2石は左右ともにハ字形に開いており、窄まる部分が羨道、開く部分が前庭であった可能性が高い。

**奥壁・側壁** 奥壁は既に抜き取られているが、一部残存する石材から1枚の板状の石材を立てて鏡石にしていた可能性が高い。玄門は板状の石材を立てて立柱石とし、内側に突出させている。

側壁は玄室・羨道とともに基底石を平手積み、2段目以上を小口積み、を基本として積み上げている。使用する石材は川原石である。用いられた川原石は基底石に利用されるものがやや大きい。

**敷石** 敷石は現状で奥壁から約0.4m～2.8mまでの長さ2.4m、幅1.0mの範囲に敷設されている。現状では奥壁側に空白部分、また左側壁側に偏在しているが、それぞれ石材が抜き取られているため、その際に攪乱された可能性が高い。したがって、奥壁から2.8mまでは敷石が設置されていたと考えるのが妥当である。奥壁から1.7mの位置に他の敷石より大きい石材を用いて石室主軸に直交するように屍床仕切石が設けられている。

#### (4) 遺物の出土状況（第124図、図版56）

石室内からは主に敷石上と左側壁側の玄門部分で出土している。

敷石上では、奥壁側～中央部にかけて玉類が出土した。奥壁近くでは丸玉1点（568）、棗玉1点（558）、耳環（572）がまとまって出土し、それより60cm南、屍床仕切石の20cm北側、敷石の中央で、管玉1点（561）、勾玉7点（546・547・550・552～555）、丸玉4点（562～565・569）、大刀茎片（588）、南端左側壁側で須恵器平瓶（545）が口縁部を上に向けた状態で出土した。右側壁側の屍床仕切石付近で鉄鎌（581）が出土した。また、屍床仕切石の南から勾玉1点（549）、左側壁に沿って刀子1点（576）が出土した。残存する敷石の一番南側の石材の間から鉄鎌茎片（582）が出土した。

床面（地山）上では、左側壁の玄門部分で須恵器高环1点（543）、短頸壺1点（544）が出土した。

この他、右側壁が破壊された部分、屍床仕切石の西側から、耳環1点（573）、鉄鎌（580）、大刀片（586・587）が出土した。さらに石室床面上から須恵器壺蓋1点（529）、坏身2点（535・538）、無蓋高环1点（540）が出土した。これ以外の鉄製品、耳環、玉類は、横穴式石室の覆土から出土した。

羨道の覆土からは須恵器壺蓋5点（530～534）、坏身2点（536・537）が出土した。

#### (5) 出土遺物（第119・125・126図、第37～40表、図版86～91）

石室内から須恵器壺蓋1点、坏身2点、無蓋高环2点、平瓶1点、短頸壺1点、勾玉10点、切子玉2点、棗玉3点、管玉1点、丸玉・小玉10点、耳環4点、刀子2点以上、鉄鎌2点以上、鉄鋸1点、大刀片3片、用途不明の鉄製品1点が出土した。また、羨道から壺蓋5点、坏身2点が出土した。

**土器** まずは石室内から出土した土器について記述する。

壺蓋（529）は、口径9.4cm、器高4.2cmで天井と口縁部の境には稜は確認できない椀形（半球形）の壺蓋である。天井部には「一」のヘラ記号がある。坏身（535）は、低く立ち上がるもので、口縁部の高さはほぼ同じである。口径8.4cm、器高3.2cmである。底部には「一」のヘラ記号がある。このことから、壺蓋（529）と坏身（535）は組合せ関係にある可能性が高い。538はほぼ垂直に高く立ち上がるもので、口縁部は丸く仕上げられている。受け部は水平に伸びる。口径11.9cmである。

無蓋高环（543）は椀形の坏部で、口縁端部は内傾する面をもつ。脚部には透かしがないが、中央部分に四線二条を巡らせていることから長脚二段高环である。脚部は四線部分までほぼ垂直に下がった後、急激にハ字形に広がり、脚裾部に段を設け、脚端部は丸く求められる。口径16.5cm、器高13.4cmである。

第30表 上神増E16号墳埋葬施設の規模			
主軸方位	N 22° 45' W		
石室全長	6.75m前後		
玄室長	4.5m前後	玄室幅	1.1m前後
玄室奥壁幅	1.0m前後	玄室玄門側幅	0.8m
羨道長	2.25m	羨道幅	0.75m
墓壙長	7.0m前後	墓壙幅	2.3m

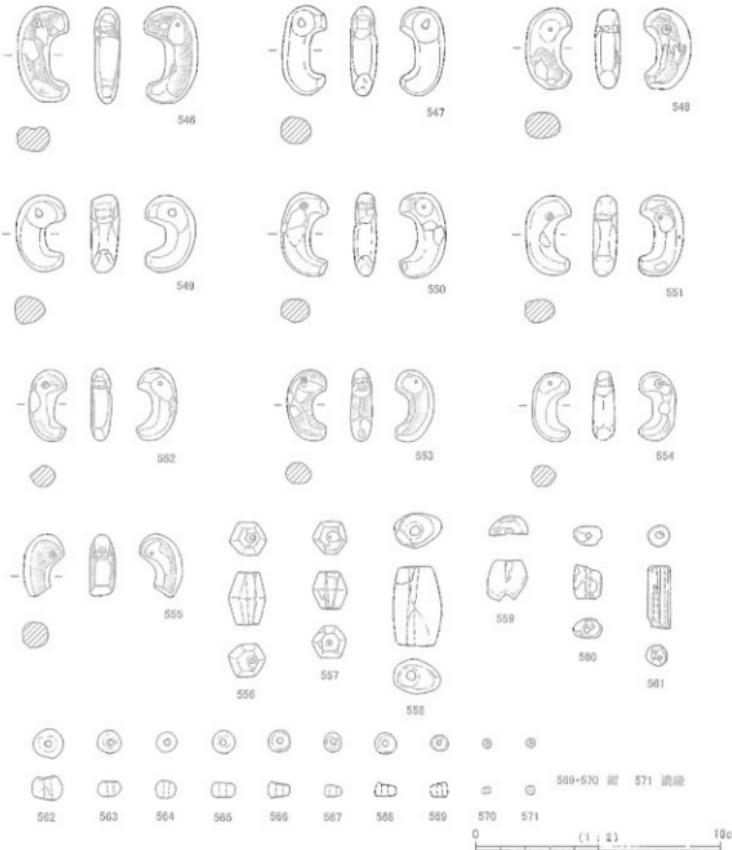
高坏（540）も543と同様の坏部である。口径16.4cmに復原できる。

平瓶（545）は、扁平な球胴に、短い口縁部が取り付けられるものである。頸部はハ字形に立ち上がり、口縁端部は丸く收められる。胴部の側面に「升」のヘラ記号が刻まれている。

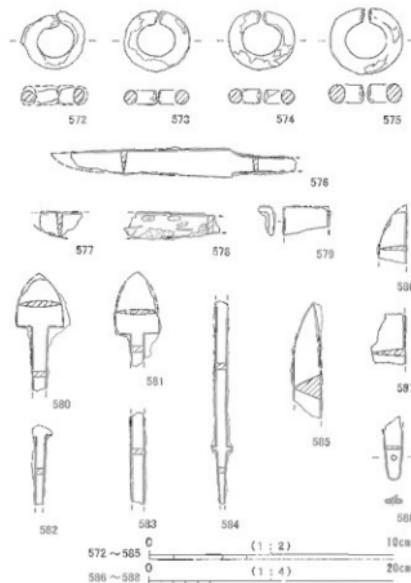
短颈壺（544）は扁平な球胴で、肩部に胴部の最大径がある。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。口径5.8cmである。

以下に墓道から出土した須恵器について記述する。

坏蓋（530～534）は返りをもつ坏蓋（返蓋）で、返りは受部よりも外側に突出しない。形態的に2種類に区分できる。第1は、半球形の天井部で、口縁内側に返りを貼り付けるもの（530～532）である。第2は半球形の天井部で、口縁部を内湾させ返りとし、その外側に受部を貼り付けたような状況を呈するもの（533・534）である。第2は受部を接合した可能性と、半球形の天井部の口縁部近くを急激に外



第125図 上神増E16号墳横穴式石室出土玉類実測図



第126図 上神塚E16号墳出土金属製品実測図

ンタフ製)で、両面から穿孔しているが、図の下側から穿ったものは途中で止っており、失敗したため図の上側から再度穿孔しなおしたものである。

丸玉・小玉(562～571)はすべてガラス製の可能性が高い。風化が進んで黒褐色などを呈しているが、本来は緑色であった可能性が高い。小玉の色調は、569・570は緑色、571は濃緑を呈している。

耳環 耳環(572～575)はすべて銅地銀張である。耳環のC字の小口部分を観察すると皺が確認できることから、銅芯に銀箔を巻き付けたものであることがわかる。大きさは575がやや大きく、直径2.9cmの円形で、572～573は直径2.6～2.7cmでやや扁平な円形である。したがって、574・575が石室覆土内から出土しているため出土位置が明確ではないが、耳環の大きさから判断して、572～574の3点で2組、575で1組の3組分が確認できるため、少なくともE16号墳には3人が埋葬された可能性が高い。

鉄器 刀子2点以上、鉄刀3点、鉢1点、鉄鎌2点以上、用途不明鉄製品が出土した。

刀子(576)は刃部側が直角、棟側が撫角の両側面で、茎は直線的に茎尻に向かって伸びる。茎断面は棟側の幅がやや広い台形である。茎には木質は残存しておらず、柄の材質については不明である。577は刀子の切先である。578は刀子の茎片で、圓から茎尻に向かい幅を狭める。茎には木質が残存しており、本柄刀子であったことがわかる。

大刀(586～588)は切先、刀身、茎尻の破片が出土しており、586と587は刀身幅が異なることから別個体である可能性がある。586は切先の破片で、ふくらみがやや張るものである。587は刀身片である。588は茎片で、茎は茎尻に向かって幅を狭めるもので、茎尻は丸尻である。目釘孔が確認でき、目釘孔には鉄製目釘が残存する。目釘は断面方形の可能性がある。

鉢(585)は鉢先片である。断面が三角形であり、三角穂式鉢である可能性が高い。鉢身幅1cmである。

側に屈曲させ、その内側に返りを接着した可能性もある。前者は口径(受部径)10.6～10.8cm、後者は同じく10.4～11.0cmに復原できる。

坏身(536)は、口縁部が内傾しながら立ち上がるものの、受部よりもわずかに高いものである。口径7.8cmである。537は口縁部が短く直立するたちあがりで、受部よりもやや高いものである。口径8.4cmに復原できる。

玉類 勾玉10点、切子玉2点、蚕玉3点、管玉1点、丸玉・小玉10点が出土した。

勾玉は、瑪瑙製(546・548、550～555)、チャート(547)、石製(石材不明、549)である。片面穿孔8点(546・548、550～555)、両面穿孔の可能性があるのが2点(547・549)である。したがって、瑪瑙製のものはすべて片面穿孔で、チャート製(その可能性がある)のものは両面穿孔であることがわかる。全長2.5～3.9cmである。

切子玉(556・557)は水晶製で、12面体である。片面穿孔である。蚕玉(558～560)は琥珀製で、大きさが3点すべて異なる。管玉(561)はいわゆる碧玉製(蛇紋岩、緑色凝灰岩かグリー

鉄鎌は、584が580・581のどちらかに伴うものであるとすれば、鉄鎌片5点は2点である可能性が高い。580・581ともに三角形式で、鎌身幅1.8～1.9cmで、平造りである。鎌身幅が1.8～1.9cmと尖根式、平根式の中間的な形態である。長頸鎌のように頸部が長いものと想定できることから、尖根式に近い。584は頸部から茎の破片で、闊は鍔闊である。582は茎片、583は頸部片である。

用途不明鉄製品579は、幅1.8cm、厚さ2mmの鉄板をL字形に折り曲げたものである。埋葬後変形したとすれば、鍔などの可能性がある。

#### (6) 小結

築造時期について 石室床面から出土した538はその大きさから遠江Ⅲ期中葉（TK43型式併行期）に位置づけることができる。また、古墳時代終末期に副葬されることが稀な遺物である鉄鋤が副葬されていることも、この須恵器の時期と一致しており、この他にこの時期に確実に帰属する遺物はないものの、これらの遺物をもって築造時期とすることができる可能性が高い。

これ以外の遺物では、楕形の坏部を有する無蓋高坏（543）は長脚二段の痕跡を保持することから遠江Ⅲ期末葉、石室や墓道から出土した坏身・坏蓋は口径が10cm未満と小さく、坏身はほぼ立ち上がり受け部で見えないような状況であることから、遠江Ⅳ期後半に位置づけるのが妥当である。

したがって、E 16号墳は少なくとも遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ期、7世紀前半）には存在しており、遠江Ⅲ期中葉～後葉、TK43～209型式期）まで遡る可能性が高い。

追葬について 石室内からは耳環が4点出土しており、少なくとも2人埋葬されたことは明らかであり、耳環の大きさからみると、572～574の3点がほぼ同じ大きさ、575がやや大きいことから、4点2組分ではなく、4点3組分で、3人分の残り2点は失われた可能性が高いと考える。

また、出土した須恵器についても、上述したように遠江Ⅲ期末葉、Ⅳ期後半のものが存在していることから、2回の追葬が行われたと想定できる。したがって、E 16号墳は、遠江Ⅲ期中葉に築造され、少なくとも遠江Ⅲ期末葉、Ⅳ期後半の2回追葬が行われた可能性が高い。

## 18. 上神増E 17号墳

## (1) 古墳の現況

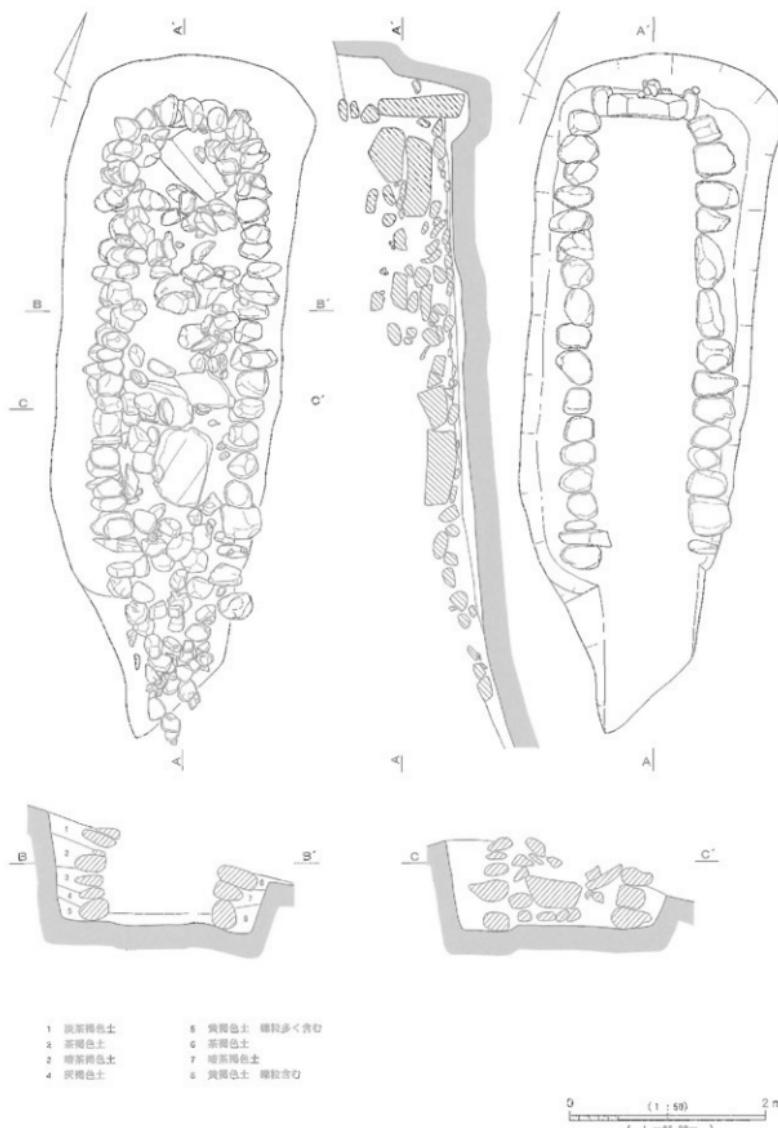
E 9・10号墳が所在する尾根から東に派生する尾根の緩斜面の下位に位置していたが、斜面がやや張り出しており、古墳の存在は予想できた。古墳は標高87～89mに築造されている。西側の斜面上位にE 16号墳が所在する。

## (2) 墓丘の構造（第127図、第5表）

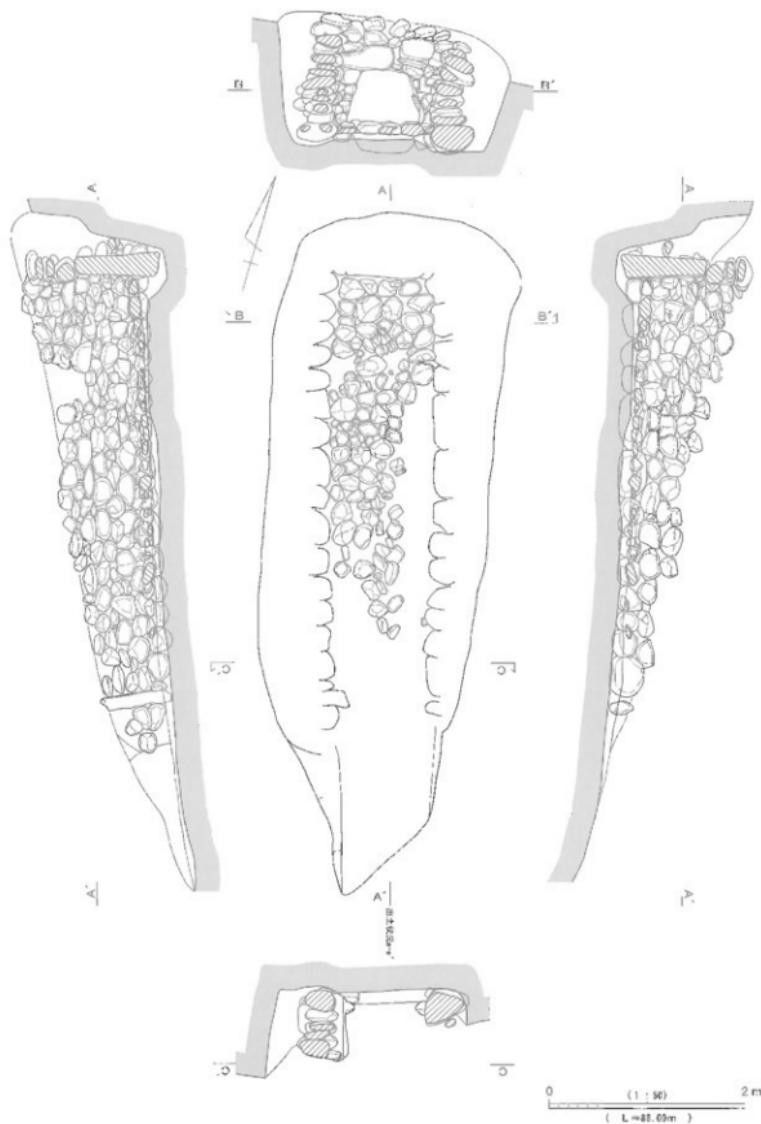
周溝は石室の周囲には一切確認できず、削り出しも確認できない。斜面上位に当たる西側にも周溝が確認できないことから、築造当初から周溝は掘削されなかつた可能性が高く、石室の周囲に削り出しを行う程度であった可能性が高い。したがって、墳形・規模は不明である。また、墳丘は、石室を覆う程度の盛土であったと考えられる。



第127図 上神増E 17号墳周辺測量図



第128図 上神塚E17号墳横穴式石室検出状況および基底石、基礎実測図



第129図 上神増E17号墳横穴式石室実測図

## (3) 埋葬施設の構造 (第 128・129 図, 第 31 表, 図版 57・58)

埋葬施設は半地下式に構築された、ほぼ南に向かって開口する擬似両袖式横穴式石室である。

第31表 上神塚E17号墳埋葬施設の規模	
主軸方位	N-17°30'W
石室全長	4.65m
玄室長	4.3m
玄室奥壁幅	0.9m
羨道長	0.35m
墓壙長	5.5m
玄室幅	1.05m
玄室玄門側幅	0.95m
羨道幅	1.0m前後
墓壙幅	2.3m

墓壙・羨道 墓壙は地山（第 127 図 1 層）を掘り込んで構築しており、奥壁側では石室床面から 1.0 m まで掘削されている。墓壙の形状は隅丸長方形であり、南側に羨道が接続する。

羨道は石室入口から古墳の外側へ向かって掘削されており、約 1.5 m 確認した。幅約 1 m で、石室床面との段差はない。

横穴式石室 横穴式石室は墓壙内部に構築され、玄室は奥壁側がやや窄まるが、長方形であり、羨道は非常に短く、川原石 1 石分の長さしかない。このため、玄門立柱石南側の 1 石は長さが短く羨道の機能を果たさないことから、羨道ではなく、前庭側壁である可能性が高い。したがって、当石室は玄室と前庭側壁で構成された可能性が高い。

奥壁・側壁 奥壁は板状石材を立てて鏡石とし、その上にやや大型の川原石を長手積みし、3・4 段目は川原石を小口積みする。鏡石を含めて 4 段残存するが本来は川原石でもう 1・2 石分高くまで積み上げられていた可能性が高い。玄室平面形はほぼ長方形であり、板石を用いて玄門（立柱石）としている。側壁は基底石の一部に長手積が確認できるが、基本的に小口積している。最大で 8 段、1.3 m 残存しているが、本来はもう 1・2 段程度積載され、1.5 ~ 1.7 m 程度の高さであった可能性が高い。使用石材は奥壁の 1 段目と右側立柱石が板状の角砾、それ以外は 20 ~ 50cm の川原石を使用している。

奥壁と側壁の接続については、奥壁 1 段目の鏡石を挟み込むように側壁を積み上げ、鏡石の上部からは側壁石材と奥壁石材を組み合わせるように積み上げている。側壁隅の持ち送りが著しく、天井側壁側はドーム状に積み上げられていた。

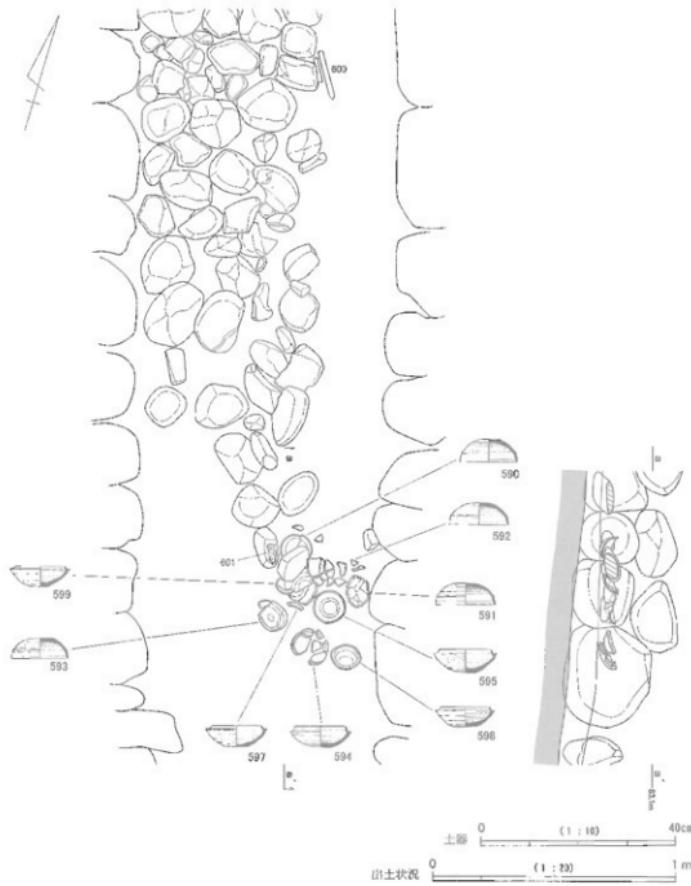
天井石 天井石は大型の角砾を用いている。玄門手前まで 5 石確認することができる。使用された石材は長さ 40 ~ 80cm、幅 80 ~ 100cm の角砾であり、その長さを足すと、長さ 2.7 m 程度となるが、石室の半分程度の長さしかなく、玄室全体を覆うにはもう 2、3 石不足している。

床面 床面には敷石が設置される。川原石を用いており、1 面のみである。敷石は玄室全体に敷設されているわけではなく、奥壁から 3.5 m の範囲に設置されるが、奥壁から 0.8 ~ 1.0 m の範囲はやや空間があり、奥壁側は石室幅全体に、中央は右側壁側のみ敷設され、奥壁側と中央の 2 箇所に敷き分けが存在する。これは設置される敷石の大きさにも表れており、奥壁側は 20cm 以上の川原石を中心に、中央は 20cm 以下の川原石を中心に設置している。奥壁側の敷石は長さ 0.8 m で、幅は約 1 m で側壁間を埋める。中央の敷石は長さ 2 m、幅 0.7 m である。

閉塞 石室玄門付近で閉塞石が確認できるが、残存状況が良好ではなく、1 段の残存である。10 ~ 30cm 前後の川原石を用いている。第 128 図の A のところまで石材が確認できることから、羨道内に閉塞石が流出した可能性もある。その想定が正しければ、玄門付近と、羨道部分に流出した石材の大きさが異なることから、羨道に流出したものが追葬時の閉塞石である可能性がある。

## (4) 遺物の出土状況 (第 130 図, 図版 5・58)

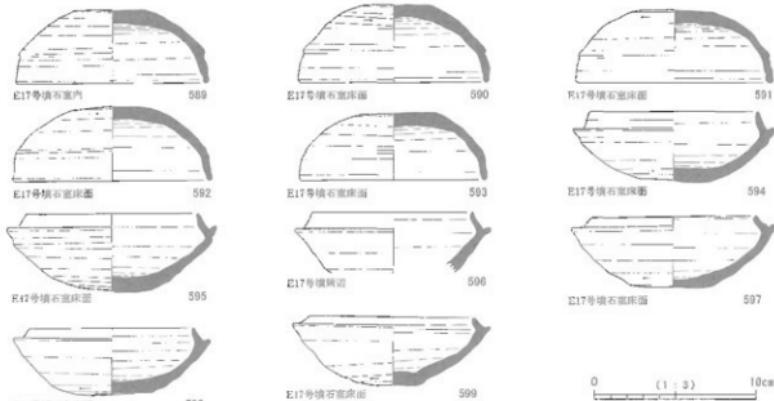
遺物は玄門近く左側壁側の敷石が敷設されない箇所から須恵器坏身 5 点 (594・595・597 ~ 599)・坏蓋 4 点 (590 ~ 593) がまとまった状態で出土しているが、坏身・坏蓋を組み合わせた状態ではなく、坏身 5 点は口縁を上に向けた状態で、坏蓋 4 点は口縁を下に向けた状態で出土した。つまり、組み合せ関係を崩して副葬した可能性が高い。



第130図 上神堆E17号墳横穴式石室遺物出土状況図

また、中央よりの敷石横から鉄鉾1点（600）が鉄先を南側に向けた状態で、南の敷石上から石突1点（601）が先端を南に向けた状態で出土した。本来は鉄鉾・鉄石突で組合せ関係にあると考えるが、鉄鉾が切先を南側に向けているため、木柄に両者が装着された状態を保持していない。副葬された後鉄鉾の方向が変えられた、あるいは副葬段階で鉄鉾のみ取り外して副葬した、の両者の可能性を考えられる。

このほか、須恵器坏蓋（589）が石室内から出土した。出土状況図には示していないが上記の須恵器がまとめられて出土した箇所近くから出土しており、同じ位置に副葬されていた可能性が高い。



第131図 上神増E17号墳出土土器実測図

## (5) 出土遺物 (第131・132図、第37・39表、図版89・91・92)

鉄製鉢1点(600)・石突1点(601)、須恵器環身6点(594～599)・环蓋5点(589～593)が石室内および石室周辺から出土した。

なお、石突の断面図横に掲載した遺物は石突の鉄製目釘であるため、遺物番号は付加していない。

土器 石室床面から須恵器環身5点(594～595、597～599)、环蓋4点(590～593)、石室内から环蓋1点(589)、石室周辺から須恵器環身1点(596)が出土した。

环蓋は、天井部と口縁部の間に明瞭な稜をもつもの(589～591)と、稜が目立たず、凹線でその境を示すもの(592・593)がある。前者は、口縁部内面に凹線が確認でき、やや古い傾向を示す。前者は口径11.3～12.1cmで、器高4.5～4.7cmである。後者は口径11.1～11.8cm、器高4.1～4.5cmである。

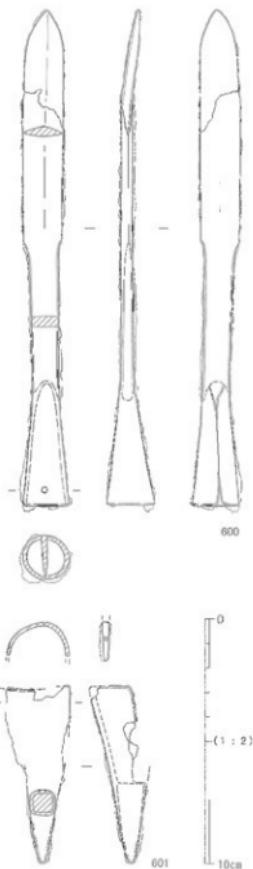
环身は立ち上がりが比較的高いもの(594・595)と、低いもの(597～599)の2者がある。前者がやや大きく、口径10.3～10.4cm、器高4.3～4.8cmである。後者は口径9.9～10.1cm、器高4.1～4.4cmである。

この他、石室周辺から須恵器環身1点(596)が出土した。比較的高い立ち上がりで、口径9.8cmである。

鉄器 鉢(600)、石突(601)が出土した。本来は組合せ関係にある可能性が高い。

鉄製鉢(600)は鉢身、頸部、袋部で構成される珍しい形状の鉢である。全長20.2cm、鉢身長9.6cm、鉢身幅1.6cm、頸部長5.6cm、幅1.1cm、厚さ4mm、袋部長5.0cm、袋端直径1.9cmである。鉢身は片側のみ錫が確認できるレンズ形に近い片錫造で、頸は撫閥、頸部は断面長方形で、頸部分で一旦幅を狭めた後、直線的に袋部に繋がる。袋部は鉢身に比べて非常に割合が低い。袋部の断面は円形である。袋端部付近、断面方形の鉄製目釘が打ち込まれる。合わせ目の反対側(図面左側)には目釘孔が穿たれているが、合わせ目部分(図面右側)には目釘孔は確認できず、目釘の先端は合わせ目の内側で止まっている。目釘の頭部は失われているため不明であるが、鉢と木柄を固定するため打ち込まれた後、袋部の外側部分を叩いて遣す(かしめる)程度で、特別な工作はされていなかった可能性が高い。

石突(601)は逆円錐形で袋端部から約4.0cmのところで中実の石突先端となる。袋部の断面は円形、石突先端の断面は隅丸方形である。

第132図 上神増E17号墳横穴式石室出土  
銅製品実測図

なお、鉄鉤が本来の位置近くで鉢身と袋部を反対に移動させられ、本来の切先の位置に袋部が、袋部の位置に切先が位置し、石突が原位置を保持すると仮定するならば、鉢の長さは2.1mと推測できる。また、袋部を起点に切先が180度回転したとすれば2.3m程度に復原できる。したがって、鉢の復原長（石突～鉢先まで）は2.0～2.5mであった可能性が高い。

#### (6) 小結

築造時期について 石室内から出土した壊身5点、壊蓋5点は、口径の大きさや全体的な形状から遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ期、7世紀前葉）に位置づけることができるから、E17号墳の築造時期も、その時期に位置づけることができる。

追葬について 出土した須恵器は同じ箇所にまとめられた状態で出土することから、出土位置からは時期差を認められない。しかし、たちあがりが低く短い壊身（597～599）は遠江Ⅳ期前半（飛鳥Ⅱ期、7世紀前半～中頃）まで降る可能性がある。また、敷石に敷き分けが確認できること、閉塞が2回行われた可能性があることから、少なくとも1回は行われた可能性が高い。

したがって、遠江Ⅲ期末葉に築造され、遠江Ⅳ期前半に追葬された可能性が高い。

# 第5章 古墳以外の調査成果

## 第1節 繩文時代の遺構と遺物

### 1. 隕穴

上神増E古墳群E-3区でE9・10号墳の所在する尾根上から東に下る斜面の稜線に沿って、隕穴8基がほぼ等間隔に配置された状態で出土した（第133図、図版27-2）。

各土坑に共通する特徴は、円形の掘り方で底に逆茂木を設置するための小穴が掘削されていることがある。各土坑の規模は第32表に示した。土坑の大きさは1.3～1.7mであり、深さは0.7～2.2mである。杭穴の大きさは0.1～0.3m、深さ0.14～0.30mである（第134・135図、第32表、図版59）。

隕穴は等間隔で配置されることから計画的に掘削されて  
いることは明らかである。縄文人の狩猟戦略に基づき隕穴  
を同時期に掘削し、機能させていた蓋然性が高い。

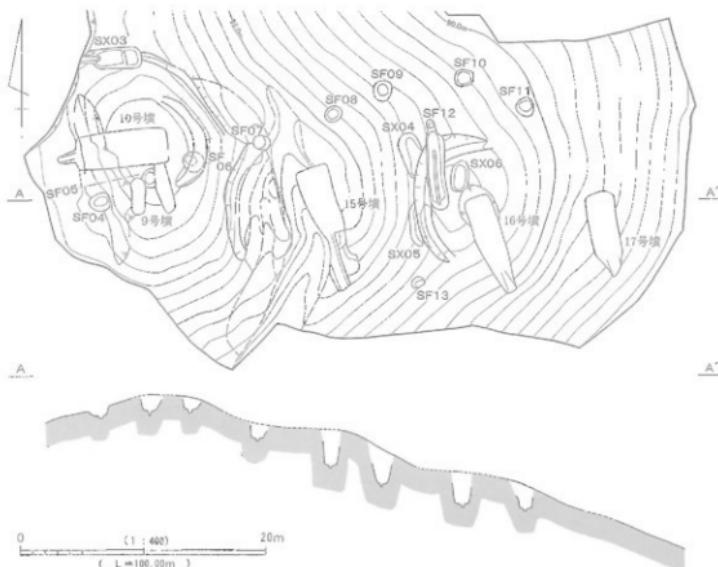
### 2. 遺構に伴わない遺物

なお、縄文時代の遺物としては、E-1区でE6号墳の墳丘から出土した深鉢（第4章第6節7、第82図431）のほか、小片で文様等が施されていない縄文土器が出土しておおり、これらは縄文前期のものである。

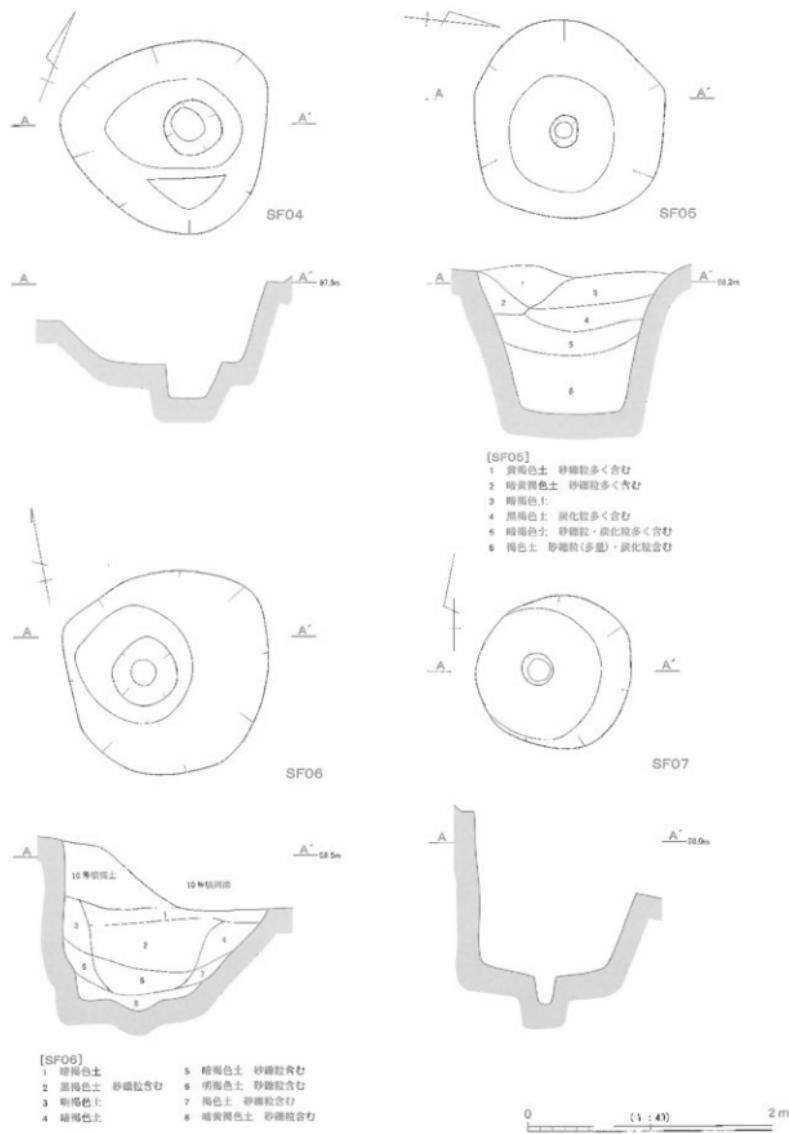
第32表 隕穴一覧表

遺構名	大きさ (東西×南北)	深さ	逆茂木底 の大きさ	逆茂木底 の深さ	備考
SF04	1.68×1.62	0.68	0.24～0.28	0.28	遺物なし
SF05	1.62×1.56	1.20	0.14～0.14	0.23	遺物なし
SF06	1.66×1.67	1.00	0.20～0.21	0.30	遺物なし
SF07	1.28×1.26	1.36	0.18～0.19	0.24	遺物なし
SF08	1.32×1.32	2.14	0.17～0.18	0.18	遺物なし
SF09	1.57×1.76	1.72	0.12～0.14	0.20	遺物なし
SF10	1.50×1.58	1.82	0.14～0.15	0.14	遺物なし
SF11	1.43×1.50	1.36	0.10～0.12	0.26	遺物なし

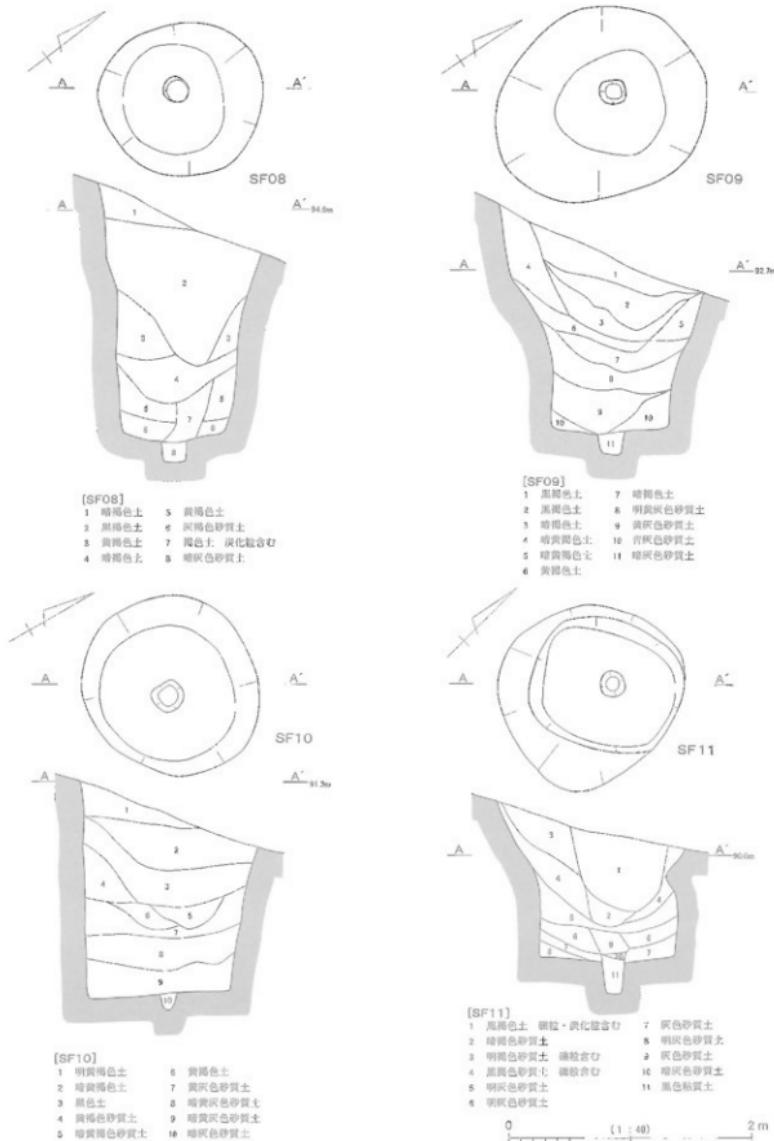
単位(m)



第133図 隕穴の位置



第134図 陪穴完掘状況図①



第135図 脳穴完掘状況図②

## 第2節 古代の遺構と遺物

### 1. 火葬墓の概要

上神増B古墳群B-1区でSF14、SF15、E古墳群E-3区でSF03、SF13の4基が確認された。以下に個々の特徴を述べる。<sup>5555</sup> 蔵骨器を伴うことから墓であることは間違いなく、火葬骨を納めた火葬墓の可能性が高いが断定的ではなく、改葬骨を納めた古代墓の可能性も残る。

上記4基の火葬墓の营造場所が異なるため、少なくとも3つの营造主体が存在した可能性を考えられる。また、古墳の近くに古墳を避けるように营造しており、古墳となんらかの関係があった可能性が想定できる。

なお、石材が抜き取られているため確定的ではないが、藏骨器を石材で囲むSF03とSF14は一部に石材がなかった可能性があり、上神増B8、E14号墳のようなC字形に近い石室を模造した可能性も残る。

以下に、B区、E-3区の順で記載する。また、墓壙（土坑）の規模については、第33表に示す。

### 2. 火葬墓 SF14（第136・137図、第33・37表、図版8・60・93・95）

B-1区のB5号墳の周溝北側約2.5mで確認された。

**墳墓の構造** 地山を掘削して築いた円形墓壙（土坑）の中央に土師器赤彩壺を据え、その周囲には人頭大の川原石でL字形に囲む。土坑と残存する2石の関係

からすると、本来は東側から南側にかけても石材が設置されており、土師器壺を完全に取り囲んでいた可能性が高い。石材で藏骨器を取り囲む方式は、横穴式石室を想定させ、横穴式石室の系譜上にある可能性を考慮しておく必要がある。

なお、この藏骨器の埋葬方法（墳墓の構造）は東海地方では、岐阜県砂行墳墓、浜松市半田山A古墳群KSK1に類似している（岐阜県文化財保護センター2000）。

**出土遺物** 藏骨器は赤彩された土師器壺（604）で、胴下部～底部のみが出土した。赤彩は現状では残存部位の上部のみで確認されるだけであるが、本来は外面全体に塗布されていた可能性が高い。ただし、底部まで赤彩されていたかどうかは不明である。

底部には直径1cm未満の円孔3孔が等間隔に穿たれている。この穿孔は土器の焼成後に底部から開けられたものである。底部は平底である。胴部は底部から外側に向かって丸みを持って立ち上がるもので、球胴に近い形状であった可能性が高い。外面には細かいハケ調整が施されている。胴部径21.8cm、底部径8.3cmである。

なお、この内部に堆積した土砂を洗浄したが人骨や微細遺物は出土していない。

### 3. 火葬墓 SF15（第136・137図、第33・37表、図版8・60・93・95）

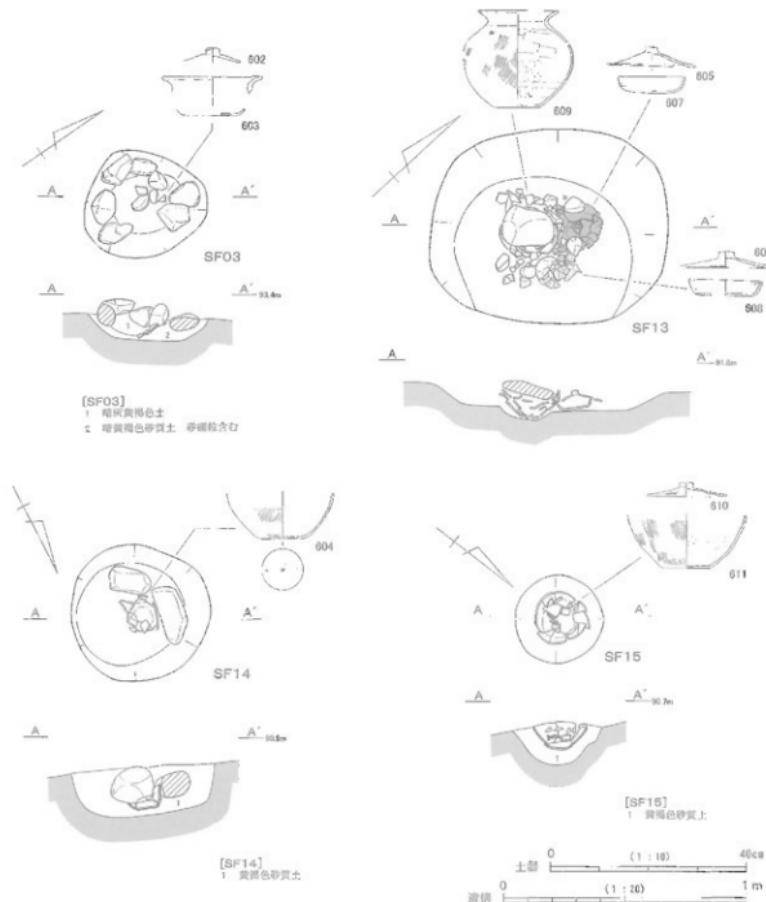
SF14の南0.8m、B5号墳の周溝北側2.0mで確認された。SF14と非常に近い位置に营造されていることから、それと関連する墳墓であることは確実である。

**墳墓の構造** 地山を掘削した円形墓壙を藏骨器の底部の形状に合わせて埋め戻し、その中心に藏骨器である土師器赤彩壺を正置の状態で納めている。SF14のような石囲いは行われていない。

**出土遺物 蔵骨器** 蔵骨器は赤彩された土師器壺(611)で、胴下部～底部のみが出土した。赤彩範囲は外面全体に及び、一部底部まで塗布されている。ただし、底部全体が赤彩されていたかどうかは風化が進み、明確ではない。壺の底部は平底である。胴部は底部から外側に向かって丸みを持って立ち上がるもので、球胴に近い形状であった可能性が高い。外面には細かいハケ調整が施されている。底部径10.9cm、胴部径24.5cmであり、SF14のものよりもやや大きい。

**蔵骨器蓋**(610)は摘みを有する土師器蓋で外面のみ全体に赤彩されている。つまみは擬宝珠形であるが接合部は若干くびれ、頂部は平坦である。天井部はハ字形に開く低平な天井部である。

なお、墓壙内から出土した土砂を洗浄したが人骨や微細遺物は確認できなかった。



第136図 古代墳墓実測図および遺物出土状況図

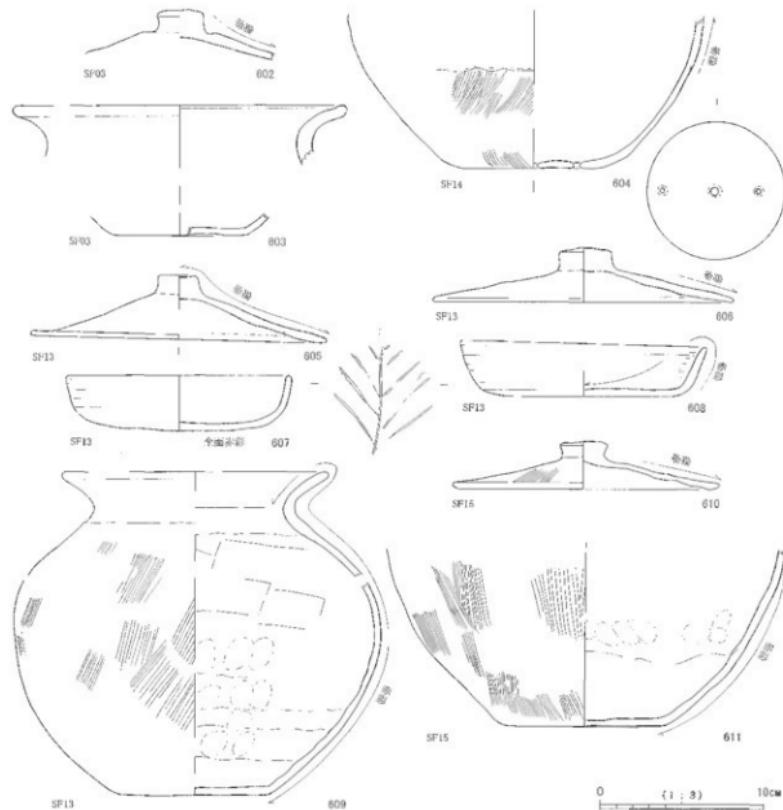
## 4. 火葬墓 SF03 (第136・137図, 第33・37表, 図版8・60・92・95)

E 11号墳の北東側約4mの地点で確認された。E 12号墳とやや離れているものの、関連する可能性がある。

**墳墓の構造** 地山を掘削して構築したほぼ円形の墓壠の外壁に沿って拳大の礫を巡らせ、その中央に蔵骨器として土師器甕が据えられた墳墓である可能性が高い。墳墓の構造は蔵骨器と甕を置きやすくなるためか、掘削した墓壠を埋め戻し、蔵骨器と甕を据えている。蔵骨器の周囲に巡らせた礫は15cm以下であり、蔵骨器の安定を図るために設置されたと考えるが、上部が削平されており、本来はもう少し高くまで甕が積まれていた可能性もある。墳墓としてはSF14に近い形態であった可能性が高い。

なお、蔵骨器の設置方法であるが、出土した蔵骨器・蓋が原位置を保持せず攢乱されたような状態で出土したことから明確ではないが、SF14・SF15のように正置の状態で埋納された可能性が高い。

**出土遺物** 蔵骨器と蓋が出土している。



第137図 古代墳墓出土土器実測図

藏骨器（603）は土師器甕で、口縁部と底部の破片である。底部は上げ底気味の平底である。口縁部はく字形で、口縁端部はつまみあげられたように若干肥厚する。

藏骨器蓋（602）は擬宝珠摘みを有する土師器蓋で外面のみ赤彩されている。擬宝珠摘みは接合部に括れがなく、頂部は平坦である。口縁部は失われており、ハ字形に開く形状である。口径は不明である。

## 5. 火葬墓 SF13（第136・137図、第33・37表、図版8・60・93・95）

E-3区E 16号墳周溝南東隅から北東約3.5mの位置に構築されている。

墳墓の構造 SF13は、地山を掘り込んで構築した隅丸方形の墓壙で、墓壙の規模は0.95×0.95mである。墓壙の中心に円形の浅い土坑を掘り込み、二段墓壙とし、この部分に口縁を上に向かた正置の状態で土師器蓋を据え、その外側に土師器の蓋付坏を正置の状態で2組埋納している。土師器蓋は人頭大の板状の川原石に押しつぶされた状態で確認されたが、壺内部からは蓋が確認できないことから、蓋はこの人頭大の川原石であった可能性が高い。この川原石の大きさは20×15×5cmである。

出土遺物 蔵骨器のほか副納（葬）品として土師器坏・蓋2組が出土した。

藏骨器は、土師器蓋（609）で、外面全体に赤彩されている。底部は平底で、胴部は底部から外側に向かい内湾しながら立ち上がり、胴部中央やや上位に最大径があるやや扁平な球形である。口縁部はく字形で、口縁端部は丸く収められる。口径16.4cm、器高は19.6cmに復元できる。

土師器蓋（605）と土師器坏（607）が組合せ関係にある。両者ともに赤彩が確認できる。蓋は擬宝珠形のつまみであるが、接合部は括れず、頂部は回む。天井部はハ字形に広がり、口縁部付近で一旦肥厚し、口縁端部は丸く仕上げられる。口径18.1cm、器高4.0cmである。坏（607）は平底で、口縁部はやや外方に向かって立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。口径13.5cm、器高3.4cmである。

土師器蓋（606）と土師器坏（608）が組合せ関係にある。両者ともに赤彩が施される。蓋（606）は擬宝珠形の摘みで、接合部は括れず、頂部はやや突起する。天井はハ字形に広がるもの低平である。口径18.4cm、器高3.3cmである。坏（608）は平底で、口縁部は外上方に向かって直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。口径14.9cm、器高3.4cmである。

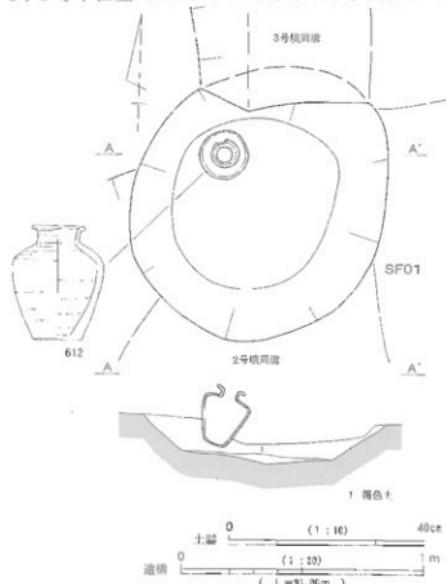
## 6. 小結～墳墓の築造時期について～

ここでは4基の墳墓の築造時期についてまとめておきたい。

SF03の土師器甕（603）、SF13の土師器坏・坏蓋、SF14の坏・坏蓋、壺の特徴は浜松市（旧細江町）井通遺跡の土器編年における井通遺跡IV期新段階（丸杉2007）、鈴木敏則氏による遠江編年V期後半（鈴木2001）の古段階に位置づけられる土師器と特徴が一致しており、これらの土師器は井通IV期新段階、遠江編年V期後半古段階に位置づけることができる。両氏はとともにそれらを8世紀後半に位置づけており、上神増E古墳群で確認された4基の墳墓は8世紀後半の造営である可能性が高い。

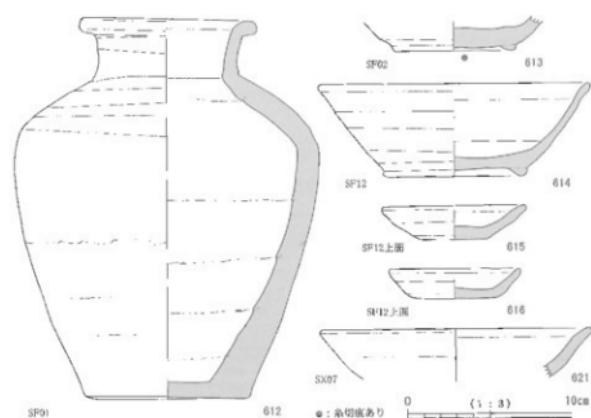
### 第3節 中世の遺構と遺物

#### 1. 1号中世墓 (SF01, 第138図, 第37表, 図版60・94・95)



第138図 中世墓SF01実測図

#### 2. 炭窯 (第139～141図, 第34・37表, 図版61・94・95)



第139図 SF01および炭窯ほか出土遺物実測図

E-1区でE-2号墳およびE-3号墳の周溝を破壊して、造営された1号中世墓(SF01)が出土した。

**構造** SF01は、地山を掘り込んだほぼ円形墓壙で、1.05×1.05m以上、深さ0.3mである。藏骨器は墓壙の中心ではなく、やや北西に偏った位置に口縁部を上に向いた正位の状態で埋置されていた。

**出土遺物** 藏骨器として使用された常滑壺1点(612)が出土した。

壺の口縁部は外反させ、玉縁状に成形する。胴部は粘土紐巻上げ技法により成形され、胴部下半はヘラケズリを施している。底部は平底である。

この陶器の帰属年代は愛知県一宮市法園寺中世墓遺跡(一宮市教委1995)の事例などを参考に、口縁部の形状から常滑5～6型式(赤根・中野1994)、13世紀中頃～後半に位置づけることができる。

SF12、SF02の2基が出土した。

##### (1) SF12

SF12は、E-3区の南側ほぼ中央で確認した。E-16号墳の墳丘から周溝を破壊して構築されている。

**構造** 焚口が北側、煙出が南側に設けられており、ほぼ南北に主軸を取る。この焚口の配置は、北側から吹き込む風を意識した配置であった可能性が高い。

焚口は梢円形で、緩やかに下った後、焼成室に至る。焼成室は隅丸長方形で、床面は焚口から煙出までほぼ水平である。床面中央に細長い溝が掘られるとともに、天井を支えるための柱が設置された小土坑が4基確認できる。

全長7.4m、焚口長0.85m、幅0.7m、焼成室長6.55m、幅1.45mである。

遺物出土状況 遺物は中央底部に近い位置の覆土中から山茶塊(614)1点、覆土の上層から山眞(615・616)2点が出土した。

これらの遺物は、炭窯を廃棄する際の祭祀に伴い、供獻された遺物である可能性がある(太田1991)。

出土遺物 SF12からは山茶塊1点、小眞2点が出土した。

山茶塊(614)は、底部から外上方に向かって直線的にたちあがり、口縁部は外反させ、丸く收める。台部は低く潰れた三角形である。口径16.6cm、器高約5.7cmである。

小眞(615・616)は底部の糸切痕はナデ消される。底部から外上方に向かい直線的にたちあがる。口径は8.8~9.0cm、器高1.8~2.1cmである。

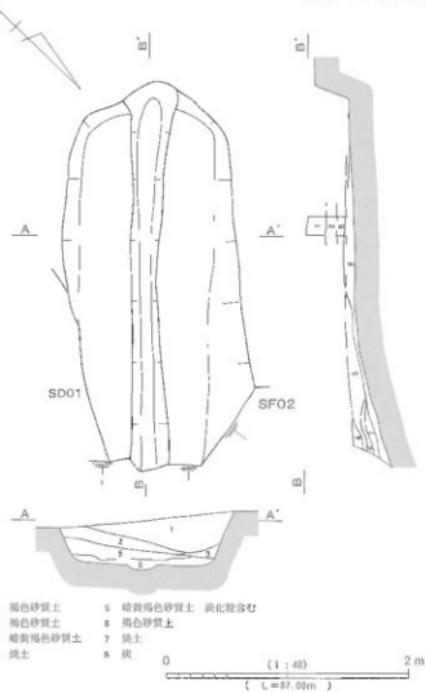
614~616ともにその特徴から渥美・湖西産山茶塊で、松井一明氏による渥美湖西編年II期、12世紀前半に位置づけられる(松井1989)。したがって、SF12はその段階に機能していた可能性が高く、これらの遺物が覆土からの出土で、かつ炭窯廃棄に伴う儀礼に伴う遺物であるとすれば、SF12の操業自体は若干遅る可能性もある。

炭化材の樹種同定と年代測定について SF12から出土した5点の炭化材の樹種同定および放射性炭素14の自然科学的分析を行った。分析の結果、炭窯内から出土した炭化材はコナラ属コナラ亜属コナラ節ブナ科であり、その年代は補正年代で910±30BP~960±30BP(実年代で西暦1000年頃)である可能性が高いことが判明した。コナラ節は重硬で強度が高い材質のため薪炭材としては優良とされることから、この炭化材は製炭された木炭である可能性が高いことが判明した(第7章第2・3節参照)。

この炭素分析による自然科学的分析と山茶塊編年による時期差がおよそ100年近く存在しており、山茶塊は埋没過程で流れ込んだ可能性も考慮しておく必要がある。

## (2) SF02

SF02は、E-1区のE3号墳の東10m、SD01を破壊して構築される。細尾根の頂部を尾根筋に直交するように掘削している。

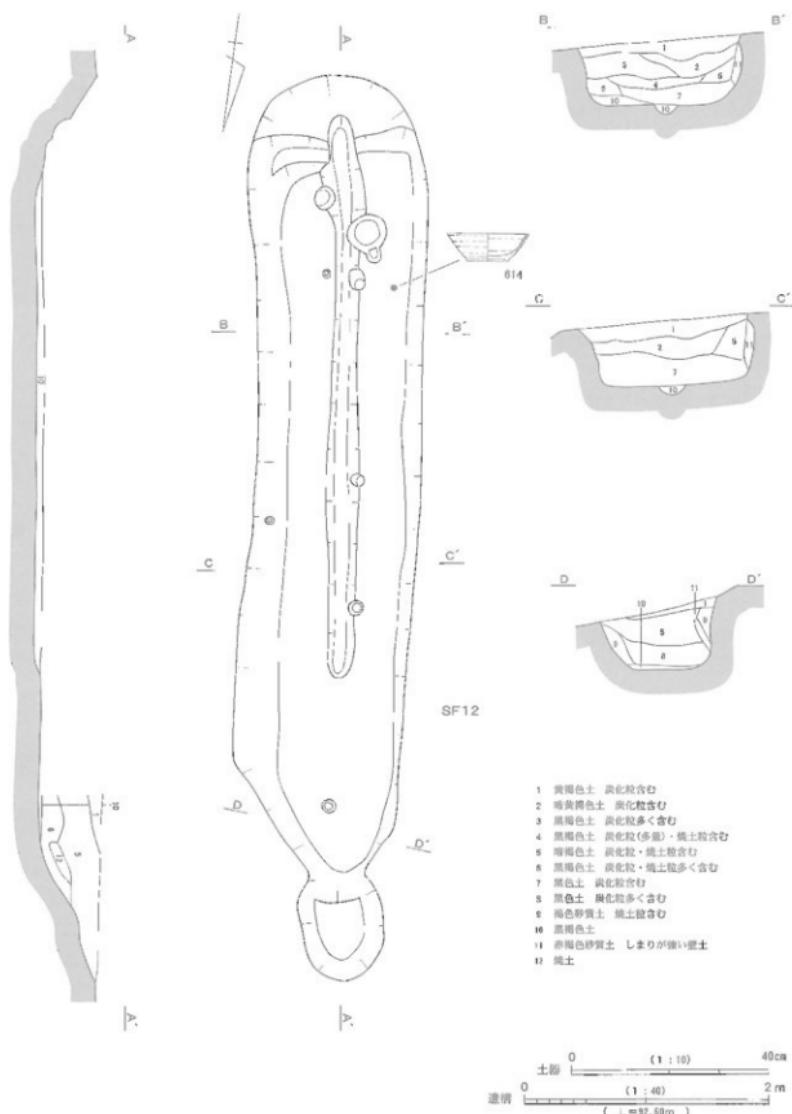


第140図 炭窯実測図①

第34表 炭窯一覧表

造構名	場所	主輪方位	長さ	幅	遺物	備考
SP02	多4区 E-3H区	N-134°6'-W	3.2+	1.3	山茶塊	底に洞あり
SF12	E-3H区	N-352°1'-W	7.4	1.4	山茶塊・小眞2	底に洞あり。また天井を支えるための柱穴あり。

単位(m)



第141図 崩落実測図②

**構造** 北東側が既に失われているが、南側に焚口が確認できないことから、SF12 と同様に焚口が北側に設けられ、残存する南側が煙出である可能性が高い。この焚口の配置は、E 1～E 3号墳、SF02 が築かれた尾根の北側谷部から吹き込む風を意識して構築した可能性が高い。

炭窯は南東一南西に主軸を取る。焼成室は隅丸長方形であったと考えられ、残存する北東の床面は急激に下がる傾斜をもつ。煙出までほぼ水平である。

床面中央に細長い溝が掘られているが、SF12 のように小穴は確認できない。

**出土遺物** SF02 は覆土中から山茶塊 1 点 (613) が出土した。

山茶塊 (613) は、底部から外上方に向かって直線的にたちあがる。台部は低く潰れた三角形である。

613 はその特徴から渥美・湖西産山茶塊で、松井一明氏による渥美湖西編年 II 期、12 世紀前半に位置づけられる（松井 1989）。

### 3. 性格不明遺構

#### (1) SX07 (第 85 図、第 37 表、図版 44)

E－3 区の尾根上、E 7 号墳上に造られた L 字形に石材が並べられた遺構である。

**構造** 人頭大の川原石を L 字形に並べており、東面石列の南側は E 7 号墳の埋葬施設を調査する段階で、石室内に崩落した石材として取り上げてしまったため、埋葬施設を構成する北側の板石部分までしか現状で確認できない。このため、この石列の南側がどこまで延びていたのか不明である。東面の石列は 0.2～0.3 m の拳大の川原石の小口面を東西に向けて一列に並べていたと想定する。

北面の西側は斜面の崩落に伴い石材が移動しており、こちらも不明である。

残存する部分は方形を意識して石材を並べたようにも観察できることから、集石墓あるいは小型の建物の基壇の可能性がある。

**出土遺物** SX07 を覆う土砂内から山茶塊 1 点 (621) が出土した。

山茶塊は見込みから緩やかに立ち上がった後、口縁部が外反するものである。口径 16.2cm 前後である。この形態的特徴や、胎土の特徴から渥美・湖西産山茶塊で、松井一明氏による湖西渥美編年 II 期（12 世紀前半）に位置づけられる可能性が高い（松井 1989）。

## 第4節 その他の遺構と遺物

### 1. 性格不明の遺構 (第142・143図)

第35表、図版61)

SX01～SX07の7基が出土した。なお、SX07については第3節で記載した。

#### (1) SX01

E-3区のE11号墳の北東側周溝部分にある遺構である。E11号墳の周溝との

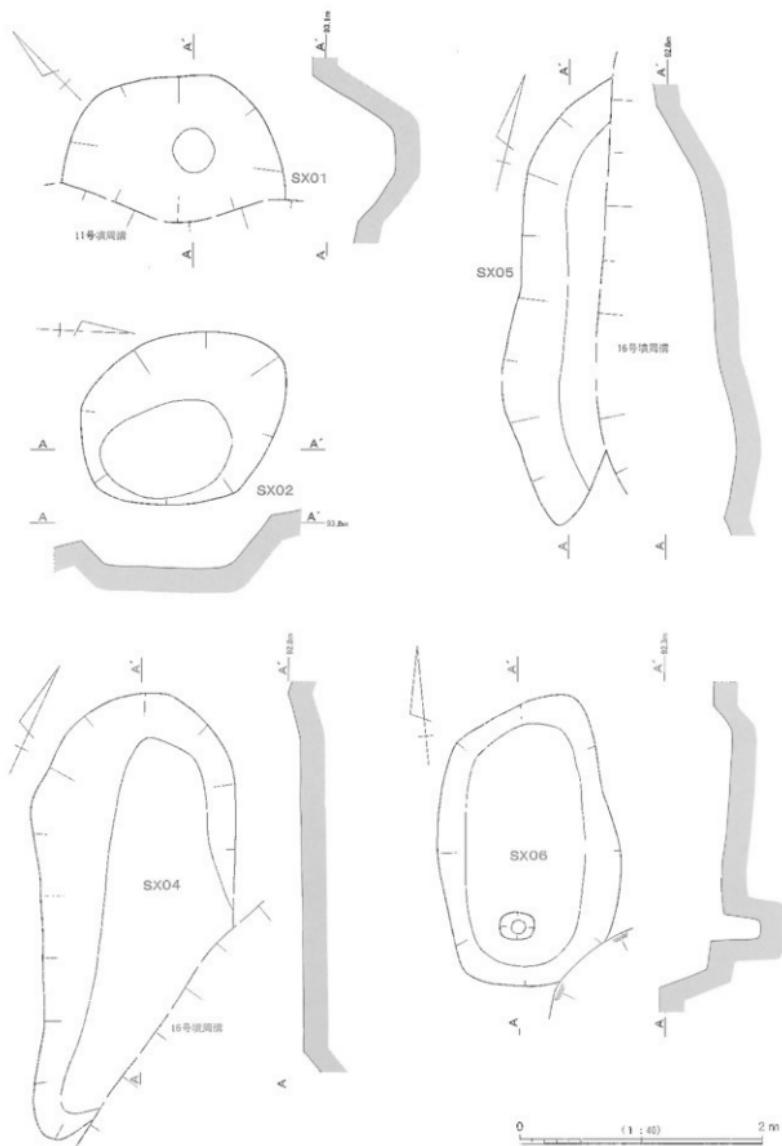
切り合い関係は確認できなかった。円形の土坑であった可能性が高いが、上端に比べて下端は狭い。

#### (2) SX02

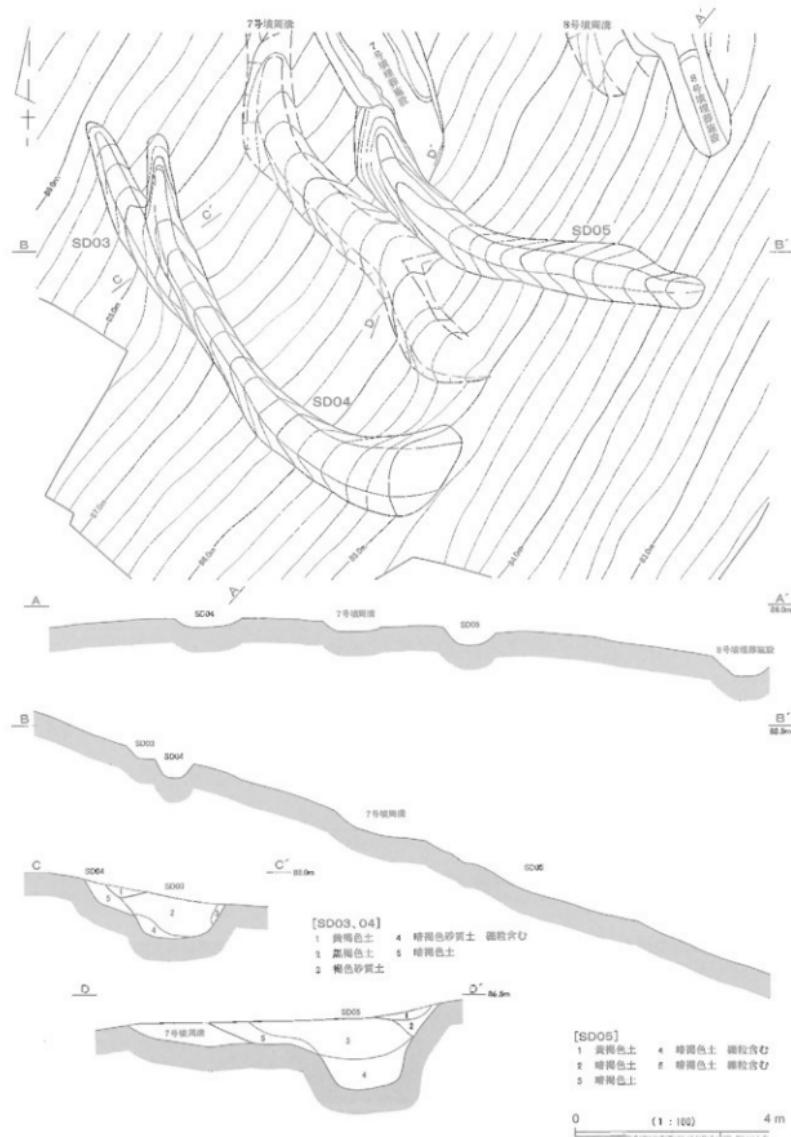
E-3区のE11号墳南西の周溝部分にある遺構である。E11号墳周溝との切り合い関係は不明である。不整形な円形の土坑状遺構である。

第35表 性格不明の遺構一覧表

遺構名	場所	形状	大きさ(奥辺×短辺)	出土遺物	備考
SX01	E-3区	椭円形?	1.8×1.2	なし	
SX02	E-3区	不整形円形	1.2×0.9	なし	
SX03	E-3区	椭丸長方形に崩道状の溝がある。	5.0×1.65	なし	横穴式本室あるいは横穴式土塀の可能性がある。
SX04	E-3区	椭丸長方形?	3.7×1.65	なし	
SX05	E-3区	椭円形?	3.7×0.8	なし	
SX06	E-3区	椭丸長方形	2.35×1.5	なし	
SX07	E-3区	方形石組		山茶唯1	中世墓の可能性あり。 E7号埴溝前に構築か。 単位(m)



第143図 性格不明の遺構実測図②



第144図 满状造構実測図①

## (3) SX03

SX03は、E-3区のE 10号墳の北側を掘り込んで形成された遺構である。隅丸長方形の小口側に溝が取り付く形状で、あたかも横穴式石室の掘方（墓壙）のようである。石材を設置した痕跡、敷石は確認できず、遺物も一切出土していないことから、性格を特定することは難しい。遺構の覆土には、炭化物が多く含まれるほか、長方形の掘り込み部分に段差が確認できる点が他の横穴式石室と異なるため、炭窯のような遺構か、あるいは三方原台地や磐田原台地で確認される横穴式土壤の可能性も排除できない。

なお、掘方内の段差は地震等による地滑りで生じた可能性も考慮しておく必要がある。

## (4) SX04

E-3区のE 16号墳の周溝北西側に位置し、周溝に破壊される遺構であり、古墳時代後期以前の遺構である可能性が高い。SX04は細長い楕円形である。遺物の出土はない。

## (5) SX05

E-3区のE 16号墳の周溝南西側に位置し、周溝に破壊される遺構であり、古墳時代後期以前の遺構である可能性が高い。形状はSX04と類似しており、細長い楕円形である。遺物はない。

## (6) SX06

E-3区のE 16号墳の墓壙北側にある遺構であるが、それとの関係は不明である。やや不整形な隅丸長方形で、底部南側には柱穴のような掘り込みがある。遺物はない。

## 2. 溝状遺構（第144・145図、第36表、図版61）

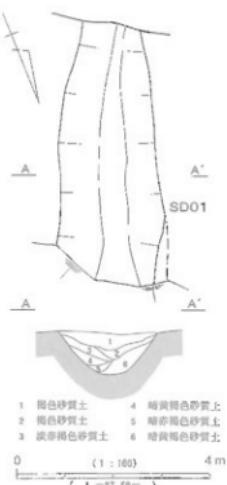
古墳に伴わない溝状遺構が5条出土した。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SD01はE-1区で掘削されたもので、古墳の周溝の可能性と墓域を区画する区画溝である可能性もある。SD03～05はB-1区で確認されたもので、古墳の墓道などの可能性もある。SD02はE-3区、E 11号墳の周溝内側で確認された。その位置から考えると、周溝と横穴式石室の中間に位置することから、古墳を築造する際の目印となる溝である可能性があるが、その性格を特定することはできない。

## 3. 遺構に伴わない土器

（第146図、第37表、図版94）

上神増E古墳群では、遺構外から須恵器小片が多数出土しているが、小破片のため器形の判明する4点を図示した。古墳の副葬品や古墳祭祀遺物の可能性が高い。

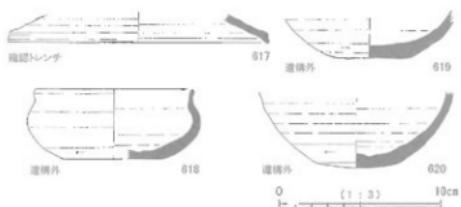


第145図 溝状遺構実測図②

第36表 溝状遺構一覧表

遺構名	場所	長さ	幅	遺物	備考
SD01	E-1区	5.2	2.1	なし	
SD02	E-3区	3.0	1.5	なし	
SD03	B-1区	4.8	0.9	なし	
SD04	B-1区	9.5	2.1	なし	
SD05	B-1区	7.6	1	なし	

単位(m)



第146図 遺構以外の出土土器実測図

# 第6章 出土遺物観察表

## 第1節 上神増A・B・E古墳群出土遺物観察表

### 1. 上神増A・B・E古墳群出土土器・陶磁器観察表

出土位置	調査番号	四隅番号	調査番号	測定範囲	断面	残存部位	残存率(%)	高さ(cm)	幅深(cm)	口幅(cm)	色調		備考
											(内面)	(外面)	
A5号墳 第1埋蔵施設 傾溝	23	1	須恵器	縦	ほぼ全体	95	33.3	35.9	19.2	-	灰(N6/3)	灰(N4/3)	
		2	須恵器	环身	口縁-側縁	16	-	(13.4)	(11.3)	-	灰オリーブ(N5V3/2)	灰(ナード)(N5V2/2)	
		3	須恵器	环身	口縁-側縁	15	-	(12.8)	(11.3)	-	灰(N6/3)	灰(N4/3)	
		4	須恵器	広口	全縫	56	4.4	(16.3)	(8.8)	4.3	灰(10W1)	灰(N5/3)	
		5	須恵器	長脚壺	口縁	7	-	(11.0)	(7.6)	-	灰(Y6/2)	灰(N4/3)	
A5号墳 第2埋蔵施設 傾在	21	6	須恵器	縦?	口縁	20	-	(9.6)	-	-	灰白(2.5V7/1)	灰白(2.5V7/1)	ワイングリッシュ 高耳の可能性ある。
		7	須恵器	縦	底部	10	-	-	(8.0)	-	灰黄(2.5V7/2)	灰(2.5V7/2)	
		8	須恵器	横底	脚部	10	-	(26.4)	-	-	灰白(5V7/1)	灰(5V7/1)	
		9	須恵器	高环	全縫	56	-	(15.0)	(15.0)	(10.5)	灰白(7.5V7/1)	灰(10W1)	
		10	須恵器	長脚壺	口縁-側縁	35	-	(16.5)	(16.5)	-	灰黄(2.5V7/1)	灰黄(2.5V7/2)	
B5号墳 墓室 傾斜	26	37	須恵器	环身	全縫	56	3.1	(9.0)	(9.0)	-	灰(7.5V7/3)	灰(N6/3)	
		38	須恵器	环身	1周	15	-	(9.8)	(9.8)	-	灰(7.5V7/1)	灰白(7.5V7/2)	
		39	須恵器	环身	全縫	15	3.1	(9.0)	(7.2)	(3.5)	灰(7.5V7/3)	灰(N6/3)	
		40	須恵器	环身	2周	50	2.9	(9.7)	(8.6)	-	灰(7.5V6/3)	灰(N6/3)	
		41	須恵器	环身	1周	5	-	(10.0)	(8.0)	-	灰(N6/3)	灰(N6/3)	
		42	須恵器	环身	口縁-側縁	35	-	(16.5)	(16.5)	-	灰黄(2.5V7/1)	灰黄(2.5V7/2)	
		43	須恵器	环身	脚部	22	-	(16.4)	(16.4)	-	灰白(5V7/1)	灰白(5V7/1)	
		44	須恵器	环身	口縁-側縁	20	-	(14.1)	(14.1)	-	灰白(5V7/3)	灰白(5V7/1)	
		45	須恵器	环身	全縫	25	3.7	(11.2)	(12.0)	-	オリーブ灰(10W6/3)	黄(10Y5/3)	
		46	須恵器	环身	ほぼ全縫	99	3.7	15.0	14.5	-	灰白(2.5V7/2)	灰白(2.5V7/2)	
B7号墳 石室内 傾斜	37	47	須恵器	环身	全縫	100	2.1	15.4	15.2	-	灰白(5V7/3)	灰白(5V7/1)	
		48	須恵器	环身	2周	50	2.9	(9.7)	(8.6)	-	灰(7.5V6/3)	灰(N6/3)	
		49	須恵器	环身	1周	5	-	(10.0)	(8.0)	-	灰(N6/3)	灰(N6/3)	
		50	須恵器	环身	口縁-側縁	35	-	(16.5)	(16.5)	-	灰黄(2.5V7/1)	灰黄(2.5V7/2)	
		51	須恵器	环身	脚部	22	-	(16.4)	(16.4)	-	灰白(5V7/1)	灰白(5V7/1)	
		52	須恵器	环身	口縁-側縁	20	-	(14.1)	(14.1)	-	灰白(5V7/3)	灰白(5V7/1)	
		53	須恵器	环身	全縫	25	3.7	(11.2)	(12.0)	-	オリーブ灰(10W6/3)	黄(10Y5/3)	
		54	須恵器	环身	ほぼ全縫	99	3.7	13.9	13.8	9.7	灰白(2.5V7/2)	灰白(2.5V7/1)	
		55	須恵器	环	ほぼ全縫	98	4.0	13.5	13.5	7.9	赤(10R4/6)	赤(10R4/6)	全面赤系
		56	須恵器	环	ほぼ全縫	97	3.6	16.8	16.4	22.8	赤(10R4/9)	赤(10R4/9)	全面赤系
E1号墳 墓室 傾斜	46	57	須恵器	环身	受部	10	-	(12.6)	-	-	青灰(5B6/1)	青灰(5B6/1)	
		58	須恵器	环身	脚部	25	-	-	-	-	青灰(5B6/1)	青灰(5B6/1)	
		59	須恵器	环身	口縁	20	-	(14.2)	(14.2)	-	灰白(5V7/3)	灰白(5V7/1)	
		60	須恵器	环身	全縫	25	3.7	(11.2)	(12.0)	-	灰白(5V7/2)	灰白(5V7/1)	
		61	須恵器	环身	口縁	90	4.3	11.3	11.3	-	灰(2.5V7/2)	灰(2.5V7/2)	
		62	須恵器	环身	全縫	100	4.1	13.5	13.5	5.9	灰白(5V7/1)	灰白(5V7/1)	
		63	須恵器	环身	ほぼ全縫	99	3.7	13.9	13.8	9.7	灰白(2.5V7/1)	灰白(2.5V7/1)	
		64	須恵器	环身	口縁	97	3.6	16.8	16.4	22.8	赤(10R4/9)	赤(10R4/9)	
		65	須恵器	环身	口縁	98	4.0	13.5	13.5	7.9	赤(10R4/6)	赤(10R4/6)	
		66	須恵器	环身	ほぼ全縫	97	3.6	16.8	16.4	22.8	赤(10R4/9)	赤(10R4/9)	
E2号墳 脊蓋	52	67	須恵器	环身	口縁	8	-	(11.2)	(12.6)	-	灰白(5V6/1)	灰白(5V6/1)	
		68	須恵器	环身	脚部	25	-	-	-	-	灰(11N7/9)	灰(11N7/9)	
		69	須恵器	环身	口縁	90	4.7	(14.8)	(14.2)	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
		70	須恵器	环身	全縫	97	3.8	17.7	18.7	-	暗青灰(10BG4/1)	青灰(10BG4/1)	
		71	須恵器	环身	天井	23	-	-	-	-	青灰(5BG5/1)	青灰(5BG5/1)	
		72	須恵器	环身	口縁	15	-	(12.9)	(12.9)	-	暗青灰	オリーブ灰	
		73	須恵器	环身	口縁	18	-	(12.9)	(12.8)	-	(2.5G7/1)	(2.5G7/1)	
		74	須恵器	环身	全縫	90	4.3	11.3	11.3	-	灰(2.5V7/2)	灰(2.5V7/2)	
		75	須恵器	环身	全縫	50	4.7	(10.6)	(10.6)	-	灰黄(2.5V7/2)	灰黄(2.5V7/2)	
		76	須恵器	环身	全縫	99	5.5	12.5	12.4	5.1	灰白(5V6/1)	灰(5V6/1)	
E3号墳 墓室 傾斜	71	77	須恵器	环身	口縁	99	5.3	14.9	12.6	-	淡黄(5Y7/1)	黄(5Y6/1)	
		78	須恵器	环身	脚部	8	-	(14.2)	(12.6)	-	灰白(5V6/1)	灰白(5V6/1)	
		79	須恵器	环身	口縁	17	-	(14.9)	(11.8)	-	灰白(11N7/9)	灰(11N7/9)	
		80	須恵器	环身	口縁	15	-	(14.0)	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	
		81	須恵器	环身	全縫	97	3.8	17.7	18.7	-	(2.5G7/1)	(2.5G7/1)	
		82	須恵器	环身	全縫	50	2.9	13.4	13.0	-	灰白(5V7/1)	灰白(5V7/1)	
		83	須恵器	环身	口縁	15	-	-	-	-	灰白(11N7/9)	灰白(11N7/9)	
		84	須恵器	环身	脚部	25	-	-	-	-	灰白(5V7/1)	灰白(5V7/1)	
		85	須恵器	环身	口縁	95	5.3	14.9	12.6	-	灰白(5V7/1)	灰白(5V7/1)	
		86	須恵器	环身	全縫	85	22.9	26.9	(14.5)	-	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	
E4号墳   墓室 傾斜	76	87	須恵器	环身	1周	15	-	(12.9)	(12.9)	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
		88	須恵器	环身	脚部	75	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
		89	須恵器	环身	口縁	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
E5号墳 墓室 傾斜	71	90	須恵器	环身	口縁	18	-	(12.9)	(12.8)	-	暗青灰	オリーブ灰	
		91	須恵器	环身	全縫	90	4.3	(13.4)	(14.0)	-	灰(2.5V7/2)	灰(2.5V7/2)	
		92	須恵器	环身	全縫	50	4.7	(10.6)	(10.6)	-	灰黄(2.5V7/2)	灰黄(2.5V7/2)	
		93	須恵器	环身	口縁	99	5.5	12.5	12.4	5.1	灰白(5V6/1)	灰(5V6/1)	
		94	須恵器	环身	口縁	99	5.3	14.9	12.6	-	淡黄(5Y7/1)	黄(5Y6/1)	
E6号墳   墓室 傾斜	71	95	須恵器	环身	脚部	12	-	(14.9)	(14.0)	-	灰(11N6/9)	灰(11N7/9)	
		96	須恵器	环身	口縁	87	4.2	(14.0)	(12.0)	-	灰白(11N7/9)	灰白(11N7/9)	
E7号墳とE8号墳の間	74	97	須恵器	环身	口縁	98	4.5	13.8	11.7	-	灰(11N6/9)	灰(11N7/9)	
		98	須恵器	环身	口縁	70	4.3	(12.8)	(11.4)	5.1	灰白(11N7/9)	灰白(11N7/9)	
E8号墳   墓室 傾斜	76	99	須恵器	环身	脚部	15	-	(13.2)	-	-	灰(11N7/9)	灰(11N7/9)	
		100	須恵器	环身	口縁	70	161	剥離	36	-	6.0	灰白(12.5V7/1)	灰(12.5V7/1)
E9号墳	77	101	須恵器	环身	口縁	15	-	(14.9)	(11.8)	-	灰白(11N7/9)	灰(11N7/9)	
		102	須恵器	环身	脚部	75	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
E10号墳	77	103	須恵器	环身	脚部	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
		104	須恵器	环身	口縁	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
E11号墳	77	105	須恵器	环身	脚部	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
		106	須恵器	环身	口縁	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
E12号墳	77	107	須恵器	环身	脚部	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
		108	須恵器	环身	口縁	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
E13号墳	77	109	須恵器	环身	脚部	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
		110	須恵器	环身	口縁	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
E14号墳   墓室 傾斜	76	111	須恵器	环身	脚部	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
		112	須恵器	环身	口縁	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
E15号墳	77	113	須恵器	环身	脚部	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
		114	須恵器	环身	口縁	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
E16号墳	77	115	須恵器	环身	脚部	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
		116	須恵器	环身	口縁	50	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
E17号墳とE18号墳の間	74	117	須恵器	环身	天井	12	-	-	-	-	青灰(5B6/1)	青灰(5B6/1)	
		118	須恵器	环身	全縫	15	-	-	-	-	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	

第1圖 上神代A・B・C古墳群出土遺物調査表

出土位置	発掘番号	形態番号	遺物番号	種別	残存部数	残存率(%)	高さ(cm)	幅(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外寸(%)	内寸(%)	備考
E7号墳	84	441	須恵器	环面	全体	90	4.4	14.1	-	-	灰白(57%)/	灰白(57%)/	
		442	須恵器	环面	口縁	65	-	(13.4)	(13.4)	-	灰(56%)/	灰(56%)/	
		443	須恵器	环面	口縁	5	-	(13.1)	(13.0)	-	青灰(58G/1)	青灰(58G/1)	
		444	須恵器	环面	全体	67	5.0	(15.4)	(15.2)	4.8	灰(58G/1)	灰(58G/1)	
		445	須恵器	环面	全体	33	5.3	(15.5)	(15.2)	4.5	灰(7.5YD/1)	灰(7.5YD/1)	
		446	須恵器	环面	全体	57	4.3	(15.8)	(15.7)	-	灰(56%)/	灰(56%)/	
		447	須恵器	環	口縁	25	-	-	14.6	-	黄灰(57%)/	黄灰(57%)/	
		448	須恵器	環	口縁～側面	50	-	-	-	-	灰白(7.5YD/1)	灰白(7.5YD/1)	
		449	須恵器	環	口縁～側面	15	-	(16.3)	(10.2)	-	青灰(5PB5/1)	青灰(5PB5/1)	
		450	須恵器	環	側面	90	-	11.9	-	-	黄灰(57%)/	黄灰(57%)/	
E8号墳	90	451	須恵器	環	部	15	-	-	-	-	灰(7.5YD/1)	灰(7.5YD/1)	
		450	須恵器	环面	全体	30	4.7	(15.6)	(15.6)	-	灰(7.5YD/1)	灰(7.5YD/1)	
		470	須恵器	环面	ばね全体	99	5.0	14.6	11.5	-	灰(57%)/	灰(57%)/	
		471	須恵器	环面	高身	口縁～側面	49	-	10.7	-	灰(54%)/	灰(54%)/	
		474	須恵器	环面	ばね全体	99	4.4	13.7	13.7	-	青灰(5BA1/1)	青灰(5BA1/1)	
		475	須恵器	环面	ばね全体	99	4.4	14.0	14.0	-	青灰(5BB1/1)	青灰(5BB1/1)	
		476	須恵器	环面	全体	80	4.2	(15.4)	(15.5)	-	灰(7.5YD/2)	灰(7.5YD/2)	
		477	須恵器	环面	ばね全体	97	5.3	(14.4)	(11.5)	-	オーリーブ灰(2.5GYV1/1)	オーリーブ灰(2.5GYV1/1)	
		478	須恵器	环面	口縁	5	-	(14.6)	(12.2)	-	暗灰(10BG4/1)	暗灰(10BG4/1)	
		479	須恵器	环面	全体	80	4.0	(15.3)	(13.8)	-	青灰(5BB1/1)	青灰(5BB1/1)	
E10号墳	95	480	須恵器	环面	全体	50	5.5	(15.5)	(12.9)	-	灰(10Y5/1)	灰(10Y5/1)	
		481	須恵器	环面	ばね全体	98	4.9	14.3	13.7	4.8	オーリーブ灰(2.5GYV1/1)	オーリーブ灰(2.5GYV1/1)	
		482	須恵器	环面	刺繡	12	-	(13.9)	-	-	青灰(5BB1/1)	青灰(5BB1/1)	
		483	須恵器	環	ばね全体	98	15.1	9.5	12.0	-	灰(5P5/1)	灰(5P5/1)	
		484	須恵器	高身	口縁	15	-	(10.6)	(10.6)	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		485	須恵器	高身	口縁～側面	30	-	(10.0)	(10.4)	(6.8)	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		486	須恵器	高身	刺繡	20	-	-	-	9.7	暗灰(5BB1/1)	暗灰(5BB1/1)	
		487	須恵器	高身	全体	20	-	(11.3)	-	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		488	須恵器	高身	刺繡	15	-	(10.6)	(10.6)	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		489	須恵器	高身	全体	95	2.2	11.4	8.6	-	灰白(3.5YD/1)	灰白(3.5YD/1)	
E11号墳	105	490	須恵器	高身	刺繡	15	-	-	-	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		491	須恵器	高身	刺繡	20	-	-	-	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		492	須恵器	高身	全体	30	4.9	(13.9)	(11.2)	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		493	須恵器	高身	刺繡	15	-	(10.6)	(10.6)	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		494	須恵器	高身	全体	95	2.2	11.4	8.6	-	灰白(3.5YD/1)	灰白(3.5YD/1)	
		495	須恵器	高身	刺繡	20	-	-	-	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		496	須恵器	高身	全体	95	2.2	11.4	8.6	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		497	須恵器	高身	刺繡	15	-	-	-	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		498	須恵器	高身	全体	95	2.2	11.4	8.6	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		499	須恵器	高身	刺繡	20	-	-	-	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
E12号墳	106	501	須恵器	高身	全体	30	4.9	(13.9)	(11.2)	-	灰白(2.5YD/1)	灰白(2.5YD/1)	
		502	須恵器	高身	全体	75	5.2	16.5	16.5	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		503	須恵器	高身	ばね全体	98	3.5	17.2	17.2	-	灰(7.5YD/1)	灰(7.5YD/1)	
		504	須恵器	高身	全体	60	2.9	16.7	15.7	-	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		505	須恵器	高身	ばね全体	98	3.4	15.8	15.8	12.2	灰(10W6/1)	灰(10W6/1)	
		506	須恵器	高身	全体	40	3.4	(15.0)	(15.5)	(11.5)	灰(10N/1)	灰(10N/1)	
		507	須恵器	高身	全体	80	27.8	24.4	13.7	-	灰黄(2.5YD/2)	灰黄(2.5YD/2)	
		508	須恵器	高身	刺繡	98	-	-	15.2	-	灰白(2.5YD/1)	灰白(2.5YD/1)	
		509	須恵器	高身	刺繡	100	25.8	15.4	13.2	7.2	灰白(2.5YD/1)	灰白(2.5YD/1)	
		510	須恵器	高身	刺繡	19	-	(15.4)	(15.0)	-	灰(7.5W6/1)	灰(7.5W6/1)	
E14号墳	113	511	須恵器	高身	刺繡	19	-	(17.6)	(16.6)	-	灰(10W7/1)	灰(10W7/1)	
		512	須恵器	高身	刺繡	20	-	-	-	-	暗灰(7.5G)	暗灰(7.5G)	
		513	須恵器	高身	刺繡	55	3.9	11.6	11.0	-	灰白(10W1/1)	灰白(10W1/1)	
		514	須恵器	高身	刺繡	20	-	10.3	10.3	-	灰白(2.5YD/1)	灰白(2.5YD/1)	
		515	須恵器	高身	刺繡	79	4.1	14.5	14.5	10.5	灰白(2.5YD/1)	灰白(2.5YD/1)	
		516	須恵器	高身	刺繡	20	-	-	-	-	16.10W7/1)	16.10W7/1)	
		517	須恵器	高身	刺繡	90	-	-	-	-	灰(10W7/1)	灰(10W7/1)	
		518	須恵器	高身	刺繡	95	-	-	-	-	灰(10W7/1)	灰(10W7/1)	
		519	須恵器	高身	刺繡	95	-	-	-	-	灰(10W7/1)	灰(10W7/1)	
		520	須恵器	高身	刺繡	75	15.8	15.5	10.1	6.6	灰白(10W7/1)	灰白(10W7/1)	
E15号墳	117	521	須恵器	高身	刺繡	65	-	-	-	-	灰白(2.5YD/1)	灰白(2.5YD/1)	
		522	須恵器	高身	刺繡	60	-	-	-	-	灰(10W7/1)	灰(10W7/1)	
		523	土器部	刺繡	全体	80	9.1	24.7	24.3	12.8	暗灰(2.5W6/1)	暗灰(2.5W6/1)	金指手形
		524	土器部	刺繡	全体	70	3.6	(10.5)	(10.5)	6.2	明黄(10W7/1)	明黄(10W7/1)	金指手形
		525	土器部	刺繡	全体	70	3.6	(10.5)	(10.5)	6.2	明黄(10W7/1)	明黄(10W7/1)	金指手形
		526	土器部	刺繡	全体	70	3.6	(10.5)	(10.5)	6.2	明黄(10W7/1)	明黄(10W7/1)	金指手形
		527	土器部	刺繡	全体	70	3.6	(10.5)	(10.5)	6.2	明黄(10W7/1)	明黄(10W7/1)	金指手形
		528	土器部	刺繡	全体	70	3.6	(10.5)	(10.5)	6.2	明黄(10W7/1)	明黄(10W7/1)	金指手形
		529	土器部	刺繡	全体	70	3.6	(10.5)	(10.5)	6.2	明黄(10W7/1)	明黄(10W7/1)	金指手形
		530	土器部	刺繡	全体	70	3.6	(10.5)	(10.5)	6.2	明黄(10W7/1)	明黄(10W7/1)	金指手形
E16号墳	118	531	須恵器	高身	刺繡	5	-	(10.5)	(10.5)	-	灰(10W7/1)	灰(10W7/1)	
		532	須恵器	高身	刺繡	5	-	(10.5)	(10.5)	-	灰(10W7/1)	灰(10W7/1)	
		533	須恵器	高身	刺繡	5	-	(10.5)	(10.5)	-	オーリーブ灰(2.5GYV1/1)	オーリーブ灰(2.5GYV1/1)	
		534	須恵器	高身	刺繡	5	-	(10.4)	(10.4)	-	灰白(2.5YD/1)	灰白(2.5YD/1)	
		535	須恵器	高身	刺繡	30	3.2	(10.2)	(6.4)	-	灰白(10N7/1)	灰白(10N7/1)	
		536	須恵器	高身	刺繡	15	-	9.8	7.8	-	灰(10W7/1)	灰(10W7/1)	
		537	須恵器	高身	刺繡	12	-	(10.0)	(6.4)	-	青灰(5BB1/1)	青灰(5BB1/1)	
		538	須恵器	高身	刺繡	20	-	(14.7)	(11.0)	-	青灰(5BB1/1)	青灰(5BB1/1)	
		539	須恵器	耳朧	刺繡	20	-	(15.2)	(13.6)	-	青灰(5BB1/1)	青灰(5BB1/1)	
		540	須恵器	耳朧	刺繡	30	-	(16.4)	(16.4)	-	灰白(2.5YD/1)	灰白(2.5YD/1)	
E17号墳	119	541	須恵器	耳朧	刺繡	15	-	(15.1)	(16.2)	-	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	
		542	須恵器	耳朧	刺繡	8	-	-	-	-	灰(7.5YD/1)	灰(7.5YD/1)	
		543	須恵器	耳朧	刺繡	90	13.4	16.5	16.5	12.0	灰白(2.5YD/1)	灰白(2.5YD/1)	
		544	須恵器	耳朧	刺繡	55	5.7	9.7	5.8	-	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	
		545	須恵器	耳朧	刺繡	85	12.4	14.6	6.1	-	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	
		546	須恵器	耳朧	刺繡	90	13.4	16.5	16.5	12.0	灰白(2.5YD/1)	灰白(2.5YD/1)	
		547	須恵器	耳朧	刺繡	55	5.7	9.7	5.8	-	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	
		548	須恵器	耳朧	刺繡	15	-	-	-	-	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	
		549	須恵器	耳朧	刺繡	90	13.4	16.5	16.5	12.0	灰白(2.5YD/1)	灰白(2.5YD/1)	
		550	須恵器	耳朧	刺繡	55	5.7	9.7	5.8	-	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	

出土位置	探査番号	回収番号	造形番号	種類	器種	残存部位	保存率 (%)	直徑 (mm)	幅 (cm)	高さ (cm)	色調		備考	
											(外側)	(内側)		
理済施設	131	590	明治期	环甌	環甌全体	90	4.7	11.2	11.4	-	青灰(10BG6/1)	青灰(10BG6/1)		
		591	明治期	环甌	環甌全体	95	4.7	11.2	11.3	-	青灰(10BG6/1)	青灰(10BG6/1)		
		592	明治期	环甌	環甌全体	95	4.5	12.1	12.1	-	灰(N5/0)	灰(N6/0)		
		593	明治期	环甌	環甌全体	90	4.5	11.8	11.8	-	青灰(10BG6/1)	青灰(10BG6/1)		
		594	明治期	环甌	環甌全体	95	4.1	11.1	11.1	-	青灰(5BG6/1)	青灰(5BG6/1)		
		595	明治期	环甌	環甌全体	90	4.3	12.4	10.3	-	青灰(10BG6/1)	青灰(10BG6/1)		
		596	明治期	环甌	環甌全体	109	4.8	12.8	10.4	-	青灰(5BG6/1)	青灰(5BG6/1)		
		597	明治期	环甌	U型	18	-	(11.9)	(9.3)	-	灰(10Y9/1)	灰(N5/0)		
		598	明治期	环甌	環甌全体	90	4.4	12.5	10.1	-	青灰(10BG6/1)	青灰(10BG6/1)		
理済施設	132	599	明治期	环甌	環甌全体	95	4.3	12.0	9.9	-	青灰(5BG6/1)	青灰(5BG6/1)		
		600	明治期	环甌	環甌全体	95	4.2	12.1	9.9	-	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)		
理済施設	137	601	上脚部	环甌	環甌	脚部	15	-	-	-	灰(10Y9/1)	赤鉄(10YR2/4)	赤鉄(10YR2/4)	
		602	上脚部	环甌	環甌	口唇・脚部	20	-	(20.4)	(11.0)	灰(10Y9/1)	灰(10Y9/1)	灰(10Y9/1)	
SF03	137	603	上脚部	环甌	環甌	脚部	60	-	-	8.3	灰(10Y9/1)	赤鉄(10YR2/4)	赤鉄(10YR2/4)	
		604	上脚部	环甌	環甌	脚部・底部	60	-	-	-	灰(10Y9/1)	赤鉄(10YR2/4)	赤鉄(10YR2/4)	
SF13	137	605	上脚部	环甌	環甌	環甌全体	90	4.9	18.1	18.1	-	灰(10Y9/1)	赤鉄(10YR2/4)	赤鉄(10YR2/4)
		606	上脚部	环甌	環甌	全体	60	3.5	(18.4)	(18.4)	-	灰(10Y9/1)	赤鉄(10YR2/4)	赤鉄(10YR2/4)
SF15	137	607	上脚部	环甌	環甌	環甌全体	95	3.4	13.5	13.5	-	灰(10Y9/1)	赤鉄(10YR2/4)	赤鉄(10YR2/4)
		608	上脚部	环甌	環甌	全体	80	3.4	14.9	14.9	12.1	灰(10Y9/1)	赤鉄(10YR2/4)	赤鉄(10YR2/4)
SF15	137	609	上脚部	环甌	環甌	環甌全体	90	-	22.6	16.4	9.2	灰黄(3.5Y6/2)	赤鉄(2.5Y6/2)	赤鉄(2.5Y6/2)
		610	上脚部	环甌	環甌	全体	40	2.9	(15.2)	(16.3)	-	灰(10Y9/1)	赤鉄(10YR2/4)	赤鉄(10YR2/4)
SF01	139	611	上脚部	环甌	環甌	脚部・底部	85	-	-	-	16.9	灰(10Y9/1)	赤鉄(10YR2/4)	赤鉄(10YR2/4)
		612	上脚部	环甌	環甌	底部	95	23.3	17.2	10.5	16.0	灰黄(3.5Y6/2)	灰黄(3.5Y6/2)	灰黄(3.5Y6/2)
SF02	139	613	山手塚	环甌	環甌	環甌全体	90	-	-	-	7.5	灰白(SV7/3)	灰白(SV7/3)	
		614	山手塚	环甌	環甌	環甌全体	95	5.7	16.5	15.5	18.2	灰白(10Y9/1)	灰白(10Y9/1)	
SF12	139	615	山手塚	小瓶	小瓶	全体	14	2.1	(8.0)	(8.5)	3.6	灰白(SV7/3)	灰白(SV7/3)	
		616	山手塚	小瓶	小瓶	全体	25	1.8	(9.0)	(9.0)	5.9	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
毒器具	146	617	玻璃瓶	环甌	環甌	環甌	10	-	(16.6)	(16.6)	-	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	
		618	玻璃瓶	环甌	環甌	環甌全体	35	4.5	(10.0)	(9.8)	6.2	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	
毒器具	146	619	玻璃瓶	环甌	環甌	底部	30	-	-	-	-	灰(10Y9/1)	灰(10Y9/1)	
		620	玻璃瓶	环甌	環甌	底部	60	-	-	-	4.5	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	
SK02	139	621	山手塚	环甌	環甌	環甌	15	-	(16.5)	(16.2)	-	灰白(SV7/3)	灰白(SV7/3)	

※ 数値の括弧は復原値

## 2. 上神増A・B・E古墳群出土玉類観察表

第38表 上神増A・B・E古墳群出土玉類観察表

出土位置	探査番号	回収番号	造形番号	種類	材質	直徑 (mm)	全長・高さ (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	色調	穿孔	備考
A5号墳2番理済施設	22	62-64	62-64	勾玉	瑪瑙	-	31.0	4.0	5.65	灰黄	片面	
		62-64	62-64	管玉	玛瑙	2.3	27.0	2.0	4.22	碧綠	片面	
		62-64	62-64	管玉	玛瑙	9.0	23.0	3.0	3.12	碧綠	片面	
		62-64	62-64	管玉	玛瑙	7.5	20.0	2.7	2.21	碧綠	片面	
		62-64	62-64	管玉	玛瑙	7.6	20.0	2.5	1.69	碧綠	片面	
		62-64	62-64	管玉	玛瑙	6.8	18.0	2.1	1.42	碧綠	片面	
		62-64	62-64	管玉	玛瑙	7.0	3.4	1.2	0.21	碧綠	片面	
		62-64	62-64	管玉	玛瑙	4.3	2.9	1.0	0.07	碧		
		62-64	62-64	管玉	玛瑙	6.9	3.7	2.2	0.24	碧綠	片面	
K1号埴縁理済施設	69	70	70	小玉	ガラス	2.5	3.9	1.0	0.53	碧綠		
		71	71	小玉	ガラス	4.5	5.3	1.8	0.63	碧		
		72	72	小玉	ガラス	2.5	2.5	1.0	0.69	碧		
		73	73	小玉	ガラス	2.5	2.0	1.3	0.95	碧		
		74	74	小玉	ガラス	3.9	2.9	1.2	0.96	碧		
		75	75	小玉	ガラス	4.9	2.5	1.5	0.96	碧		
		76	76	小玉	ガラス	3.0	2.1	1.0	0.34	碧		
		77	77	小玉	ガラス	4.3	2.5	2.0	0.56	碧		
		78	78	小玉	ガラス	2.8	2.1	1.8	0.34	碧		
E3号埴縁理済施設	63	63	63	8-T1-73	管玉	2.9	2.0	1.5	0.02	碧		
		64	64	8-T1-73	管玉	12.0	29.0	3.9	7.06	透綠	片面	
		65	65	8-T1-73	管玉	21.5	29.0	4.0	7.05	透綠	片面	
		66	66	8-T1-73	管玉	18.0	35.0	2.5	7.08	透綠	片面	
		67	67	8-T1-73	管玉	19.5	29.0	3.0	5.45	透綠	片面	
		68	68	8-T1-73	管玉	20.0	27.0	4.0	5.94	透綠	片面	
		69	69	8-T1-73	管玉	20.0	26.0	2.0	5.55	透綠	片面	
		70	70	8-T1-73	管玉	9.5	27.0	2.5	4.39	透綠	片面	

第1節 上神堆A・B・E古墳群出土遺物解説表

第6章 造物類別表

出土位置	標図 番号	図版 番号	種類	材質	直徑 (mm)	全長・高さ (mm)	重量 (g)	重積 (g)	色調	穿孔	備考
			190 小玉	ガラス	3.0	2.8	1.0	0.00	ライブルー		
			191 小玉	ガラス	3.0	2.4	1.0	0.04	ライブルー		
			192 小玉	ガラス	3.0	1.2	1.0	0.02	ライブルー		
			193 小玉	ガラス	3.0	1.8	1.0	0.05	ライブルー		
			194 小玉	ガラス	2.5	1.8	1.0	0.02	ライブルー		
			195 小玉	ガラス	3.0	1.9	1.0	0.03	ライブルー		
			196 小玉	ガラス	2.0	1.2	1.0	0.02	ライブルー		
			197 小玉	ガラス	3.0	1.2	1.0	0.02	ライブルー		
			198 小玉	ガラス	2.8	1.4	1.0	0.02	ライブルー		
			199 小玉	ガラス	3.0	2.2	1.0	0.04	ライブルー		
			200 小玉	ガラス	3.0	1.8	1.0	0.02	ライブルー		
			201 小玉	ガラス	4.0	2.5	1.0	0.07	ライブルー		
			202 小玉	ガラス	3.0	1.5	0.9	0.02	ライブルー		
			203 小玉	ガラス	2.0	1.5	0.9	0.00	ライブルー		
			204 小玉	ガラス	3.0	1.0	1.0	0.03	ライブルー		
			205 小玉	ガラス	3.5	1.5	1.4	0.04	ライブルー		
			206 小玉	ガラス	3.5	1.8	0.6	0.02	ライブルー		
			207 小玉	ガラス	2.5	1.2	1.0	0.02	ライブルー		
			208 小玉	ガラス	4.0	2.1	1.3	0.06	ライブルー		
			209 小玉	ガラス	3.4	1.6	1.0	0.05	ライブルー		
			210 小玉	ガラス	4.0	2.2	1.5	0.04	ライブルー		
			211 小玉	ガラス	4.1	2.2	1.0	0.06	ライブルー		
			212 小玉	ガラス	3.5	2.9	1.5	0.04	ライブルー		
			213 小玉	ガラス	3.0	2.1	1.0	0.04	ライブルー		
			214 小玉	ガラス	3.0	2.0	1.0	0.06	ライブルー		
			215 小玉	ガラス	3.0	2.4	0.9	0.03	ライブルー		
			216 小玉	ガラス	2.3	1.5	0.6	0.02	ライブルー		
			217 小玉	ガラス	3.8	1.8	1.2	0.05	ライブルー		
			218 小玉	ガラス	3.2	1.8	1.0	0.03	ライブルー		
			219 小玉	ガラス	3.2	1.5	1.0	0.04	ライブルー		
			220 小玉	ガラス	4.0	1.5	1.5	0.02	ライブルー		
			221 小玉	ガラス	3.8	2.4	1.1	0.04	ライブルー		
			222 小玉	ガラス	3.8	1.5	1.2	0.04	ライブルー		
			223 小玉	ガラス	3.5	2.1	1.5	0.02	ライブルー		
			224 小玉	ガラス	2.8	2.1	1.1	0.04	ライブルー		
			225 小玉	ガラス	4.1	2.0	1.1	0.02	ライブルー		
			226 小玉	ガラス	3.0	2.0	1.0	0.02	ライブルー		
			227 小玉	ガラス	3.2	2.0	1.0	0.02	ライブルー		
			228 小玉	ガラス	3.1	1.1	1.0	0.01	ライブルー		
			229 小玉	ガラス	3.9	2.9	1.5	0.02	ライブルー		
			230 小玉	ガラス	-	1.9	1.0	0.02	ライブルー		
			231 小玉	ガラス	3.2	2.0	-	0.01	ライブルー		
			232 小玉	ガラス	3.3	2.5	-	0.01	ライブルー		
			233 小玉	ガラス	2.5	2.0	1.0	0.05	黒		
			234 小玉	ガラス	3.0	1.8	1.1	0.04	黒		
			235 小玉	ガラス	3.0	1.5	1.0	0.03	黒		
			236 小玉	ガラス	3.0	1.8	1.0	0.04	黒		
			237 小玉	ガラス	3.8	2.0	1.0	0.04	黒		
			238 小玉	ガラス	3.0	1.7	1.0	0.05	黒		
			239 小玉	ガラス	3.8	1.8	1.2	0.04	黒		
			240 小玉	ガラス	3.0	1.7	1.0	0.04	黒		
			241 小玉	ガラス	3.3	1.9	1.0	0.03	黒		
			242 小玉	ガラス	3.8	1.9	1.0	0.04	黒		
			243 小玉	ガラス	3.0	2.0	1.0	0.04	黒		
			244 小玉	ガラス	3.1	1.9	1.0	0.05	黒		
			245 小玉	ガラス	3.9	1.5	1.0	0.04	黒		
			246 小玉	ガラス	4.0	2.0	1.5	0.06	黒		
			247 小玉	ガラス	3.3	1.9	1.0	0.03	黒		
			248 小玉	ガラス	3.8	1.8	1.2	0.04	黒		
			249 小玉	ガラス	3.0	1.7	1.0	0.05	黒		
			250 小玉	ガラス	3.0	2.0	1.0	0.05	黒		
			251 小玉	ガラス	3.0	1.8	1.1	0.04	黒		
			252 小玉	ガラス	3.0	1.5	1.0	0.03	黒		
			253 小玉	ガラス	3.0	2.0	1.0	0.04	黒		
			254 小玉	ガラス	3.6	2.0	1.1	0.05	黒		
			255 小玉	ガラス	3.1	1.9	1.0	0.05	黒		
			256 小玉	ガラス	3.9	1.5	1.0	0.04	黒		
			257 小玉	ガラス	4.0	2.0	1.5	0.06	黒		
			258 小玉	ガラス	3.1	1.8	1.0	0.04	黒		
			259 小玉	ガラス	3.1	1.8	1.0	0.04	黒		
			260 小玉	ガラス	3.2	2.0	1.1	0.05	黒		
			261 小玉	ガラス	3.0	1.4	1.0	0.03	黒		
			262 小玉	ガラス	3.0	1.9	1.0	0.02	黒		
			263 小玉	ガラス	3.0	1.3	0.9	0.04	黒		
			264 小玉	ガラス	3.5	1.5	1.1	0.03	黒		
			265 小玉	ガラス	3.5	1.5	1.2	0.05	黒		
			266 小玉	ガラス	3.6	1.5	1.3	0.03	黒		
			267 小玉	ガラス	3.0	1.5	1.1	0.04	黒		
			268 小玉	ガラス	3.2	1.7	1.0	0.05	黒		
			269 小玉	ガラス	3.6	2.0	1.0	0.04	黒		
			270 小玉	ガラス	3.1	1.9	1.0	0.05	黒		
			271 小玉	ガラス	3.9	1.5	1.0	0.04	黒		
			272 小玉	ガラス	4.0	2.0	1.5	0.06	黒		
			273 小玉	ガラス	3.0	2.0	1.0	0.04	黒		
			274 小玉	ガラス	3.1	1.8	1.0	0.04	黒		
			275 小玉	ガラス	3.1	1.6	1.0	0.03	黒		
			276 小玉	ガラス	3.1	1.9	1.0	0.04	黒		
			277 小玉	ガラス	3.9	1.8	1.2	0.05	黒		
			278 小玉	ガラス	3.2	1.8	1.5	0.05	黒		
			279 小玉	ガラス	3.6	2.0	1.1	0.04	黒		
			280 小玉	ガラス	3.2	2.0	1.1	0.05	黒		
			281 小玉	ガラス	3.0	1.4	1.0	0.03	黒		
			282 小玉	ガラス	3.0	1.9	1.0	0.02	黒		
			283 小玉	ガラス	3.0	1.3	0.9	0.04	黒		
			284 小玉	ガラス	3.5	1.5	1.1	0.03	黒		
			285 小玉	ガラス	3.5	1.5	1.2	0.05	黒		
			286 小玉	ガラス	3.6	1.5	1.3	0.03	黒		
			287 小玉	ガラス	3.2	1.9	1.0	0.04	黒		
			288 小玉	ガラス	3.2	1.5	1.1	0.04	黒		
			289 小玉	ガラス	3.2	1.6	1.2	0.05	黒		
			290 小玉	ガラス	3.0	2.0	1.0	0.04	黒		
			291 小玉	ガラス	3.6	1.8	1.2	0.05	黒		
			292 小玉	ガラス	3.0	1.2	0.8	0.03	黒		
			293 小玉	ガラス	3.0	1.5	1.0	0.03	黒		
			294 小玉	ガラス	3.0	1.6	1.0	0.03	黒		
			295 小玉	ガラス	2.9	1.5	0.8	0.03	黒		
			296 小玉	ガラス	3.2	1.8	1.0	0.03	黒		
			297 小玉	ガラス	3.0	2.0	1.0	0.03	黒		

出土位置	補助番号	図版番号	遺物番号	種類	材質	直径 (mm)	全長・高さ (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	色調	穿孔	備考
			294	小玉	ガラス	3.1	1.6	1.2	0.04	緑		
		296	1 小玉	ガラス	3.1	1.5	1.2	0.03	緑			
		300	小玉	ガラス	3.4	2.0	1.2	0.03	緑			
		301	小玉	ガラス	3.1	1.8	1.0	0.04	緑			
		302	小玉	ガラス	3.1	1.9	1.0	0.03	緑			
		303	小玉	ガラス	3.0	1.8	1.3	0.04	緑			
		304	小玉	ガラス	3.1	1.9	1.2	0.03	緑			
		305	小玉	ガラス	3.0	1.8	1.2	0.03	緑			
		306	小玉	ガラス	3.5	1.9	0.9	0.04	緑			
		307	小玉	ガラス	3.1	1.9	0.9	0.03	緑			
		308	小玉	ガラス	3.4	1.9	1.2	0.05	緑			
		309	小玉	ガラス	3.0	1.8	0.8	0.02	緑			
		310	小玉	ガラス	3.0	1.6	0.9	0.03	緑			
		311	小玉	ガラス	3.0	1.8	1.0	0.03	緑			
		312	小玉	ガラス	3.6	1.5	1.0	0.04	緑			
		313	小玉	ガラス	3.5	1.8	1.0	0.04	緑			
		314	小玉	ガラス	3.2	1.3	1.0	0.03	緑			
		315	小玉	ガラス	3.2	1.8	1.0	0.04	緑			
		316	小玉	ガラス	3.2	1.2	1.0	0.03	緑			
		317	小玉	ガラス	3.0	2.0	1.0	0.03	緑			
		318	小玉	ガラス	2.5	1.3	1.0	0.03	緑			
		319	小玉	ガラス	3.0	1.6	1.0	0.02	緑			
		320	小玉	ガラス	3.0	1.9	1.0	0.03	緑			
		321	小玉	ガラス	3.5	1.8	1.2	0.04	緑			
		322	小玉	ガラス	3.2	1.6	1.0	0.04	緑			
		323	小玉	ガラス	3.4	1.8	0.9	0.05	緑			
		324	小玉	ガラス	3.0	1.5	0.9	0.04	緑			
		325	小玉	ガラス	3.0	1.5	0.9	0.03	緑			
		326	小玉	ガラス	3.0	1.5	0.9	0.04	緑			
		327	小玉	ガラス	3.0	1.5	1.0	0.03	緑			
		328	小玉	ガラス	3.0	1.8	1.0	0.02	緑			
		329	小玉	ガラス	3.5	2.0	1.3	0.04	緑			
		330	小玉	ガラス	3.2	1.5	1.0	0.03	緑			
		331	小玉	ガラス	3.0	1.9	1.0	0.03	緑			
		332	小玉	ガラス	3.0	1.8	1.1	0.03	緑			
		333	小玉	ガラス	3.0	2.0	1.0	0.03	緑			
		334	小玉	ガラス	3.1	1.6	1.2	0.03	緑			
		335	小玉	ガラス	3.1	1.6	1.2	0.03	緑			
		336	小玉	ガラス	2.5	1.6	1.2	0.03	緑			
		337	小玉	ガラス	3.0	1.8	1.2	0.03	緑			
		338	小玉	ガラス	3.0	1.8	1.0	0.03	緑			
		339	小玉	ガラス	3.0	1.6	1.0	0.03	緑			
		340	小玉	ガラス	3.1	1.6	1.2	0.03	緑			
		341	小玉	ガラス	3.2	2.0	1.0	0.04	緑			
		342	小玉	ガラス	3.1	1.8	1.0	0.03	緑			
		343	小玉	ガラス	3.5	2.0	1.0	0.04	緑			
		344	小玉	ガラス	3.2	1.6	1.0	0.05	緑			
		345	小玉	ガラス	3.5	2.0	1.0	0.03	緑			
		346	小玉	ガラス	3.5	2.0	1.0	0.03	緑			
		347	小玉	ガラス	3.8	2.0	1.0	0.03	緑			
		348	小玉	ガラス	3.1	1.5	1.5	0.05	緑			
		349	小玉	ガラス	3.5	1.8	1.0	0.04	緑			
		350	小玉	ガラス	3.1	1.5	1.0	0.03	緑			
		351	小玉	ガラス	3.6	1.8	1.0	0.03	緑			
		352	小玉	ガラス	3.1	1.8	1.0	0.03	緑			
		353	小玉	ガラス	3.0	1.4	1.0	0.03	緑			
		354	小玉	ガラス	3.0	1.3	1.0	0.03	緑			
		355	小玉	ガラス	3.1	1.3	1.0	0.03	緑			
		356	小玉	ガラス	3.8	2.0	1.0	0.04	緑			
		357	小玉	ガラス	3.2	1.5	1.0	0.03	緑			
		358	小玉	ガラス	3.2	1.6	1.0	0.03	緑			
		359	小玉	ガラス	2.6	2.0	1.0	0.03	緑			
		360	小玉	ガラス	2.6	2.0	1.0	0.04	緑			
		361	小玉	ガラス	3.4	1.9	1.0	0.03	緑			
		362	小玉	ガラス	3.2	1.4	1.0	0.04	緑			
		363	小玉	ガラス	3.1	1.5	1.0	0.04	緑			
		364	小玉	ガラス	3.0	2.0	1.0	0.03	緑			
		365	小玉	ガラス	3.0	1.5	1.0	0.03	緑			
		366	小玉	ガラス	5.1	1.8	1.0	0.03	緑			
		367	小玉	ガラス	3.0	1.5	1.0	0.04	緑			
		368	小玉	ガラス	3.1	1.5	1.0	0.04	緑			
		369	小玉	ガラス	3.0	1.4	0.9	0.03	緑			
		370	小玉	ガラス	3.1	1.9	1.0	0.03	緑			
		371	小玉	ガラス	3.1	1.8	1.0	0.03	緑			
		372	小玉	ガラス	3.5	1.5	1.0	0.03	緑			
		373	小玉	ガラス	3.2	2.0	1.0	0.03	緑			
		374	小玉	ガラス	3.2	1.5	1.0	0.03	緑			
		375	小玉	ガラス	3.0	1.9	1.0	0.03	緑			
		376	小玉	ガラス	3.2	1.8	1.0	0.04	緑			
		377	小玉	ガラス	3.2	1.5	1.0	0.04	緑			
		378	小玉	ガラス	3.0	2.0	1.0	0.03	緑			

## 第6章 遺物調査表

出土位置	探査番号	埋蔵番号	遺物番号	種類	材質	直径 (mm)	全長・高さ (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	色調	穿孔	備考
			279	小玉	ガラス	3.0	1.5	1.0	0.04	透明		
			280	小玉	ガラス	3.1	2.0	1.0	0.03	透明		
			281	小玉	ガラス	5.0	1.5	1.0	0.04	透明		
			282	小玉	ガラス	4.0	1.8	1.0	0.03	透明		
			283	小玉	ガラス	3.0	1.4	1.0	0.04	透明		
			284	小玉	ガラス	3.2	1.5	1.0	0.04	透明		
			285	小玉	ガラス	3.5	1.9	1.1	0.05	透明		
			286	小玉	ガラス	2.9	2.0	1.0	0.04	透明		
			287	小玉	ガラス	3.9	2.0	1.0	0.04	透明		
			288	小玉	ガラス	2.9	1.8	1.0	0.03	透明		
			289	小玉	ガラス	3.2	1.9	1.0	0.03	透明		
			290	小玉	ガラス	3.4	1.8	1.0	0.03	透明		
E3号棺埋葬施設	72	6-73-75	291	小玉	ガラス	4.2	1.9	1.2	0.05	透明		
			292	小玉	ガラス	3.0	1.8	1.2	0.04	透明		
			293	小玉	ガラス	3.1	1.2	1.2	0.05	透明		
			294	小玉	ガラス	3.4	2.5	1.0	0.03	透明		
			295	小玉	ガラス	3.5	2.8	1.0	0.05	透明		
			296	小玉	ガラス	3.4	2.6	1.0	0.05	透明		
			297	小玉	ガラス	2.8	2.0	1.0	0.04	ライブルー		
			298	小玉	ガラス	3.5	2.5	1.0	0.07	ライブルー		
			299	小玉	ガラス	3.6	2.5	1.0	0.05	ライブルー		
			300	小玉	ガラス	3.1	2.3	1.0	0.04	ライブルー		
			401	小玉	ガラス	3.0	1.8	1.0	0.02	ライブルー		
			402	小玉	ガラス	4.0	2.9	1.0	0.02	ライブルー		
			403	小玉	ガラス	2.8	2.0	1.0	0.03	ライブルー		
			404	小玉	ガラス	3.0	2.2	1.0	0.02	ライブルー		
			405	小玉	ガラス	2.5	2.0	1.0	0.04	ライブルー		
			406	小玉	ガラス	3.0	-	1.5	0.01	ライブルー		
			407	小玉	ガラス	4.0	-	1.2	0.04	ライブルー		
			422	勾玉	滑石	-	18.5	1.5	0.57	灰白		
			423	留玉	滑石	7.0	18.5	4.0	1.26	透明		
			434	小玉	ガラス	7.4	5.8	2.1	0.38	透明		
E8号棺埋葬施設	81	77	435	丸玉	ガラス	0.6	7.3	3.0	0.03	透明		
			436	小玉	ガラス	5.2	5.0	1.6	0.11	透明		
			437	小玉	ガラス	5.0	4.3	1.5	0.11	透明		風化が進む
			438	小玉	ガラス	4.4	3.0	2.0	0.06	ライブルー		
			439	留玉	ガラス	7.0	12.0	2.0	0.07	透明		
			453	丸玉	ガラス	8.6	6.9	1.9	1.60	透明		
			454	丸玉	ガラス	6.5	7.6	2.1	0.71	透明		
			455	丸玉	ガラス	8.0	6.9	1.5	0.57	透明		
			456	丸玉	ガラス	9.0	6.5	2.2	0.70	透明		
			457	丸玉	ガラス	8.2	6.4	1.5	0.51	透明		
			458	丸玉	ガラス	8.5	6.0	1.8	0.04	透明		
E7号棺埋葬施設	87	78-79	459	丸玉	ガラス	8.2	6.0	2.0	0.02	透明		
			460	丸玉	ガラス	8.9	5.8	2.0	0.04	透明		
			461	丸玉	ガラス	8.5	6.0	2.0	0.02	透明		
			462	丸玉	ガラス	3.4	5.2	2.0	0.03	透明		
			463	丸正	ガラス	8.0	7.0	1.8	0.03	透明		
			464	丸玉	ガラス	9.0	5.9	2.0	0.02	透明		
			465	小玉	ガラス	5.8	3.0	1.6	0.10	透明		風化が進む
			466	小玉	ガラス	6.7	5.0	1.5	0.17	透明(重7)		風化が進む
E10号棺埋葬施設	106	7-62-83	497	留玉	滑石	10.0	26.5	3.5	5.48	透明		
			498	丸玉	ガラス	8.2	6.0	2.0	0.02	透明		
			500	丸玉	ガラス	8.9	5.8	2.0	0.04	透明		
			501	丸玉	ガラス	8.5	6.0	2.0	0.02	透明		
			502	丸玉	ガラス	3.4	5.2	2.0	0.03	透明		
			503	丸玉	ガラス	8.0	7.0	1.8	0.03	透明		
			504	丸玉	ガラス	9.0	5.9	2.0	0.02	透明		
			505	丸玉	ガラス	5.8	3.0	1.6	0.10	透明		風化が進む
			506	丸玉	ガラス	6.7	5.0	1.5	0.17	透明		風化が進む
			507	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			508	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			509	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			510	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			511	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			512	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			513	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			514	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			515	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			516	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			517	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			518	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			519	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			520	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			521	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			522	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			523	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			524	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			525	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			526	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			527	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			528	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			529	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			530	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			531	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			532	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			533	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			534	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			535	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			536	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			537	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			538	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			539	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			540	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			541	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			542	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			543	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			544	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			545	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			546	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			547	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			548	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			549	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			550	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			551	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			552	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			553	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			554	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			555	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			556	丸玉	ガラス	7.0	26.0	3.5	5.48	透明		
			557	丸玉	ガラス	14.5	12.0	5.5	3.60	透明明白		
			558	丸玉	ガラス	14.0	32.0	4.0	6.21	透明赤		
			559	留玉	琥珀	-	15.5	5.0	1.0	透明赤		
			560	丸玉	ガラス	11.5	14.0	2.5	0.61	透明赤		
			561	留玉	留玉	9.5	25.5	5.0	5.99	透明赤		透明により青空乳
			562	丸玉	ガラス?	12.5	10.3	2.0	1.20	灰白		風化が進む
			563	丸玉	ガラス?	9.0	6.5	3.0	0.50	透明		風化が進む
			564	丸玉	ガラス?	8.4	7.4	2.5	0.51	明黄透明		風化が進む
			565	丸玉	ガラス?	9.4	6.4	3.0	0.79	透明		風化が進む
			566	丸玉	ガラス?	9.0	6.4	2.5	0.65	透明		風化が進む
			567	丸玉	ガラス?	8.0	5.9	2.4	0.53	透明		風化が進む
			568	丸玉	ガラス	5.0	6.9	2.5	0.65	青空		
			569	小玉	ガラス	7.0	6.0	1.5	0.39	透明		
			570	小玉	ガラス	3.5	3.8	2.5	1.0	0.06	透明	
			571	小玉	ガラス	3.8	3.8	2.5	1.0	0.06	透明	

\*1 ここで「留玉」としたものについては理化学的分析を行っていないため目録が説明していないものであり、留玉、蛇紋岩、緑色珊瑚岩、グリーンタフの可塑性があるものをさす。

## 3. 上神増A・B・E古墳群出土金属製品観察表

第39表 上神増A・B・E古墳群出土金属製品観察表

出土位置	辨別番号	団版番号	通称	種類	材質	全長		頭部		茎・頭部・刀具部・脚部		備考	
						式	幅	長	幅	長	幅		
A5号墳第2埋葬施設	22	63	刀具類	金銅鏡	(1.0)	-	-	-	-	-	-	6.11 黄金属	
			刀	金	(1.0)	-	-	-	-	-	-	6.08 馬具か	
			不明	鐵	(4.1)	-	-	-	-	-	-	2.93 鉄鏡頭?	
			不明	鐵	(4.4)	-	-	-	-	-	-		
			鹿角形刀子	鐵	0.2.5 (7.7)	1.4	-	-	(4.5)	0.8	16.02		
			木柄刀子	鐵	G.I.D (9.8)	1.5	-	-	(3.3)	0.9	14.04		
			木柄刀子	鐵	1.1.3	7.1	1.3	-	-	4.2	0.8	11.37	
			刀子	鐵	(5.9) (5.9)	0.69	-	-	-	-	-	4.83	
			刀子	鐵	(4.0) (4.0)	0.69	-	-	-	-	-		
			鹿角形刀子	鐵	0.1.0 (10.0)	1.2	-	-	-	3.6	0.7	4.93	
			刀子	鐵	(3.5) (2.5)	1.5	-	-	-	0.2	0.9	7.26	
			刀子	鐵	(3.9) (3.9)	1.4	-	-	-	0.1	0.9	15.05	
			小刀(切刃)	鐵	(2.2) (2.2)	1.5	2.5	-	-	0.5	1.6	70.95	
			刀具類	鐵	2.0	-	-	-	-	-	-	13.22 頭錐多員が頭	
A5号墳隨丘	23	63	頭錐	鐵	2.3	-	-	-	-	-	-	2.41 「丸」通貫?	
			頭錐	鐵	2.4	-	-	-	-	-	-	2.35 「元」通貫?	
			刀	金	(0.9) (0.9)	0.65	-	-	0.4	1.5	-	6.67	
			刀	金	(0.9) (0.9)	0.65	-	-	0.4	1.5	-	3.87	
			刀	金	(4.0) (4.0)	0.65	-	-	0.4	1.9	-	5.76	
			刀	金	(3.9) (3.9)	0.65	-	-	0.7	1.3	-	3.88	
			刀	金	(3.9) (3.9)	0.65	-	-	0.3	1.0	-	3.21	
			刀	金	(3.6) (3.6)	0.65	-	-	0.5	1.0	-	4.26	
			刀	金	(4.1) (3.7)	0.7	-	-	0.4	1.1	-	5.05	
			刀	金	(3.1) (3.1)	0.5	-	-	-	-	-	頭錐第7.6cm後段	
			刀	金	(4.1) (4.1)	0.5	-	-	-	-	-	3.13 「刃身」か頭錐の頭部の可能性が高い。	
			刀	金	(2.2) (1.2)	0.5	-	-	-	-	-	0.33 「刃身」か頭錐の頭部の可能性が高い。	
			刀	金	(0.8) (0.8)	0.4	-	-	-	-	-	3.45 「刃身」か頭錐の頭部の可能性が高い。	
B7号埋葬部施設	36	64-66	頭錐	鐵	(3.1) (3.1)	0.5	-	-	-	-	-	0.71 「刃身」か頭錐の茎の可能性が高い。	
			頭錐?	鐵	(3.1) (3.1)	0.5	-	-	-	-	-	「刃身」か頭錐の茎の可能性が高い。	
			頭錐?	鐵	(4.1) (4.1)	0.5	-	-	-	-	-	3.13 「刃身」か頭錐の頭部の可能性が高い。	
			頭錐?	鐵	(4.1) (4.1)	0.5	-	-	-	-	-	2.18 「刃身」か頭錐の頭部の可能性が高い。	
			頭錐?	鐵	(2.2) (2.2)	0.5	-	-	-	-	-	0.33 「刃身」か頭錐の頭部の可能性が高い。	
			頭錐?	鐵	(0.8) (0.8)	0.4	-	-	-	-	-	3.45 「刃身」か頭錐の頭部の可能性が高い。	
			頭錐?	鐵	(2.0) (1.0)	0.4	-	-	-	-	-	0.71 「刃身」か頭錐の茎の可能性が高い。	
			頭錐?	鐵	(2.4) (2.4)	0.6	0.6	0.6	0.6	-	-	1.12 尖端削除式	
			頭錐?	鐵	(1.5) (1.5)	0.6	-	-	0.7	-	-	1.55	
			頭錐?	鐵	(3.1) (3.1)	0.6	-	-	0.3	0.5	-	1.24 「刃身」か頭錐の茎の可能性が高い。	
			頭錐?	鐵	(4.4) (4.4)	0.6	-	-	-	-	-	4.15 「刃身」か頭錐の頭部の可能性が高い。	
			頭錐?	鐵	(2.0) (2.0)	0.6	-	-	-	-	-	2.18 「刃身」か頭錐の頭部の可能性高い。	
			頭錐?	鐵	(0.8) (0.8)	0.4	-	-	-	-	-	0.71 「刃身」か頭錐の茎の可能性高い。	
E1号埋葬部施設	32	65-69	頭錐	鐵	(3.1) (3.1)	0.5	-	-	0.3	0.5	0.5	1.24 「刃身」か頭錐の茎の可能性が高い。	
			頭錐?	鐵	(4.4) (4.4)	0.5	-	-	-	-	-	4.15 「刃身」か頭錐の頭部の可能性高い。	
			頭錐?	鐵	(6.5) (6.5)	-	-	-	-	-	-	21.0 第11.2cm評議。	
			刀子	鐵	(7.0) (7.0)	1.5	-	-	2.0	-	0.7	7.59	
			刀子	鐵	(5.0) (5.0)	1.5	-	-	0.6	2.6	29.61	頭錐は逆送。頭錐部付近、頭錐部付近。	
			刀子	鐵	(6.5) (6.5)	-	-	-	-	-	-	21.0 第11.2cm評議。	
			刀子	鐵	(7.0) (7.0)	1.5	-	-	0.6	2.6	29.61	頭錐は逆送。頭錐部付近、頭錐部付近。	
			刀子	鐵	(6.5) (6.5)	1.5	-	-	0.6	2.6	29.61	頭錐は逆送。頭錐部付近、頭錐部付近。	
			刀子	鐵	(7.0) (7.0)	1.5	-	-	0.6	2.6	29.61	頭錐は逆送。頭錐部付近、頭錐部付近。	
			刀子	鐵	(6.5) (6.5)	1.5	-	-	0.6	2.6	29.61	頭錐は逆送。頭錐部付近、頭錐部付近。	
			刀子	鐵	(7.0) (7.0)	1.5	-	-	0.6	2.6	29.61	頭錐は逆送。頭錐部付近、頭錐部付近。	
			刀子	鐵	(6.5) (6.5)	1.5	-	-	0.6	2.6	29.61	頭錐は逆送。頭錐部付近、頭錐部付近。	
			刀子	鐵	(7.0) (7.0)	1.5	-	-	0.6	2.6	29.61	頭錐は逆送。頭錐部付近、頭錐部付近。	
E2号埋葬部施設	64	6-71-73	頭錐	鐵	(2.0) (2.0)	14.9	2.6	-	-	3.1	1.0	44.33	
			頭錐	鐵	(3.0) (3.0)	14.9	2.6	-	-	-	-	7.59 平頭錐・円形式	
			頭錐	鐵	(3.0) (3.0)	14.9	2.6	-	-	-	-	9.11 平頭錐・円形式	
			頭錐	鐵	(2.4) (2.4)	14.9	2.6	-	-	-	-	9.47 平頭錐・円形式	
			頭錐	鐵	(3.0) (3.0)	14.9	2.6	-	-	-	-	9.47 平頭錐・円形式	
			頭錐	鐵	(2.0) (2.0)	14.9	2.6	-	-	-	-	9.47 平頭錐・円形式	
			頭錐	鐵	(3.0) (3.0)	14.9	2.6	-	-	-	-	9.47 平頭錐・円形式	
			頭錐	鐵	(2.0) (2.0)	14.9	2.6	-	-	-	-	9.47 平頭錐・円形式	
			頭錐	鐵	(3.0) (3.0)	14.9	2.6	-	-	-	-	9.47 平頭錐・円形式	
			頭錐	鐵	(2.0) (2.0)	14.9	2.6	-	-	-	-	9.47 平頭錐・円形式	
			頭錐	鐵	(3.0) (3.0)	14.9	2.6	-	-	-	-	9.47 平頭錐・円形式	
			頭錐	鐵	(2.0) (2.0)	14.9	2.6	-	-	-	-	9.47 平頭錐・円形式	
			頭錐	鐵	(3.0) (3.0)	14.9	2.6	-	-	-	-	9.47 平頭錐・円形式	
E3号埋葬部施設	72	6-72-76	頭錐	鐵	(1.4) (1.4)	1.8	-	-	-	5.4	1.1	33.19	
			頭錐	鐵	(1.6) (1.6)	1.8	-	-	-	-	-		
			頭錐	鐵	(1.6) (1.6)	1.8	-	-	-	-	-		
			頭錐	鐵	(1.6) (1.6)	1.8	-	-	-	-	-		
			頭錐	鐵	(1.6) (1.6)	1.8	-	-	-	-	-		
			頭錐	鐵	(1.6) (1.6)	1.8	-	-	-	-	-		
			頭錐	鐵	(1.6) (1.6)	1.8	-	-	-	-	-		
			頭錐	鐵	(1.6) (1.6)	1.8	-	-	-	-	-		
			頭錐	鐵	(1.6) (1.6)	1.8	-	-	-	-	-		
			頭錐	鐵	(1.6) (1.6)	1.8	-	-	-	-	-		
			頭錐	鐵	(1.6) (1.6)	1.8	-	-	-	-	-		
			頭錐	鐵	(1.6) (1.6)	1.8	-	-	-	-	-		
			頭錐	鐵	(1.6) (1.6)	1.8	-	-	-	-	-		
E7号埋葬部施設	87	78-79	頭錐	鐵	(7.0) (7.0)	2.7	0.69	0.69	0.69	0.69	2.6	119.00	
			頭錐	鐵	(10.0) (10.0)	2.7	0.69	0.69	0.69	0.69	2.6	119.00 圓頭錐状逆送形	
			刀子	鐵	(10.0) (10.0)	2.7	0.69	0.69	0.69	0.69	2.6	119.00 大頭錐式	
			刀子	鐵	(10.0) (10.0)	2.7	0.69	0.69	0.69	0.69	2.6	11.89 金銅鏡貝入り。	
			頭錐	金銅鏡	(3.0) (3.0)	2.7	-	-	-	-	-	12.88 座金銅の金銅鏡頭錐。	
			刀子	鐵	(3.0) (3.0)	2.7	-	-	-	-	-	45.36	
			頭錐	金銅鏡	(3.0) (3.0)	2.7	-	-	-	-	-		
			刀子	鐵	(3.0) (3.0)	2.7	-	-	-	-	-		
			頭錐	金銅鏡	(3.0) (3.0)	2.7	-	-	-	-	-		
			刀子	鐵	(3.0) (3.0)	2.7	-	-	-	-	-		
			頭錐	金銅鏡	(3.0) (3.0)	2.7	-	-	-	-	-		
			刀子	鐵	(3.0) (3.0)	2.7	-	-	-	-	-		
			頭錐	金銅鏡	(3.0) (3.0)	2.7	-	-	-	-	-		

第6章 調査報告書

出土位置	説明 番号	回収 番号	遺物 番号	種類	材質	全長 cm	頭部・刃部・身		頭部 長	基・側・刀身・頭部		重量 g	備考	
							身	刃	長	幅	重			
K9号墳群2埋葬施設	96	7-81-83	487	鉄劍	鉄	(12.0)	2.7	0.5	9.0	0.6	(0.9)	0.4	7.79	古墳式刀耕式
			488	鉄劍	鉄	(11.9)	3.0	0.5	8.5	1	(0.8)	0.5	6.83	先秦式刀耕式
			489	鉄劍	鉄	(3.7)	(2.7)	0.7	(1.7)	0.4	-	-	2.18	先秦式刀耕式
			490	鉄劍	鉄	(3.9)	(2.7)	0.7	(1.9)	0.7	-	-	2.15	先秦式刀耕式
			491	鉄劍	鉄	(4.6)	2.9	0.7	(2.7)	0.7	-	-	2.54	先秦式刀耕式
			492	鉄劍	鉄	(6.0)	-	-	(6.6)	0.7	(6.5)	0.5	4.02	頭部一茎片
E11号墳群2埋葬施設	97	7-82-83	494	劍	鉄	(22.0)	32.0	2.6	-	-	0.8	1.8	91.44	劍身一茎片
			495	大刀	鉄	(2.0)	(2.0)	0.5	-	-	-	-	1.94	刀身一茎片
			496	大刀	鉄	(76.9)	665.0	2.6	-	-	(0.4)	2.0	375.0	刀身一茎片
K15号墳群2埋葬施設	104	85	509	刀子	鉄	11.2	6.4	1.1	-	-	4.8	0.7	4.95	
			525	木柄刀子	鉄	(19.8)	(3.2)	1.2	-	-	(5.2)	0.8	6.98	
			526	刀子	鉄	(6.0)	(5.4)	0.1	-	-	(2.6)	0.1	7.19	
			527	鉄劍	鉄	(7.2)	4.4	3.2	3.1	0.8	-	-	14.43	平首三角形式
			528	大刀	鉄	(4.0)	-	-	-	-	(4.0)	0.9	13.71	30.7
			576	刀子	鉄	(0.1)	(6.5)	1.1	-	-	(2.6)	0.5	7.21	
			577	刀子	鉄	(1.7)	(2.7)	(0.9)	-	-	(2.6)	0.5	8.82	
			578	木柄刀子	鉄	(3.9)	-	-	-	-	(3.9)	(1.1)	6.51	
			579	不明	鉄	(1.1)	-	-	-	-	(1.1)	1.8	1.50	刀身全部
			580	鉄劍	鉄	(4.5)	(0.9)	1.9	(2.6)	0.6	-	-	5.44	平首三角形式
E16号墳群2埋葬施設	126	86-91	581	鉄劍	鉄	(18.0)	2.5	1.8	(1.3)	0.5	-	-	3.20	平首三角形式
			582	鉄劍	鉄	(3.5)	-	-	-	-	(3.5)	-	1.25	茎片?
			583	鉄劍	鉄	(3.7)	-	-	(3.7)	0.6	-	-	1.65	頭部一茎片?
			584	鉄劍	鉄	(8.2)	-	-	(8.0)	0.5	(2.2)	0.4	3.81	頭部一茎片
			585	鉄	鉄	(4.7)	(4.7)	1.1	-	-	-	-	8.91	二重鍔式刀頭
			586	大刀	鉄	(4.3)	(4.2)	2.2	-	-	-	-	7.31	刀身片
			587	大刀	鉄	(6.0)	(6.0)	2.0	-	-	-	-	14.08	1刀身片
			588	大刀	鉄	(5.0)	-	-	-	-	(5.0)	0.7	6.60	茎片
			600	薙	I	20.2	9.6	1.6	5.6	1.1	5.0	1.9	45.55	頭部・頭部をもつ鉄鋸
			601	石突	鉄	7.1	7.1	(2.0)	-	-	-	-	18.76	日式残存長1.5cm
E17号墳群2埋葬施設	132	89-92	591	石突	鉄	-	-	-	-	-	-	-	-	状況 (m · d)

※括弧内は残存する部分の位置。

## 4. 上神増A・B・E古墳群出土耳環観察表

第40表 上神増A・B・E古墳群出土耳環・鏡製品観察表

出土位置	周囲 番号	回収 番号	遺物 番号	種類	材質	平面	断面		重量 g	備考		
							身	頭輪	足輪			
A5号墳群2埋葬施設	22	53-54	19	銅鏡	銅	3.4	2.9	円形	0.9	0.8	25.56	鏡面
B9号墳群2埋葬施設	45	57-58	67	銅鏡	銅	1.8	1.6	橢円形	0.6	0.4	2.52	鏡面
E3号墳群2埋葬施設	72	6-73-75	409	鏡	銅	(2.0)	(2.0)	圓形	0.5	0.5	1.57	
E16号墳群2埋葬施設	126	8-86-90	572	銅鏡	銅	(2.6)	(2.4)	円形	(0.6)	(0.5)	0.43	鏡面
			573	銅鏡	銅	(2.6)	(2.5)	円形	0.6	0.5	0.76	鏡面
			574	銅鏡	銅	2.7	2.4	円形	0.6	0.6	0.92	鏡面
			575	銅鏡	銅	2.8	2.7	円形	0.7	0.7	14.01	鏡面

※E3号墳出土の鏡製品(408)については、完影品ではないため検定ではないが、鏡舟貝(耳環)の可能性が有る。

※括弧内は残存する部分の位置。

# 第7章 自然科学分析の成果

## 第1節 金属製品の材質について

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

静岡県磐田市（旧豊岡村）に所在する上神増E古墳群では、6世紀後半頃とされるE2・E3号墳が確認され、石室からは豊富な遺物が出土した。本報告では、E2号墳の石室内から出土した刀装具とされる鉄製の小片遺物およびE3号墳出土の環状を呈する金属製遺物について、その材質を明らかにし、遺物の性格に関わる資料を作成する。

### 1. 試料

試料は、上神増E古墳群のE2号墳横穴式石室より出土した鉄製小片2点（鉄片1、2とする）とE3号墳横穴式木室床面より出土した環状を呈する金属製小片1点（408、環状遺物とする）である。各試料の外観は、写真25～27に示す。

なお、鉄片1・2ともに三葉環頭大刀の刀装具の可能性があるとされている。

### 2. 分析方法

鉄片2点については、表面に塗膜状の光沢が認められたことから、特に漆の塗布の有無を確認するためにフーリエ変換赤外分光分析を行う。ただし、後述するようにその結果から無機化合物である可能性が考えられたため、X線回折分析による再分析も行った。さらに、断面組織観察と成分分析を主とした金属学的調査を行い、材質の構造と成分を明らかにする。また、環状遺物については、蛍光X線分析による非破壊分析から成分を求めた。以下に各分析方法を述べる。

#### （1）フーリエ変換赤外分光分析（FT-IR）

##### a. 赤外線分光分析の原理

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて（すなわち吸収されて）、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、さまざまな結合を有する分子では、様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数（波長の逆数 $\text{cm}^{-1}$ で示す）、縦軸に吸光度（ABS）を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起こるかを調べ、その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標準化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより、未知物質の同定をすることができる（山田 1986）。

##### b. 赤外線吸収スペクトルの測定

鉄片試料の表面の塗膜状物質を剥離し、供試した。なお、これら鉄製品には保存処理が施されていた

ため、剥離試料はアセトンに浸漬し、繰り返し洗浄を行い、保存処理剤を除去した後、分析に用いた。

測定は、FT-IR 装置（サーモエレクトロン（株）製 Nicolet Avatar 370）を用いる。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、試料をメノウ乳鉢で微粉碎した後、KBr と混合・希釈し、錠剤に成型し、透過法で行う。また、得られたスペクトルは各種の補正を施した後、吸光度 (ABS) で表示する。測定条件及び各種補正処理の詳細については、FT-IR スペクトルを示した図 1 に併記しているので、そちらを参照されたい。

### (2) X線回折分析

メノウ乳鉢で微粉碎した試料を無反射試料板に充填し、X線回折分析試料（無定位試料）を作成し、以下の条件で測定を実施する。なお、検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. の X線回折パターン処理プログラム JADE を用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製 MultiFlex	Divergency Slit : 1°
Target : Cu (K $\alpha$ )	Scattering Slit : 1°
Monochromator : Graphite 湾曲	Receiving Slit : 0.3mm
Voltage : 40KV	Scanning Speed : 2° /min
Current : 40mA	Scanning Mode : 連続法
Detector : SC	Sampling Range : 0.02°
Calculation Mode : cps	Scanning Range : 2 ~ 61°

### (3) 金属学的調査

#### a. 外観観察

調査遺物は、外観的特徴をデジタルカメラおよび实体顕微鏡により観察・記録した。

デジタルカメラ Finepix F401 型（富士写真フィルム工業製）

实体顕微鏡 SZ40 型（オリンパス光学工業製）

#### b. 組織調査

鉄片 2 点は着磁良好な箇所を約 5mm 片に切り取り、断面が観察面になるように樹脂埋め込みし組織を固定後、鏡面になるまで研磨し、金属顕微鏡にて観察・記録した。

金属顕微鏡 BX51M 型（オリンパス光学工業製）

#### c. 成分分析

鉄片 2 点は、組織観察用研磨試料を用いて、残留金属鉄および非金属介在物の組成を X 線マイクロアナライザー (EPMA) にて分析した。一方、環状遺物は、蛍光 X 線分析装置により構成元素を求めた。以下に使用装置を示す。

X 線マイクロアナライザー (EPMA) JXA-8100 型（日本電子製）

蛍光 X 線分析装置 ZSX-100e 型（リガク製）

## 3. 結果

### (1) フーリエ変換赤外分光分析

FT-IR スペクトルを第 147 図に示す。鉄片 1 の赤外線吸収特性では  $3100\text{cm}^{-1}$  付近に幅広く強い吸収帯が見られるほか、 $1150\text{cm}^{-1}$  以下の低波数域に多数の吸収帯が確認される。鉄片 2 では  $3400\text{cm}^{-1}$ 、 $3100\text{cm}^{-1}$  付近に幅広く強い吸収帯が見られるほか、鉄片 1 と同様に  $1150\text{cm}^{-1}$  以下の低波数域に多数の吸収帯が確認される。

両試料とも漆に特徴的に認められる  $2930\text{cm}^{-1}$ 、 $2860\text{cm}^{-1}$  のメチル基およびメチレン基の C-H 伸縮振動、 $1710\text{cm}^{-1}$  の C=O 伸縮振動、 $1620\text{cm}^{-1}$  の C=C 伸縮振動による吸収が認められていないことから、漆の可能性は考えにくい。なお、FT-IR スペクトルを見る限りでは、有機化合物というよりは無機化合物である可能性が高い。そこで、X線回折分析による追加調査を実施し、無機化合物の材質を検証した。

## (2) X線回折分析

X線回折図を第148図に示す。鉄片1、2ともに鉄の酸化・水酸化鉱物である磁鉄鉱(magnetite)、針鉄鉱(goethite)、レピドクロサイト(lepidocrocite)が検出された。

## (3) 金属学的調査

### a. 鉄片1

写真25に外観と断面マクロ・ミクロ組織を示した。また、成分分析の結果は第149図に示した。大きさは、 $18 \times 23$ で厚さ約2mm、重量は2.053gを測る。全体的に茶褐色で鉛化は進んでいるものの磁石を近づけると若干はあるが吸い付く。厚みに対し水平に模様が形成しており、明らかに鍛造して薄板に成形したことがわかる。全体的に鉛化しているが、極一部には白色を呈する金属鉄が残存している。また、写真中にA-Bで示した部分は突起部で、明らかに板状に加工した後、突起加工を施したものと考えられる。これは、本遺物の表面に何らかの被覆を施すため、被覆材の密着性や剥離難易性を向上させるためのものと考えられる。地金成分は残留金属鉄が殆ど残っていないため正確な情報は得られなかつたが、金属鉄中には微量元素として硫黄(S)が約0.1%検出し他の元素は存在しなかつた。したがつて、元は炭素量の低い軟鋼と推測される。また、非金属介在物も見当たらず、比較的清浄な材料と考えられる。

なお、表面の一部には灰色粒子を包有した暗灰色の付着物が認められた。その成分を第41表に示す。暗灰色の基質は、珪酸分と鉄分が多く少量のアルミを伴い、灰色粒子は珪酸分が約80%を占め、少量のアルミを伴う組成であった。

第41表 鉄片1の付着物の成分分析結果

	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	K <sub>2</sub> O	ClO <sub>3</sub>
基質	46.5	—	13.3	37.7	1.4	1.3
灰色粒子	77.8	0.5	13.4	6.8	1.2	—

単位(%)

### b. 鉄片2

写真26に外観と断面マクロ・ミクロ組織を示した。また、第42表と第150図に成分分析結果を示した。大きさは、 $14 \times 25$ で厚さ約3mm、重量は2.439gを測る。鉄片1と同様に茶褐色で鉛化は進んでいるものの磁石には吸い付く。また、厚み方向に対し水平に模様が形成しており、鍛造によって薄板加工をしたことが判る。全体的に鉛化が進んでいるが極一部に白色を呈する金属鉄が残存し、その近傍に非金属介在物が存在する。金属鉄中には微量元素としてニッケル(Ni)が0.18%検出するが他の元素は存在しなかつた。炭素濃度は残留金属鉄が少なく判断するには困難であるが、薄板に加工していることから、元は炭素量の低い軟鋼と推測される。一方、非金属介在物は若干のチタン(Ti)、マグネシウム(Mg)、バナジウム(V)を含むウスタイトと構(P)を含むウスタイトおよび非晶質珪酸塩からなる構成鉱物である。

第42表 鉄片2の非金属介在物の鉱物相分析結果

分析箇所	FeO	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MgO	CaO	TiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>
2	97.60	0.32	0.38	0.45	—	0.34	—	—	0.87
3	95.80	1.36	0.85	—	0.23	—	—	1.43	—
4	67.20	21.30	3.27	0.71	3.17	0.32	0.12	3.91	—

単位(%)

第7章 自然科学分野の成果

測定情報

サンプルスキャン回数 : 40  
バックグラウンドスキャン回数 : 40  
分解能 : 4.000  
ミラー速度 : 0.6329

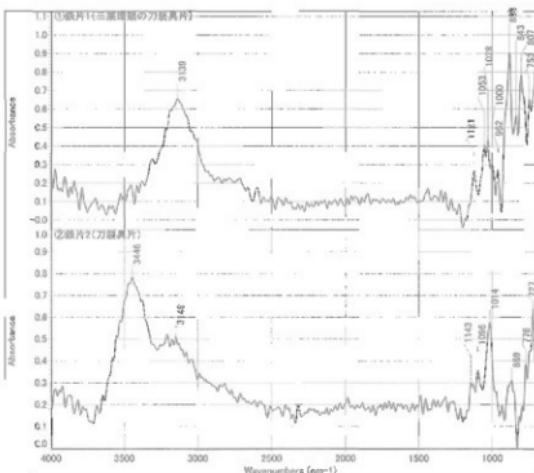
光学系の構成

検出器 : DTGS KBr  
ビームスプリッタ : KBr  
光源 : IR

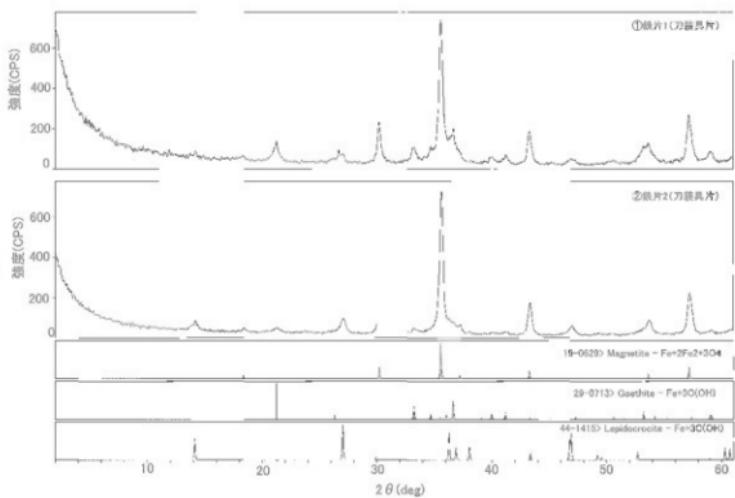
備考

KBr錠剤成型  
透過法

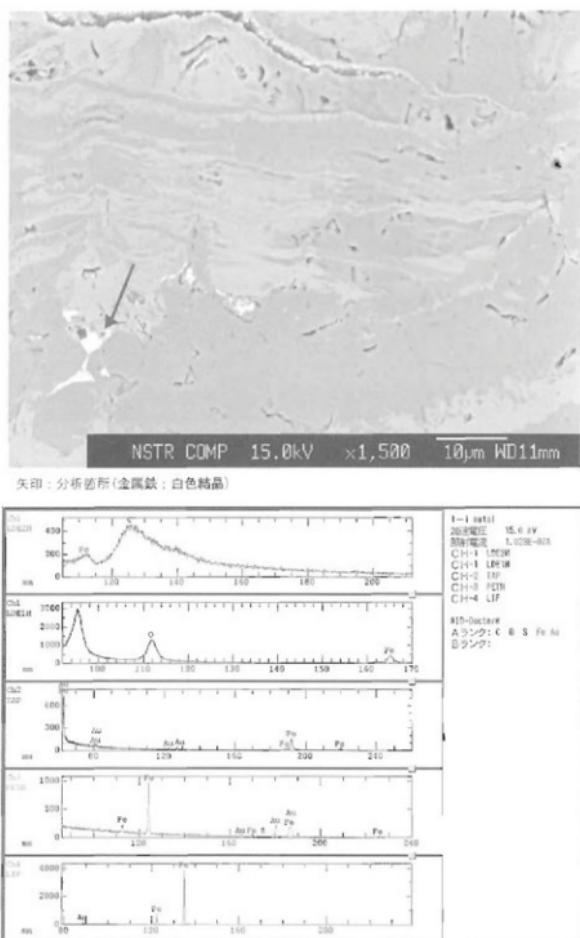
CO<sub>2</sub>除去(直線化)  
オートベースライン補正  
スムージング処理  
Y軸正規化



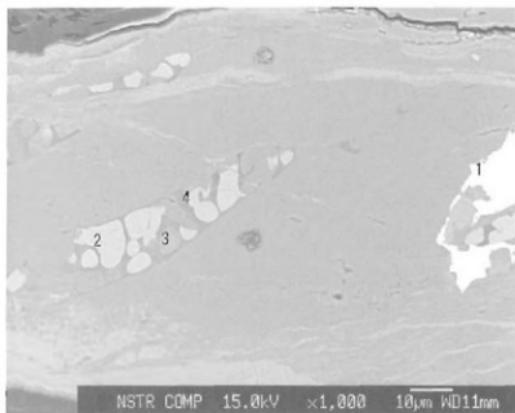
第147図 FT-IRスペクトル



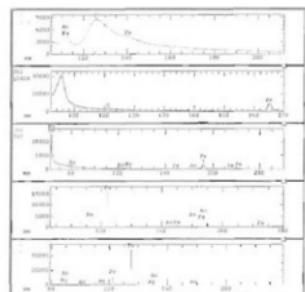
第148図 X線回折図



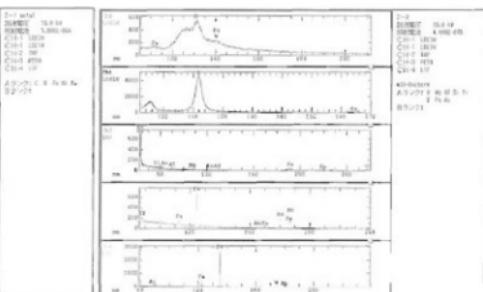
第149回 鉄片の金属鉄の成分分析結果



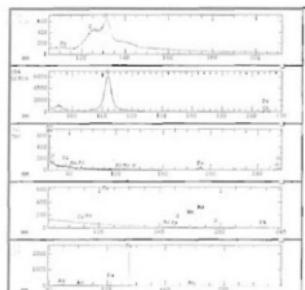
数值：分析图所



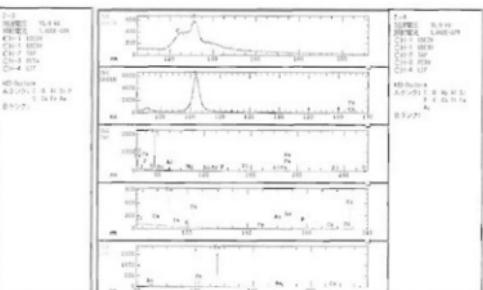
### 1. 金属铁(白色)



## 2.ウスタイルA(明灰色)



### 3.ウスタイト日(灰色)



#### 4. 非晶質矽酸塗(暗灰色)

第150図 鋼片2の金属鉄および非金属介在物の成分分析結果

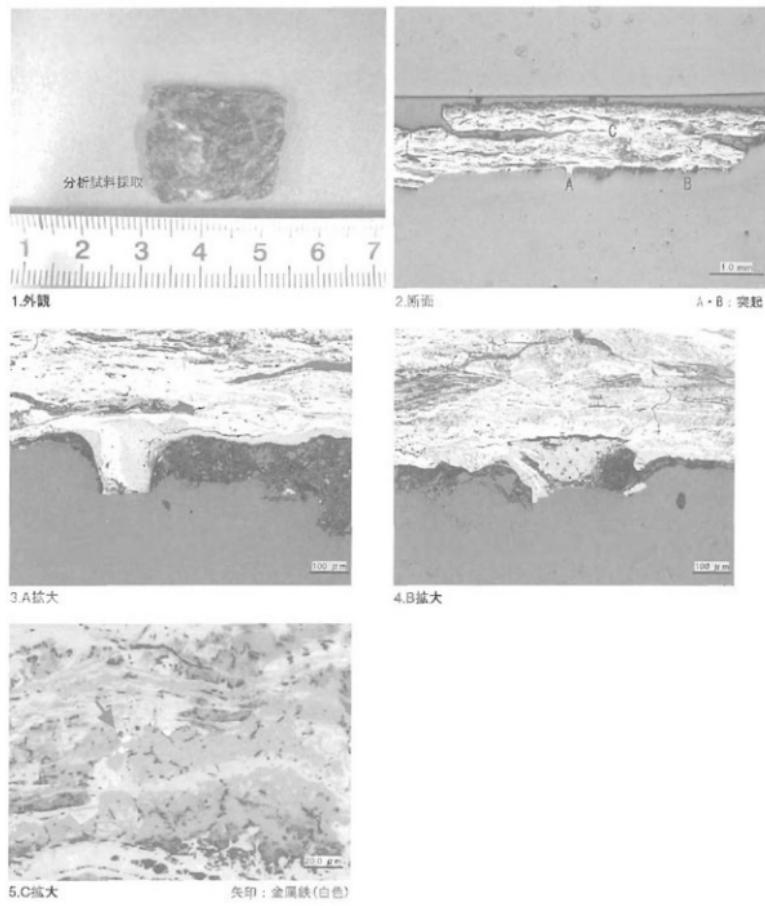


写真26 鉄片 1 の外観と断面組織

第7類：自然材料分析の結果

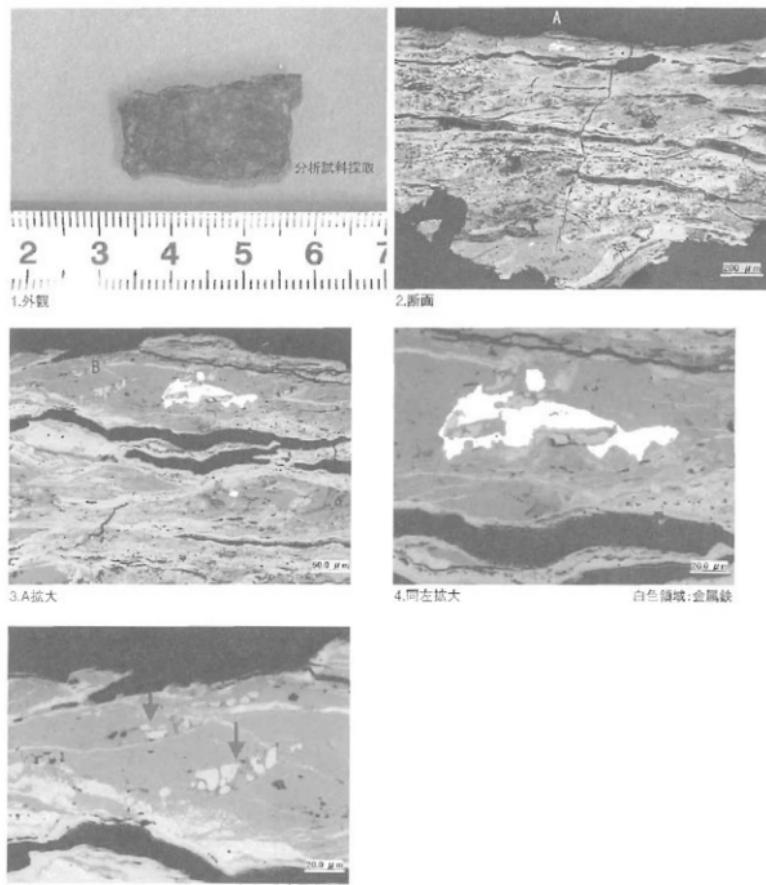


写真26 鉄片 2 の外観と断面組織

### c. 環状遺物

写真27に外観写真、第43表に成分分析結果を示した。黒灰色で表面は凹凸が著しくリング状をした環状遺物である。リングの太さは4.5程度で重さ1.572gを測る。主成分は錫(Sn)で、酸化物として存在する。また、鉄(Fe)・鈷(P)・クロム(Cr)・亜鉛(Zn)・鉛(Pb)は、錫(Sn)中の不純物として存在するものと考えられる。その他の検出元素は周囲からの混入物質と考えられる。非破壊分析のため、表面の情報であるので内部の情報は計り知れないが、いずれにしても錫(Sn)を主体とする遺物である。

第43表 金属製品(408)の成分分析結果

Fe	Si	Al	K	P	S	Cr	Sn	Zn	Pb
1.29	1.00	0.59	0.07	0.21	0.04	0.24	96.00	0.07	0.51

基値(%)

### 4. 考察

鉄片1および2の表面に見られた塗膜状の物質は、FT-IRおよびX線回折分析の結果より、漆である可能性は低く、地金が腐食したことによって表面に析出した鉄鏽である可能性が高い。また、鉄片1の表面に認められた付着物については、その成分から、おそらく鉄鏽と泥の混合したもの（特に灰色粒子は泥の粒）であると推定される。なお、鉄片試料は、いずれも炭素量の低い軟鋼を鍛造により薄板加工した加工品であることが確認された。鉄片1は刀装具の一部であることから、今回の分析結果は、当時の金属加工品の特性の一部を示すものと言える。また、鉄片2は鉄片1とほぼ同様の特性を示したことから、鉄片1と同様に刀装具の一部である可能性が高い。

環状遺物は錫製の金属製品であることが明らかとなったが、具体的にどのような性格の遺物であったかは不明である。今後の類例の発見を待ちたい。

### 引用文献

山田富貴子 1986 「赤外線吸収スペクトル法」「機器分析のてびき」第1集 化学同人 1-18頁

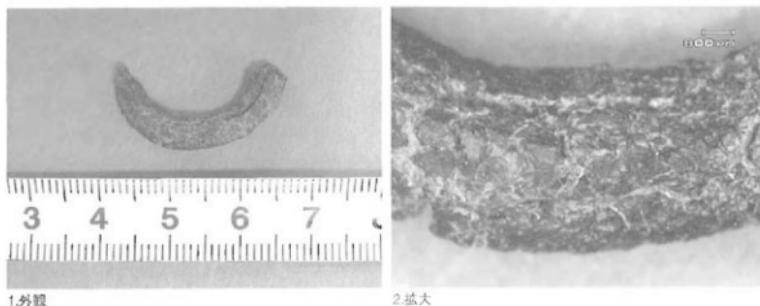


写真27 金属製品(遺物番号408)の外観

## 第2節 炭窯（SF12）出土炭化材放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

### 1. 測定対象試料

測定対象試料は、上神増E古墳群で検出された炭窯SF12出土炭化材（1：IAAA-90008、2：IAAA-90009、3：IAAA-90010、4：IAAA-90011、5：IAAA-90012）合計5点である。

### 2. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。  
最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

### 3. 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC社製）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 4. 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- (2) <sup>14</sup>C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として過る年代である。この値は、δ<sup>14</sup>Cによって補正された値である。<sup>14</sup>C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差（±1σ）は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) δ<sup>14</sup>Cは、試料炭素の<sup>14</sup>C濃度（<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。
- (5) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差（1σ = 68.2%）あるいは2標準偏差（2σ = 95.4%）で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない<sup>14</sup>C年

代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 – Bronk Ramsey 2001; Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

## 5. 測定結果

$^{14}\text{C}$  年代は、1 が  $960 \pm 30\text{yrBP}$ 、2 が  $910 \pm 30\text{yrBP}$ 、3 が  $930 \pm 30\text{yrBP}$ 、4 が  $920 \pm 30\text{yrBP}$ 、5 が  $920 \pm 30\text{yrBP}$  である。誤差の範囲内ですべて重なっており、ほぼ同年代と判断される。炭素含有率はいずれも 70% 前後と十分な値であり、化学処理、測定上の問題は認められず、妥当な年代と判断される。

第44表 SF12出土炭化材の放射性炭素年代測定結果一覧表

測定番号	試料名	採取場所	試料	形態 処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 調正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-90008	1	遺構: SF12	炭化材	AAA	-23.84 ± 0.85	960 ± 30	88.71 ± 0.33
IAAA-90009	2	遺構: SF12	炭化材	AAA	-21.83 ± 0.81	910 ± 30	89.29 ± 0.34
IAAA-90010	3	遺構: SF12	炭化材	AAA	-24.72 ± 0.69	930 ± 30	89.05 ± 0.32
IAAA-90011	4	遺構: SF12	炭化材	AAA	-22.62 ± 0.64	920 ± 30	89.18 ± 0.33
IAAA-90012	5	遺構: SF12	炭化材	AAA	-23.98 ± 0.92	920 ± 30	89.16 ± 0.33

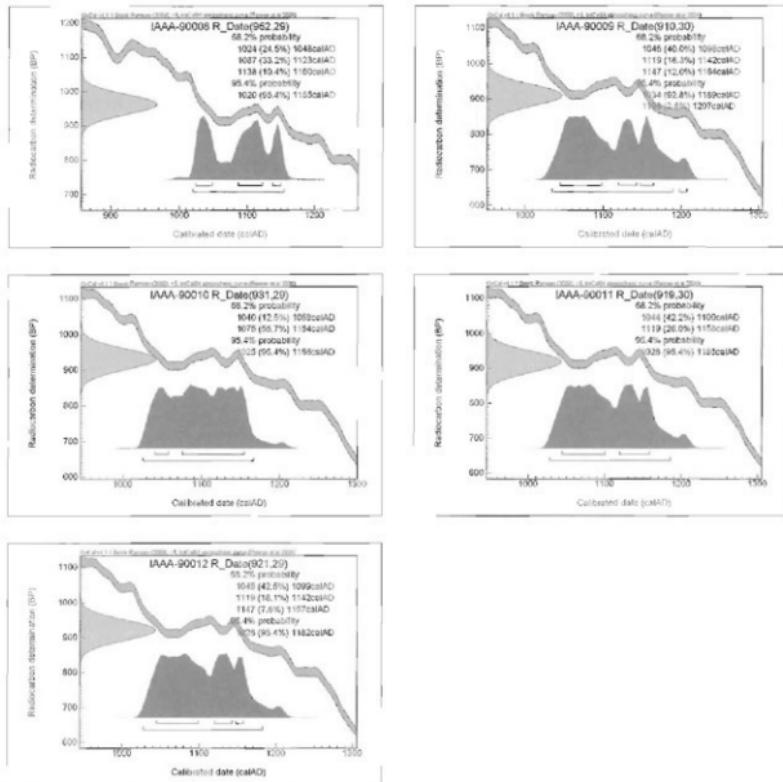
[参考]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 調正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲		2 $\sigma$ 暦年代範囲	
	Age (yrBP)	pMC (%)					
IAAA-90008	940 ± 30	88.92 ± 0.29	962 ± 29	1024AD - 1048AD (24.5%) 1087AD - 1123AD (33.2%) 1138AD - 1150AD (10.4%)		1020AD - 1156AD (95.4%)	
IAAA-90009	860 ± 30	89.87 ± 0.30	910 ± 30	1045AD - 1098AD (40.0%) 1119AD - 1142AD (16.3%) 1147AD - 1164AD (12.0%)		1034AD - 1189AD (92.8%) 1198AD - 1207AD (2.6%)	
IAAA-90010	930 ± 30	89.10 ± 0.30	931 ± 29	1040AD - 1058AD (12.5%) 1075AD - 1154AD (55.7%)		1025AD - 1166AD (95.4%)	
IAAA-90011	880 ± 30	89.62 ± 0.31	919 ± 30	1044AD - 1100AD (42.2%) 1119AD - 1158AD (26.0%)		1028AD - 1185AD (95.4%)	
IAAA-90012	990 ± 30	88.44 ± 0.28	921 ± 29	1045AD - 1099AD (42.5%) 1119AD - 1142AD (18.1%) 1147AD - 1157AD (7.6%)		1038AD - 1182AD (95.4%)	

[参考]

## 参考文献

- Suiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19, 355-363  
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430  
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363  
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389  
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



第151図 [参考] 歴年校正年代グラフ

## 第3節 炭窯（SF12）出土炭化材の樹種同定

（株）加速器分析研究所

### はじめに

上神増E古墳群は、天竜川左岸の丘陵尾根部に立地する。これまでの発掘調査により20基以上の古墳の他、縄文時代の土坑、古代墳墓、中世の炭窯等の遺構が検出されている。

本報告では、中世の炭窯における木材利用を明らかにするため、内部から出土した炭化材について樹種同定を実施する。

### 1. 試料

試料は、SF12（炭窯）から出土した炭化材5点（試料番号1～5）である。

### 2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・社目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の削断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

### 3. 結果

樹種同定結果を第45表に示す。炭化材は、全て落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定され

た。解剖学的特徴等を記す。

コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus subgen. Quercus sect. Pinus*）ブナ科

環孔材で、孔隙部は1～2列、孔隙外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

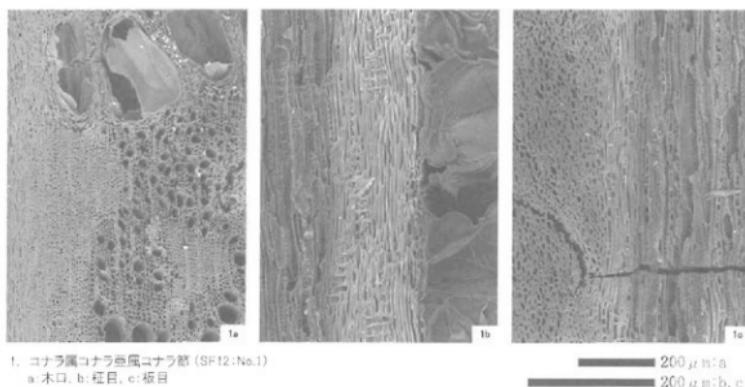
第45表 SF12出土炭化材の樹種同定結果

番号	通稱	試料名	樹種
1	SF12(炭窯)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
2	SF12(炭窯)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
3	SF12(炭窯)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
4	SF12(炭窯)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
5	SF12(炭窯)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節

### 4. 考察

炭窯から出土した炭化材は、製炭された木炭あるいは木炭を生産するための燃料と考えられている。これらの炭化材は、年代測定により  $910 \pm 30\text{BP}$  ～  $960 \pm 30\text{BP}$  の補正年代が得られている。炭窯の炭化材は、調査した全てが落葉広葉樹のコナラ節に同定された。日本のコナラ節には、コナラ、ミズナラ、カシワ、ナラガシワの4種といくつかの変種がある。いずれも木材は重硬で強度が高い材質を有しており、薪炭材として優良とされることから（平井, 1996）、出土した炭化材は製炭された木炭の一部である可能性が高い。

炭窯で製炭された木炭は、製鉄燃料材等、何らかの生産活動に利用されたことが推定される。今後、生産構造から出土する炭化材について樹種同定を行うことで、木炭の利用状況などを明らかにすることが望まれる。



1. コナラ属コナラ亜属コナラ筋 (SF12-No.1)  
a:木口, b:径目, c:板目

写真28 炭窯SF12出土炭化材の組織

#### 引用文献

- 林 昭三 1991 「日本産木材 虹微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 81-181頁。
- 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 66-176頁。
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 83-201頁。
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 30-166頁。
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 47-215頁。
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 「図説木材組織」 地球社 176頁。
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 治 (日本語版監修) 海青社 122p. (Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification)
- 平井信二 1996 「木の大百科 解説編」 朝倉書店 642頁。

※) 本測定は、当社協力会社・カリノ・サーヴェイ(株)にて実施した。

# 第8章 上神増A・B・E古墳群の評価

## 第1節 上神増A・B・E古墳群の築造順序と群構成

### 1. 上神増A・B・E古墳群の築造順序

#### (1) 上神増A・B・E古墳群の編年的位置づけ

今回調査した上神増古墳群の形成過程について検討する前に、ここでは検討資料とする各古墳の埋葬施設と主な出土遺物、時期的な位置づけを提示する。第152図には各古墳の埋葬施設、築造時期と追葬時期についてまとめた（註1）。第153図には、古墳時代中期に位置づけられる古墳の埋葬施設と主な副葬遺物を、第154・155図には古墳時代後期～終末期に位置づけられる古墳の埋葬施設と副葬遺物を示した（各古墳の詳細について第4章第3節第5表参照。第154図には、既往調査の上神増D・F古墳群、新林1号墳についても掲載した）。

さらに、合代島丘陵に築造された古墳群のうち発掘調査され、内容が判明しているものについて第46表にまとめた。なお、第152図、第46表は後述する合代島丘陵に築造された古墳群の分節に基づき作成しており、単純に古墳番号ごとに表示していない。

#### (2) 合代島丘陵の古墳の築造順序

ここで、今回調査した古墳の位置づけとともに合代島丘陵の古墳群の動向について考え、今回調査を実施した古墳の意義について考えたい。第156図には時期ごとに築造された古墳、追葬が行われた古墳、前段階に築造された古墳を示した。

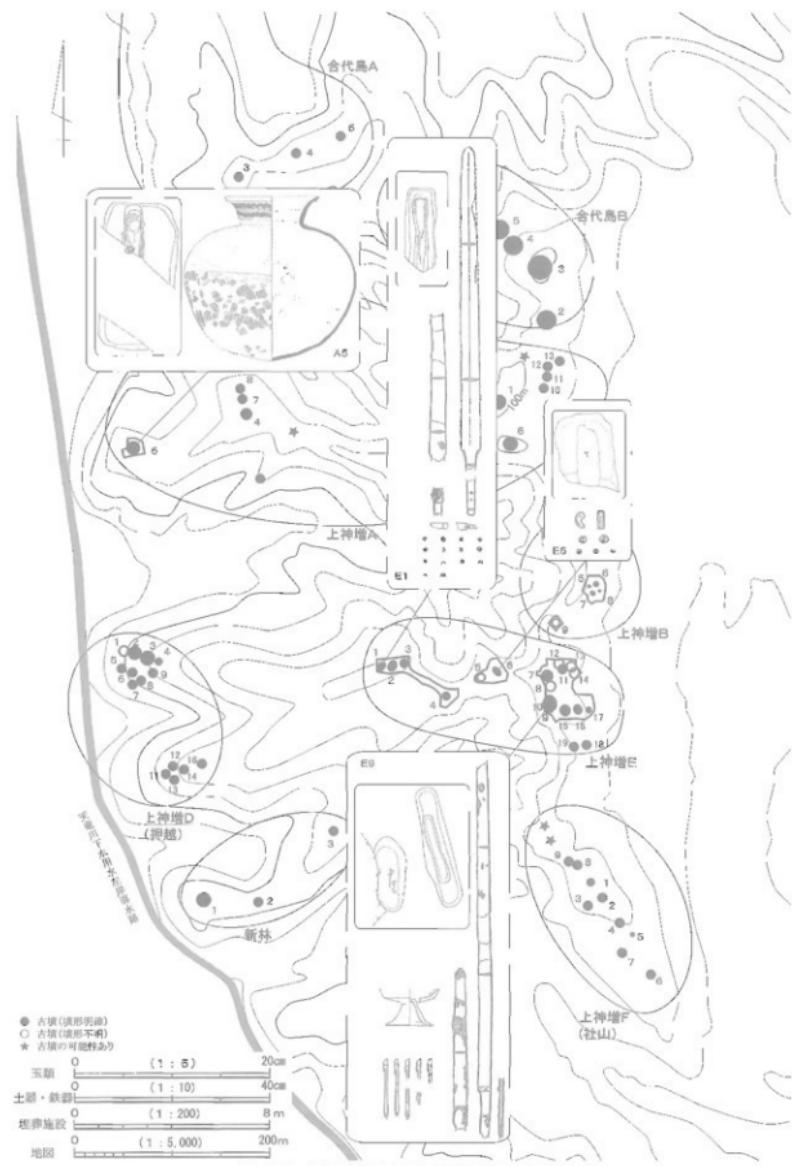
支群	基数	単位群	古墳名	埋葬施設	石材	I中	I後	II	III前	III中	III後	IV未	IV前	IV後	V前	V後
合代島丘陵群	單数	1	KA 5-第1	木棺直葬?												
	○	KA 5-第2	片油式石室		■											
	单数	○	KE 1	木棺直葬?												
	1	KE 2		無袖形	●											
	複数	1	KE 3	横穴式石室	●											
	单数	2	KE 4	不明（木室?）	—											
	单数	○	KE 5	未梢直葬?	—											
	单数	○	KE 6	木棺直葬?												
	单数	3	KE 7	箱形石室? 塔	■											
	单数	○	KE 8	木棺直葬?	—											
合代島丘陵群	複数	○	KE 9-第1	木棺直葬?	—											
	单数	○	KE 9-第2	木棺直葬?												
	单数	4	KE10	横口横造の「難拠」	●											
	複数		KB 5	疑似両袖式	●											
			KB 6	疑似両袖式	●											
		1	KB 7	疑似両袖式	●											
			KB 8	無袖形	●											
			SF14	古代埴輪	—											
			SF15	古代埴輪	—											
		2	KB 9	疑似両袖式	●											
	複数		SF03	古代埴輪	—											
			KE11	疑似両袖式?	●											
		3	KE12	疑似両袖式	●											
			KE13	横穴式土壙	—											
			KE14	無袖形	●											
	複数		KE15	疑似両袖式	●											
		4	KE16	疑似両袖式	●											
			KE17	疑似両袖式	●											
			SF13	古代埴輪	—											

単位群の○は堅穴系埋葬施設

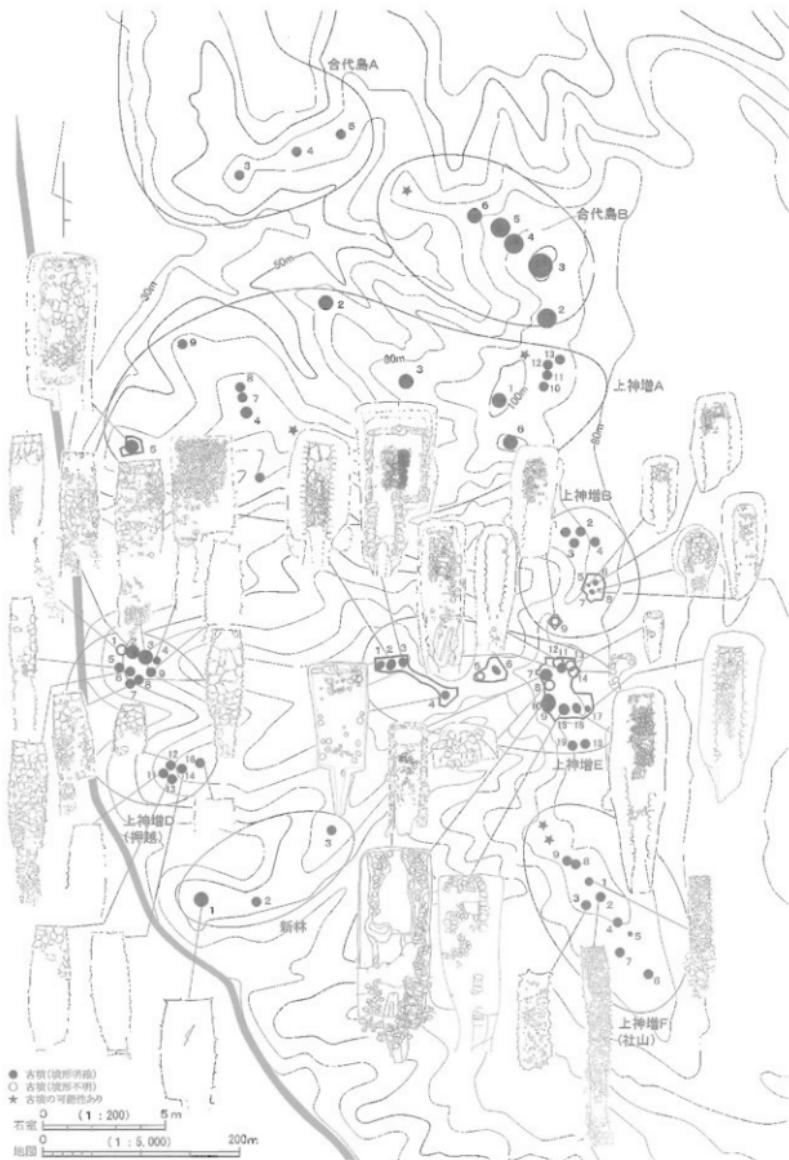
KA=上神増A古墳群 KB=上神増B古墳群 KE=上神増E古墳群  
SF=箱形石室、横口横造の石室、横穴式石室の可能性がある。  
石材 ● 圓盤に川原石を主に使用 ■ 圓盤に角礫を主に使用

■ 築造 ■ 追葬 ■ 推定

第152図 今回調査した古墳の築造時期と追葬時期

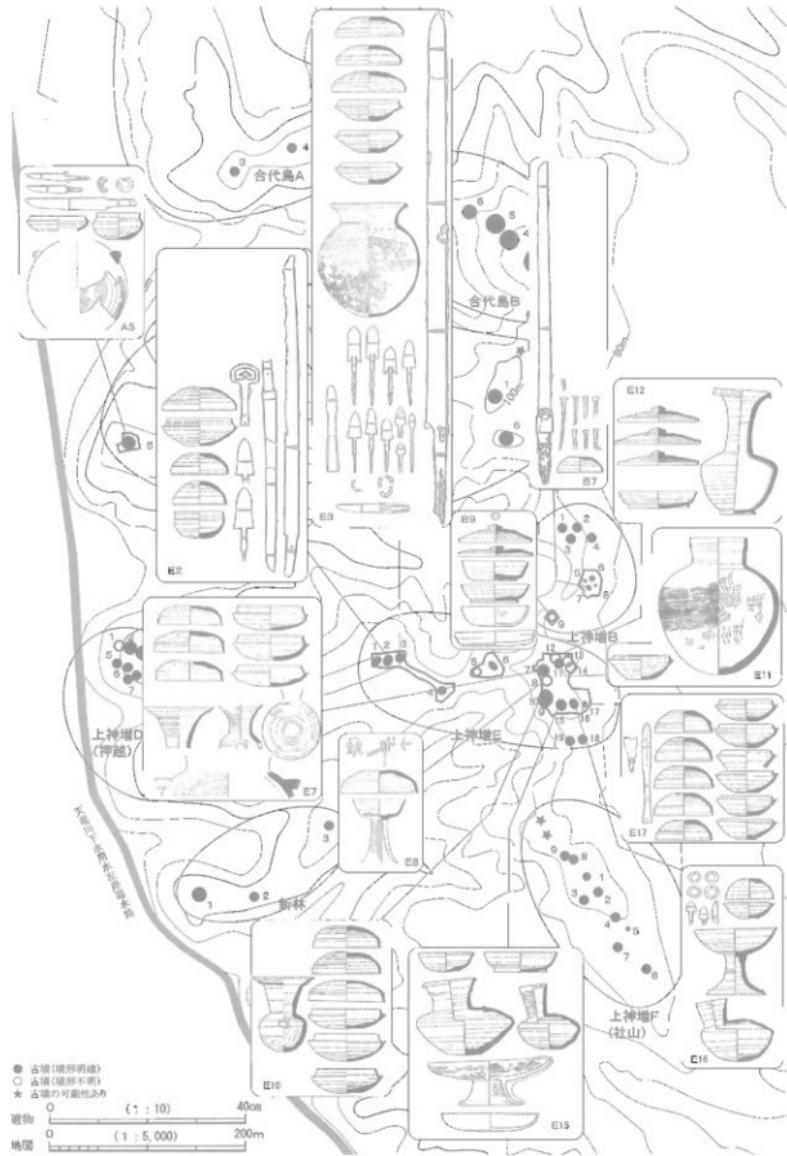


第153図 古墳時代中期の古墳の埋葬施設と出土遺物



第154図 古墳時代後期～終末期の古墳の埋葬施設

第8章 上神塚A・B・E古墳群の計画



第155図 古墳時代後期～終末期の古墳の出土遺物

### a. 古墳時代中期中葉～末葉一合代島丘陵における古墳の初現－

この時期（遠江Ⅰ期中葉～末葉、TK208～TK47型式期）に築造された古墳は、上神増A 5（第1埋葬施設）、上神増E 9号墳（第156図）、新平山B 1・2号墳である。上神増E 1・6号墳、新平山B 8号墳（豊岡村教委1992、以下、新平山B古墳群についてはこの文献参照）はこの時期の築造である可能性が高い。なかでも上神増A 5号墳と新平山B 2号墳が中期中葉に遡る可能性が高く、現状でこの2基が合代島丘陵で確認された最も古い古墳である。この時期が第1の画期（古墳の出現期）であり、今回の調査で合代島丘陵の古墳築造の開始時期が中期中葉まで遡ることが判明したことに意義がある。合代島丘陵周辺では、旧豊岡村の五反田1号墳（豊岡村教委2000b）が中期前半、同じく大手内A 15号墳（豊岡村教委2000a、以下大手内A古墳群はこの文献参照）が前期末～中期前半に位置づけられるため、今後さらに遡る時期の古墳が確認される可能性も高い。しかし、これらはいずれも単独であり、中期中葉～末葉に10基弱がまとまって築造された点が重要である。この時期は磐田原台地北西縁に血松塚古墳（前方後円墳、全長約50m）が築造された時期でもあり、この古墳の築造に連動した可能性が高い。

この時期の古墳は西尾根から西側に派生する尾根上、東尾根北端の丘陵上に単独あるいは2基程度で築造されており、平坦面が少ないとから集中箇所は確認できない。今後合代島丘陵の調査が進んだとしても、この傾向に大きな変化はないものと考える。

また、この時期の古墳は10～15mの小規模な円墳で、やや大型の上神増A 5号墳、新平山B 1・2号墳は葺石を葺く。若干の規模差に階層差が表れている可能性がある。これらは木棺直葬を埋葬施設とする。遺物は玉類、鉄劍・刀、鉄鎌、土器であり、一般的な遺物が出土している。

### b. 古墳時代後期前半一合代島丘陵の古墳の変質－

つづく後期前半（遠江Ⅱ期～Ⅲ期前葉）に位置づけられる古墳は上神増E 7・8・10号墳の3基のみである。前段階では6箇所7基の築造が確認できたが、新平山A・B古墳群、上神増A 5号墳周辺では築造が継続しておらず、後期前半には一旦この3基を除いて古墳の築造は下火となる。したがって、合代島丘陵の古墳群は、古墳時代中期から終末期まで古墳群全体としては継続的に築造されるものの、微視的にはこの時期に一旦断絶が確認できる。

この時期の3基は丘陵尾根上に築造される点は変わりないが、今回調査した古墳群では西尾根の最も高い尾根筋に築造されている。古墳の規模は10m前後であり、全段階と同様であるが、埋葬施設は大きく変化している。E 7号墳は箱形石槨、「横口構造の石槨」、または横穴式石室の可能性がある特異な埋葬施設であり、E 10号墳は「横口構造の砾槨」の可能性が高く、遠江でも早い段階に横穴系埋葬施設の影響を受けて堅穴系埋葬施設が変化した可能性が高い。

残念ながら盗掘や地震による地滑りの影響が大きく、副葬品は多くが失われているが、E 8号墳では金銅装軒金具（鞍）が確認されており、豊富な遺物が副葬されたことが想定できる。

この段階は、古墳の築造数の減少、埋葬施設の変化という大きな変化があった時期である。今回の調査によりこれまでに確認されなかったこの時期の3基が確認されたことに意義がある。

### c. 古墳時代後期後半一合代島丘陵における横穴系埋葬施設の本格的導入－

後期後半（遠江Ⅲ期中葉～Ⅲ期後葉、TK43～TK209）には尾根上はもちろん、この段階で西尾根の両斜面に古墳が築造されるようになり、古墳の築造が急増する。以後、活発に奈良時代直前まで古墳の遺営が続く。上神増D（押越）古墳群や新林古墳群（豊岡村1993）、新平山A古墳群ではこの段階から古墳の築造が始まり、上神増A古墳群では古墳の築造が再開される。尾根上から斜面へ徐々に古墳築造範囲を広げている様子が窺える。

この時期に築造される古墳は、上神増A 5、E 2・3号墳が挙げられ、上神増E 16号墳が築造された可能性が高い。また、既往の調査では上神増D 2・4・7号墳（豊岡村教委1983、以下上神増D古墳群

第46表 合代島丘陵の古墳群時期別古墳数

支群	古墳群名	古墳番号	古墳數	調査数	I	中	II	III前	III中	III後	IV前	IV後	V前	V後	不明
					I後	II	III前	III中	III後	IV前	IV後	V前	V後	不明	
新平山群	新平山A	1~11	11	11					2	1	2	1	2		3
	新平山B	1~18	18	18		3			1	6	8				
合代島I群	合代島A	1~2	2	0											
	合代島A	3~5	3	0											
合代島B	合代島B	2~6	5	1	0										
	上神増A	1~9	9	1	1				1						
合代島C	上神増D	1~9 11~14 16~20	15	15				3	4	2	1		2		3
	新林	1~3	3	1				1							
上神増A	上神増A	10~13	4	0											
	上神増B	1~6	9	5						1			1	1	2
合代島D群	上神増E	11~17	9	7				1	1	1			3	1	
	上神増F	1~9	9	3					2	1					
合代島E群	合代島C	1~7	7	0											
	上神増G	1~50	10	10	4	1	1	2	1						1
合計		114	71	1	7	1	1	6	8	6	13	10	4	6	9

についてはこの文献参照)、新林1号墳、新平山A 1・4号墳が挙げられる。さらに、調査されていないため不明確ではあるが、「静岡県史」(静岡県 1930) の記述が正しいとすれば、鈴鏡の出土が伝えられる「上神増古墳」や三累環頭大刀が出土した「合代島古墳」、板石積みの「合代島1号墳」がこの時期の築造と考えられる(静岡県 1930)。

現状で上神増B古墳群では後期後半に遡る古墳は確認できないが、今回のB-1調査区から出土した須恵器に遠江Ⅲ期後葉に位置づけられるものがあり、未発見の古墳が近くに所在する可能性がある。

第156図には遠江Ⅲ期中葉とⅣ期後葉に分けて掲載した。これをみると、Ⅲ期中葉は上神増D古墳群と上神増E 2・3・16号墳の築造のみで合代島丘陵全体ではなく一部地域に限られていたものが、遠江Ⅲ期後葉に上神増A古墳群、新平山A 1・4号墳、新林1号墳が築造され、合代島丘陵全体で古墳の築造が行われた可能性が高い。

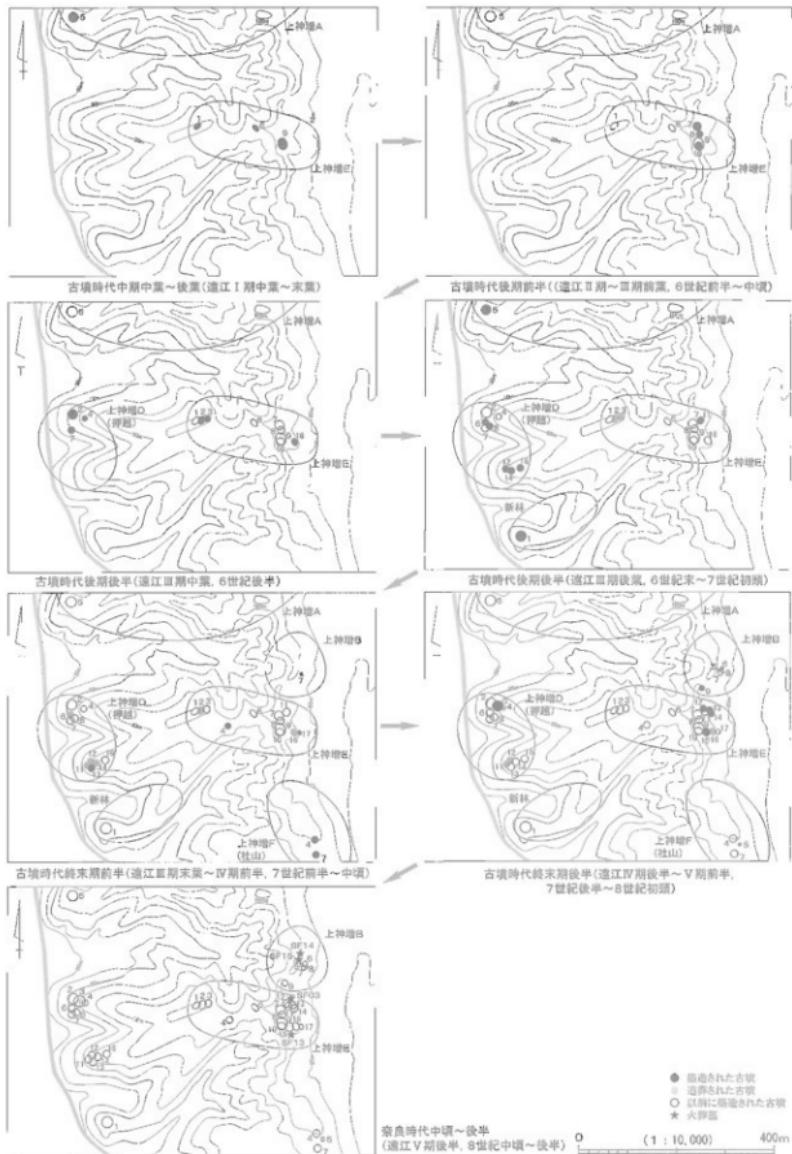
この段階の古墳は、墳丘20 mほどと想定される上神増A 1・6号墳や、鈴鏡が出土した「上神増古墳」、三累環頭大刀が出土した「合代島古墳」があり、規模が大きく、豊富な遺物が出土した古墳が確認できるようになる。装飾付大刀や鈴鏡など遺物も豊富であることからこの段階では、合代島丘陵西尾根に築造された古墳が、盟主的な古墳であったといえる。古墳規模が大きくなり、金銅製品を有することから合代島丘陵の古墳群の造営者集団の重要性が増した時期といえよう。一方で、尾根斜面に築造された古墳は、これらに比べると規模がやや小さく、遺物も鉄製馬具が副葬される程度である。したがって、この時期の合代島丘陵の古墳群は、尾根の最も高い部分にやや大型の古墳が築造され、その古墳を中心として、古墳群が築造された可能性が高い。

また、この段階では上神増A 5号墳第2埋葬施設が、第1埋葬施設を大きく破壊して築造するなど、前段階の古墳を破壊・再利用しており、古墳を再利用している面からみれば同一系譜にある築造者集団と捉えられるが、その中心となる埋葬施設を大きく破壊していることを評価すれば、築造集団が異なり、A 5号墳第2埋葬施設を築造した集団は、ただ単に丘陵の高まりを利用しただけの可能性もある。したがって、この段階に合代島丘陵の古墳群の造営集団自体が変化した可能性がある。

後期後半は、古墳築造数の増加とともに合代島丘陵全体が古墳造営地として機能していたことが確認できたこと、磐田原台地東縁や、小笠山丘陵に限られると考えられていた横穴式木室が旧豊岡村域で確認されたことに意義がある。

#### d. 古墳時代終末期前半—古墳の盛行—

終末期前半(遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半、飛鳥Ⅰ～Ⅱ期)には、古墳の築造が活発に行われるとともに、既存の古墳には追葬が行われた時期で、合代島丘陵における古墳築造の最盛期である。この時期に位置づけられる古墳は上神増B 7、E 11・17号墳をはじめ新平山A・B古墳群を中心に計16基以上が確認



第156図 今回調査した古墳の築造過程

できる。これ以外にも、遺物が出土していないが、石室形態からはこの時期に帰属する可能性が高い古墳も多く、古墳築造数が最も多い時期といえる。

終末期前半は、西尾根の尾根筋上で築造が確認できなくなるのに対し、北端の新平山B古墳群、南端の上神増F古墳群で築造が開始される。また、西尾根両斜面や新平山A古墳群では前段階に引き続いで古墳の築造が行われ、古墳築造の盛期を迎えたといえる。

この段階の古墳は新平山古墳群で20mを前後の古墳（A2号墳）が築造され、鏡や金銅装馬具、装飾付大刀（A2・6号墳）など豊富な遺物が出土しているが、西尾根では上神増B7号墳の装飾付大刀のみで石室規模も小さいことから、合代島丘陵の有力墳が西尾根上から新平山A古墳群へ変化した可能性が高い。これに伴い、新平山A・B古墳群での築造が増加する一方で、上神増D・E古墳群では築造数が減少する。上神増D古墳群では片袖式石室の築造が確認できなくなり、疑似両袖式石室が確認できるようになる。上神増E16号墳など疑似両袖式石室の影響を受けている可能性もある。

この段階は古墳の造営箇所が変化し、後述するように石室形態についても大きく変容した時期といえ、社会、文化の変化があったことが想定できる。

#### e. 古墳時代終末期後半～古墳の衰退

終末期後半（遠江IV期後半～V期前半）は、終末期前半と同様築造数は多く、今回の調査で確認された古墳では上神増B8・9、E12～15号墳、これ以外では新平山A10、B9～12号墳、上神増D20号墳など計19基が挙げられる。この終末期後半には前段階同様築造数は多いものの、上神増B8、E13・14号墳、新平山A9号墳などのような小型の石室の存在から徐々に石室規模が縮小していく傾向にあり、埋葬方法が複次葬から単（次）葬（改葬）へ変化した可能性が高い（註2）。

いずれも古墳の規模は10m以下と小さく、副葬遺物も減少しており、合代島丘陵の古墳群の明確な盟主的な古墳は確認できなくなる。

#### f. 奈良時代中頃～後半～火葬墓の築造

奈良時代中頃～後半（遠江V期後半）にかけて上神増B・E古墳群中のみ火葬墓が造営されている。上神増B5・6号墳周辺、上神増E16号墳周辺と上神増E11号墳周辺であり、それぞれが遠江V期前半まで古墳が築造される箇所（単位群）に位置している点が注目できる。一方、同じく最終末まで古墳の造営が行われる新平山A・B古墳群、上神増D古墳群では古代墳墓が確認されていないことも注目できる。火葬墓単独で築造された場合には確認するのは困難であるため、新平山A・B古墳群、上神増D古墳群周辺に所在しなかったとは断言できないが、西尾根東斜面にのみ確認できるため、古代墳墓の分布に偏りがありそうな点は興味深い。

古墳の最終末段階と古代墳墓に若干の時期差があるため確定的ではないが、古墳に隣接して築造されている点から考えれば、古墳と古代墳墓の造営者集団には出自等系譜的な繋がりがあったと考えたい。

この段階は、古墳造営終了後、火葬墓に移行する集団が存在する可能性が高いことが判明した点が重要である。

## 2. 合代島丘陵の古墳群の分節単位と意義

### (1) 分節の方法について

合代島丘陵に造営された古墳群は、おおよそ地域ごとに新平山、合代島、上神増、新林の4古墳群に区分され、それぞれがさらに地形や字により新平山古墳群2支群（A・B）、合代島古墳群3支群（A～C）、上神増古墳群5支群（A・B、D～F）、新林古墳群1支群の合計11古墳群が周知されている。しかし、これはあくまでも現代のわれわれが調査前の地形や字などを考慮しながら分節したものであり、各古墳の内容を検討して区分しているわけではない。したがって、周知された古墳群の区分が、古墳時代当時

の單位群などの分節を示しているわけではない。

同一丘陵あるいは同一箇所に築造された古墳群は、さまざまな墓域設定理由が想定されるが、そこに築造された集団はなんらかの有機的な関係があると考えられる。この関係は地縁（集落）、血縁（同族関係、擬制的同族関係）と理解されることが多い（水野 1970、和田 1992 など）。しかし、墓域設定に当たっては家族、氏族、同族といった、さまざまなレベルで設定されていることから、一概に群集墳といつても詳細な分析を経なければ、その群集墳の全体の性格は明らかとならない。遠江においては、古墳時代後期以降に築造された古墳群（群集墳）をみると、隣接しながら墓道の方向が異なるなど、古墳間で古墳に至るまでの方向や古墳築造者が意識した方向に差異が確認されることがある。この相違にどのような意味があるのかを分析することで、古墳群（群集墳）の構成のあり方、築造集団の性格が解明できると考える。

そこで、同一古墳群の築造者集団がどのような集団で、いかなる構成をとるのかを分析する基礎資料として、今回調査した上神増A・B・E古墳群に、これまでに調査された上神増D古墳群や新平山A・B古墳群を含めて、下記の分類基準により共通点、相違点を導き出し、合代島丘陵に築造された古墳群の分節を行いたい。

合代島丘陵の古墳群の分節にあたり、次の点を重視して区分する。

①立地 尾根上に立地するか、斜面に立地するか。合代島丘陵は細尾根上とそれから脩手状に東西に張り出す尾根斜面に古墳が築造されており、尾根は谷により細かく分断されていることから、地形によりある程度のまとまりを抽出することが可能となる。

②墓道の方向（開口方位） 隣接して古墳が築造される場合、基本的には同一集団による累代的な築造と把握されることが多いが、墓道が向かう方向をみると別の谷部へ向かって伸びるなどの隣接古墳間でも意識する方向に差異が確認できるものがある。このような場合には同一被葬者集団の累代的な古墳の築造ではなく、同時期に別の被葬者集団により築造された古墳と考えられる場合もある。したがって、墓道の向かう（古墳の築造者集団が意識する）方向を検討の上、重視する。

③埋葬施設の形態 合代島丘陵の古墳群には埋葬施設に様々な形態が確認できるが、埋葬施設の形態は、それを構築した集団の性格や出自を如実に表すと考えられている（鈴木一 2000a）。また、合代島丘陵の古墳群では同一形態の横穴式埋葬施設が偏在傾向にあるため、その形態を重視する。

④使用石材 横穴式埋葬施設の場合は、平面形態と使用石材（川原石か板石か）に着目する。横穴式石室の石材は板石を主に使用するものと、川原石（円礫）を使用する石材がある。それらは築造技術が異なる可能性があるため使用石材に留意する必要がある。特に新平山B古墳群では、川原石（円礫）積の古墳と、板石（角礫）積の古墳は築造場所が異なることから、明らかに別の造営主体による築造と考えるべきものである。したがって、埋葬施設の使用石材についても考慮する。

## （2）合代島丘陵の古墳群の分節一立地、墓道、石室形態、使用石材から

今回調査した後期古墳の分節 今回発掘調査した横穴式埋葬施設を有する古墳を①立地状況、②墓道の方向から単位群に区分したものが第157図である。この分析では、細かく入り込む谷により尾根筋からの小規模な張り出しが多く、その尾根斜面に2～4基程度が築造される。この同一の張り出し斜面に築造された古墳は、墓道の方向も一致しており、有機的な関係を想定してよいと考える（註3）。また、墓道を西側に向ける丘陵上のE 2・3・7・10古墳とA 5号墳は③石室形態や④使用石材により埋葬施設形態が大きく異なり、別系統と考えられることから、別の単位群と想定する。

したがって、今回調査した古墳は堅穴式埋葬施設の可能性のある上神増E 7号墳を含めて、尾根上に築造された支群（合代島Ⅳ群）、西側斜面に築造された支群（合代島Ⅱ群）、東側斜面に築造された支群（合代島Ⅲ群）に大きく支群分けし、3支群9単位群に分節する。

合代島丘陵の後期古墳の分節 今回調査した古墳の分節単位が合代島丘陵に築造された古墳群の中でのどのように評価できるのかを検討するため、上記の分類基準に基づき①立地と②墓道の方向から合代島丘陵の古墳群を分節したものが第158図である。

当然のことであるが、合代島丘陵の西尾根の西斜面に築造された古墳は西側の谷から登る墓道を、東斜面は東から登る墓道を想定できる。東尾根西斜面に築造された合代島C古墳群は西尾根東斜面の古墳群と同様中央の平坦面から登る墓道の存在が想定できる。合代島丘陵西尾根東斜面と東尾根西斜面に築造された古墳群は同一の主要幹線に意識が向いていたことが判明する。また、合代島丘陵の北部の新平山A・B古墳群では、一雲斎川が形成した平地（北側）から登る墓道が考えられる。

これらの墓道を集約すると第158図のように合代島丘陵中央の平坦地を通る「中央幹線」（道）、西尾根東側の尾根裾を通る「西側幹線」（道）が想定できる。現在、天竜浜名湖鉄道は「北側副幹線」とした場所を通過しているが、古墳の所在を考慮すると、古墳時代においては合代島丘陵の中央の平坦面を抜けて天竜川方面、太田川方面へ抜ける「中央幹線」が、太田川が形成した平野部と天竜川が形成した平野部を結ぶ主要道であったと想定する。

さらに、墓道の向けられた方向がそれぞれの古墳築造集団の基盤となる地域であると仮定すれば、この墓道が収斂する場所は3箇所あり、合代島丘陵西側の天竜川平野の北東端の平坦地、一雲斎川が開析した平坦地、合代島丘陵の南東の敷地川が開析した平野部である。それぞれに古墳時代後期～終末期に位置づけられる集落は確認されていないが、今後の調査により徐々に造営主体が明らかになると見える。

このようにそれぞれの古墳群の分析を丘陵単位で行うことで古墳造営者が意識した地域が明確になり、同一丘陵に築造された古墳群といえども異なる造営者集団が築造した可能性が高いことが明らかになる可能性があるため、今後はこのような視点で地域ごとに古墳群の分節を進め、造営者集団を分析していく必要がある。

したがって、調査が行われていない合代島A・B・C古墳群、上神増A古墳群の位置づけについては今後調査が行われた時に変更する必要があるが、現状で地形を考慮した上で墓道の方向を想定し、墓道が繋がる古墳を一つのまとまりに分節すれば、合代島I～IV群と新平山群（合代島V群）の5支群に分節することができる可能性が高い（第158図、註4）。各支群における単位群の分節（案）については詳述せず、第47表に記載している。

### （3）各支群の特徴とその意義

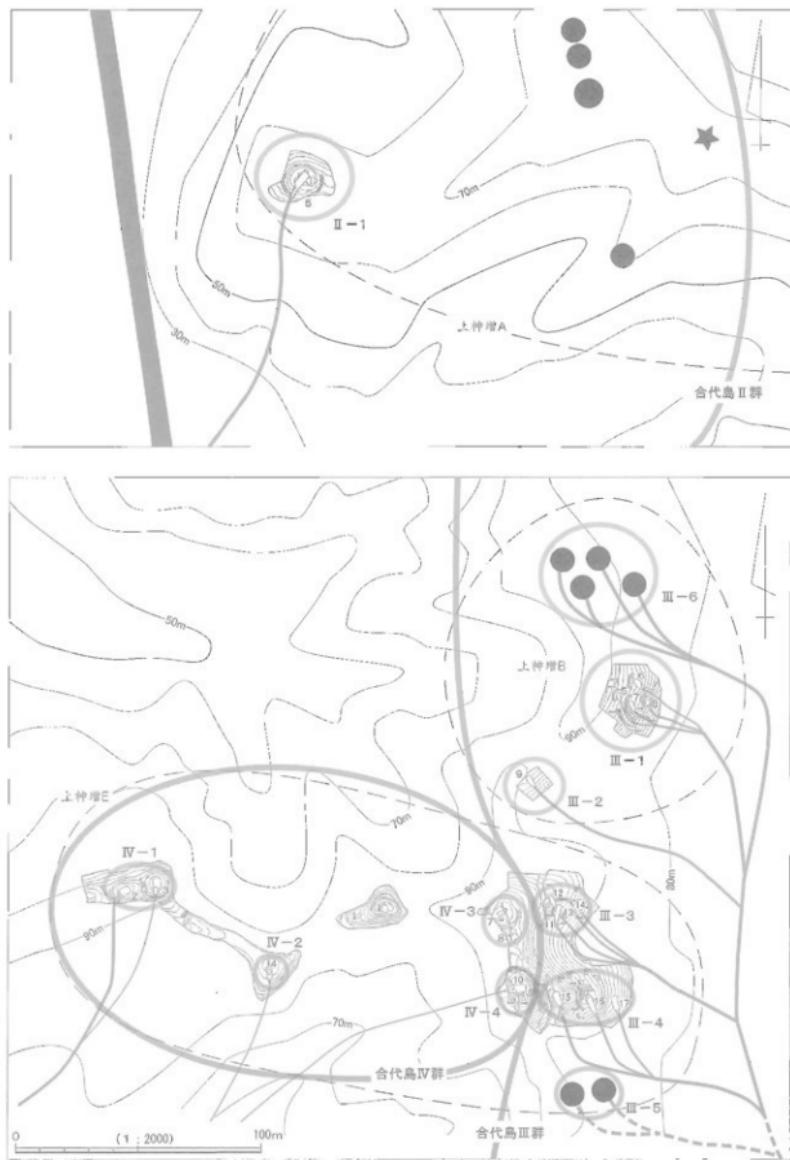
ここでは、上記で分類した各支群の特徴を示し、この支群ごとの特徴を確認し、その意義について考えたい。

#### a. 「新平山群（合代島V群）」

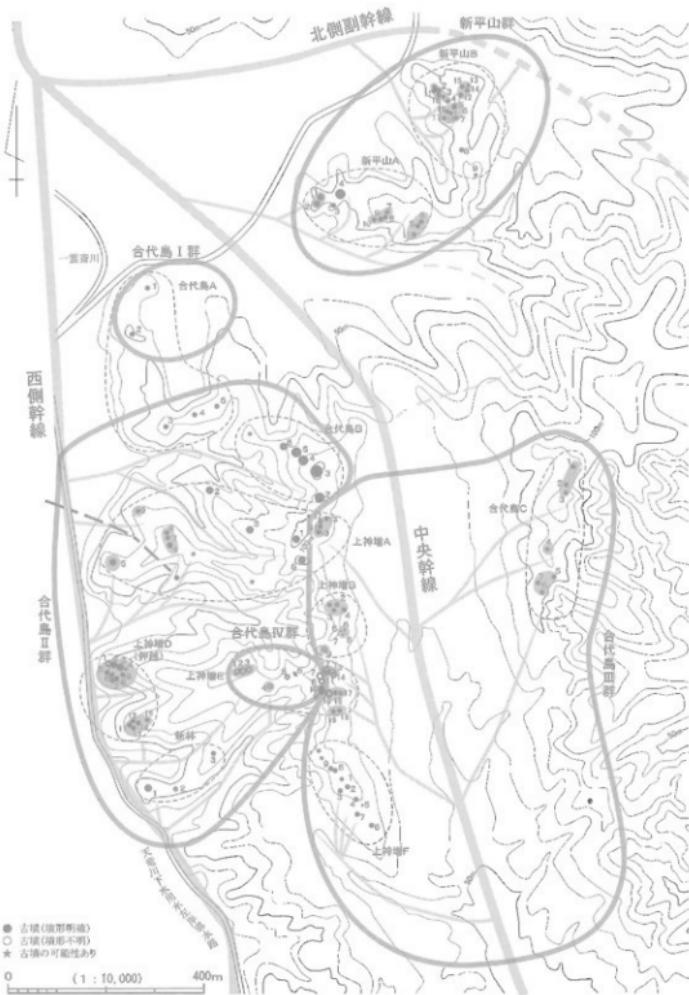
「新平山群」は合代島丘陵東尾根の北端に築造された支群で新平山A・B古墳群で構成される。合代島丘陵の中では遠江III期後葉と後期古墳の築造開始が遅い支群である。

当群は角礫積と川原石積石室が併存するが、同一石室において川原石・角礫を併用するものを除いては角礫積と川原石積石室は同一単位群中には存在せず、排他的である。これにより使用石材により同一支群中に所在しながらも築造者集団が異なっていた可能性が高い。

なお、当支群の盟主的古墳であるA2・A4号墳は尾根先端に築造される。この2基からは可耕地である一雲斎川が開析した平野部に向かって直接墓道を伸ばすことが可能であるが、墓道は南に向かって伸延させている。この墓道は、合代島丘陵中央部の平坦地から一雲斎川の平野部に想定した「中央幹線」が意識されていた可能性が高い。また、新平山A2・A4号墳の以外の合代島丘陵の有力墳と想定する20m規模の古墳は、合代島丘陵西尾根頂部の合代島A1・6号墳であり、この古墳は天竜川が形成した平



第157図 今回調査した古墳の分部



第158図 合代島丘陵の古墳群の分節

野部と、中央幹線とした平地部を見渡すことができる。したがって、現在天竜浜名湖鉄道が走ることから、われわれは古代にも下野部から敷地に抜ける主要幹線を想定しがちであるが、合代島丘陵に築造された有力墳の位置とその意識した方向からは、中央幹線が太田川平野から天竜川平野へ抜けるための主要道であったと想定できる。この中央幹線と北側副幹線では、中央幹線に向かって伸びる尾根斜面に古墳が多い

一方で、北側副幹線が天竜浜名湖鉄道と同様敷地方面へ抜けたと想定する場合、合代島丘陵東尾根東斜面に築造された古墳群が少ないととも、中央幹線が主要道であった根拠となると考える。

#### b. 「合代島I群」

合代島A古墳群の数基で構成される。現状では合代島A1・2号墳のみを区分しているが、墓道が東斜面に向かい、新平山群と同様北側が意識されたと想定できれば、新平山群と同一の支群として統合できる可能性がある。なお、同様の理由により合代島A3~5号墳はこの支群に分節できる可能性もある。

#### c. 「合代島II群」

「合代島II群」は合代島丘陵の尾根上～西尾根斜面に築造された、墓道を天竜川平野へ向けて伸ばす古墳で構成される支群である。円碟を主体的に用いる古墳もいくつか確認できるが、角碟（板石）を主体的に用いる古墳が多く、新平山群同様、川原石積と板石（角碟）積の石室はある程度排他的な関係にあった可能性が高い。遠江の群集墳としては片袖式石室が多数確認できることも注目できる。上神増A5号墳、新林1号墳とともに短い狭道を有する右片袖式（の可能性が高い）で、基底石に板石を縦位に用いる点が特徴的である。また、左・右片袖式とも、板石を平積みする点が特徴的である。また、両袖式石室が片袖式石室と同時に築造されており、在地化しながらも片袖式・両袖式と畿内系石室の影響を受けている点は注目してよい。これらの角碟・板石積の石室は遠江Ⅲ期中葉～後半の比較的古い時期に築造された古墳が多い。

一方、遠江Ⅲ期末葉以降に築造された古墳（D5・8号墳）が円碟を主体的に用いる傾向にあり、時期が新しくなるにつれて混在していく可能性が高い。

なお、「合代島II群」の西側に存在すると考える「西側幹道」を南に向かうと、角碟積で短い狭道を有する右片袖式石室の大手内A6号墳や、角碟積の道東3号墳（磐田市教委1992）などが所在し、敷石に板石を使用する寺谷坂上17号墳（磐田市教委1988）なども確認できることから、角碟・板石使用の横穴式石室については広く磐田原台地北西縁辺部の古墳を含めた交流を考える必要があろう。

また、右・左片袖式石室・両袖式石室ともに確認できる地域は渥美半島である。左片袖式は田原市神明社古墳・城宝寺古墳、両袖式は新美古墳・籠池古墳、藤原8号墳（三河考古学談話会1994）で確認できる。渥美半島の左片袖式は袖の反対側に立石が埋め込まれており、上神増D2・7号墳と類似している。さらに、三重県鈴鹿市にある岸岡山古窯で生産された特徴的な須恵器が渥美半島の藤原古墳群と上神増D2号墳で確認できる（豊岡村教委2000b）。この点から「合代島II群」は渥美半島との交流を想定しておく必要がある。

また、上神増D古墳群では砥石が出土しているが、古墳に通常副葬される遺物ではなく、遠江ではそれほど多くはない。上神増E3号墳など横穴式木室の築造者集団が鍛冶技術を有する可能性も指摘される（柴田1983、鈴木敏1991、田村2008）ところでもあり、こうした砥石の副葬からは鍛冶技術など特殊な技術を有する集団であった可能性も考慮しておく必要がある。

#### d. 「合代島III群」

合代島丘陵西尾根東斜面と、東尾根の斜面（合代島C古墳群）で構成される円碟を主体的に用いる支群で、墓道を合代島丘陵中央の平坦地に向ける。この支群では、一部の単位群に奈良時代に古代墳墓（火葬墓）が造営されることに特徴がある。上神増A10~13号墳は板石（角碟）積である以外は、横穴式石室は、既往調査の上神増B1~4号墳、上神増F古墳群（旧社山1~3号墳）を含めて川原石積疑似両袖式石室が主体である。また、新平山支群同様、単位群中に川原石積と板石（角碟）積は混在しない。

「合代島II群」と「合代島III群」は時期的な前後関係による違いもあるが、「II群」が角碟主体、「III群」が川原石主体と、石室を築造する石材が大きく異なる。また、「II群」には片袖式・両袖式石室が確認されるが、「III群」は疑似両袖式が主体である。この相違が何に基づくか現状では解明できないが、①



全く異なる集団がたまたま同一丘陵上に古墳を築造したため、それぞれの築造集団がもつ異なる交流の結果から石室の使用石材や形態が異なる、②なんらかの関係のある出自が異なる集団が同一の丘陵上に古墳を築造したが、それぞれの系譜関係、交流のある集団から石室情報を得て、異なる石室を同時期に築造した。この2つの可能性を想定するが、筆者は後者の可能性が高いと考えている。

「合代島Ⅲ群」は「合代島Ⅱ群」とは異なり、墓道が収斂する「中央幹線」を敷地川方面へ向かい、磐田原台地北東縁辺を向いていたとすれば、この磐田原台地北東縁辺部は袋井市山田原古墳群（袋井市教委1994）、磐田市中原A・C古墳群（磐田市教委1991）、同新豊院山C古墳群（磐田市教委2005）をはじめ川原石積横穴式石室を主体とする古墳群が多い地域であり、この地域との関連性を考えておく必要がある。

このようにそれぞれの支群が意識する方向と他の古墳群との関連性を考えると「Ⅱ群」と「Ⅲ群」は造営母体とする集落が所在する地域が異なると想定する。そして、石室情報についても流入過程が異なっていたことを念頭に置く必要がある。

なお、後述するように「Ⅱ群」の上神増D古墳群では砥石、鎌などの農工具が出土している。一方、「Ⅲ群」は石室の破壊が著しいため確定的ではないが、農工具が現状では出土していないことなどからみると、「Ⅱ群」と「Ⅲ群」では築造集団の性格差があった可能性がある。

#### e. 「合代島Ⅳ群」

上神増E 2（無袖形石室）・3（横穴式木室）・4（石材を利用しない横穴系埋葬施設）・7（箱形石槨？）・10（横口構造の躰槨）号墳で構成される。この支群は遠江二期～三期中葉（MT15-TK43型式期）と群集墳では比較的早い時期に横穴系埋葬施設を導入している可能性が高い。しかし、その埋葬施設形態が他の古墳へ継続されていないところに特徴がある。

また、墓道を上神増E 2・3・10号墳は「合代島Ⅱ群」と同様の方向へ向けているが、同時期に築造された「Ⅱ群」の石室が板石積であるのに対し、川原石を用いる点、「Ⅱ群」が片袖式・両袖式であるのに対し無袖形、横穴式木室であるなど特異形態である点が異なるため、別支群と考えた。

上神増E 2号墳は板石敷、上神増E 7号墳は板石を縦位に用いる埋葬施設である点、上神増E 3号墳の横穴式木室の平面形態が上神増D 4号墳と類似している点は「Ⅱ群」と共通するが、E 2号墳が川原石積石室、E 3号墳の川原石積羨道、E 10号墳が川原石積の埋葬施設である点は「Ⅲ群」と共通する。「Ⅳ群」は両者の中間的な位置づけをすることができるため、「合代島Ⅱ群」と「合代島Ⅲ群」を繋ぐ橋渡し的な存在であったのだろうか。

なお、上神増E 2号墳の無袖形石室は、磐田原台地北西部の磐田市払下1号墳、同大手内A 2号墳と類似する。上神増E 3号墳の横穴式木室は磐田原台地東縁の磐田市明ヶ島古墳群や、原野谷川左岸の小笠山丘陵に築造された袋井市北山古墳群などと同様の構造である。つまりE 2号墳は「Ⅱ群」同様磐田原台地北西部と、E 3号墳は「Ⅲ群」と同様、太田川流域、原野谷川流域の古墳群との関係が想定でき、上述した「Ⅱ群」と「Ⅲ群」を繋ぐ橋渡し的な存在であったとの想定がさらに深まる。

#### （4）合代島丘陵の古墳群の分節のまとめ

今後の調査により若干の範囲の変更を行う必要があるが、合代島丘陵に築造された古墳を立地、墓道の方向、埋葬施設の形態、使用する石材から5つの支群に区分した。「合代島Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群」のように近接地域に築造しながらも、墓道方向、石室形態、使用石材に明確な差異が確認でき、古墳が意識した平野部の違いも想定できることからそれぞれの支群は別築造集団により築造された可能性が高いだろう。しかし、この集団がそれぞれ無関係に存在していたとは考えにくい。同一丘陵に築造されることから、何らかの関係のある集団がこの地に古墳を築造したと考えられる。

このように同一丘陵や同一尾根上に築造された古墳群が同じ地域にありながら、各古墳の墓道の方向が異なる方向へ向き、いくつかの谷に収斂される様相が確認されるのは浜松市半田山古墳群（C・D・E古墳群、浜松市教育委員会 1988 ほか）、浜松市大屋敷C古墳群（静岡埋文研 2004）、磐田市明ヶ島古墳群（磐田市教委 2003）など多くの古墳群で確認することができる。

同一地域にある古墳群（群集墳）の築造集団が立地や墓道の方向により、職掌、出自などなんらかのまとまりや差異があることを想定しているが、現状ではその理由を明確に示すことはできない。

今後はこうした隣接箇所あるいは同一丘陵上に営まれた古墳の分析を詳細に行い、どのような集団が築造したのかを明確にした上で、なぜ同一丘陵築造したのかを明らかにしていく必要があるだろう。

古墳群の分析は盗掘あるいは破壊された古墳が多いことから、大略の築造順序を検討するだけになることが多いが、ある程度のまとまりをもった地域を分析することで古墳時代の社会構造を明らかにしていくことができ、それをもとに職掌や地域間関係など地域的な特質を見出していく必要がある。



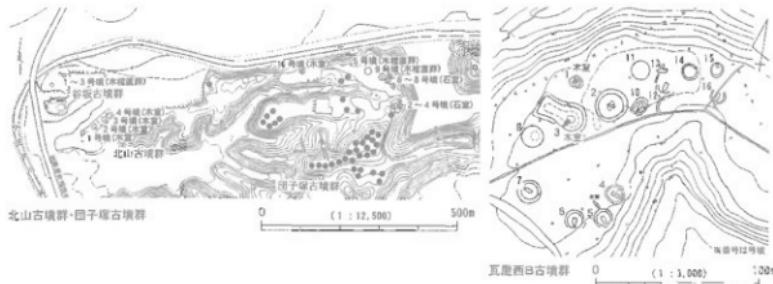


図160群 群集墳中の横穴式木室墳の存在形態

台地南東部（明ヶ島古墳群、権現山古墳群、屋敷山古墳群）に局地的に導入される（第160図）。小型前後円墳を含む場合（瓦屋西古墳群、半田山古墳群、権現山古墳群、屋敷山古墳群）と含まれない場合、横穴式石室墳と並存する場合（半田山古墳群など）と並存が認められない場合（北山古墳群、明ヶ島古墳群など）といった違いはあるが、いずれにしても、横穴式木室が特定の小地域・古墳群に集中的に採用されるという傾向が注目されている。

こうした中にあって、上神増古墳群における横穴式木室墳（E3号墳）は群集墳地帯にあるものの、横穴式木室墳が集中する諸地域から離れ、横穴式石室主体の群中に点的に築造された状況にある。横穴式石室墳と横穴式木室墳が並存する場合でも、数基以上の横穴式木室墳が築造される場合が多く（第159図）、また、立地や築造時期において両者の在り方が異なる場合が多い。上神増E3号墳のような群集墳中の1基に横穴式木室が構築されるという存在形態は、半田山D10号墳や同E4号墳に指摘できる程度である。天竜川西岸の半田山古墳群、天竜川東岸の上神増古墳群における横穴式木室墳の存在形態について、これまで注目されてきた局地的な集中とは異なる評価が必要であろう。

### 3. 埋葬施設の特徴

上神増E3号墳の横穴式木室は、棟持柱を伴う合掌形（横断面が三角形になる形態）の墓室、片袖形になる入口形態、そして側壁に石積みを伴う入口構造をもつ。前2者については、伊勢と西遠江（天竜川以西）には少なく、中・東遠江（天竜川以東）に多く認められる要素である。すなわち、中・東遠江の地域的特徴として評価できる（鈴木敏1991など）。その一方で、側壁に石積みを伴う入口構造については、後述するように決して天竜川以東の地域的特徴を反映したものとはいえない。

東海地方の横穴式木室48基の中で、側壁に石積みを伴う入口構造（以下、石積みの入口構造）があるのは7基（第161図）のみであり、特異な要素であることがわかる。さらに、その分布や時期をみると、特定の地域や時期に限定された要素であるとはいえないことがわかる。

南山古墳や豊河C12号墳、上神増E3号墳では、石積みの入口構造が墓坑の外側に構築されている。しかし、北山1~3号墳や屋敷山1号墳南棺では、石積みの入口構造が墓坑の内側に構築されている。また、南山古墳では天井石が存在するが、上神増E3号墳では入口構造の天井が木造であった可能性が指摘できる。北山1~3号墳は、この要素が集中する唯一の古墳群であるが、その入口構造は他に比べて非常に短小である。屋敷山1号墳南棺は、天竜川以東にありながら両袖形に構築するという特徴をもつ。このように、同じ石積みの入口構造であっても、それぞれに異なる特徴をとりあげることができる。

石積みの入口構造を採用する背景としては、横穴式石室との関連性があげられよう。横穴式石室は、横穴式木室と同時期に広く普及・展開するが、石積みの入口構造は通有の要素である。そして、横穴式



第161図 石積みの入口構造を伴う横穴式木室

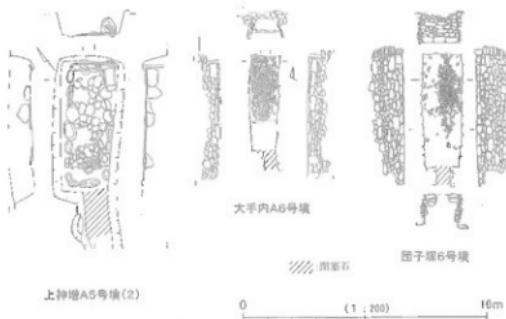
木室墳の周囲にも横穴式石室墳が多く築造されていることから、両者の存在形態によって様々な影響があったと推測され、その一つが石積みの入口構造として表れていると評価したい。横穴式木室の構造と形態については、様々な要素を共有せながら地域ごとに異なるものを構築していたことが判明している（鈴木敏 1991, 田村 2008 など）。入口構造の側壁に石積みを用いるという横穴式石室の影響についても、まばらで多様な受容であったと考えたい。

上神増E 3号墳については、周囲に同時期の横穴式石室墳が多く築造されており、その影響を強く受ける環境にあったと推測できる。しかし、この古墳と同時期もしくは先行する横穴式石室となると、同じ古墳群の中に明確な狭道構造を伴うものが確認できない。隣接するE 2号墳も、無狭道（無袖）の横穴式石室（以下、無袖の石室）である。一方、西側の上神増D（押越）古墳群には明確な狭道をもつ片袖式石室が認められるが、狭道側壁は板石の腰石と小口積みによる構造であり、上神増E 3号墳の入口構造との関連性は見出しづらい。

そこで、上神増古墳群の南約 1.5km、同じ天竜川東岸北部に位置する大手内古墳群をとりあげたい。この古墳群では、6世紀代に無袖の横穴式石室が導入されるが、6世紀末葉頃の大手内A 6号墳の横穴式石室には、明確な入口構造が付く（第162図）。この入口構造は、非常に幅狭で短なものであり、側壁は円礫積み、天井石が存在するかは不明である。墓室（玄室）は無袖の石室と同じ細長い平面矩形を呈しており、有狭道（片袖式）の横穴式石室が導入されたというよりは、無袖の石室に短小な入口構造を付加したといった評価が可能である。同様の状況は、小笠山丘陵西端部の团子塚6号墳にも認められる。無袖の石室を主体とする古墳群の中で、团子塚6号墳の横穴式石室には幅狭短小の入口構造が付き、その形態的特徴は大手内A 6号墳のものと類似する。また、上神増古墳群においては、A 5号墳の横穴式石室に短小な入口構造を伴っていた可能性が指摘されており、この構造が類例となる可能性がある。

大手内A 6号墳などの横穴式石室は、無袖の石室が導入された古墳群において、狭道とは異なる短小な入口構造が構築される場合があることを示す。ただし、遠江の中でも特殊形と称されるほど、一般的に出現する形態ではない（静岡県考古学会 2003）。一方、これらが位置する地域（天竜川東岸北部と小笠山丘陵西端部）には、石積みの入口構造が付く横穴式木室が分布している。また、周囲の横穴式石室が無袖を主体とすること、入口構造は円礫積みで短小であることなど、共通点も少なくない。天竜川東岸北部と小笠山丘陵西端部には、片袖式・両袖式石室の狭道とは異なる入口構造を墓室に付加する発想が一部に生じ、それが横穴式石室（無袖の石室）に限らず横穴式木室にも表現された可能性を評価して

おきたい。



第162図 幅狭短小の入口構造を伴う横穴式石室

性を考えている（柴田 1983、鈴木 1991、田村 2008 など）。

6世紀における上神増古墳群の埋葬施設の在り方は、無袖の石室を主体とする群や左片袖式石室を主体とする群など、多様な群が集合した状況にある。その中で、横穴式木室墳は一群を成さず、無袖の石室の一群の中に築造される。上神増 E 3号墳の調査成果は、遠江における横穴式木室の分布だけではなく、群集墳中の存在形態や横穴式石室との関係性を考える上で重要な新情報をもたらすものと思われる。

#### 参考文献

- 浅羽町教育委員会 1987 「北山遺跡」
- 伊勢市教育委員会 1974 「南山古墳発掘調査報告」
- 伊勢市教育委員会 1993 「豊河古墳群」
- 静岡県教育委員会 2001 「静岡県の前方後円墳」個別報告編
- 静岡県考古学会 2003 「静岡県の横穴式石室」
- 柴田 隆 1983 「横穴式木芯粘土室の基礎的研究」『考古学雑誌』68-4
- 鈴木敏則 1991 「横穴式木室雑考」『三河考古』第4号
- 田村隆太郎 2008 「東海の横穴式木室と葬送」季刊考古学別冊 16 「東海の古墳風景」 雄山閣

#### 4.まとめ

埋葬施設の形態・構造の違いは、様々な地域間交流と地域的伝統によって表れ、その背景には被葬者集団の何らかの性格が反映していると考えられることが多い。そして、横穴式木室については渡来系・外来系の可能性が指摘され、また筆者を含めて地域生産において特別な役割を担っていた可能

## 第3節 特異な石積み埋葬施設について

### 1. 上神増E 7号墳の埋葬施設について

#### (1) 上神増E 7号墳埋葬施設の概要

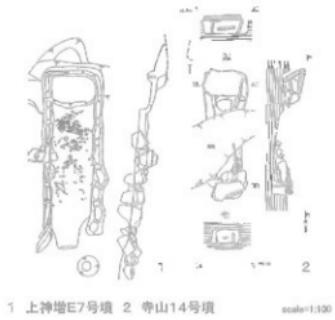
E 7号墳の埋葬施設は、板石を縦位に用いたコ字形あるいは長方形の埋葬施設である。古墳の西側が崩落しているため、この位置に石材があったのかどうか明確ではなく、この部分の石材の有無が確定すれば堅穴系埋葬施設か横穴系埋葬施設かどうか判断可能であるが、今では確定することはできない。また、埋葬施設の上部は、SX07構築時に破壊されたらしく、より上位に石積みがあったのかどうかも不明である。なお、埋葬施設の規模は、長辺で3.5 m以上、短辺で0.9 mであり、床面には玉石を設置している。以下では、この埋葬施設がどのような構造であったのかを検討する。

#### (2) 上神増E 7号墳埋葬施設の復原

箱形石棺との比較　木棺直葬をもつ古墳が主体的である遠江にあって、合代島丘陵周辺は、稀有な箱形石棺が複数確認される地域である。旧豊岡村地域では寺山14号墳（小豊岡村式石室）、五反田3号墳（箱形石棺か）がある。このほか、森町文殊堂8号墳、菊川市高田ヶ原遺跡などで確認され、遠江全域で10基が確認されている（大谷2004a）。旧豊岡村に所在する2基と上神増E 7号墳を比較する（第163図）と、上神増E 7号墳は箱形石棺とするにはやや大きい。遠江で確認される箱形石棺の大きさも全長2 m前後、幅は50 cm前後であり、大人一人を埋葬する程度の広さである。上神増E 7号墳のように幅が1 m弱、長さが最低3.5 mと大人一人を埋葬するに必要以上の大型のものは確認できない。また近接する寺山14号墳と五反田3号墳が側壁や天井石と同じ板石を床面に据えているのとは異なり、玉砂利を敷いている点も異なる。さらに、時期的に寺山14号墳と五反田1号墳が遠江Ⅰ期後葉～末葉（TK23-TK47型式期）に位置づけられるのに対し、上神増E 7号墳は遠江Ⅱ期～Ⅲ期前葉（MT15-TK10型式期）であり、1～2型式の時期差があり、大きさもかなり相違することから、上神増E 7号墳の埋葬施設を単純に箱形石棺とすることには躊躇する。

西側小口壁が存在した場合に想定される類似する埋葬施設を確認することは困難であるが、少なくとも板石で囲まれた範囲内には木棺が据えられるだけの空間があるため、堅穴系埋葬施設と仮定する場合には「箱形石棺」とするほうが妥当である。「箱形石棺」とした場合、遠江では類例は確認できず、系譜関係を隣接地域に求めるることは難しい。

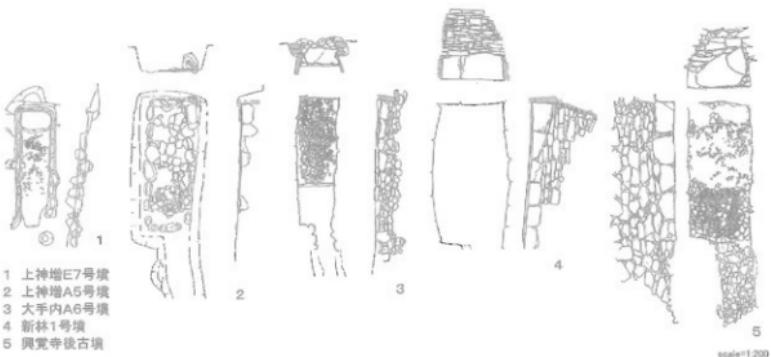
横穴式石室との比較　上神増E 7号墳のように板石を基底石として縦位に用いる古墳がいくつか確認できる。また、板石ではなく、大型の角礫であるが腰石を用いる浜松市興覚寺後古墳などが構造的に類似する（第164図）。主に磐田原台地北西部と合代島丘陵の古墳群であり、興覚寺後古墳を含めても天竜川平野北部から北東部にかけてみられる構造であるといえる。これらの横穴式石室は玄室幅が最も狭い上神増A 5号墳でも1.3 m程度あり、上神増E 7号墳の約0.9 mとはかなりの差が確認できる。したがって、上神増E 10号墳の埋葬施設が横口構造であった場合にも、横穴式石室としてはやや狭く、高さも低かったと考えられる。したがって、横穴式埋葬施設の場合には「横口構造の石棺」であった可能性



1 上神増E7号墳 2 寺山14号墳

scale=1:100

第163図 上神増E 7号墳と関連する堅穴系埋葬施設



第164図 上神増E 7号墳と同様する横穴式石室

が高く、上神増A 5号墳第2埋葬施設と同形態の石室であった可能性も残る。

ただし、上神増A 5号墳のような横穴式石室の場合は、少なくとも1.5m前後の石室高が必要であり、現状の埴丘のさらにこの上に埴丘盛土が載せられていたとすると、現状より2m以上高くなることから、上神増E 7号墳は横穴系の埋葬施設であった場合にも、人が内部で立つことができる大きさを有するものであった可能性は低い。

**上神増E 7号墳の埋葬施設の復原** 上述した検討結果により、堅穴系埋葬施設、横穴系埋葬施設のどちらとも断定するには至らない。可能性としては、箱形石棺あるいは「横口構造の石棺」の2者のどちらかである可能性が高い。いずれにせよ、遼江地域では非常に珍しい埋葬施設形態であり、その系譜関係をさまざまな根拠をもとに説明することで、新たな歴史的事実が確認される可能性が高い。

### (3) 上神増E 7号墳の系譜

上神増E 7号墳の埋葬施設に板石を利用する点は、地域にあった板石を縦位に用いる箱形石棺（五反田3号墳）、小豎穴式石室（寺山14号墳）などの合代島丘陵周辺に存在した埋葬施設の影響を受けていると考えられる。

一方で、上記で検討した板石を基底石に用いる上神増A 5号墳や大手内A 6号墳、新林1号墳などは、在地化した片袖式石室と考えられる（田村2003、本章第2節）が、この在地化する要因として、もともと地域にあった上神増E 7号墳の板石を縦位に用いる技法などの影響を受けている可能性が高い。つまり、これらの在地化した板石を縦位に用いる石室については他地域からの横穴式石室の情報や技術的な影響を受けつつ、この合代島丘陵の伝統的な埋葬施設の構造の伝統を受け継ぐことで成立したといえよう。箱形石棺・小豎穴式石室 → 上神増E 7号墳 → 板石を縦位に用いる横穴式石室という流れである。

上神増E 7号墳は、この点で在地的な堅穴系埋葬施設と横穴系埋葬施設を繋ぐ役割を果たしていたといえる。

## 2. 上神増E10号墳の埋葬施設について

### (1) 上神増E10号墳埋葬施設の概要

上神増E 10号墳埋葬施設は挙大一人頭大の石材を用いて構築された埋葬施設であり、残存する側壁は川原石積横穴式石室のように丁寧に積み上げられたような状況ではなく、疊構のような乱雑に積み上げられたような状況を示している。著しい破壊を受けていたため当初からこのような乱雑な状態であったか明確ではないが、横穴式石室のような石を組み合せて積み上げていく意識が低く、横穴式石室あるいは竪穴式横口式石室とするには躊躇する。しかし、上神増E 10号墳は西側が地すべりにより大きく崩れているが、墓道状の掘り込みが確認できること、その墓道部分に須恵器が副葬されていたことを評価すれば、横口部があった可能性が高い（以下、「横口構造の疊構」）。

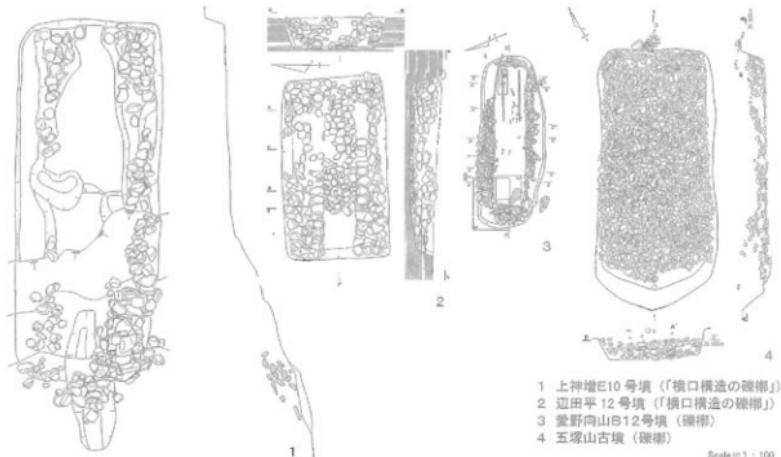
### (2) 上神増E10号墳埋葬施設の復原

上述した特徴は、掛川市（旧大東町）五塚山古墳（大東町教委 2001）や袋井市春岡A 1号墳、同愛野向山B 12号墳第1主体部（袋井市教委 2004）など疊構の構造に類似している。また、川原石を利用した特異な竪穴系埋葬施設（木椁？）には浜松市（旧浜北市）二本ヶ谷積石塚群や辺田平古墳群（浜北市教委 2000）がある。このうち上神増E古墳群からは直接確認できる三方原台地上に構築された辺田平12号墳では、円礫を用いた埋葬施設の小口の一方を開放させ、埋葬施設内部に下る斜めの床面を構築しており、二本ヶ谷積石塚群の特異な竪穴系埋葬施設が横穴式石室の影響を受けて横口部がつけられた横穴系の埋葬施設と考えられている（鈴木一 2000・2003）。

したがって、上神増E 10号墳の特異な埋葬施設は、疊構を構築する集団が横穴系埋葬施設の影響を受けて、疊構に横口部を設けた、横穴式埋葬施設と疊構との融合形態であると考えたい。

### (3) 上神増E10号墳埋葬施設の成立要件

ここでは、上神増E 10号墳の成立要件について考えておきたい。疊構は遠江においては比較的少ないもので、上述したように愛野向山B 12号墳（中期）、春岡1号墳（前期）、五塚山古墳（中期）がある。



第165図 上神増E10号墳と関連する埋葬施設

このほか礫櫛と関連しそうな古墳としては、寺谷銚子塚古墳（前期、磐田市 1992）、新豊院山 2 号墳（前期、磐田市教委 2006）、新豊院山 3 号墓（弥生末～古墳前期、磐田市教委 2006）など礫と粘土を用いた古墳がある。春岡 1 号墳や新豊院山 2 号墳などは古墳時代前期であり、時期的に 100 年以上も隔てているため直接的な影響という面からは除外するとしても、太田川流域～菊川流域の中・東遠江で確認されている点は興味深い。こうした礫を用いる竪穴系埋葬施設は、天竜川以東に多く確認されるものであり、また前・中期ともに地城の有力墳に採用されている埋葬施設である。つまり、中・東遠江の伝統的墓制の「つといえ、中でも有力者が採用した埋葬施設であったといえる。合代島丘陵の古墳群では、新平山 B 2 号墳が木棺の下位や蓋の上に川原石や板石を用いた木棺直葬であり、木棺全体を礫で覆うものではないが、礫櫛の影響は窺える。合代島丘陵では完全な形の礫櫛は確認されていないことから、上神増 E 10 号墳の成立は、近接する太田川流域、原野谷川流域で確認される礫櫛を築造した集団との交流の結果、その影響で新平山 B 2 号墳のような石材を多く用いる木棺直葬墳を創出し、さらにこの上神増 E 10 号墳のような「横口構造の礫櫛」が新来の横穴式石室の影響を受けて創出されたと考えたい。

この点は上神増 E 3 号墳の横穴式木室が磐田原台地東南縁や小笠山丘陵に多く確認される遠江 I 型（鈴木敏 1991）であり、その地域との関係が想定されることから、やはり上神増 E 10 号墳の形態的な系譜関係にあると想定する礫櫛も太田川流域の集団との交流により出現し、それに横穴式石室の情報を取り入れることで成立した墓制と想定したい。さらに、E 4 号墳が横穴式木室である可能性も排除できないが横穴式木室がほぼ単独で存在している点、E 10 号墳の埋葬施設形態もその後継承されないことを考えると、太田川流域、原野谷川流域の集団が、この地域に墓域を設定あるいは移住した可能性も考えておく必要がある。

なお、横穴系埋葬施設の導入に当たる思想的な変化であるが、上神増 E 10 号墳は埋葬施設内部が搅乱されており、郴内からは遺物が玉類以外出土していないことから確定ではないが、埋葬施設内部（玄室内）には、土器は埋葬されなかった可能性が高い。

遠江の場合、埋葬施設内部に土器を副葬するのは、嵐塚古墳や大門大塚古墳など典型的な横穴式石室を除いては、遠江Ⅲ期後葉以降が多いため、情報としての横穴系埋葬施設導入と横穴式石室の導入に伴う玄室内への土器の副葬には時期差があったと考えたい。

したがって、合代島丘陵の古墳群に対する横穴式石室の初現的な影響は、上神増 E 10 号墳に及んでいるが、横穴式石室の導入に伴う埋葬施設形態とその思想的变化は、つづく横穴系埋葬施設が複数導入される遠江Ⅲ期中葉を俟たなければならなかつたと考える。

## 第4節 合代島丘陵における横穴系埋葬施設の変遷

### 1. 合代島丘陵における横穴系埋葬施設の分類

合代島丘陵の古墳群の埋葬施設は、遠江で確認されるほぼすべての埋葬施設の形態が存在している。遠江ではさまざまな石室形態が、階層差、地域性により導入されたと考えられているが、合代島丘陵はその中でも多系統の横穴系埋葬施設が構築され、「埋葬施設のデパート」とでも呼べるような多様性を示している。したがって、それぞれの系譜関係を明らかにすることは非常に困難であるが、ここでは下記の分類に基づき、合代島丘陵におけるそれぞれの埋葬施設の展開を追うことで、横穴系埋葬施設の位置づけを行いたい。

合代島丘陵における横穴系埋葬施設は、横穴式石室、横穴式木室、横穴式土壙が確認できる。また、横穴式石室の影響を受けて堅穴系埋葬施設が変化した可能性のある上神増E 7・10号墳については横口構造の埋葬施設として区分する。横穴式石室の分類は、本書の第4章第1節3で記述したように、片袖式（右・左）、両袖式、疑似両袖式、無袖形に区分し、横穴式木室は確実なものは上神増E 3号墳のみであるが、上神増E 4号墳は壁面に石材を用いない埋葬施設である可能性が高く、墓壇内から粘土が確認されていることから、木室系の横穴系埋葬施設である可能性が高い。ここでは横穴式木室の範囲として扱うが、今後類例が確認されれば横穴式土壙とすべきかもしれない。横穴式土壙は石材・粘土が確認されなかった上神増E 13号墳が該当する。

以下では、横穴系埋葬施設が導入される以前の段階（古墳時代中期中葉～後期前半）、横穴系埋葬施設が導入されたと考えられる段階（古墳時代後期前半）、横穴系埋葬施設が本格的に導入される段階（古墳時代後期後半）、横穴系埋葬施設に変質が見られる段階（古墳時代終末期）に分け、変遷についてまとめておきたい。

### 2. 合代島丘陵における横穴系埋葬施設の展開

#### （1）横穴系埋葬施設導入以前

合代島丘陵では、遠江Ⅰ期中葉～後葉に木棺直葬が出現し、横穴式石室が本格的に採用されるまで継続的に採用される。合代島丘陵周辺では、遠江では珍しい箱形石棺や小型穴式石室が採用されていることから、やがてはこうした埋葬施設が確認される可能性が高い。また、後述する上神増E 10号墳の祖形となる砾塚が発見される可能性もある。

#### （2）横穴系埋葬施設の導入

遠江において横穴式石室は磐田市藤塚古墳で最も早く、遠江Ⅱ期に導入され、続く遠江Ⅲ期前葉に袋井市大門大塚古墳、森町崇信寺10号墳など各地域の有力墳が横穴式石室を採用しているが、群集墳で採用が開始されるのは遠江Ⅲ期中葉以降である。

第3節で検討したように上神増E 7号墳が横穴式石室の影響を受けた「横口構造の石塚」であるとすれば、合代島丘陵では遠江Ⅱ期～Ⅲ期前葉に導入されていったことになるが、その後、同形態の埋葬施設が確認されないことから、これをもって横穴系埋葬施設の導入と断定することは困難である。

つづく、上神増E 10号墳は、墓道を伴い、その墓道部分で須恵器窓など数点が原位置を保持した状態で出土しており、明らかに横穴系埋葬施設の埋葬方法を採用しているといえる。側壁の残存状況が不良であることもあるが、本格的な横穴式石室のような壁面構成をとらず、墓壇側壁との間に人頭大の礫を充填して側壁・奥壁とする点から砾塚が横穴式石室の影響を受けて変化した、「横口構造の砾塚」といえる。したがって、この上神増E 10号墳の導入時期をもって、合代島丘陵での横穴系埋葬施設の出現とするこ

とができ、遠江の古墳群（群集墳）の中ではいち早く横穴系埋葬施設を採用した地域として注目できる。

### （3）横穴系埋葬施設の本格的導入～遠江Ⅲ期中葉～後葉～

上神増E10号墳における「横口構造の構築」の導入にやや遅れ、本格的な横穴系埋葬施設の第一段階として、右・左片袖式石室、無袖形石室、横穴式木室が遠江Ⅲ期中葉（TK43型式期）に導入される。以下、それぞれの形態についてみておきたい。

**左片袖式石室** 左片袖式石室は上神増D2～4、7号墳があり、D13号墳はその可能性がある。上神増D4号墳の側壁は直線的であり、それ以外は胴張りを呈することから、上神増D4号墳が最も古く、上神増D2・3・7号墳は若干新しい傾向にあると考えたい。左片袖式石室は、遠江Ⅲ期中葉に出現し、Ⅲ期後葉をもって衰退した可能性が高い。

左片袖式石室は遠江では合代島丘陵でのみ確認される形態であり、強い地域色を示す。田村隆太郎氏は、胴張りすること、基底石に板石を縦位に用いる点などから、幡塚古墳など畿内系片袖式石室ではなく、畿内系石室が在地化する中で二次的に伝播した横穴式石室と想定している（田村2003a）。合代島丘陵の片袖式石室は袖がない右側壁側にも立石を設けており、この点は、渥美半島の神明社古墳や榮巣寺古墳（三河考古学談話会1994）などの左片袖式石室に確認できることから、渥美半島の集団などとの交流も想定すべきであろう。

**右片袖式石室** 今回調査した上神増A5号墳と、新林1号墳が挙げられる。どちらも左片袖式石室同様基底石に板石を縦位に用いる点が特徴的である。磐田原台地北西縁に位置する大手内A6号墳は同形態である（註5）。左・右の違いはあるが、基底石に板石を縦位に用いる構築方法を採用する点は、共通性が高いといえる。大手内A6号墳と上神増A5号墳は石室形態だけではなく、基底石上に円礫を積載した可能性が高く、共通性が強いことから同一の技術をもって石室が構築されたと想定する。一方、新林1号墳は板石を平積する点や玄室幅が広い点など上記2者とは差異がある。複数形態の片袖式石室が採用されていたといえよう。

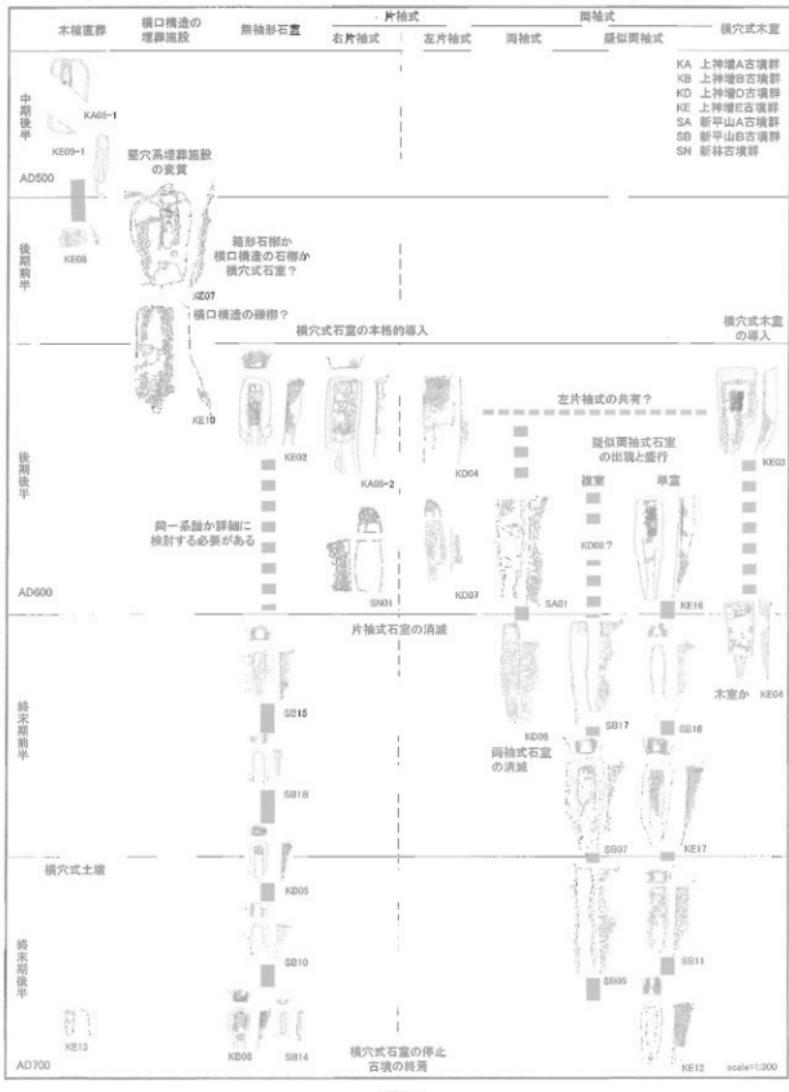
合代島丘陵に特徴的な右片袖式石室は左片袖式石室同様、畿内系片袖式石室が二次的な変容を受けていると考えられ、在地色が強い石室といえよう（田村2003a）。

右片袖式は、遠江Ⅲ期中葉に出現し、Ⅲ期後葉に築造されたものが確認される可能性があるが、左片袖式石室同様、Ⅲ期後葉をもって衰退した可能性が高い。これは遠江における片袖式石室の衰退と軌を一にしており、遠江では同時期に片袖式石室の存在意義が失われたと想定する。

**両袖式石室** 今回調査した古墳では確認できないが、新平山A1号墳、上神増D6号墳で確認できる。二者ともに角礫・板石を用い、中央部が膨らむ胴張形の玄室で、玄門に立柱石を用いるが側壁から突出しない点が共通する。遠江Ⅲ期後葉に出現し、遠江Ⅲ期末葉まで築造された可能性がある。玄門立柱石が突出しない両袖式石室は周辺では確認できないことから、浜松市火穴古墳や、渥美半島の藤原8号墳などとの関係を想定すべきだろう。ただし、両袖式石室であるが胴張りがあり、羨道が細いなど畿内系石室でもかなり在地化が進行した石室といえよう。また、基底石に板石を縦位に用いないなど、同時期に存在する片袖式石室とはやや石材の用法が異なる。

**疑似両袖式石室** 上神増E16号墳など合代島丘陵西尾根東斜面や新平山B古墳群で継続的に採用された石室形態である。上神増E16号墳が最も遅い可能性があり、遠江Ⅲ期中葉～後葉の築造と想定する。以後、遠江V期前半まで継続的に築造され、片袖式石室、両袖式石室の築造終了後的主要な石室形態であった。この疑似両袖式石室は、西・中遠江で主体的に採用された石室形態であり、遠江Ⅲ期末葉以降西・中遠江全般で増加する傾向にあることから、歴史的な変化は遠江の中で共有されている。

**無袖形石室** 上神増E2号墳が挙げられる。この石室は遠江Ⅲ期中葉に出現するものの、片袖式石室



火葬墓へ

第166図 合代島丘陵における埋葬施設の変遷

とは側壁の使用石材や用法が異なるなど相違が大きい。別系譜により導入されたと考えるべきだろう。これに類似する石室は磐田市坂下 1 号墳（磐田市教委 1979）、大手内 A 2 号墳で確認でき、ほぼ同時期に同形態の石室が導入されている。上述した右片袖式石室同様、磐田原台地北西部の古墳とかかわりが深い。

無袖形石室は合代島丘陵では、新平山 B 15 号墳など遠江Ⅲ期末葉以降継続的に遠江Ⅴ期前半まで築造されるが、上神増 E 2 号墳と同系譜にあるのかは検討の余地がある。

**横穴式木室** 上神増 E 3 号墳が該当し、遠江Ⅲ期中葉に出現する。横穴式木室の主要な分布範囲を超えて確認されたものであり、木室形態の伝播・採用のあり方について重要な情報を提供している。当該木室は隧道を石材で構築すること、「遠江Ⅰ型」とされる形態であることなど、原野谷川流域の北山古墳群などと共に通性が高い。したがって、当該木室にあっては、それらとの交流あるいは、その地域からの移住も含めて考えるべきであろう。

このように、合代島丘陵における横穴系埋葬施設は遠江Ⅲ期中葉に本格的に出現するが、複数の地域から情報がもたらされており、それぞれの集団が自らの交流関係や系譜関係を示すために横穴系埋葬施設を築造した結果、多形態の埋葬施設が構築された。一方で、第 3 節でも論じたように、導入当初から在地的な様相が確認できるなど、横穴式石室導入以前に合代島丘陵周辺に存在した箱形石棺や礫構などの影響も想定できる点が興味深い。

合代島丘陵に古墳を築造した集団は同一系譜にある集団ではなく、第 2 節でも検討したように出自や系譜の異なる集団であった可能性が高いといえるだろう。

### （3）合代島丘陵における埋葬施設の変質—遠江Ⅲ期末葉～Ⅴ期前半—

両袖式石室、片袖式石室は遠江Ⅲ期末葉にはその築造を終え、遠江Ⅲ期末葉以降、疑似両袖式石室と無袖形石室が主体となる。横穴式木室の可能性がある上神増 E 4 号墳、上神増 E 13 号墳の横穴式土壙が確認できるが、客観的である。この石室形態の大きな変質は、上述したように遠江における変化と同一であり、遠江内部で大きな社会的な変質があったことを反映したと考えられる。

**疑似両袖式石室** 疑似両袖式石室は複室、単室ともに前段階に出現していた可能性が高いが、遠江Ⅲ期末葉以降継続的に採用され併存する。複室疑似両袖式は遠江Ⅳ期後半で終焉した可能性が高いが、単室疑似両袖式は遠江Ⅴ期前半まで築造されている。

**無袖形石室** 遠江Ⅲ期末葉以降に構築された無袖形石室は、上神増 E 2 号墳の横穴式石室とは特徴が異なるため直接的な系譜にあるかどうかは検討する必要がある。筆者は直接的な系譜にはないと考えている。この時期の無袖形石室は小型であり、時期が新しくなるに従い、胴張りが著しくなるとともに、遠江Ⅳ期末葉～Ⅴ期前半頃、上神増 B 8、E 14 号墳のように奥壁と側壁の境界が不明瞭な円形に近い石室に変化するものが確認できる。

なお、疑似両袖式石室と無袖形石室の間には石室規模差があり、石室形態により階層差を表示している可能性が高い。また、疑似両袖式石室の中では複室疑似両袖式のほうが単室疑似両袖式石室よりも大型であることから、複室疑似両袖式石室の方がやや上位階層にあった可能性が高い。

## 第5節 上神増E 2号墳出土の三葉環頭大刀について

### 1. 三葉環頭大刀の復原

上神増E 2号墳から、鉄製三葉環頭大刀柄頭が出土した。X線写真撮影の結果、象嵌は施されていないことが判明した。

再度、その特徴を概観すると、柄頭は薄鉢形（上円下方形、主頭形）の環内に三葉文を表現し、柄頭茎は柄頭と一体造で長い。柄頭茎は刀身茎と直接目釘で装着されるものと想定できる。

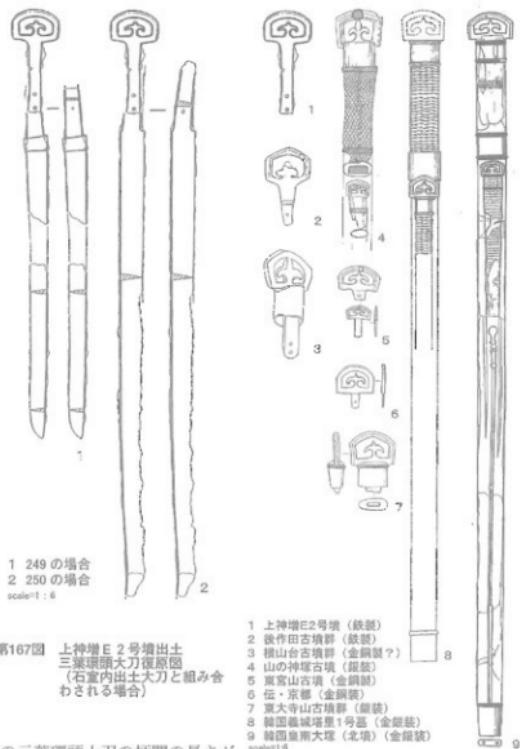
上神増E 2号墳からは大刀が2点出土しているが、この柄頭とは離れた場所から出土しており、①古墳の埋葬段階で柄頭が取り外された状態で副葬されたか、②追葬時の片付けの際に壊（さ）れたか、あるいは③盗掘の際に破壊されたか、の3者が考えられる。いずれにしても出土状態から原形を復原するには困難である。このため柄頭に伴う刀身が明確ではないが、出土した2点の大刀のどちらかがこの柄頭に伴うという想定で第167図に復原案を示した。

復原案を作成するにあたり、他の三葉環頭大刀の柄間の長さが10~12cmのものが多いことから、2者ともにほぼその長さになるように柄頭茎と刀身茎を重ね合わせた。柄頭茎には目釘孔が2孔確認できるが、2点とも刀身茎には1孔のみ現状では確認できない。249と装着される場合は欠損している箇所に目釘があったと仮定すれば2孔で固定した可能性があるが、現状では刀身には1孔しか確認できないため、柄頭茎の1孔は未使用であった可能性が高い。250と装着される場合は、目釘孔が間に近い位置にあることから重なり合う部分が非常に長かった可能性が高く、先端に近いほうの目釘のみの使用でも1孔は使用されなかった可能性が高い。この他、別の大刀が副葬されていた可能性があり、第167図復原案が妥当かどうか今後事例の増加を俟って、評価する必要がある。

### 2. 三葉環頭大刀所有の意味～上神増E 2号墳の被葬者像と合代鳥丘陵の古墳群の位置づけ～

#### (1) 三葉環頭大刀の分類・分類からみた系譜

三葉環頭大刀の起源は漢代にあり（穴沢・馬目1989）、上神増E 2号墳のように環内が明確な三葉文



第167図 上神増E 2号墳出土  
三葉環頭大刀復原案  
(右室内出土大刀と組み合わ  
わされる場合)

- 1 上神増E2号墳(鉄製)
- 2 後作田古墳群(鉄製)
- 3 横山台古墳群(金銅製)
- 4 山の神原古墳(銀製)
- 5 東宮山古墳(金銅製)
- 6 伝・京都(金銅製)
- 7 東大寺山古墳群(銀製)
- 8 韓国義城郡里1号墓(金銅製)
- 9 韓国慶州大塔(北墳)(金銀製)

scale=1:5

第168図 薄鉢形三葉環頭大刀の類例



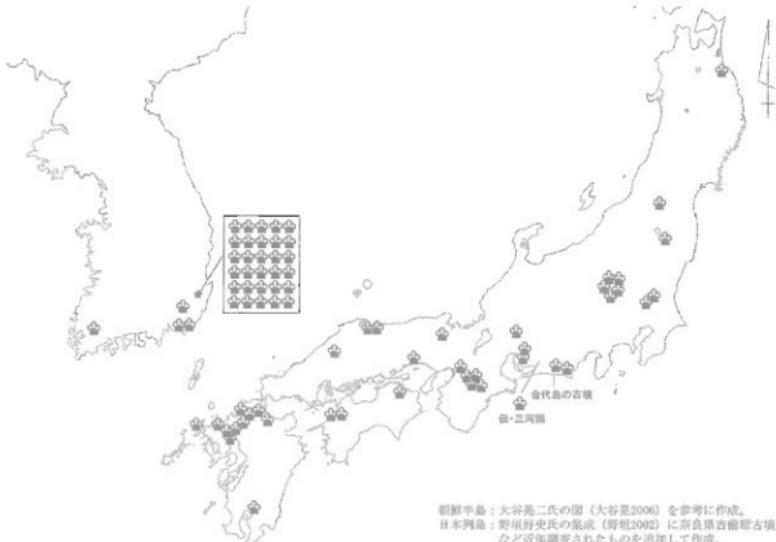
第169図 日本列島および朝鮮半島の三葉環頭大刀出土遺跡分布図

となるものは、日本列島、朝鮮半島で出土している。これまでの研究により、三葉環頭大刀（二葉も含む）は環頭の形状から円形環と蒲鉾形（圭頭形、上円下方形）環に区分できる。この種類ごとに出土位置を示したのが第169図である（註6）。この分布図からも分かるように朝鮮半島では、蒲鉾形三葉環頭大刀は新羅地域に多く、円形は百濟（榮山江流域）や伽耶地域に分布することが論じられている（穴沢・馬目 1989、大谷晃 2006、持田 2006 など）。したがって、上神増E 2号墳例は朝鮮半島の新羅のものの系譜を引くと考えることができる。

穴沢啄光氏によると、上神増E 2号墳のように柄頭の茎が長く、直接刀身茎の目釘孔と柄頭の茎の目釘孔が刀身茎と直接目釘で固定されるのは朝鮮半島に多い技法という。この特徴も本例が朝鮮半島とのかかわりが想定できる根拠となる。

しかし、朝鮮半島で生産され、上神増E 2号墳被葬者集団にもたらされたとは断定できない。上神増E 2号墳の築造時期は遠江国中期中葉（TK43型式期、6世紀後）に位置づけられ、本例が初葬に伴うものとしてもその生産はそれほど遙ない可能性が高い。朝鮮半島ではこの時期に生産された三葉環頭大刀は非常に少い上、朝鮮半島の蒲鉾形のものは金銀装であり、基本的に鉄製のものが確認されていないことから、上神増E 2号墳例は新羅の系譜を引きつつも日本列島内で生産された大刀である可能性が高い。

日本国内では円形三葉環頭大刀が一般的で、蒲鉾形三葉環頭大刀は上神増E 2号墳を含めて7点（6古墳、1不明）出土している（第168図）。例示すれば、福島県後作田古墳群、同横山台古墳群、伝・京都府出土、東大寺山古墳群、徳島県川之江市東宮山古墳（妻鳥塚陵墓参考地）、宮崎県兒湯郡高鍋町山の神塚古墳（持田 28号墳）であり（穴沢・馬目 1989）、うち後2者が金・銀装親子大刀であり、新羅から直接もたらされた可能性が高い。伝・京都府出土は金銀装、東大寺山古墳群例は銀装、横山台古墳群例は材質不明（穴沢・馬目氏は金銀装と想定する。穴沢・馬目 1989）、後作田古墳群例は鉄製である。



第170図 日本列島および朝鮮半島の三葉環頭大刀出土遺跡分布図

これにより、上神増E2号墳例は後作田古墳群出土例と最も近い関係にある。また、材質不明のため比較可能かどうか明確ではないが、横山台古墳群出土例が実寸に近い状態が報告されているとすれば、柄頭茎が長い、目釘孔が2孔である、という2つの特徴が上神増E2号墳出土例と類似しており、この2個体は近い工房で生産された可能性を想定できるのではないかろうか。

### (2) 三葉（繁）環頭大刀との関係

三葉環頭大刀の評価にあたり重要なのが、上神増E2号墳と同一丘陵上にある合代島古墳（詳細不明）から出土したとされる三葉環頭大刀である（第4章第1節、第5図）。この三葉環頭大刀は出土古墳不明であり、既に盗掘が行われ、開口している横穴式石室内に副葬されていた可能性が高い。

第170図に示したように三葉環頭大刀も三葉環頭大刀と同様朝鮮半島の新羅で多く確認されるものであり、新羅系と考えられている（穴沢・馬目1987、大谷晃2006、持田2006など）。

### (3) 三葉環頭大刀、三葉環頭大刀からみた合代島丘陵の古墳群の位置づけ

朝鮮半島の新羅に系譜を有し、新羅や、伽耶で流行する三葉環頭大刀、三葉環頭大刀を保有する古墳が合代島丘陵上に2古墳存在することは、この地域の集団が直接的に渡来人を示すものではないにしても、渡来系あるいは朝鮮半島（新羅）と関係をもつような集団であった可能性が高いと考える。

装飾付大刀について三葉、三葉環頭大刀と同時期には單鳳環頭大刀が主体的に存在するが、それと比べて三葉、三葉環頭大刀の出土数は少ない。また、單鳳環頭大刀は朝鮮半島の百濟や伽耶に系譜を有し（大谷晃2006、持田2006ほか）、百济・伽耶・倭で副葬される。一方、三葉、三葉環頭大刀は朝鮮半島の新羅に系譜を有し、新羅・伽耶で流行するものである。单鳳環頭大刀と三葉・三葉環頭大刀は全く異なる歴史的脈絡により創出され、朝鮮半島でも分布範囲が異なり、日本列島内でも共伴する事例はほと

んどない（野垣 2002）。

東海地方でも単鳳環頭大刀は東遠江や東駿河などで 12 例が、三葉環頭大刀は 2 例が、三累環頭大刀は 6 例が出土している（東海古墳文化研 2006）が、同一古墳からの出土ではなく、ある程度排他的な関係にある。

東海地方において特に注目すべきは、ほとんど装飾付大刀の出土がない西三河の矢作川流域で、三累環頭大刀 2 例（岡崎市井田出土、豊田市山ノ神古墳）、円環三葉環頭大刀 1 例（岡崎市岩津 1 号墳）が出土している点である（岩原 2001）。これと同じように、合代島丘陵周辺では単鳳環頭大刀の出土ではなく、三累環頭大刀 1 例（合代島古墳）、三葉環頭大刀 1 例が出土している点は注意すべきであろう。この二地域間に直接的なつながりは看取できないが、矢作川流域は古墳時代中期後半に堅穴系横口式石室を採用して以降、畿内系横穴式石室を構築しない地域であり（鈴木一 2001）、独自色が強い地域である。一方、合代島丘陵の古墳群、特に遠江Ⅲ期前葉～後葉の古墳は、板石を多用し、基底石に板石を縦位に用いる在地化した横穴式石室の存在、遠江では稀有な左片袖式石室が複数構築される点、横穴系埋葬施設の多様な形態が構築されるなど遠江の中でも特異な地域として挙げができる。この 2 地域には、それぞれ横穴式石室の形態に独自色が強く、単鳳環頭大刀が出土していない点も共通しており、注目できる。

この点に関連して、九州では現在の佐賀県内で単鳳環頭大刀が少ない一方で三累環頭大刀が多いことが指摘されている（野垣 2002）。このように地域によっては単鳳環頭大刀とは明らかに分布が異なる場合があり、三葉、三累環頭大刀と単鳳環頭大刀には系譜だけではなく、それを配布する集団にも、それを受け取る側にも差異があった可能性を想定でき、合代島丘陵の古墳群の築造者集団が遠江の中でもやはり性格の異なる集団、朝鮮半島（新羅）に系譜を有する集団あるいは朝鮮半島（新羅）との交流を持った集団であった可能性を想定しておきたい。

## 第6節 上神増B 7号墳出土の環付足金物で佩用する大刀について

### 1. 上神増B 7号墳出土大刀の復原

大刀の概要 上神増B 7号墳から装飾付大刀が出土した。この大刀は環付足金物の環が失われているが、凸状貴金属を有する点、凸状貴金属で固定された端部が欠損する棒状金具が存在する点、鞘口金具に凹状切欠が確認できる点、を総合的に評価して、環付足金物で佩用する大刀（以下、環付足金物佩用大刀）と断定した。また、柄頭・鞘尻金具が残存していないが、盗掘などによる被害は受けていないこと、金属製の鞘口金具や鑓、鍔などの装具が残存していることから、柄頭と鞘尻金具が後世に持ち出された可能性は非常に低く、有機質の柄頭・鞘尻の環付足金物佩用大刀であった可能性が高い。

復原の参考例 上神増B 7号墳例は拵えの一部が銅装である可能性が高いこと、環付足金物佩用大刀のなかで環付足金物を2箇所貴金属で固定することから、この特徴を有する大刀を探すと、前者では島根県松江市進行1号横穴墓（島根県教委 2002）、後者では和歌山県御坊市岩内1号墳（巽 1998）がある。

進行1号横穴墓例は、銅製の円頭・圭頭・方頭に近い形態をしており、報告書では圭頭大刀とされる。拵えは柄頭・鍔・鞘口金具・鞘尻金具・貴金属が銅製で、柄間は布巻を行った上に糸巻（葛巻）を施している。鍔は突出鍔で、鍔は装着されているが材質は確認できない。

岩内1号墳例は、柄頭は銀装とされ（松崎 1983）、鞘尻金具は出土していない。柄間は銀線巻（銀線蛭巻）、鍔・鞘口金具は銅装で、復原では柄頭・鞘尻は木製漆装に復原されている。鍔は突出鍔である。

なお、このほか奈良県斑鳩町法隆寺蔵の七星文銅製大刀（伝製品、白鳳期とされる、法隆寺 1989）は、金銅装の鞘口金具に凹状切欠が確認でき、漆塗鞘にはこの切欠部分から一直線に漆がはげている部分があり、この部分に環付足金物の足金物が装着されていたことが想定できることから、環付足金物で佩用する大刀と想定できる。この大刀も後世の補修であるが銅製の方頭柄頭が装着されており、上神増B 7号墳の大刀を復原する上で参考となる。

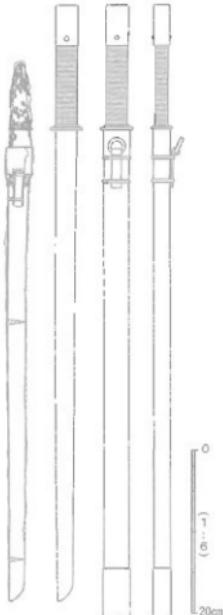
上神増B 7号墳出土装飾付大刀の復原 以上の参考例などをもとに、上神増B 7号墳出土例の想定復原図を第171図に示した。柄頭・鞘尻金具は失われているが、柄頭は有機質（木製か）漆塗で方頭、鞘尻金具は有機質（木製か）漆塗で平尻であった可能性が高い。柄間は糸巻き漆塗り、鍔は銅製突出鍔、鍔は銅製、鞘口金具は鉄製漆塗である可能性が高い。鞘は鞘口金具のみ金属製の飾りが装着される「素鞘」（瀧瀬 1984）に相当する（第171図）。

### 2. 環付足金物で佩用する大刀の評価について

ここでは、環付足金物佩用大刀について、先学の意見を参考にしながら、その評価を試みたい。

#### （1）環付足金物佩用大刀の系譜と編年的位置

系譜 現状で最古のものは、韓國公州市武寧王陵出土の金銀装刀子（下大迫 2003）で、武寧王陵の没年である523年以前に生産された可能性が高い。韓国ではこの他、羅州



第171図 上神増B 7号墳出土環付足金物佩用大刀の想定復原図

の伏岩里 3 号墳（国立文化財研究所 2001）から 3 例出土しており、出土数は少ないものの、他の装飾付大刀と同様、朝鮮半島（特に百濟）に起源する佩用方法である可能性が高い（下大迫 2003）。

**編年** 日本国内での初現は奈良県藤ノ木古墳の銀装刀子（櫻考研 1995）で TK43 型式期に位置づけられ、大刀で環付足金物を伴うものはつづく TK209 型式期には埼玉県小見真觀寺古墳出土大刀と刀子、茨城県梶山古墳などの主頭大刀で確実に採用されており、奈良時代まで用いられる佩用金具である。大刀への採用は、愛知県磯辺王塚古墳（豊橋市教委 1998）などから出土したものが TK43 型式期まで遡る可能性があり、刀子と同時期に日本列島で採用された可能性が高い。

環付足金物佩用大刀の変遷について、現状での見通しでは、TK209 型式期までは金属製の柄頭が伴うもので、70cm 以上の大刀に伴うことが多い。一方、飛鳥Ⅰ期以降は金属製柄頭を伴うものが減少し、有機質の柄頭が増加するとともに、70cm 以下のやや短い大刀が多くなる。

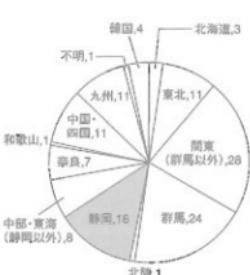
この假定が正しいとすれば、上神増 B 7 号墳例は約 65cm と短い部類で、古墳は遠江Ⅳ期前半（飛鳥Ⅱ期）に位置づけられることから、古墳と環付足金物佩用大刀の関係は妥当であるといえる。

## （2）環付足金物佩用大刀の意義

**環付足金物佩用大刀の分布とその意義** 環付足金物については、神林淳雄氏が最初に注目し（神林 1938）、松崎元樹氏が全国的な集成を試み（松崎 1983）、下大迫幹洋氏（下大迫 2003）が両氏の研究を継承し研究を進めている。下大迫氏は日本列島内の環付足金物佩用大刀の出土遺跡を集成・公表し、47 事例が列挙されている（下大迫 2003）が、報告書が手に入りにくい古墳が多いことが要因と思われ、静岡県の事例はすべて遗漏されている。新発見と遗漏を含めた筆者と瀧瀬芳之氏の集成（第 48 表、註 7・8）によれば、朝鮮半島で 4 例、日本列島で北海道から福岡県で 115 遺跡の出土で合計 126 例が確認できる。この他の遗漏を含めれば 130～140 例前後となる蓋然性が高い。

日本列島では環付足金物佩用大刀は均等に分布するわけではなく（第 173 図、第 48 表）、群馬県を中心とする関東に約 50 例と多い傾向は先学の意見（松崎 1983、下大迫 2003）を追認できるが、群馬に次いで多い静岡の 16 例が抜け落ちていること、これ以外の地域でも島根、奈良でも 7 例が出土しており、下大迫氏が想定したよりも、全国的にもやや分散する傾向にある。したがって、下大迫氏が集成をもとに群馬と東北に多く、大和（奈良）にも一定数存在することから、蝦夷政策と関連した畿内王権と上野、東北地方との関係により配布されたとする点は重要である（下大迫 2003）が、この指摘は環付足金物佩用大刀の一侧面を評価したにすぎないといえる。方頭大刀など 7 世紀前半以降に用いられる大刀が東日本に偏在する点は同様であり、これらとの差異を明らかにしていく必要があろう。

環付足金物佩用大刀の分布で興味深いのは、群馬、関東と東北に多いことのほかに、奈良に 7 例で、



それも法隆寺の寺宝、藤ノ木古墳からの出土など畿内の中心的な古墳や寺院が保有すること、法隆寺のものは銅製で七星文が刻まれていることである。このことから環付足金物佩用大刀は畿内で生産された可能性が高く、畿内中軸部でも古墳時代後期から奈良時代まで断続的に副葬が続き、階層的には上位の被葬者が考えられることが挙げられ、重要性が高かったと考えられる。また、九州の壱岐や対馬、島根の隠岐など朝鮮半島との交流を想定すべき島々から出土している点も注目すべきこととして挙げられる。

環付足金物佩用大刀が、壱岐・対馬で出土していることは朝鮮半島との外交や広域流通を担うなどの役割を果たしていた集

第 172 図 地域別の環付足金物佩用大刀出土数

團に配布された可能性も、畿内王権の東国・蝦夷政策と併せて想定しておくべきであろう。

また、環付足金物は主要な装飾付大刀の生産が終焉し、方頭大刀が主体となっていく時期と盛行時期が重複しており、方頭大刀の分布とも比較検討しながら、推古朝以降に施行された冠位制度との関係も想定すべきと考えている。

遠江における環付足金物を配する大刀を副葬する古墳について 静岡県の16例中、特に遠江が13例(註9)と群馬に次いで多い点が確認されたことは重要である。遠江の事例は、森町院内甲塚が御頭環頭大刀である以外は柄頭が確認されるものではなく、また全長が60cm前後と短いものが多い。時期的には

第48表 環付足金物佩用大刀出土遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在	遺跡	周囲	遺物名
1	柏木遺跡2号墳	北海道室蘭市	北海	7	黒漆方首刀
2	柏木遺跡2号墳	北海道室蘭市	北海	7	黒漆鉄(刀柄)刀
3	西島山古墳P-96	北海道室蘭市	北海	8	黒漆鉄大刀
4	大井半山古墳	宮城県仙台市	銀大塚	5	銅鏡大刀
5	丸井山10号墳	宮城県仙台市	銀大塚	5	銅鏡方首刀
6	川北山65号墳	宮城県仙台市	銀大塚	5	銅鏡金足金物
7	朽木山13号墳	宮城県仙台市	銀大塚	5	銅鏡大刀
8	淀内山27号墳	宮城県仙台市	銀大塚	5	銅鏡大刀
9	御宿山古墳	丹波篠山市	円墳	9	銅鏡大刀
10	羽ノ口2号墳	福島県磐梯郡	円墳	5	銅鏡など
11	御坂原12号墳	福島県磐梯郡	円墳	6	銅鏡金足金物
12	八幡山2号墳	福島県いわき市	銀大塚	5	銅鏡金足金物
13	白河郡山3号墳	福島県白河市	銀大塚	5	銅鏡金足金物
14	八幡古墳	福島県郡山市	不明	5	銅鏡大刀
15	武藏古墳	茨城県土浦市	円墳	23	銅鏡方首刀
16	武藏古墳	茨城県土浦市	円墳	23	銅鏡三連環頭大刀
17	七ツ石古墳	茨城県常総市	古墳	5	銅鏡大刀
18	延喜式2号(道場)	茨城県ひたちなか市	古墳	5	銅鏡金足金物
19	高田山古墳	茨城県鉾田市	円墳	40	銅鏡大刀
20	笠置山古墳	茨城県笠置町	円墳	5	銅鏡金足金物
21	笠置山古墳	茨城県笠置町	円墳	5	銅鏡金足金物
22	蛭塚古墳	茨城県前橋市	円墳	5	銅鏡大刀
23	鶴原山古墳	茨城県鹿嶼郡	円墳	5	銅鏡大刀
24	鶴原山古墳	茨城県鹿嶼郡	円墳	5	銅鏡金足金物など
25	御井山古墳	茨城県鹿嶼郡	古墳	5	銅鏡金足金物など
26	金糞野有山上	茨城県鹿嶼郡	古墳	5	銅鏡大刀
27	芦屋町蓬莱山	群馬県高崎市	不明	5	銅鏡方首刀
28	瑞雲古墳	群馬県高崎市	円墳	55	銅鏡金足金物
29	幸村2号墳	群馬県伊勢崎市	円墳	25	銅鏡大刀
30	龍王山古墳	群馬県伊勢崎市	円墳	5	銅鏡大刀
31	夜呂神2号墳	群馬県伊勢崎市	円墳	20	銅鏡金足金物
32	御宿山古墳	群馬県太田市	方墳	29	銅鏡日目など
33	金兵2号墳	群馬県邑楽郡	方墳	1, 5	銅鏡大刀
34	日暮古墳	群馬県邑楽郡	古墳	5	銅鏡大刀
35	金山古墳付近	群馬県邑楽郡	小明	5	銅鏡大刀
36	金山1号墳	群馬県邑楽郡	円墳	5	銅鏡大刀
37	御宿山古墳付近	群馬県邑楽郡	不明	5	銅鏡金足首刀
38	御宿山4号墳	群馬県邑楽郡	円墳	5	銅鏡金足金物など
39	御宿山5号墳	群馬県邑楽郡	円墳	5	銅鏡金足金物など
40	金子メメ2号墳	群馬県邑楽郡	円墳	25	銅鏡大刀
41	金子メメ3号墳	群馬県邑楽郡	円墳	12	銅鏡日・足・金物
42	鏡山古墳	群馬県伊勢崎市	円墳	19	銅鏡金足首刀
43	御前4号古墳	群馬県伊勢崎市	円墳	5	銅鏡大刀
44	小山真殿守古墳	埼玉県行田市	鋸面	112	銅鏡金足大刀
45	小山真殿守古墳	埼玉県行田市	鋸面	112	銅鏡刀
46	日本山古墳	埼玉県深谷市	円墳	12	銅鏡大刀
47	小山・御理古墳	埼玉県深谷市	円墳	26	銅鏡金足首刀
48	小山・通御守・御理	埼玉県深谷市	円墳	26	銅鏡金足首刀
49	金糞野古墳	埼玉県深谷市	円墳	95	銅鏡金足金物など
50	金糞野2号墳	埼玉県深谷市	鋸面	12	銅鏡金足大刀
51	阿多山古墳	千葉県成田市	銀大塚	5	銅鏡金足大刀
52	阿多山古墳	千葉県成田市	銀大塚	10	銅鏡金足首刀
53	内野8号墳	千葉県香取市	銀大塚	20	銅鏡(刀柄)刀
54	内野8号墳	千葉県香取市	銀大塚	63	銅鏡金足金物など
55	内野8号墳	千葉県香取市	円墳	79	銅鏡金足金物
56	内野8号墳	千葉県香取市	円墳	20	銅鏡金足2号
57	内野8号(秀)	千葉県香取市	遺構外	5	銅鏡金足金物
58	天王山古墳	千葉県香取市	古墳	5	銅鏡金足金物など
59	金糞野2号古墳	千葉県香取市	鋸面	20	銅鏡金足・足金物
60	手元山4号墳	千葉県香取市	円墳	15	銅鏡大刀

① 本表は、宮内省は、御廻寺秀之氏・御付足金物(刀柄)の集成を提供していただいた。それに一部を加筆したのである。

② 命名: 北海=北海道古墳、南=南後方円墳、北=北後方円墳

単位(cm)

③ 通算の名は「○」を記入したものは、復元足金物の可視性が高いことを示す。

④ 一音頭より複数個を示しているものがあるが、大刀の形が異なるものについて記載として拘執し、複数個足金物が複数出土した古墳は遺物のところに数量を明記した。



第173図 日本列島および朝鮮半島の環付足金物出土遺跡分布図

院内甲墳が遠江Ⅲ期後葉に位置づけられる以外は、時期的に7世紀前半以降に位置づけられる古墳が多い。

また、遠江では中遠江に多く（特に磐田原台地北部から合代島丘陵に3例）、また、浜松市半田山C39号墳で3例、地蔵平B17号墳の三方原古墳群中で4例と同一地域に多い傾向にある。群馬でも多野郡に多く確認されるようであり、同様の佩用方法の大刀が同一地域に分布する点は注目する必要がある。このように環付足金物佩用大刀が複数存在する理由は同じような役割を担う被葬者が存在していたことの証となろうか。

遠江の出土例は遠江Ⅲ期末葉以降が多く、小規模古墳からの出土が多い。遠江Ⅲ期末葉以降装飾付大刀の副葬が減少する中で、畿内王権から配布された可能性の高い環付足金物佩用大刀を有することは、この時期に新たに畿内王権との結びつきを強めた群集墳の盟主的存在が多々存在していたことになる。これらの人々は、下大迫氏が想定したように軍事的な役割のほかに、交易等の流通を担うなどの役割を担った人物であり、それまでに主体的であった主要な装飾付大刀とはやや佩用者の性格が異なる可能性がある（註10）。

## 第7節 上神増A・B・E古墳群出土の装飾付大刀以外の遺物について

### 1. 耳環

今回の調査では4点の耳環が出土しているが、すべて銅地銀張の銀環である。また、製作技法は、端面の観察から薄い銀箔を銅地に巻きつけ、端部で絞り込んだ痕跡が確認できる。耳環においては銀環が多い点は注意しておく必要がある。

### 2. 錫製品の出土

自然科学分析の結果、上神増E 3号墳から錫製の環状遺物が出土している。残存する部位の湾曲状況からすると、耳環の可能性が高い。錫製品は主に九州や東北北部から北海道で確認される遺物である。しかし、これまで分析数が多い地域で確認される傾向にあり、今後調査が増えるにつれ、各地域でも出土数の増加が見込まれる。

このような状況の中、静岡県では袋井市（旧・浅羽町）五ヶ山B 1号墳（浅羽町教委 1999）から錫製鉢、同愛野向山B 13号墳（袋井市教委 2004）から耳環が出土しており、管見では上神増E 3号墳例が県内で3例目である。五ヶ山B 1号墳、愛野向山B 13号墳は中期古墳であり直接的な関係は見出しつく。しかし、この2基が所在する小笠山丘陵北西麓では古墳時代後期には横穴式木室が多数築造される地域であり、上神増E 3号墳のように狭道に石材を用いる点も共通する北山古墳群などが存在している。時期がことなるため断言はできないが、このような特殊な素材を扱う集団が小笠山丘陵北西麓に存在しており、その集団が後期後半に横穴式木室を採用し、そしてこの上神増E 3号墳の成立に影響を与えた可能性も考えておく必要がある。

さらに、錫製品を所有することは、この上神増E 3号墳の埋葬施設が横穴式木室であることと考え合わせると非常に興味深い。横穴式木室は、鉄器生産とかかわる集団の墓制との指摘もあり（柴田 1983、鈴木敏 1991、田村 2008 など）、鍛冶技術を有する集団であった可能性も高い。そうした技術集団が錫製品を有する点は、鍛冶技術との関連で錫製品などを入手していた可能性も考慮すべきであろう。

### 3. 鉄鉢

上神増E古墳群では、E 3・E 16・E 17号墳と3基の古墳から鉄鉢が出土している（第174図）。2001年の段階で古墳時代後期以降に東海地方で鉢が出土した古墳・横穴墓は約30基を数える（三河古墳研究会編 2001、静岡県考古学会編 2001に新出土・遺漏分追加）。

鉄鉢は古墳時代後期以降副葬の度合いが減少する。これは古墳時代後期に朝鮮半島と日本列島各地の首長層との交流の証としてあった鉄鉢を、朝鮮半島との窓口を一元化するため畿内王権が鉄鉢の流通を制限し、一元化したためと考えられている（高田 1998）。この一元化に伴い、畿内王権は鉢身の断面が正三角形になる三角穂式と呼ばれる鉄鉢を創出・配布し自らの権威を高めた。この三角穂式は畿内以外の地域では有力古墳から出土することが多いことから、三角穂式は畿内王権と地方の有力者との関係の中で配布されたと考えられている（高田 1998）。この三角穂式鉄鉢は遠江でも上神増E 16号墳のほか磐田市幡塚古墳や御前崎市梶ヶ谷横穴墓群などで出土している。東海地方では静岡市賤機山古墳などで出土し



第174図 上神増E古墳群出土の鉄鉢

ているが高田貫太氏の指摘どおり各地の有力古墳から出土することが多い。しかし、上神増E16号墳は破壊が著しく副葬品の様相が不明確であるが、10m程度の小規模墳であり、横穴式石室規模も合代島丘陵の他の古墳と比較して大きいとはいはず、合代島丘陵における有力墳ではない。こうした状況にありながら三角穂式鉄鋸を保有することは、畿内王権が地方の支配強化のため群集墳中の小規模の古墳の被葬者に三角穂式鉄鋸を与えることで支配の裾野を広げる一方、上神増E16号墳の被葬者は畿内王権との関係を深め、自らの地位を確立した証拠と考えられる。上神増E16号墳はこの点で合代島丘陵の古墳群の中にあっては重要な位置づけにあった可能性が高い。

一方、上神増E3、E17号墳から出土した鉄鋸は、古墳時代後期の古墳から出土する鉄鋸の中では非常に特殊な型式である。E3号墳のものは鋸身が非常に短く、E17号墳のものは鋸身と袋部の間に頸部が存在する。どちらも同時期の東海地方には類例が見いだせない特殊な形態である。後者のように袋部と頸部を有する鉄製品では、鉄鑿などの工具が想定でき、鍛冶技術を有する集団が工具を生産する過程で鋸を生産した可能性も想定しておくべきかもしれない。同じく前者も袋部に目釘孔が2箇所確認できる特殊な形態で、かつ何度も繰り返すが鍛冶生産との関係が想定できる横穴式木室から出土していることも自ら生産した可能性を考慮しておく必要があろう。上述したように鉄鋸は三角穂式鉄鋸の創出以来、畿内王権による流通規制（高田1998）が想定されており、こうした流れとは逆行するよう上神増E古墳群から2点出土していることは畿内王権が完全に鉄鋸の流通を一元化できたわけではなかったことを示していよう。また、上神増E3、E17号墳の被葬者がこうした特異な鉄鋸を入手できる位置にいた点も重視しておく必要があるだろう。

#### 4. 上神増A・B・E古墳群のその他の特徴

今回調査した古墳からは農工具類の出土が少なく、工具として刀子が挙げられる程度であることも特徴の一つである。副葬されなかつたことを証明するのは非常に難しいが、合代島丘陵西尾根西斜面に位置する上神増D（押越）古墳群では、盗掘や破壊を受けていたものの、鎌、鶴先、砥石などが出土しており、今回調査した古墳でも当初副葬されていたとすれば、数点が出土したとしてもおかしくない。

出土していないことを根拠に論じるのは控えなければならないが、上神増D古墳群と今回調査した古墳には、出土遺物にも差異が確認できるといえよう。今回調査した古墳時代後期以降の上神増B・E古墳群（「合代島Ⅲ群」）と、上神増D古墳群（「合代島Ⅱ群」）は使用石材や石室形態が異なることから、位置づけの異なる集団であることを論じたが、こうした農工具の副葬の有無という点も考慮すべきであろう。

## 第8節 上神増B・E古墳群出土の古代墳墓について

### 1. 遠江における古代墳墓出土遺跡の概要

遠江でこれまでに確認された奈良時代の古代墳墓（藏骨器が確認された遺構）は、管見では16基である（第49表）。これらは古墳時代後期～終末期の群集墳の大規模発掘調査により確認されたものが大部分であり、古墳群に伴わないものが多いと仮定すれば、本来はこの数倍が造営されていた可能性が高い。したがって、現状での様相が今後大きく変化する可能性がある。現状では、浜松市三方原古墳群、磐田原台地西部の磐田市広野地区、同東部の二子塚古墳群、合代島丘陵の上神増B・E古墳群、原野谷川下流域で複数が確認されている。

なお、ここで挙げた事例には浜松市作原6号墳や浦前IV・V区2号墳など横穴式石室や横穴墓内に納められた藏骨器が出土した遺跡については例示していない。別報告（大谷2004b）で論じているため、そちらを参照願いたい。古墳の埋葬施設内に納めた事例は、浜松市三方原古墳群や佐鳴湖西岸の古墳群に多く確認される一方で、中・東遠江には少ない（大谷2004b）。

### 2. 遠江における古代墳墓の様相

古代墳墓の立地状況 浜松市半田山A古墳群（浜松市遺跡調査会1984）や磐田市二子塚古墳群（磐田市教委2003）、上神増E古墳群は、終末期まで築造が行われる古墳群中に位置している（第175図）。藏骨器（想定されるものも含む）を納めた横穴式石室内や横穴墓も、基本的に古墳時代終末期まで築造が繼續する古墳群・横穴墓群である場合が多い。したがって、遠江における奈良時代の墳墓の一類型は古墳群・横穴墓群中に築造されたものである。

一方で、古墳に伴わず単独で出土した遺跡としては磐田市上坂上C遺跡や湖西市川尻東遺跡が挙げられる。

古代墳墓の類型 遠江における古代墳墓は、①横穴式石室や横穴墓内に壺や甕を藏骨器として納めるもの、②土坑を掘り、そこに壺・甕を藏骨器として納めるもの、がある。②では土坑を掘削するが藏骨器を据えてそのまま埋め戻すもの（②A）、土坑の内部に石組をしてその内部に藏骨器を納めるもの（②B）

第49表 遠江における古代墳墓一覧（奈良時代）

遺跡名	出土地	あり方	遺構	藏骨器類	埋納	伴出遺物	備考
川尻東遺跡	湖西市	單独？	土坑	土師器類・ 須恵器杯身	罐置	なし	
瓦屋西D1号墳 埴内丘頭墳	浜松市	單独	古墳群丘上	須恵器脚付壺		なし？	
半田山A古墳群KS1	浜松市	古墳群中	土壇墓（經使用）	土師器甕	罐置	なし	
半田山A古墳群KS3	浜松市	古墳群中	土壇墓	土師器甕	罐置	なし	
上神増E古墳群SF14	磐田市	古墳群中	土壇墓（經使用）	土師器甕	罐置	なし	
上神増E古墳群SF15	磐田市	古墳群中	土壇墓	土師器甕・蓋	罐置	なし	
上神増E古墳群SF13	磐田市	古墳群中	土壇墓（經使用）	土師器甕	罐置 2組	壺・环身	藏骨器の蓋に用原石を使用か。
上神増E古墳群SF03	磐田市	古墳群中	土壇墓（經使用）	土師器甕・廣	罐置	なし	
上坂上C遺跡	磐田市	單独？	土坑	土師器甕・廣	罐置	なし	
広野出土	磐田市	不明		須恵器脚付壺	不明	不明	
二子塚古墳群SK10	磐田市	古墳群中	土壇墓	土師器甕・蓋	罐置	なし	
二子塚古墳群SK1	磐田市	古墳群中	土壇墓？	土師器	不明	なし	壺蓋か？土師器小片出土。
櫛原山道跡GN1地点K1	袋井市	複数？	土壇墓	土師器	不明	なし	人骨出土
櫛原山道跡 3・4地点出土	袋井市	不明	土壇墓？	土師器	不明	不明	骨壺から出土のため墓か不明。
宮ノ越遺跡出土	袋井市	不明	土壇墓？	土師器甕	不明	不明	
南坪10号墓	掛川市	横穴墓群中	横穴墓？	土師器甕	不明	不明	横穴墓？

※佐野1995の半田山A古墳群KS1の出土遺物として掲載されているものはKS1の遺物の誤りである。

B) が確認できる。①は 30 基以上が確認でき（大谷 2004b）、②A は半田山 A 古墳群 KSK3、二子塚古墳群 SK10、上神増 B 古墳群 SF15、②B は半田山 A 古墳群 KSK1、上神増 B・E 古墳群 SF03・13・14 などがある。

なお、これまでのところ古墳を再使用した浜松市瓦屋西 D 1 号墳丘利用の墳墓は別として、墳丘を有する古代墳墓は確認されていないようである。

**蔵骨器の埋納方法** 蔵骨器の設置方法では壺・甕を正置状態で納めるもの（X）、横置するもの（Y）が確認できる。この他、他地域の事例を考慮すると、蔵骨器口縁部を下に向かた状態のもの（Z）が遠江においても出土する可能性がある。

上神増 E 古墳群 SF03・SF13～15 はいずれも蔵骨器となる土師器壺・甕の口縁部を上に向けて正置する X 類であるが、②A と②B がある。

**蔵骨器** 石櫃や木櫃が確認された遺跡ではなく、現状では須恵器（広口壺、脚付短頸壺、短頸壺、四耳壺）、土師器（壺・甕）を蔵骨器とする。現状では土師器壺・甕を蔵骨器としているものが多い。土師器壺では、上神増 E 古墳群 SF13 のように赤塗しているものもある。

**副納品** 奈良時代の古代墳墓に伴う副納品は、上神増 E 古墳群 SF13 で出土している。蔵骨器の横に土師器坏身・坏蓋が組み合わされた状態で 2 組が埋納されていた。内部からは遺物が出土していない。遠江の古代墳墓では残存状況が良好なものが少ないためとも考えられるが、副納品は貧弱あるいは伴わない可能性が高い。

### 3. 古墳からみた遠江における古代墳墓の意義

上述したように遠江における奈良時代の古代墳墓は、大きく古墳を再利用するもの、終末期まで継続する古墳群中に造営されるもの、古墳群に伴わず単独（あるいは複数）で造営されるものが確認できる。

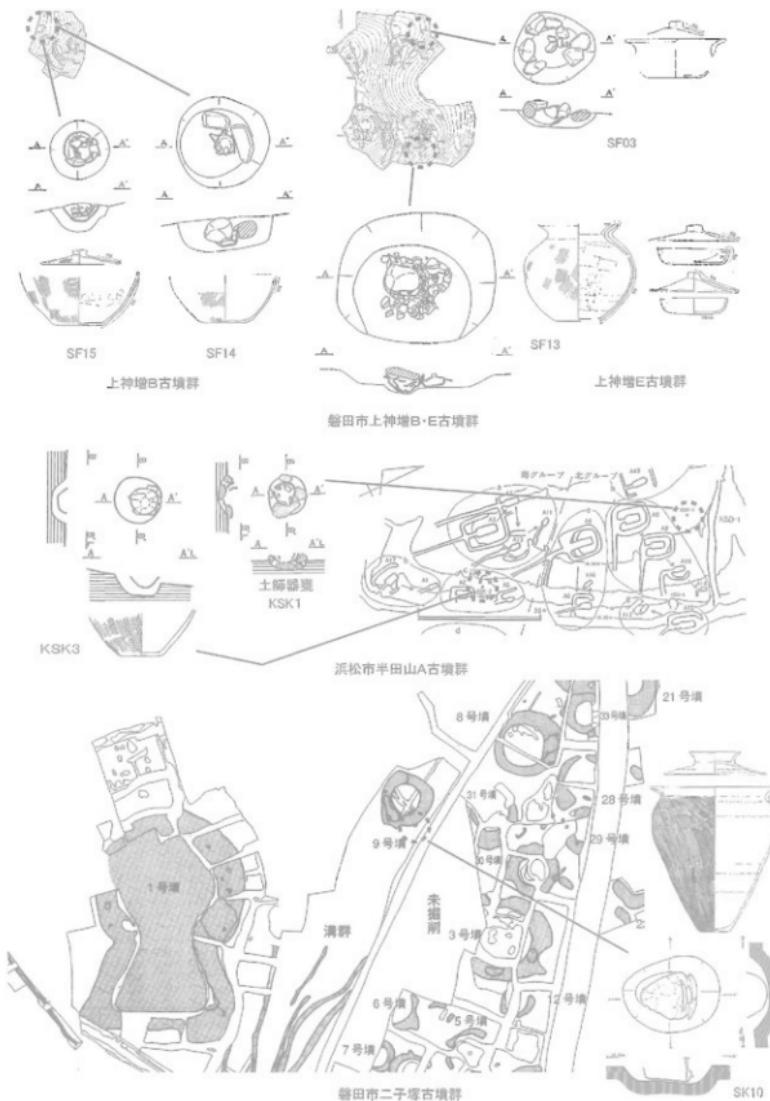
横穴式石室や横穴墓を再利用するもの、古墳群中に造営されるものについては古墳や横穴墓と兼造集団は大きく変化しないものと考える。単独で造営するものについては、この時期に新たに墳墓（火葬墓）を造営できるようになった新興の集団が想定できようか。

特に前者の場合、古墳の終末段階まで古墳の築造が続く古墳（群）は多々確認できるが、大規模調査を経てもそのすべてに墳墓が継続して築かれているわけではない。合代島丘陵でも上神増 B・E 古墳群と並行して新平山 A・B 古墳群、上神増 D 古墳群でも古墳時代終末期まで継続して古墳が築造されているが、古代墳墓が造営されたのは上神増 E 古墳群と B 古墳群の一部のみであった。

したがって、古墳を造営していた集団すべてが、古代墳墓の造営ができたわけではなく、その一部のみが継続して墳墓を造営できた（した）ことの意味を考える必要がある。

半田山 A 古墳群では、古墳の墳形において方墳化が進行するなど畿内との関連が想定できること、上神増 E 古墳群では古代墳墓の近くにある上神増 E 16 号墳や上神増 B 7 号墳には畿内との関係が深い三角穂式鉄鉢、環附足金物佩用大刀が副葬されている。遠江の事例すべてを検証しているわけではないので、今後注意深く検討する必要があるが、古墳群の造営集団のうち、畿内王權との関係が深かった造営集団の一部が継続して墳墓を営むことができたと考えたい。

図8脚 上神増B・E古墳群出土の古代墳墓について



全体図 scale=1:2,000 遺構 scale=1:30 遺物 scale=1:10

第175図 古墳群中から出土した古代墳墓

## 註（第8章）

- 1 この位置づけは主に須恵器・土師器を用いている。ただし、上神増E 16号墳など一部鉄製品により補正している古墳があり、須恵器の編年的位置づけと異なる部分がある。
- 2 一方で、遼江V期前半に位置づけられる遺物のみが出土した古墳でもやや石室規模が大きい上神増B 9、E 12号墳があり、この差異が何に起因するのかを明らかにする必要がある。
- 3 ここで注意しなければならないのは尾根上に立地する上神増E 10号墳とその斜面に立地するE 15～17号墳である。尾根上のE 10号墳が遼江Ⅴ期前葉～中葉で、斜面の古墳はそれよりも時期が下るため、尾根上から斜面へ築造したようにみえるが、墓道の方向はE 10号墳が西方向、E 15～17号墳は東方向へ向けられており、それぞれの築造集団が意識した方向が異なっていた可能性が高い。したがって、この墓道の方向を重視し、別の単位群と考えている。
- 4 ただし、現・合代島A古墳群中の南側の尾根に築造された古墳の様相が明確ではなく、これらの古墳は開口方向や墓道の方向により支群の範囲の集成が必要となる。
- 5 ただし、上神増A 5号墳と大手内A 6号墳は片袖式といつても、いわゆる「狭道」は短く、天井が戦せられていない可能性も多い。これらは無袖形石室に横口を付加した構造との見解もあり（田村 2003、本書第8章第2節）、注意が必要である。
- 6 なお、朝鮮半島の出土位置については大谷晃二氏（大谷晃 2006）、持田大輔氏（持田 2006）が提示した図を、日本列島については穴沢啄光・馬日順一氏の集成（穴沢・馬日 1989）と濱瀬芳之氏から提供いただいた集成表をもとに参考に作成した。
- 7 また、朝鮮半島の事例については、鈴木一有氏から出土遺跡について御教授を賜ったうえ、文献の教示を得ました。銘記して御礼申しあげます。
- 8 第48表は紙幅の関係で、出土遺跡の地名と古墳の場合の規格と、環付足金物佩用大刀形式のみを示すに留めた。別の機会に詳細な一覧表を示したい。
- 9 静岡の事例は環付足金物が大刀に装着されたものは本書で報告する上神増B 7号墳の事例を含め長泉町土狩長塚古墳、静岡市牧ヶ谷2号墳、島田市水掛渡C 1号墳、袋井市貫名地A 5号墳、赤池院内4（甲）号墳例などが確認できる。このほか環付足金物のみが平田山C 39号墳（金銅鏡3点）・岡地藏平B 17号墳（金銅鏡）、袋井市山田原A 1号墳（金銅鏡）・宝野金山古墳（金銅鏡）、磐田市寺谷坂上17号墳（金銅鏡）、浜松市大屋敷A 14号墳（金銅鏡）で出土し、御前崎市鶴ヶ谷2号横穴墓、静岡市神明4号墳で環付足金物の可能性が高い金属製品が出土している。
- 10 なお、環付足金物佩用大刀については将来的に別稿にて詳しく検討したい。

## 参考文献

### 第3章 引用・参考文献

- 静岡縣 1930 『静岡縣史』1  
静岡縣教育委員会 1983 『血松塚古墳発掘調査報告書』  
静岡縣埋蔵文化財調査研究所 2004 『寺山古墳群』  
森下章司・鈴木敏則・鈴木一有 2000 『磐田郡豊岡村神田古墳』『浜松市博物館報』13 浜松市博物館  
豊岡村 1993 『豊岡村史』資料編(静岡県磐田郡豊岡村)  
※以下、本書で引用する文献は豊岡村にあるものはすべて静岡県磐田郡豊岡村である  
豊岡村 1994 『豊岡村史』通史編  
豊岡村教育委員会 1983 『押越・社山古墳群調査報告書』  
豊岡村教育委員会 1999 『新平山遺跡(写真図版編)』  
豊岡村教育委員会 1992 『新平山遺跡(Ⅱ)』  
豊岡村教育委員会 1994 『行者下道跡発掘調査報告書』  
豊岡村教育委員会 1996 『大手内B古墳群』  
豊岡村教育委員会 1998 『横山遺跡』  
豊岡村教育委員会 2000 『大手内古墳群』  
豊岡村教育委員会 2000 『豊岡村の古墳』  
豊岡村教育委員会 2002 『大業地上の段遺跡』

### 第4章 引用・参考文献

- 大谷宏治 2004 『結語—寺山古墳群の位置づけ—』『寺山古墳群』 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
岡林季作 1994 『木棺系統論—釘を使用した木棺の復元的検討と位置づけ—』『福原考古学研究所論集』十一 吉川弘文館  
小畠早苗・近藤美紀 2001 『横穴式石室用語の定義』『東海の後期古墳を考える』  
東海考古学フォーラム三河大会実行委員会  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 『寺山古墳群』  
静岡県考古学会 2003 『静岡県の横穴式石室』  
下田智洋 2003 『環付足金物を配する古代刀柄について』『古代近畿と物流の考古学』 学生社  
鈴木一有 1998 『後論』『宇摩坂古墳群』 浜松市文化協会  
鈴木一有 2008 『序論 2 古墳をめぐる環境 (3) 古墳の部位名称』『四つ池古墳群』  
鈴木敏則 2001 『湖西富古墳時代須恵器編年再構築』『須恵器生産の出現から消滅 補遺・論考編』 東海土器研究会  
田中彰人 1978 『古墳時代木棺に用いられた織縫金具』『考古学研究』25巻2号 考古学研究会  
田辺昭三 1966 『陶邑古窯跡群』 平安学園考古学クラブ  
田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店  
田村隆太郎 2008 『東海の横穴式木室と葬送』『東海の古墳風景』(季刊考古学・別冊16) 雄山閣  
近つ飛鳥博物館 2005 『年代のものさし—陶邑の須恵器—』  
豊岡村教育委員会 1992 『新平山遺跡(写真図版編)』  
豊岡村教育委員会 1992 『新平山遺跡(Ⅱ)』  
豊岡村 1993 『豊岡村史』資料編  
豊岡村教育委員会 1994 『大手内B古墳群』  
豊岡村教育委員会 2000 『大手内古墳群』  
豊岡村教育委員会 2000 『豊岡村の古墳』  
袋井市教育委員会 1994 『山田原遺跡群Ⅰ』  
松井一明 1989 『宮口古窯跡群と清ヶヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察』『静岡県の窯業遺跡』  
静岡県教育委員会  
森下章司・鈴木敏則・鈴木一有 2000 『磐田郡豊岡村神田古墳』『浜松市博物館報』13 浜松市博物館

### 第5章 参考文献

- 赤根一郎・中野晴久 1994 『生産地における編年について』『中世常滑をおって資料集』 日本福祉大学  
一宮市教育委員会 1995 『法圓寺中世墓道跡発掘調査報告書』  
太田好治 1991 『古代・中世の都田』『都田地区発掘調査報告書』 浜松市教育委員会  
岐阜県文化財保護センター 2000 『砂円遺跡』  
鈴木敏則 2001 『湖西富古墳時代須恵器編年再構築』『須恵器生産の出現から消滅 補遺・論考編』 東海土器研究会  
豊岡村 1993 『豊岡村史』資料編3 考古・民俗  
豊岡村教育委員会 1996 『大手内B古墳群』  
袋井市教育委員会 1994 『山田原遺跡群Ⅰ』  
袋井市教育委員会 1996 『高尾山古墳跡Ⅱ』

- 松井一明 1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』  
静岡県教育委員会
- 丸杉俊一郎 2007 「井通遺跡出土土器の検討」「井通遺跡」本文編2 静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 第8章

### 【報告書】

- 浅羽町史編さん委員会 1997 『浅羽町史』資料編 (静岡県磐田郡浅羽町)
- 浅羽町教育委員会 1987 「北山遺跡」(静岡県磐田郡浅羽町)
- 浅羽町教育委員会 1992 「团子塚遺跡(Ⅰ)」(静岡県磐田郡浅羽町)
- 磐田市教育委員会 1979 「从下古墳群」
- 磐田市教育委員会 1988 「昭和62年度板上・藤上原3遺跡発掘調査報告書」
- 磐田市教育委員会 1989 「昭和63年度板上・藤上原3遺跡発掘調査報告書」
- 磐田市教育委員会 1991 「中原C古墳群発掘調査報告書」
- 磐田市教育委員会 1992 「道東古墳群」
- 磐田市教育委員会 1997 「中原A古墳群発掘調査報告書」
- 磐田市教育委員会 2005 「新豊院山遺跡発掘調査報告書Ⅱ」
- 磐田市史編さん委員会 1992 「磐田市史」資料編 磐田市
- 磐田市教育委員会 2003 「東部地区区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 磐田市教育委員会 2006 「新豊院山古墳群 D地点の発掘調査」
- 攝原考古学研究所編 1995 「現地調査ノ木古墳第二・三次調査報告書」 斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 静岡縣 1930 「静岡縣史」1
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998 「水掛渡古墳群C群」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 「大屋敷C古墳群・大屋敷1号窓」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 「大屋敷A古墳群」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 「森町円田丘陵の古墳群」
- 島根県教育委員会 2002 「馬場遺跡、杉ヶ瀬遺跡、客山墳群、進行遺跡」
- 大東町教育委員会 2001 「五塚山古墳」(静岡県小笠郡大東町)
- 豊岡村 1993 『豊岡村史』資料編
- 豊岡村教育委員会 1992 「新平山遺跡(Ⅱ)」
- 豊岡村教育委員会 1996 「大手内B古墳群」
- 豊岡村教育委員会 2000a 「大手内古墳群」
- 豊岡村教育委員会 2000b 「豊岡村の古墳」
- 豊橋市教育委員会 1998 「城辺王塚古墳」
- 豊橋市美術博物館 2000 「海道をゆく－渥美半島の考古学－」
- 浜北市教育委員会 2000 「内野古墳群」
- 浜松市遺跡調査会 1984 「半田山古墳群A小支群・半田山Ⅲ遺跡」
- 浜松市教育委員会 1988 「半田山古墳群」
- 浜松市教育委員会 2008 「四ツ油古墳群2次」浜松市文化振興財團
- 浜松市博物館 1987 「浜松市半田山遺跡(Ⅴ)発掘調査報告書」浜松市教育委員会
- 浜松市博物館 1998 「宇摩坂古墳群」
- 袋井市教育委員会 1994 「山田原遺跡群」!
- 袋井市教育委員会 2004 「愛野向山Ⅱ遺跡」

### ハングル

- 国立文化財研究所 2001 「羅州伏岩里3号墳」(韓国)

### 【論文・図録等】

- 穴沢暎光・馬目順一 1987 「古新羅墳丘墓出土の環頭大刀」「朝鮮学報」122輯 朝鮮学会
- 穴沢暎光・馬目順一 1989 「会津大坂山古墳出土の鉄製三葉環頭大刀について」『福島考古』30号
- 井鍋聰之 2008 「古墳時代終末期における駿河東部の有力古墳」「原分古墳 調査報告編」静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 岩原剛 2001 「東海の越後大刀」「立命館大学考古学論集Ⅱ」立命館大学考古学論集刊行会
- 岩原剛 2005 「東海地域の鎧削付大刀と後期古墳」「鎧削付大刀と後期古墳」
- 大谷晃二 2006 「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」「2004年度共同研究成果報告書」大阪府文化財センター
- 大谷晃二・松尾亮晶編 2004 「島根県装飾付大刀と馬具出土一覧古墳・横穴墓一覧(改訂版)」島根県考古学会誌  
20・21合併号
- 大谷宏治 2003 「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄器の変遷とその意義」「研究紀要」10  
静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2004a 「結語—寺山古墳群の位置づけ」「寺山古墳群」静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2004b 「大屋敷C古墳群の評価」「大屋敷C古墳群・大屋敷1号窓」静岡県埋蔵文化財調査研究所

- 柏木普治 2008 「副葬大刀から見た相模の地域像」『神奈川考古』44号 神奈川考古研究会
- 金田明大 2001 「刀子について」『定東屋・西脇古墳』岡山大学考古学研究室
- 神林淳雄 1938 「古墳時代贈付金物に就いて」『考古学雑誌』28巻7号 考古学会
- 菊地芳樹 2003 「装飾付大刀からみた古墳時代後期の東北・関東」「後期古墳の諸段階」東北・関東前方後円墳研究会
- 佐野五十三 1995 「静岡県の奈良・平安時代の墓制について」『東日本における奈良・平安時代の墓制』  
鈴木県考古学会、鈴木県立博物館、東日本埋蔵文化財研究会
- 静岡県考古学会 2001 「東海の横穴墓」
- 静岡県考古学会 2003 「静岡県の横穴式石室」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究会 2003 「研究紀要」10号 特集：古墳時代後期の鉄器
- 柴田 駿 1983 「横穴式木棺粘土室の基礎的研究」『考古学雑誌』68巻4号
- 下大迫幹洋 2003 「環付足金物を配する古代刀劍について」「古代近畿と物流の考古学」学生社
- 鈴木一有 1998 「後論」「宇都原古墳群」浜松市文化協会
- 鈴木一有 2000a 「遠江における横穴式石室の系譜」『浜松市博物館報』13 浜松市博物館
- 鈴木一有 2000b 「三方原古墳群における群集構の構造」「東海地方における群集墳の発達モデル」三河古墳研究会
- 鈴木一有 2001 「東海地方後期古墳の特質」「東海の後期古墳を考える」東海考古学フォーラム三河大会実行委員会
- 鈴木一有 2003 「東海東部の横穴式石室にみる地域圈の形成」「静岡県の横穴式石室」静岡県考古学会
- 鈴木一有 2008a 「四ツ池古墳群の構成」「四ツ池古墳群」浜松市文化振興財團
- 鈴木一有 2008b 「横穴式土壙の系譜」「四つ池古墳群」浜松市文化振興財團
- 鈴木敏則 1988 「遠江の横穴式石室」「伝説」2号 転載刊行会
- 鈴木敏則 1991 「横穴式木棺跡考」「三河考古」4号 三河考古講話会
- 鈴木敏則 2001 「瀬戸窓古墳時代須恵器縦年の再構築」「須恵器生産の出現から消滅 複造・論考編」東海土器研究会
- 高田賛太 1998 「古墳副葬鉄銅の性格」「考古学研究」45巻1号 考古学研究会
- 瀬波芳之 1984 「円頭・主頭・方頭大刀について」「日本古代文化研究」創刊号 古墳文化研究会
- 瀬波芳之 1991 「大刀の佩用について」「伊豆考古学論集」「埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 巽 三郎 1998 「紀伊国日高郡野村大字岩内 岩内古墳調査概報告」「紀伊考古学研究」創刊号 紀伊考古学研究会
- 田村隆太郎 2003a 「遠江における横穴式埋葬施設の展開」「静岡県の横穴式石室」静岡県考古学会
- 田村隆太郎 2003b 「副葬群のへの指標」「研究紀要」10 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 田村隆太郎 2006 「遠江の横穴式木室と土器の副葬」「研究紀要」12号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 田村隆太郎 2008 「東海の横穴式木室と葬送」「東海の古墳風景」(季刊考古学・別冊16) 雄山閣
- 田村隆太郎・鈴木一有ほか 2001 「遠江長福寺1号墳の研究」「静岡県考古学研究」33号
- 土井和幸 1989 「遠江における横穴式石室の一形態—複室構成の石室に関する試論」「匂坂上4道跡発掘調査報告Ⅱ」碧田市教育委員会・国西大学考古学研究室
- 東海古墳研究会 2006 「東海の馬具と箭大刀」
- 西澤正晴 2000 「遠江における古墳の終末」「古墳の終末」三河古墳研究会
- 野垣好史 2002 「三塚堀頭大刀の彌年―日本出土資料を中心に―」「物質文化」74 物質文化研究会
- 野垣好史 2006 「装飾付大刀変遷の諸段階」「物質文化」82 物質文化研究会
- 法隆寺 1989 「法隆寺とシルクロード仏教文化」
- 松崎元樹 1983 「古墳時代贈付足金物を施す大刀について」「東京考古」3 東京考古講話会
- 三河考古学講話会 1994 「東三河の横穴式石室」
- 三河古墳研究会編 2001 「東海の後期古墳データベース」(CD-R)「東海の後期古墳を考える」
- 水野正好 1970 「群集墳と古墳の終焉」「古代の日本」5 角川書店
- 持田大輔 2006 「龍鳳文環頭大刀の日本列島内製作開始時期と系譜」「早稲田大学大学院文学研究科紀要」4号 早稲田大学
- 森下章司・鈴木敏則・鈴木一有 2000 「駿田郡豊岡村神田古墳」「浜松市博物館報」13 浜松市博物館
- 和田晴吾 1992 「群集墳と終末期古墳」「新版古代の日本」5 近畿I 角川書店

このほかにも多くの論文・報告書を参考にさせていただきましたが、紙幅の関係で割愛しました。ご容赦ください。

# 第9章 結語

最後に、今回発掘調査した上神増A・B・E古墳群の調査成果を記載し、本書を閉めたい。

## 1. 繩文時代

縄文時代早期・前期 上神増E 6号墳の墳丘中から出土したが、どのような遺構に伴うのか不明である。少なくとも上神増E古墳群周辺に縄文時代早期に人以為及んでいた可能性が高いことが明確となつた。また、図示していないが<sup>5</sup>、縄文時代前期に帰属すると想定する縄文土器片が出土している。今回の発掘調査地点では、早期～前期にかけての人間活動が確認できる。後述する陥穴と同時期か不明確であるが、関連する時期の遺物とも考えられる。

陥穴 縄文時代とは特定できないが、陥穴の形状から縄文時代に位置づけられる可能性が高い陥穴8基がほぼ等間隔に出土した。これはほぼ等間隔に掘削されていること、規模もほぼ同じ大きさであること、特徴も同一であることから、同時期に掘削された可能性が高い。当時の狩獵戦略に基づいた追い込み獵の可能性が高く、陥穴の間に樹木を切り倒すなどして塞ぎ、陥穴へ導くような戦術をもって狩獵をおこなっていた姿が復原できる。狩り場として合代島丘陵全体が機能していた可能性が高い。

磐田原台地北部の山田原I遺跡(袋井市教委 1994)では、丘陵斜面部に陥穴5基が連続して掘削され、その並びは鉤状に確認されている。本来は調査区外まで陥穴が掘削されていた可能性がある。この陥穴の距離は大凡4～5m間隔で並んでいる。この陥穴の間に樹木などを切り倒しておき、斜面下位から動物を追い立てれば、有効な罠となるであろう。したがって、こうした狩獵戦略に基づく陥穴の配置が磐田原台地北部や合代島丘陵で共通している点は重要である。

## 2. 古墳時代

縄文時代から暫くの時を経て、合代島丘陵一帯は古墳時代の造墓地となる。今回の調査地点では古墳の可能性があるものを含めて、23基の古墳が確認された。

合代島丘陵では古墳前期に遡る古墳は確認できず、古墳中期中葉(5世紀後半)以降に古墳の造営が開始され、奈良時代直前まで古墳の造営が継続する。しかし、継続的に同数が築造されたわけではなく、中期中葉～後半に築造が開始され、中期後半～末葉に築造数が増加するが、続く後期前半には一旦減少する。そして横穴式石室が採用される後期後半以降再び増加し、終末期後半まで盛行し、規模を縮小しながら古墳數は古墳の終焉まで築造される。

上神増A・B・E古墳群は立地状況や古墳の意識する方向、横穴式石室の形状や使用石材の差異から尾根上と西側斜面の古墳、東側斜面の古墳の少なくとも大きく3群(合代島丘陵全体では5群)に区分することができる。特に今回「合代島II群」、「合代島III群」とした合代島丘陵西尾根の東西斜面に築造された古墳は使用する石材、石室形態が支群ごとにある程度まとまりが確認できる一方で、「II群」と「III群」ではそれらに大きな相違が確認できることから、それぞれの築造集団の性格の違いがあった可能性を想定した。そしてその中間に位置する「IV群」は「II群」、「III群」よりも古く、両者の中間的な石材の使用方法を採用していることなどから「II群」と「III群」の築造集団の橋渡し役的な存在と想定した。この当該古墳群の分析が、群集墳の構造(あり方)について一石を投じるものとなれば幸いである。

上神増A・B・E古墳群は、在地における横穴系埋葬施設への受容期の竪穴系埋葬施設の変化の具体像が把握できたこと、横穴式石室がはじめて磐田原台地北部で確認されたことなど、今後地域史を考える上で重要な発見があった。合代島丘陵における横穴系埋葬施設の形態の多様性は築造集団が他の集団

と広い交流関係を有していたことの証明となる一方で、石室形態が単位群内でも異なる点は築造集団内部での埋葬施設構築に対する規範が弱かったことの証明ともなる。

副葬品からみれば鉄製三葉環頭大刀と環付足金物で佩用する大刀が挙げられ、前者は朝鮮半島、特に新羅に系譜を有する大刀であることから、日本列島内で生産された可能性が高いが、新羅との関係を有する集団であった可能性を想定した。また、合代島丘陵の一古墳から出土した三累環頭大刀も同様の評価をすることができ、畿内王権が生産した可能性の高い單鳳環頭大刀とは、配布主体が異なるとともに、入手する側の性格も異なっていた可能性が高いことを想定した。こうした三葉、三累環頭大刀が偏在する地域は、西三河や北部九州の唐津周辺(佐賀県域)が挙げられ、特に西三河は畿内系石室を取り入れないなど畿内王権以外との交流が考えられ、合代島丘陵の古墳群も遠江では特異な古墳群であると評価できることから、畿内王権以外との交流による入手であった可能性も想定しておきたい。

一方、環付足金物は、大和(奈良)一法隆寺では伝世している一でも出土していることから、畿内王権との関係が想定でき、同一支群中にある、上神増E16号墳からはこれも畿内王権が生産配布したと考えられる三角穂式鉄鉢が出土していることから、「合代島Ⅲ群」の築造者集団は王権との結びつきが強かった可能性がある。

### 3. 奈良時代

古墳に引き続き、古代墳墓4基が築造された。これらが築造されたのは東側斜面であり、7世紀末～8世紀前半まで古墳の築造が行われていた単位群の近くであった。一方で、尾根上や西側の斜面地は現状ではこの時期の墳墓は確認されない。したがって、この4基の古代墳墓は立地よりも古墳との関係を重視した可能性が高い。また、この4基が築造された箇所の古墳群は上述した環付足金物や三角穂式鉄鉢により畿内王権との強い結びつきを想定した古墳が所在しており、こうした古墳に系譜を有することで、古代墳墓(火葬墓)という政治色の強い墓制を採用した可能性も想定すべきであろう。

### 4. 中世(鎌倉時代)

鎌倉時代初頭、13世紀中頃に常滑産壺を藏骨器とした中世墓(SF01)が築造されるとともに用途不明遺構であるが集石墓の可能性があるSX07が確認でき、上神増E7号墳が築造された丘陵頂部に本来は供養塔(石塔)を伴わない中世墓(12世紀)が存在していた可能性がある。

一方、西尾根の東斜面には古墳の一部を破壊するように炭焼窯(SF02・SF12)が築かれる。この炭焼窯内覆土から山茶塗が出土しており、炭焼窯の廐止にともなう窓納儀礼に用いられた可能性がある。この山茶塗は松井一明氏の渥美・湖西編年により12世紀前半に位置づけられるものであるが、自然科学分析結果と時期的に100年の開きがあり検討が必要である。ただし、炭焼窯からは出土遺物が少なく、時期を特定できないため評価が難しいが、上神増E古墳群中から出土した炭焼窯は出土遺物を伴うことから時期が特定できる貴重な事例である。

このように今回の調査地点は鎌倉時代には墓地および炭の生産地として機能している。

### 5. 江戸時代

中世墓、炭焼窯が築造された後、400年は人為的な痕跡が窺えない。400年以上が経過した江戸時代前半に再び人工物が出土するようになる。

当該時期の唯一の出土遺物である「寛永通寶」がA5号墳の墳丘上から出土しており、位置的にみると近世墓が所在した可能性が高い。

このように今回の調査地点は、縄文時代に狩り場、あるいは木の実の採集場所として機能し、中世に

は炭生産の場となったが、地形的な特性からか、合代島丘陵は基本的には墓域として古墳時代から近世まで機能し続けてきたといえよう。

## 【 謝 辞 】

本書の作成にあたり、当研究所評議員 向坂鶴二先生に繩文土器についてご指導頂くとともに報告書全体についてご指導賜りました。松井一明、白澤 崇、鈴木一有の各氏には現地調査から報告書作成まで数多くの貴重なご指導、ご意見を賜りました。穴沢味光、馬目順一両先生、菊地芳朗、瀧瀬芳之、岩原 剛、西澤正晴、深谷 淳の各氏に三葉環頭大刀および環付足金物について数多くの御教授と御高配を賜り、寒川 旭先生に丘陵上地滑りの痕跡について現地指導を賜りました。

また、当研究所 足立順司調査研究員には、氏が学生だった頃に撮影した上神増B古墳群の調査中の写真などをご提供いただきました。これらの方々の御芳名を銘記し、お礼申し上げます。

さらに、現地調査および整理作業・報告書作成に当たり、下記の個人・機関に指導、助言、ご高配賜りました。銘記して深謝します。

安藤 寛 井口智博 大野勝美 大村至広 柏木善治 菊池吉修 北山峰生 木村弘之 佐口節司  
篠原修二 柴田 稔 清水 尚 鈴木敏則 竹内直文 谷口安曇 丹野 拓 土生田純之 深野麻衣  
松崎元樹 丸杉俊一郎 室内美香 米田文孝 渡辺武文

磐田市教育委員会 関西大学文学部考古学研究室 豊岡村教育委員会

# 写真図版

全景

上神増古墳群 図版 1

調査区の位置  
[←————→]



遺跡の北からの遠景 中央は合代島丘陵(手前)と磐田原台地(奥)、右には天竜川が流れる。

図版2 上神増古墳群

調査区全景



1. 上神増E古墳群全景(東から) B-1・2区とE-3区が調査中



2. 上神増E古墳群E-3区(E 7~17号墳)全景(南東から)



1. 上神増B古墳群B-1区(B 5~8号墳)全景(南東から)



2. 上神増A 5号墳全景(南西から)

図版4 上神増B・E古墳群

B 7・E 2・12・16号墳



1. 上神増E 2号墳全景(南西から)



2. 上神増E 2号墳 墓丘盛土断面(南西から)



3. 上神増B 7号墳 石室内(南東から)



4. 上神増E 12号墳 横穴式石室石室内(南東から)



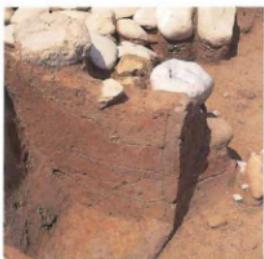
5. 上神増E 16号墳 横穴式石室内勾玉出土状況(西から)



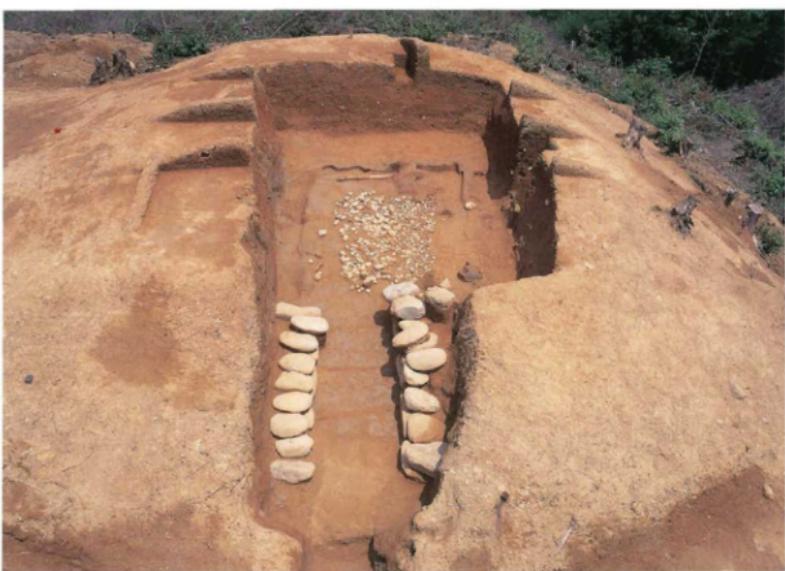
1. 上神増E 17号墳 横穴式石室内土器出土状況(北から)



2. SF13 土器出土状況(南東から)

3. 上神増E 3号墳 横穴式木室  
左袖部土層断面(北東から)

4. 上神増E 3号墳 横穴式木室土層断面(南から)



5. 上神増E 3号墳 横穴式木室(南から) 粘土上部・閉塞石除去、玄室内検出状況

図版6 上神増E古墳群

E 1・2号墳



1. 上神増E 2号墳出土遺物



2. 上神増E 3号墳出土遺物



1. 上神増E 9・10号墳出土遺物



2. 上神増E 12号墳出土遺物

図版8 上神増B・E古墳群

B 7・E 16号墳・SF03・SF13～15



1. 上神塔E 16号墳出土玉類

2. 上神塔B 7号墳出土  
装飾付大刀



3. SF03・13～15出土土器



1. 上神増A古墳群A-1区(A 5号墳)全景(南西から)



2. 上神増A 5号墳 墳頂部の盗掘痕跡(表土除去途中)(北東から)

図版10 上神増A古墳群

A 5号墳



1. 上神増A 5号墳全景(南西から)



2. 上神増A 5号墳 盛土除去後(北東から)



1. 上神増A 5号墳 西部葺石(南西から)



2. 上神増A 5号墳 東部葺石(東から)



3. 上神増A 5号墳 東部墳裾(北から)



4. 上神増A 5号墳 西部墳裾(北から)

図版12 上神増A古墳群

A 5号墳



1. 上神増A 5号墳 石室検出状況(南西から)



2. 上神増A 5号墳 石室北西部(南から)



3. 上神増A 5号墳 石室北東部(南西から)



4. 上神増A 5号墳 石室墓道(北東から)



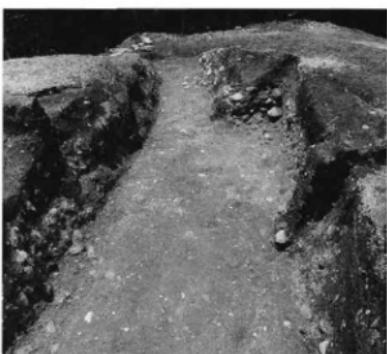
5. 上神増A 5号墳 石室墓道(南西から)



1. 上神増A 5号墳 石室南西部遺物出土状況(北から)



2. 上神増A 5号墳 石室内耳環(19)出土状況(西から)



4. 上神増A 5号墳 石室墓構(南西から)

5. 上神増A 5号墳 石室墓構(北東から)



6. 上神増A 5号墳 墓丘上部土器出土状況(南から)



7. 上神増A 5号墳 墓丘上部土器出土状況(北西から)

図版14 上神増A古墳群

A 5号墳



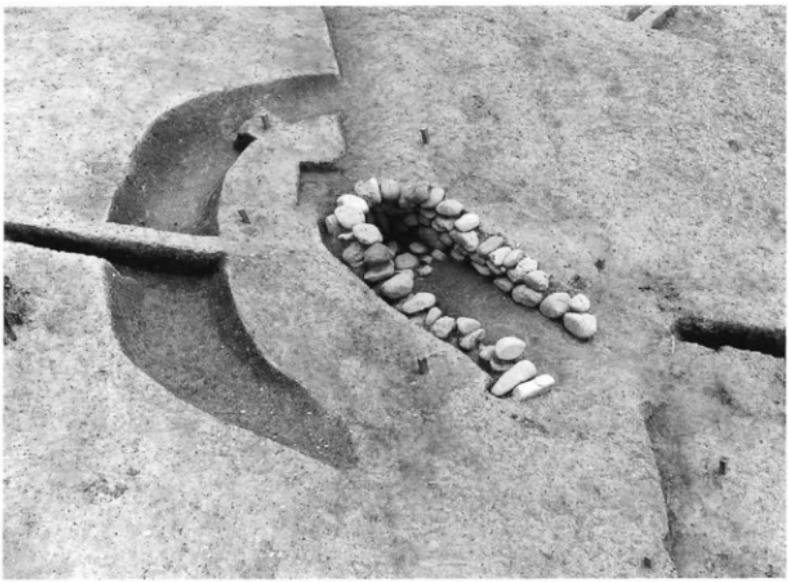
1. 上神増A 5号墳 第1埋葬施設(南西から)



2. 上神増A 5号墳 第1埋葬施設(西から)



1. 上神増B古墳群B-1区(B 5~8号墳)全景(東から)



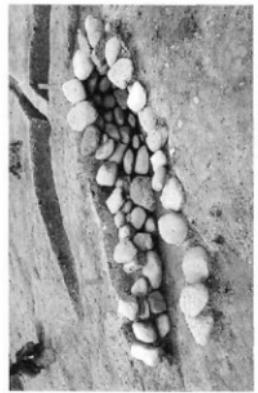
2. 上神増B 5号墳全景(南西から)

図版16 上神増B古墳群

B 5号墳



1. 上神増B 5号墳 石室候出外況(東から)



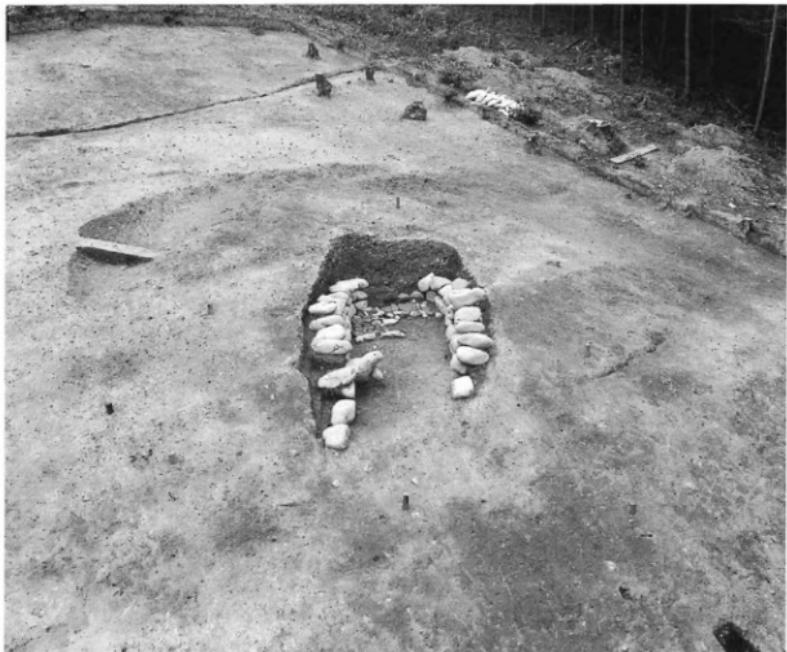
2. 上神増B 5号墳 石室右側壁(東から)



3. 上神増B 5号墳 石室左側壁(西から)



4. 上神増B 5号墳 石室基底石(南西から)



1. 上神増B 6号墳全景(南東から)



2. 上神増B 6号墳 石室検出状況(北西から)

図版18 上神増B古墳群

B 6号墳



1. 上神増B 6号墳 石室焼出状況(南東から)



2. 上神増B 6号墳 石室右側壁(北から)



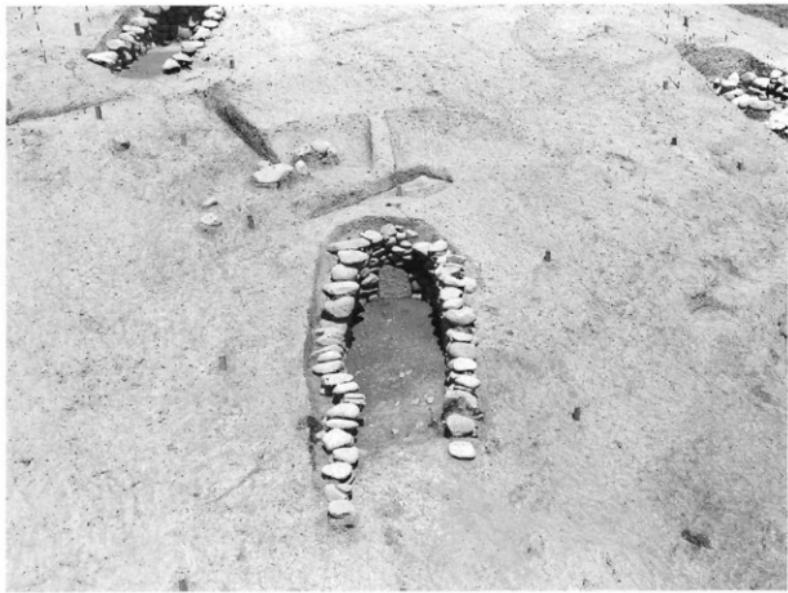
3. 上神増B 6号墳 石室左側壁(南から)



4. 上神増B 6号墳 石室床面(南東から)



5. 上神増B 6号墳 石室基底石(東から)



1. 上神増B 7号墳全景(南から)



2. 上神増B 7号墳 石室崩落状況(南から)



3. 上神増B 7号墳 石室検出状況(南から) 床石除去状況

図版20 上神増B古墳群

B 7号墳



1. 上神増B 7号墳 石室右側壁(東から)



2. 上神増B 7号墳 石室左側壁(西から)



3. 上神増B 7号墳 石室奥壁および床面・遺物出土状況(南から)



1. 上神増B7号墳 石室蓋底石(南西から)



2. 上神増B7号墳 石室蓋底石(北西から)



1. 上神増B 8号墳全景(南から)



2. 上神増B 8号墳 石室検出状況(南から)



1. 上神増B 8号墳 石室床面(北から)



2. 上神増B 8号墳 石室床面(南東から)

図版24 上神増B古墳群

B 9号墳



1. 上神増B古墳群B-2区(B 9号墳)全景(南東から)



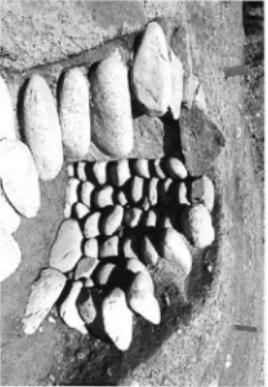
2. 上神増B 9号墳 石室崩落状況(南東から)



3. 上神増B 9号墳 石室検出状況(南東から)



1. 上神増B 9号墳 石室奥壁(南東から) 砂石除去状況



2. 上神増B 9号墳 石室左側壁(南から)



3. 上神増B 9号墳 石室右側壁(西から)



4. 上神増B 9号墳 石室床面(南東から)



5. 上神増B 9号墳 石室内土器出土状況(南東から)

図版26 上神増B古墳群

B 9号墳



1. 上神増B 9号墳 石室基底石(北東から)



2. 上神増B 9号墳 石室基底石(南東から)



3. 上神増B 9号墳 石室基底(南東から)



1. 上神増E古墳群E-1区(E 1～4号墳)全景(北東から)



2. 上神増E古墳群E-3区(E 7～17号墳)全景(東から)

図版28 上神増E古墳群

E 1号墳



1. 上神増E 1号墳全景(東から)



2. 上神増E 1号墳 埋葬施設(仰臥)



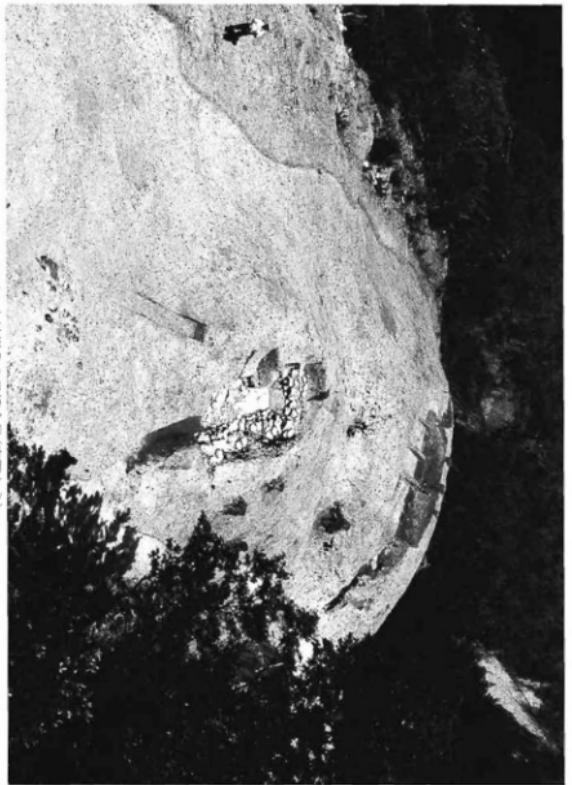
3. 上神増E 1号墳 埋葬施設棺床東端部(西から)



4. 上神増E 1号墳 埋葬施設内鉄劍等出土状況(北から)

E 2号墳

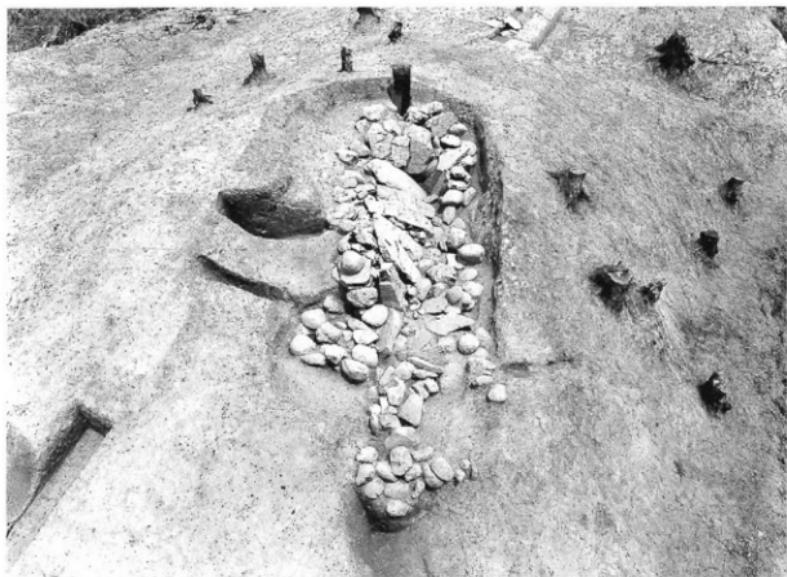
上神増E古墳群 図版29



1. 上神増E 2号墳全貌(南西から)



2. 上神増E 2号墳全貌(南西から)



1. 上神増E 2号墳 石室崩落状況(南西から)



2. 上神増E 2号墳 石室崩落状況(南から)



1. 上神増E 2号墳 石室転落石除去状況(南から)



2. 上神増E 2号墳 石室右側壁崩落状況(南から)



3. 上神増E 2号墳 石室左側壁崩落状況(北西から)



4. 上神増E 2号墳 石室閉塞石(石室外)南西から



5. 上神増E 2号墳 石室閉塞石(石室内)北東から

図版32 上神増E古墳群

E 2号墳



1. 上神増E 2号墳 石室残存部・床上面検出状況(西から)



2. 上神増E 2号墳 石室北東部  
遺物出土状況(南から)



3. 上神増E 2号墳 石室残存部・床上面検出状況(南から)



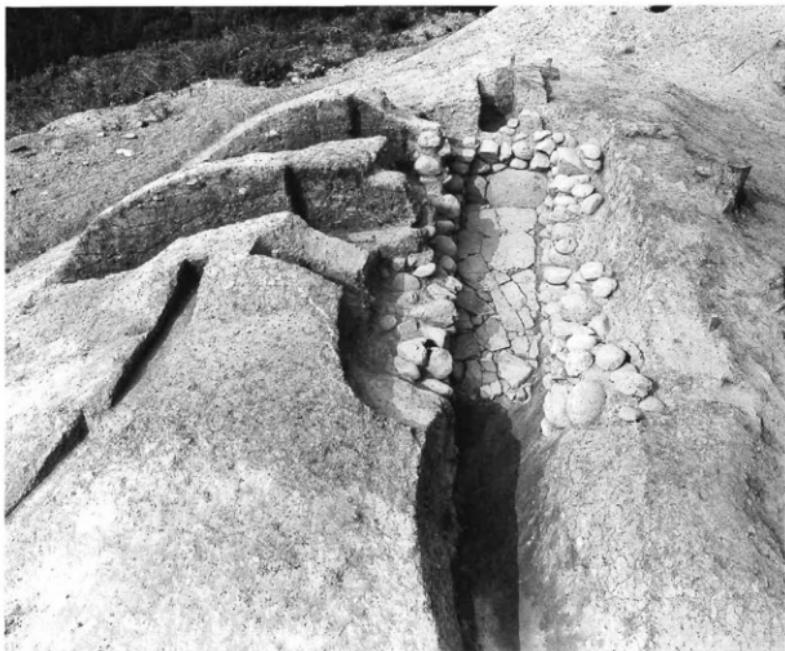
4. 上神増E 2号墳 石室南西部  
鉄刀出土状況(南西から)



5. 上神増E 2号墳 石室奥壁残存状況(南西から)



6. 上神増E 2号墳 墓道内土器出土状況(南から)



1. 上神増E 2号墳 石室残存状況・床下面および盛土第一段階突出状況(南西から)



2. 上神増E 2号墳 石室床下面(南西から)



3. 上神増E 2号墳 石室基底石(南西から)



1. 上神増E 3号墳全景(南から)



2. 上神増E 3号墳全景(南から)



1. 上神増E 3号墳 木室粘土・閉塞石検出状況(南から)



2. 上神増E 3号墳 木室閉塞石(木室外:南から)



3. 上神増E 3号墳 木室閉塞石(木室内:北から)

図版36 上神増E古墳群

E 3号墳



3. 上神増E 3号墳 大量麻布・遺物出土状況(北西から)



1. 上神増E 3号墳 木室粘土被出状況(北東から)



2. 上神増E 3号墳 木室粘土部  
(上:南東から、下:北西から)



1. 上神増E 3号墳 木室床面・遺物出土状況(南から)

2. 上神増E 3号墳 木室羨道閉塞石除去状況  
(木室外:南から)3. 上神増E 3号墳 木室羨道閉塞石除去状況  
(木室内:北から)

4. 上神増E 3号墳 木室羨道左側壁(北西から)



5. 上神増E 3号墳 木室羨道右側壁(北東から)

図版38 上神増E 古墳群

E 3号墳



1. 上神増E 3号墳 木室床面・柱穴等検出状況(北西から)



2. 上神増E 3号墳 木室床面・柱穴等検出状況(南西から)



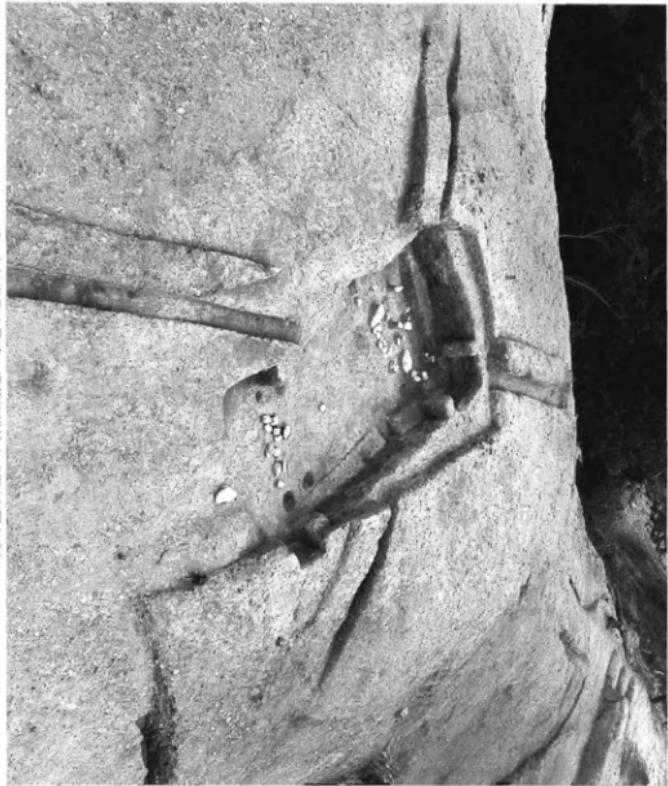
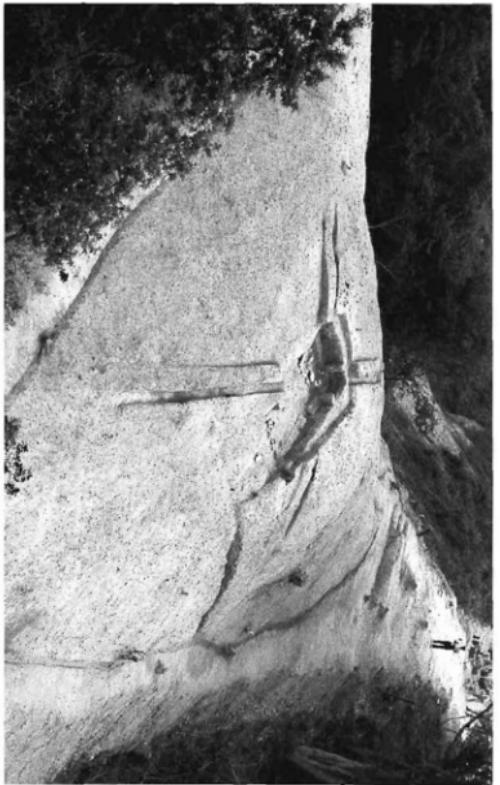
3. 上神増E 3号墳 木室羨道基底石(北西から)



4. 上神増E 3号墳 木室内鉢形出土状況(東から)



5. 上神増E 3号墳 木室墓磚(南から)



図版40 上神増E古墳群

E 4号墳



1. 上神増E 4号墳 埋葬施設土層断面(南から)



2. 上神増E 4号墳 埋葬施設内(南から)



3. 上神増E 4号墳 埋葬施設北部(南西から)



4. 上神増E 4号墳 埋葬施設南部(南西から)



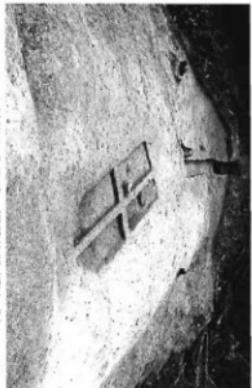
5. 上神増E 4号墳 埋葬施設北側隅土器出土状況  
(南西から)



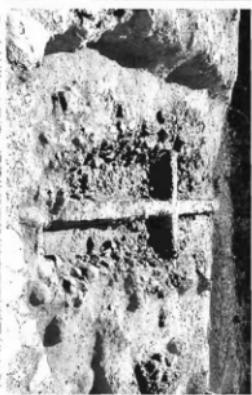
6. 上神増E 4号墳 埋葬施設墓壙(北西から)



1. 上神増E 5・6号墳全貌(南から)



2. 上神増E 5号墳 墓葬施設(棺床上面)(南東から)



3. 上神増E 5号墳 墓葬施設下段(棺床下面)断面(北東から)



4. 上神増E 6号墳 墓葬施設上段(棺床上面)(南東から)



5. 上神増E 6号墳 墓葬施設下段(棺床下面)断面(南東から)

図版42 上神増E古墳群

E 6号墳



1. 上神増E 6号墳 埋葬施設検出状況(南東から)



2. 上神増E 6号墳 埋葬施設検出状況(南から)



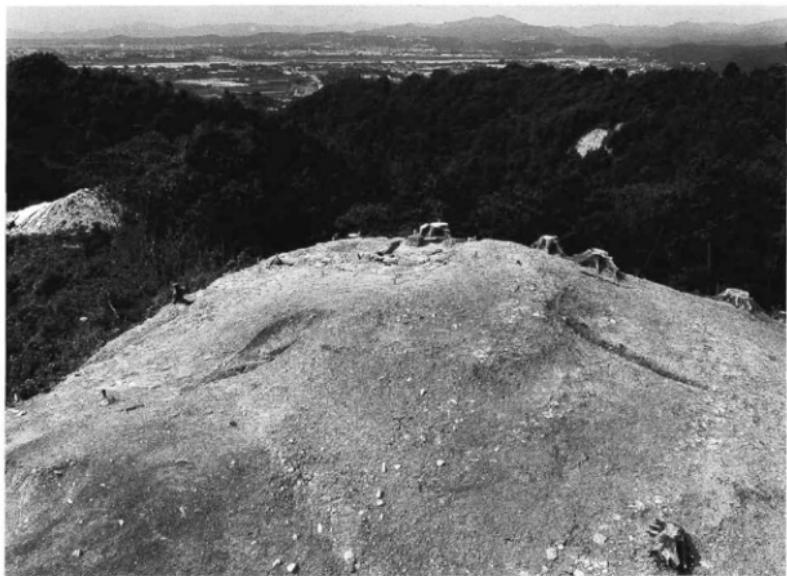
3. 上神増E 6号墳 埋葬施設壁断面(南から)



4. 上神増E 6号墳 埋葬施設内勾玉出土状況(西から)



5. 上神増E 6号墳 埋葬施設内管玉等出土状況(東から)



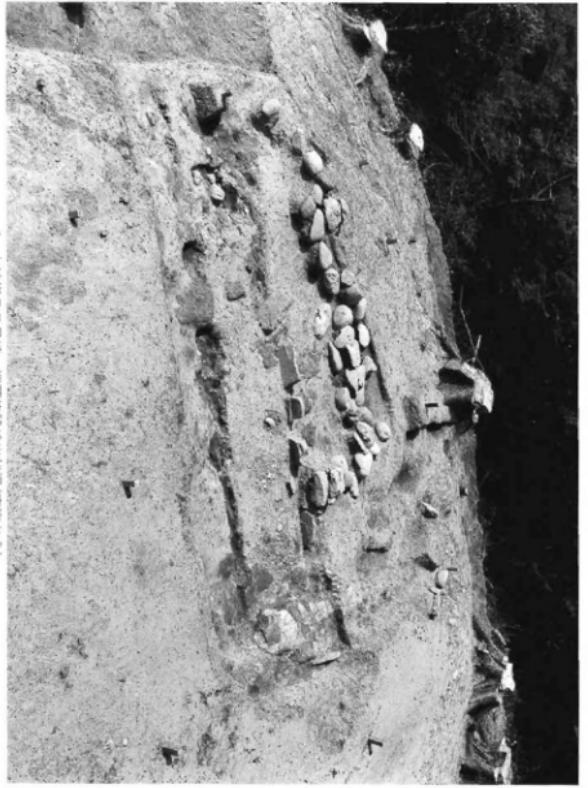
1. 上神増E 7号墳全景(東から)



2. 上神増E 7号墳全景(東から)

図版44 上神増E古墳群

E 7号墳





1. 上神増E 7・8・11～14号墳全貌(東から)



2. 上神増E 8号墳全貌(北から)

3. 上神増E 8号墳 墓封石(東から)

図版46 上神増E 古墳群

E 9号墳



1. 上神増E 9号墳全景(E 10号墳盛土除去状況)(北から)



2. 上神増E 9号墳 第1・2埋葬施設(北から)



3. 上神増E 9号墳  
第2埋葬施設内刀剣等出土状況(北から)



1. 上神増E 10号墳全景(北東から)



2. 上神増E 10号墳全景(東から)

図版48 上神増E古墳群

E 10～12号墳



1. 上神増E 10号墳 埋葬施設模出状況(東から)



2. 上神増E 10号墳 埋葬施設基底石(西から)



3. 上神増E 11・12号墳 完掘状況(南東から)



1. 上神増E 11・12号墳全景(南東から)



2. 上神増E 11号墳 石室横出状況(北から)



3. 上神増E 12号墳 石室崩落状況(南東から)



1. 上神増E 12号墳 石室検出状況(南壁から)



2. 上神増E 12号墳 石室内(南東から)



1. 上神増E 12号墳 石室右側壁(東から)



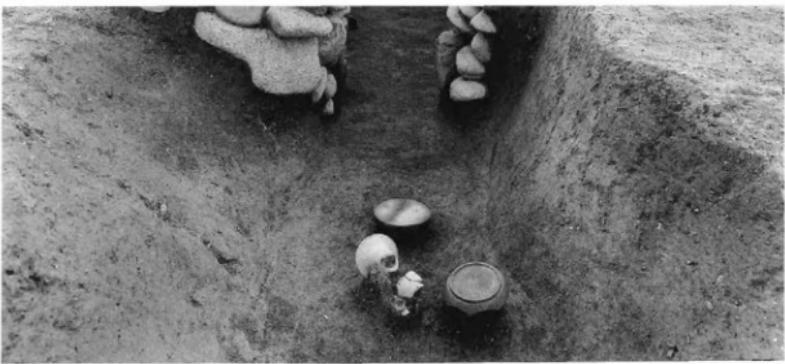
2. 上神増E 12号墳 石室左側壁(南西から)



3. 上神増E 12号墳 石室検出状況(北西から)



4. 上神増E 12号墳 石室内土器出土状況(南東から)



5. 上神増E 12号墳 墓道内土器出土状況(南東から)

図版52 上神増E古墳群

E 12号墳



1. 上神増E 12号墳 石室基底石(東から)



2. 上神増E 12号墳 石柱基底石(北西から)



3. 上神増E 12号墳 石室墓塙(東から)



1. 上神増E 13号墳 番葬施設検出状況(南から)



2. 上神増E 14号墳 石室検出状況(南から)



3. 上神増E 14号墳 石室検出状況(東から)



4. 上神増E 14号墳 石室基底石(南から)



5. 上神増E 15号墳全貌(南から)

図版54 上神増E 古墳群

E 15号墳



1. 上神増E 15号墳 石室検出状況(南から)



2. 上神増E 15号墳 石室床面(北から)



3. 上神増E 15号墳 畑道東側土器出土状況(東から)



4. 上神増E 15号墳 石室基底石(南から)



5. 上神増E 15号墳 石室墓壙(南から)

E16号墳

上神増E古墳群 図版55



3. 上神増E16号墳 石室内(南から)



4. 上神増E16号墳 石室内(北から)



2. 上神増E16号墳 石室復元状況(北から)

図版56 上神増E古墳群

E 16号墳



1. 上神増E 16号墳 石室右側壁(北東から)



2. 上神増E 16号墳 石室左側壁(北西から)



3. 上神増E 16号墳 石室床面(西から)



4. 上神増E 16号墳 石室基底石(北から)



5. 上神増E 16号墳 石室内耳環等出土状況(北から)



6. 上神増E 16号墳 石室内勾玉等出土状況(西から)



7. 上神増E 16号墳 石室土器出土状況①(西から)



8. 上神増E 16号墳 石室土器出土状況②(北西から)



1. 上神塚E 17号墳 石室崩落状況(南から)



2. 上神塚E 17号墳 石室棲出状況(南から)



3. 上神塚E 17号墳 石室棲出状況(南から)

図版58 上神増E古墳群

E 17号墳



1. 上神増E 17号墳 石室右側壁(北東から)



2. 上神増E 17号墳 石室左側壁(北西から)



3. 上神増E 17号墳 石室検出状況(北から)



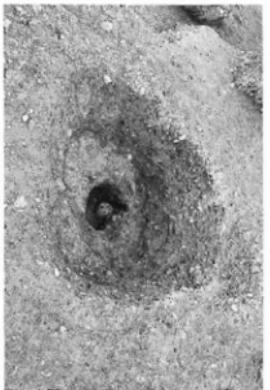
4. 上神増E 17号墳 石室土器出土状況(北東から)



5. 上神増E 17号墳 石室基底石(南から)



6. 上神増E 17号墳 石室墓壙(南から)



図版60 上神増B・E古墳群

墳墓(SF01・03・13～15)



1. SF03 (南東から)



2. SF03 (北から)



3. SF13 (南東から)



4. SF14 (東から)



5. SF15 (南から)



6. SF01 (東から)



1. SF02 (東から)



2. SF12 (北から)



3. SD03・04 (南東から)



4. SX03 (東から)



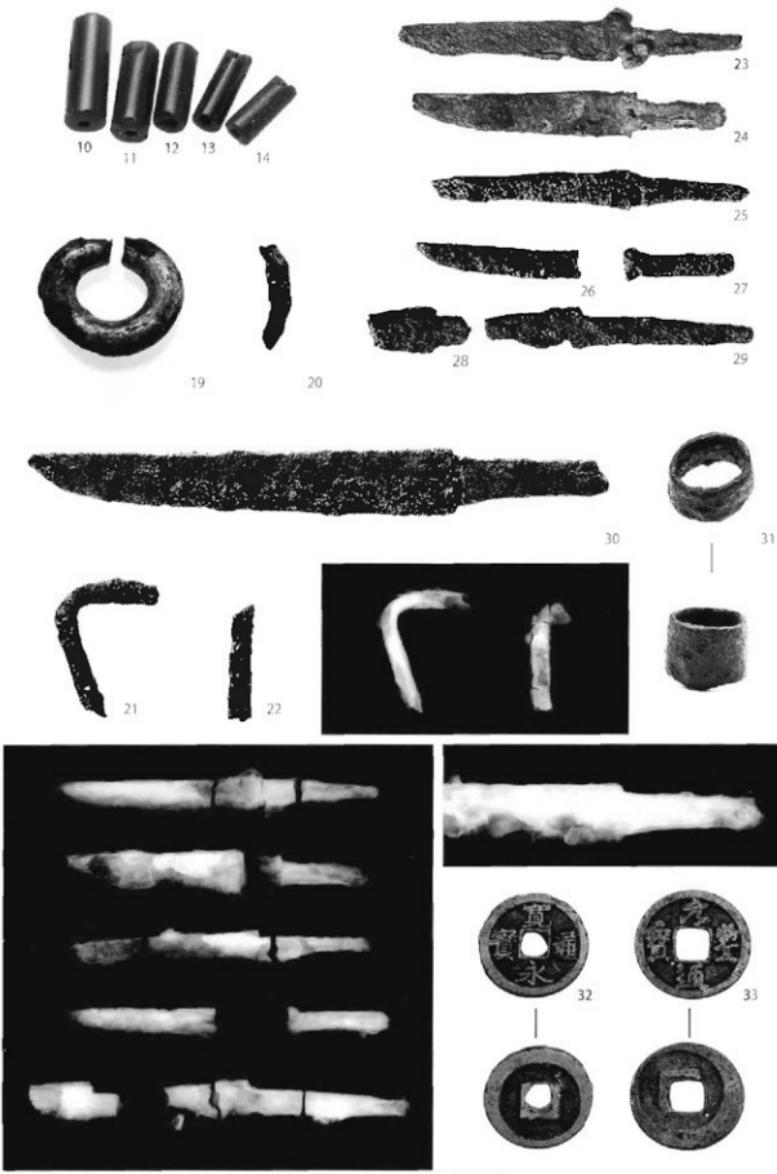
5. SD01 (南から)



6. SX06 (東から)



上神増A 5号墳出土土器・玉類



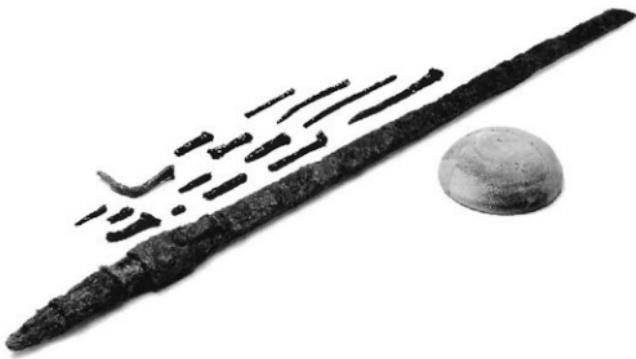
上神増A 5号墳出土玉類・金属製品

図版64 上神増A・B古墳群

A 5・B 7号墳



1. 上神増A 5号墳出土遺物一括



2. 上神増B 7号墳出土遺物一括



34

1. 上神増B 5号墳出土土器



35



38



40



39

37



41

2. 上神増B 7号墳出土遺物①



58-59



58-59



59



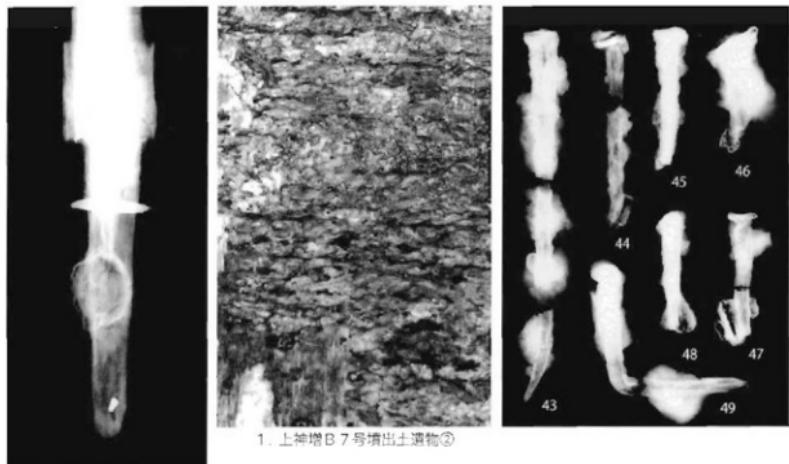
58

図版66 上神増B古墳群

B 7・8号墳



59

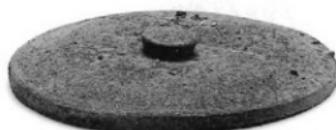


2. 上神増B 8号墳出土遺物

60



63



62

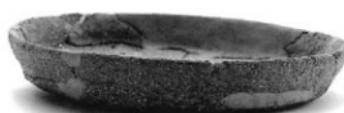


61

64



65



66

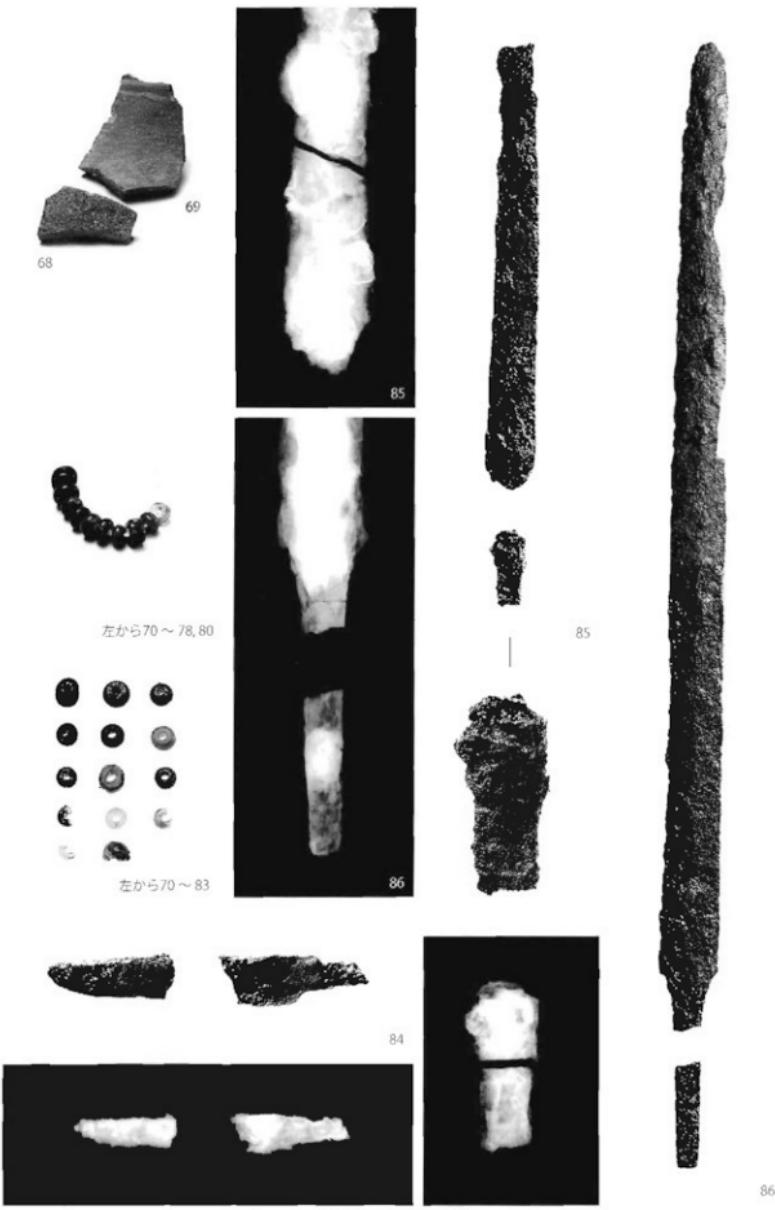
67



1. 上神増B 9号墳出土遺物一括



2. 上神増E 1号墳出土鉄製品一括





91



92



94

93



96



97



99



98

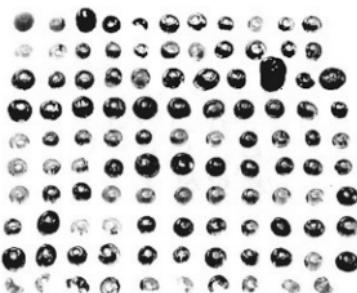


101

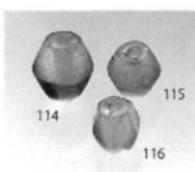
上神増E 2号墳出土遺物①



左上から102～113, 117～122



左上から123～232

114  
115  
116

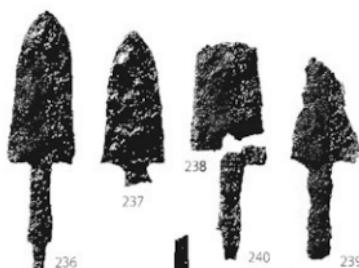
233



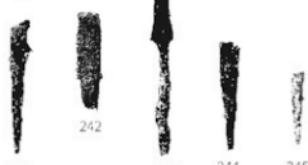
234 235



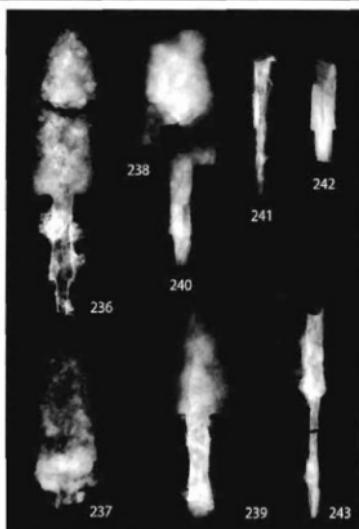
233



236 237 238 239



241 242 243 244



上神増E 2号墳出土遺物②



246



クリーニング後



248



247



250



249



248

上神増E 2号墳出土遺物③



1. 上神増E 2号墳出土遺物一括



2. 上神増E 3号墳出土遺物一括

図版74 上神増E古墳群

E 3号墳



251

252



258

256



255



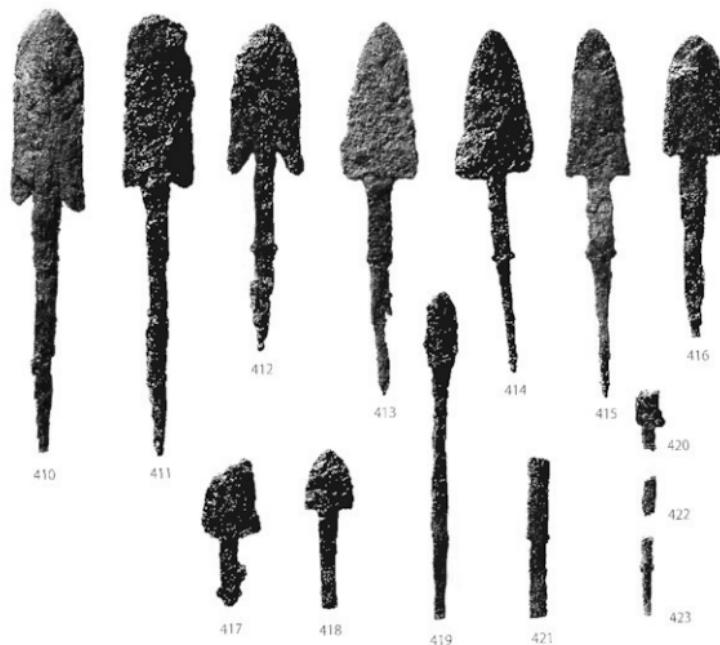
257

259

上神増E 3号墳出土遺物①



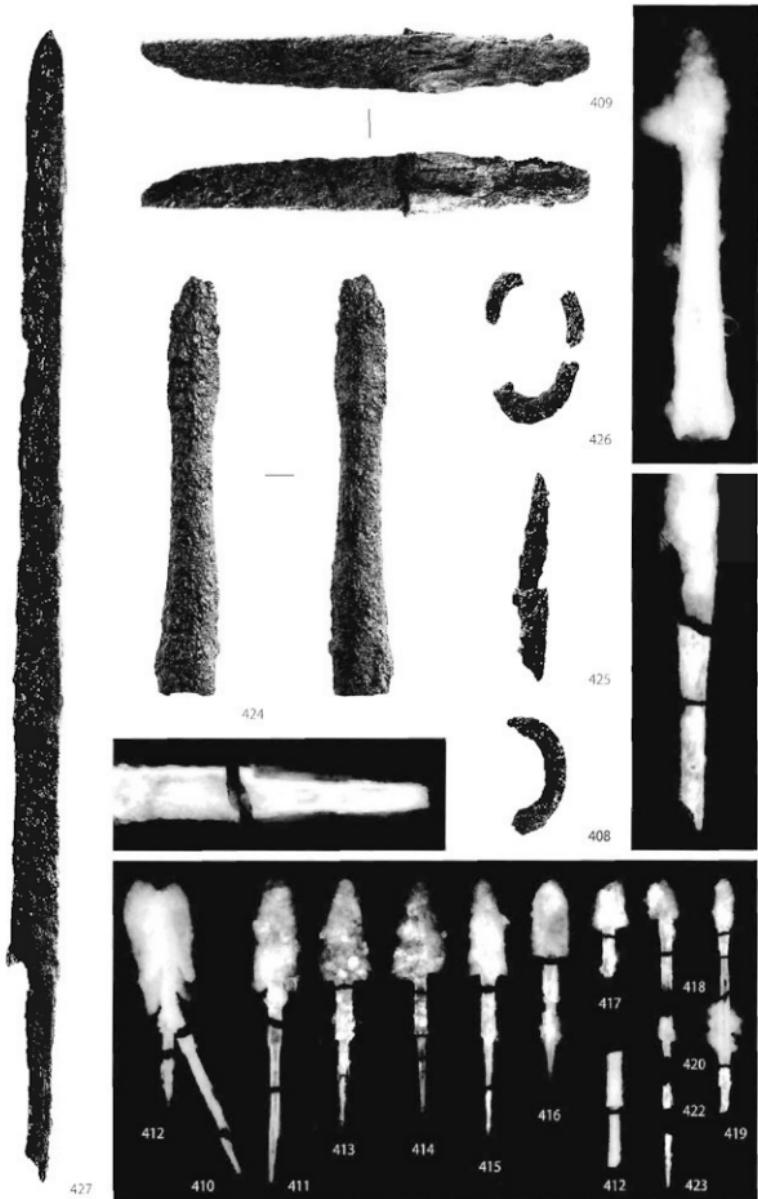
左上から260～407



上神増E 3号墳出土遺物②

図版76 上神増E古墳群

E 3号墳



上神増E 3号墳出土遺物③



429



430



432



429



431



433

1. 上神増E 4号墳出土遺物



440



441



444



442

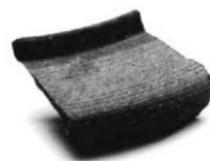


446



445

3. 上神増E 7号墳出土遺物①



449



447



450



448



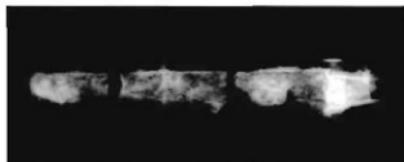
左上から452～464, 466, 465



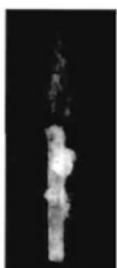
467



451



468



上神増E 7号墳出土遺物②



1. 上神増E 7号墳出土遺物一括



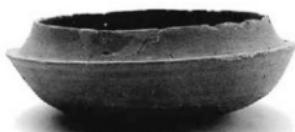
2. 上神増E 8号墳出土遺物一括

図版80 上神増E古墳群

E 8・9号墳



469



470



471



473



472



472



472



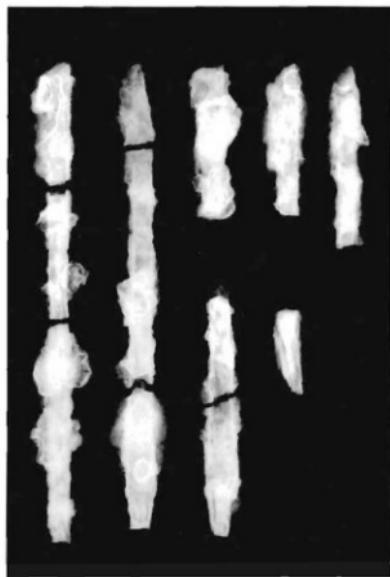
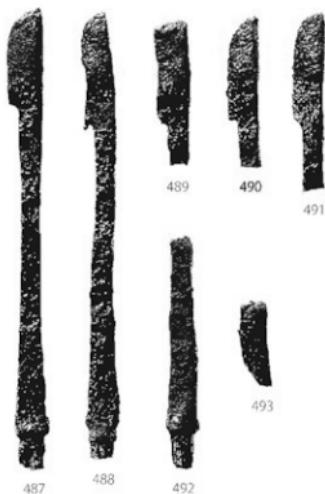
472

1. 上神増E 8号墳出土遺物

2. 上神増E 9号墳出土遺物①



496



483



1. 上神増E 9号墳出土遺物②

2. 上神増E 10号墳出土遺物①

図版82 上神増E古墳群

E 10・11号墳



480



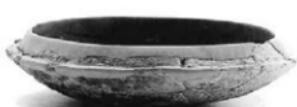
475



481



474



479



476



477

1. 上神増E 10号墳出土遺物②



498

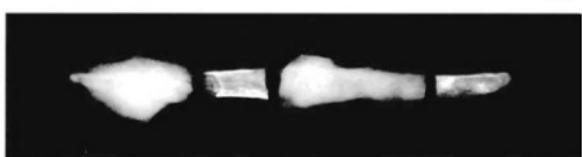


497

2. 上神増E 10号墳出土遺物③



500



3. 上神増E 11号墳出土遺物



1. 上神増E 9・10号墳出土遺物一括



2. 上神増E 12号墳出土遺物一括



503



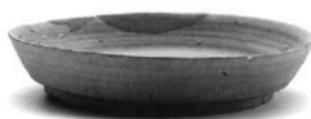
506



502



509



505



501



508



507

上神増E12号墳出土遺物



1. 上神増E 14・15号墳出土遺物  
(E 14号墳…510・511, E 15号墳…514・517・522)



513



512



520



515



521



518



516

2. 上神増E 15号墳出土遺物①



524



523



525



526



527



528



1. 上神増E 15号墳出土遺物②

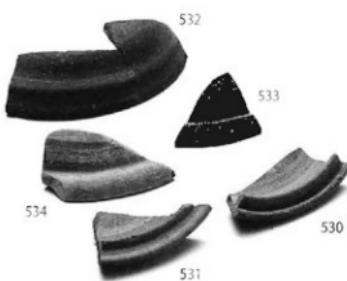


529

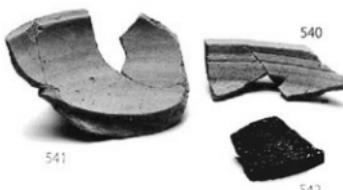


543

2. 上神増E 16号墳出土遺物①



545



上神増E 16号墳出土遺物②

図版88 上神増E 古墳群

E 16号墳



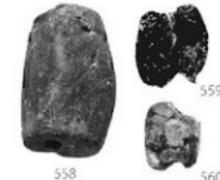
左から546 ~ 555



左から562 ~ 571



561



558  
560

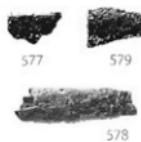


572

573

574

575



577

579

578



576



580



581



584



582



583



586

587



588

585

上神増E 16号墳出土遺物③



1. 上神増E 15号墳出土遺物一括



2. 上神増E 17号墳出土遺物一括

図版90 上神増E古墳群

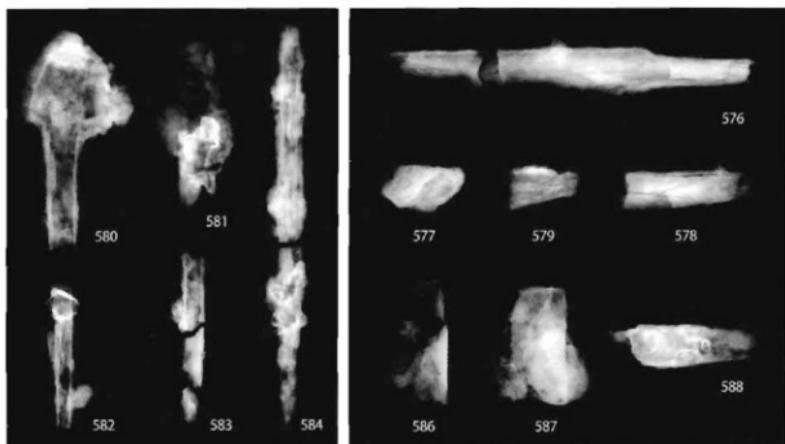
E 16号墳



1. 上神増E 16号墳出土土器一括



2. 上神増E 16号墳出土玉類一括



1. 上神増 E 16号墳出土遺物④



589



594



590



598



591



595

2. 上神増 E 17号墳出土遺物⑤

図版92 上神増E古墳群

E 17号墳・SF03



592



593



597



599



603

2. SF03出土遺物



600



601

1. 上神塔E 17号墳出土遺物②





605

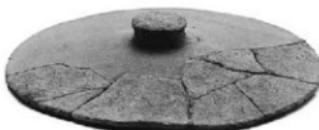


606

609



607



610



608



611



—



604



612



614



616



615

1. 中世の遺物



620



619



618

2. 遺構外出土の遺物

SF01・03・12～15

上神増B・E古墳群 図版95



1. SF03・13～15出土遺物一括



2. 中世の遺物一括

図版96 上神増A・B古墳群

既往調査の古墳



1. 上神増B古墳群の調査中



2. 上神増B古墳群の調査中



3. 上神増B古墳群の調査中



5. 上神増A古墳群 石室壁面(A-1号塙か)



4. 上神増B古墳群の調査中

## 報 告 書 抄 錄

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第218集

## 合代島丘陵の古墳群

第二東名No.124・125地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

豊岡村－3

平成22年3月31日

編集・発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL (054)262-4261(代)

FAX (054)262-4266

印刷所

中部印刷株式会社

〒432-8052 静岡県浜松市南区東若林町1516-2

TEL (053)441-2431

FAX (053)441-7612

